帝塚山学院大学五〇周年記念誌

もう一度、高く旗を掲げよう

学長　津田謹輔

学校は、教えたい人がいて、そこに学びたい人が集まる。本学は帝塚山学院の建学の精神である、「力の教育」の旗のもと、一九六六年四月四年制女子大学として発足した。わが国の高度経済成長のまっただ中であった。一期生が卒業した一九七〇年は戦後復興から続く経済成長のシンボルである大阪万博が開催された年であり、卒業後万博コンパニオン（当時このように呼ばれていた）として活躍した方も多い。ちょうどその頃は第二次ベビーブームといわれ、出生数は現在のおおよそ二倍の二〇〇万人を超えていた。一九九二年ころまでは一八歳人口も大学受験者数もまさに右肩上がりに増加していた。その後バブル景気の崩壊など日本をとりまく様々な環境の変化が、大学にも様々な影響をもたらしてきた。

教育や医療といったまさに人間を対象にした領域にも経済、経営といった視点が導入されてきた。とりわけ少子化の進行にともない、大学は、社会や学生のニーズに合わせざるを得なくなり、改革につぐ改革が行われ、そうしなければ生き残れないとさえ言われている。このことは現実問題として直視しないといけないのであるが、卒業生の立場で考えると、自分が育った大学はあっても自分の学部は消滅していることもおこっている。本学でもしかりである。改革のなかで、大学それぞれの特徴がうすれてきているのではないだろうか。改革をしていくべきところと残し続けなければならないものがある。今こそ建学の精神の旗をもう一度高く掲げよう。

大学が預かる学生は、ほとんど二〇歳前後の若者である。昔は元服により社会に仲間入りした時代もあるので、青年期に学ばねばならないことも、時とともに変遷するのかもしれない。しかし若者が身につけないといけない基本は変わらないであろう。

生物にはそれぞれ固有の生活史ライフヒストリーがある。ヒトの生活史には、他の哺乳動物にはない、いくつかの特徴がある。ヒトには長い老年期があることも一つの特徴であるが、最も特徴的なのは、ヒトは、大変未熟な状態で生まれてくることである。生まれて数時間で立ち上がり、自分の足で歩き始める動物もいるが、ヒトは歩き出すにも一年の月日を要する。すなわちヒトは自立するのに長い年月がかかる。長い発育期があり、少年期、そしてその後に青年期と呼ばれる時期が明らかにあることも大きな特徴である。

ヒトの脳もまた、生後ゆっくりと成熟していく。最近では、ｆＭＲＩ(functional MRI)など脳の働きを画像でみることができる。この機器を用いて脳の成熟度をみた研究がある。脳の機能は局在しているが、脳の異なる部位の間の機能的接続の成熟度を測定した研究では、ヒトにおいては二〇～二五歳までゆるやかに発達するという結果が得られている。ヒトに最も近いチンパンジーの脳の成熟が比較的早く終わるのと対照的である。

このようにヒトの脳が、長い時間をかけてゆるやかに成熟するのは、人類が高度に複雑な社会を形成しているので、社会性を獲得し、さまざまな社会行動を学ぶのにも、より長い時間を必要とするからと考えられている。

したがって、青年期に学ぶことは、社会が求めている知識、学力を身につけることと、社会性を獲得することにあると考えられる。これは変わらない大学で学ぶべき課題であろう。

知識、学力は毎日の授業で鍛えられ、その成果は比較的目に見える形で、また数値化することもできる。しかし、一方の社会性獲得というのは目に見えにくい。わが国では、何をしたらよいのか、社会性をもてずに悩んでいる若者が増えている。このような若者が、自分の道を見つける場所が学校であり、学校の一つの重要な役割である。これは目に見えない、数値化できない問題である。

建学の精神である「力の教育」は、「知の力」、「情の力」、「意の力」、「軀幹の力」であり、すなわち全人教育である。この力を社会のために正しく使うことができる「力の漲った人を育てる」ことを建学の目的としている。

この建学の精神のなかで、大変すばらしいと思うのは、知情意に「軀幹の力」が加わっていることである。身

体が脳活動に及ぼす様々な影響が明らかにされつつあることを考えると「知情意体」に一体化したことは驚異ですらある。

知情意といえば、私は夏目漱石の草枕にある「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ」を思い出す。ちなみに夏目漱石は今年没後一〇〇年で、帝塚山学院発足の年である。哲学は全くの門外漢であるが、元々知・情・意は、哲学者カントが提唱したといわれており、人間の精神は、「知・情・意」の三要素で決まるという。脳にあてはめると、知は大脳新皮質で知性、理性、情は大脳辺縁系で喜怒哀楽、意は前頭前野で認知，意志決定といったらよいのだろうか。

脳はもちろん重要であるが、それを支えているのは身体である。脳は身体に様々な指令をだし、人間全体を統一している。しかし、脳は多くのエネルギーを消費するのに関わらず、脳にはエネルギーの蓄えもなくすべて身体からの供給に頼っている。また脳にある情報伝達物質はすべて消化管にも存在し、脳と身体が同等であることがわかる。知識一つとっても、頭だけで「知識を理解する」というよりも、体を使った学びにより、知識をより深いところに「身につける」あるいは「腑に落ちる」。人間を考えるとき、知情意でなく、知情意体とすることは極めて意義深いと考える。

カントの知・情・意に対応する問題は、「私は何を知りうるか」、「私は何をなすべきか」、「私は何を望んでいるか」であったという。これは前述した青年期に学ぶべきことに相当すると考えられる。

これらの諸問題について思索し、脳と同時に軀幹を鍛えて初めて、「力漲る」人になっていくことができる。

これが建学の精神に対する私の今のつたない理解である。

もう一度この建学の精神の旗を高く掲げよう。

凡例

一、本書は『帝塚山学院大学五〇周年記念誌』として、一九六六年(昭和四十一)四月に開学した本学五〇年の歴史を記念し編集したものである。

一、本書は二部構成とした。第一部は「五〇年を映す『言葉の鏡』」と題し、理事長・学長・教員・職員・学生ら本学関係者の「言葉」を収録し、五つのテーマを掲げ本学について綴った、いわば「特論」である。第二部は「未来を拓く　大学がたどった五〇年」と題し、『帝塚山学院一〇〇年史』(二〇一六年三月、学校法人帝塚山学院発行)より、大学に関わる記事を「通史」として再録した。

一、巻末に歴代学長・副学長在任一覧、狭山キャンパス・泉ヶ丘キャンパス立体図を掲載した。

一、本書の編集は「大学五〇周年記念誌編纂委員会」が行った。詳細については「あとがき」を参照されたい。

一、本文の表記は、原則として現代かなづかい、常用漢字を用いたが、人名・地名などの固有名詞、引用文、記名記事などにおいてはこの限りではない。

一、資料や文献の引用・再録においては、明らかな誤りとみなされる箇所は修正し、数詞などの表記や体裁を調整・編集して掲載したところもある。

一、本書は、学内資料である『帝塚山学院大学通信』から多くを引用した。その際、文中では『大学通信』と略して表記した。

一、第一部のうち「――言葉でたどる半世紀――」は次のように編集した。人名については可能な限り所属・職務を付記し、学内関係者は敬称を省いた。学生については、所属学科の前に入学年度を付し、西暦年の下二桁で表している。学科名は、以下のように略した。

日本文学科＝日文　英文学科＝英文　美学美術史学科＝美学　国際文化学科＝国際
コミュニケーション学科＝コミュニケーション　人間学科＝人間　文化学科＝文化
食物栄養学科＝食物栄養　情報メディア学科＝情報メディア

帝塚山学院大学五〇周年記念誌　目　次

もう一度、高く旗を掲げよう　学長　津田謹輔

第一部　五〇年を映す「言葉の鏡」

――「言葉」でたどる半世紀――

はじめに……4
序章　ルーツ……5
第一章　こだはらの丘で……9
第一節　文人集う……9
第二節　書を愛し……13
第三節　世界を見据えて……18
第四節　「お花畑」……25
第二章　二学部体制へ……30
第一節　「実学」を求めて……30
第二節　IT時代を拓く……33
第三節　「心」の学び……38
第四節　食を育む……41

第三章　体を鍛え、心を磨く……45
第四章　地域に根ざし……49

―われら　一期生―

日本文学科……55
英米学科……58
美学美術史学科……63

―忘れえぬ出会い―

心の扉――心理学科の今、昔、これから　副学長・人間科学部教授　西川隆蔵……68
庄野英二先生と私　人間科学部教授　彭　佳紅……73

―学長が語る　帝塚山学院大学の昨日・今日・明日―

第七代学長　山田博光……84
第一一代学長　酒井信雄……87
第一二代学長　津田謹輔……91

―小粒でもキラリと光る大学―

帝塚山学院大学創立五〇周年の転機に　野村正朗理事長・学院長が語る ……96

第二部　未来を拓く　大学がたどった五〇年

―帝塚山学院大学五〇年の歩み―

第一章　誕生と発展 ……104

第一節　学院半世紀　帝塚山学院大学誕生　総合学園が完成 ……104

第二節　準備に動き出してから六ヶ月半で大学設置許可申請 ……105

第三節　豊かな一般常識、人間としての教養の向上をはかる ……107

第四節　新しい大学をめざし本格的な一歩 ……108

第五節　最初の卒業生一七六名巣立つ ……110

第六節　キャンパスの緑化 ……111

第七節　飛躍と発展の時代を迎える ……114

第八節　新しい図書館の誕生 ……121

第九節　新しい時代への模索 ……127

第一〇節　大学の現状と改革の基本方針・主要課題・方向と対策 ……130

第一一節　不安をかかえながらの臨時定員増 ……135

第一二節　「人間文化学部」新設　二学部体制へ ……138

第一三節　共学化問題と「文学部再生のビジョン」 ……140

第一四節　大学同窓会が船出 ……149

第二章　国際理解・国際交流 …… 154
第一節　国際理解教育研究所 …… 154
第二節　国際理解研究所 …… 156
第三節　国際女子の育成 …… 158
第三章　二一世紀の帝塚山学院大学 …… 162
第一節　学部再編と共学化 …… 162
第二節　大学院の設置 …… 165
第三節　教養教育に新たな試み …… 167
第四節　文学部の改革続く …… 168
第五節　キャリア支援体制の強化 …… 169
第六節　食物栄養学科誕生 …… 170
第七節　大阪狭山市と生涯学習推進に関する協定を締結 …… 172
第八節　文学部の男女共学と大学院の充実 …… 173
第九節　西日本初のリベラルアーツ学部と二学部四学科体制 …… 174
第一〇節　教育開発・支援センターの開設 …… 175
第一一節　南大阪地域大学コンソーシアムと大学コンソーシアム大阪への参加と連携 …… 180
第一二節　激動期迎える大学 …… 181
第一三節　大学の国際理解・国際交流 …… 185
歴代学長・副学長在任一覧 …… 191
狭山キャンパス立体図 …… 192
泉ヶ丘キャンパス立体図 …… 193
あとがき　大学五〇周年記念誌編纂委員会副委員長　西川隆蔵 …… 195

第一部

五〇年を映す「言葉の鏡」

―「言葉」でたどる半世紀―

はじめに

帝塚山学院大学に集う人々は、開学から今に至る五〇年の間に、実にたくさんの言葉を残してきた。

一例を挙げよう。

ＴＧＵはおしゃれである。小さいけれど真珠のように輝いている大学。私たちはこれを目指している。真珠は常に美しく輝いていなければならない。真珠とは、実はわがＴＧＵの一人ひとりの学生のことでもある。

学長　大谷晃一（二〇〇〇年『大学通信』九三号）

ＴＧＵ、すなわち帝塚山（Ｔ）学院（Ｇ）大学（University）。この略称からして、いかにもおしゃれな響きではないか。単語ひとつの力で、読み手は大谷の一文に引き込まれる。

言葉には、魔術師の握る杖のような働きがある。さっと、一振りするだけで、見るものの目を釘付けにする。心までつかんでしまう。

新入生に向け、心構えを説くのに掲げた「真珠」のひとことに、さっそく学生が引っかかってくれた。

我が大学は〝小さいが真珠のようにきらりと光る大学〟を目指していると聴いています。私も真珠のようにきらりと光る学生を目指して今後も努力していきたいと思います。

98人間　稲山裕美（二〇〇一年『大学通信』九五号）

稲山が大谷の魔術に引っかかったのではありません（失礼！）。

大谷の発した真珠、ならぬ珠玉の言葉が聞き手の心に響いたのだ。響いた稲山の心が共鳴現象でも起こすように振動し、また新たな言葉を紡ぎだす。紡がれた言葉の糸を織りなしていけば、そこには色鮮やかな織物が姿を表す。

その織物こそが、ＴＧＵ五〇年の歩みを映す歴史にほかならない。

言霊（ことだま）。言葉が内包する、と信じられてきた霊的な力を指す。言葉には確かに人間の心が宿されている。人間の血が通っている。

半世紀にわたって蓄えられた言霊の数々を収集し、帝塚山学院大学の生きた歴史を描いてみようと、私たちは思い立った。

ここに紹介する一つひとつの言葉を、大学の歴史のひとこまが記された一冊の書物と見立てていただいても良い。

それぞれの書物をテーマに沿って仕分け、分類番号を付して書架に並べた図書館でも開くような気分で構成したのが、この第一部である。

どのコーナーでも構いません、気に入った書物からお手に取ってくださいますよう。

序章　ルーツ

大阪狭山市今熊二丁目一八二三　これは現在の大学の住居表示である。

教務部長・教授（一般教養）田中斐太夫（一九九一年『大学通信』七六号）

大学の基点ともいえるこの住居表示地。そのルーツにまつわるいわれを巡り、田中はさらに以下のように筆を進める。

地名としては今熊の他に西山、大野、茱萸木（くみのき）が入りまじり、地籍図を見てもなかなか判りにくい状態であった。

当時の設立準備委員会が相談し、結局学長室のある場所をということになり、今熊一八二三となった。

青々と生い茂る広葉樹に囲まれた小高い丘のいただきに、本学狭山学舎はそびえ立つ。七つの建物群のうち、ひときわ威容を放つＡ棟は、かつてそれをギリシャのパルテノン神殿にたとえる人もいた。

そのＡ棟一〇二号室。今に引き継がれている学長室の所在地こそが、大学の住所なのだという。それを確認した上で、田中はこの記述に込めた意味を次のように訴え、文章を締めくくっている。

今年は大学創立二五周年である。一つの事実として書き残しておきたいと思った。

田中がこう述懐したときから、新たに二五年の歳月のページがめくられた今日、私たちもまた、大学の原点をどっしりと踏みしめることから出発したいと思う。

大学を開く前、この地のたたずまいは現在のそれとは別世界であった。

大学が来る前、「こだはら」（現在大学より刊行されている文集「こだはら」はこの地名に因んで命名された）と称されていたこの台地は、村はずれの墓地を横に控えた雑木林の丘で、土地の人は開発しようなどとは夢にも思わなかった所である。

数年前に狸の親子が姿を見せて話題になったが、往時は狐も出没したとの話である。

教授（英文）松本　淳（一九八六年『大学通信』五九号）

大学開学二〇周年に当たって、松本はこう書き記した。ブドウ、ミカンの果樹が点在し、赤茶けた土肌をさらけ出した荒涼たる光景が目に浮かぶ。それを緑したたる今の姿に生まれ変わらせたのは、内から地域から大学を支え、手を差し伸べてくれたあまたの人々の努力、協力にほかならない。

大阪府南河内郡狭山町（現大阪狭山市）の「こだはら」の丘に開学した帝塚山学院大学の学舎竣工時の全景
1966年（昭和41）4月23日　（「帝塚山学院物語」第15章）

大学新築工事の地鎮祭　鍬入れの儀
1965年（昭和40）7月24日　（『帝塚山学院創立六十周年記念誌』）

自分の生涯の記念に、学院大学の校地をみどりの森にしあげたい。
「みどりのニュース」（一九六八年『大学通信』六号）

この「みどりのニュース」が伝えるのは、ボイラー室の作業を担当していた校務技術員の「西村さん」の言葉である。郷里の奈良県で種や苗を育て、正月休みに出勤してサクラの苗床を開墾したという。

助けの手は、学外からも。植木職人の新出芳太郎さんである。大阪市住吉区にある帝塚山学院本部の近くで「植芳」という屋号の造園業を一族で営んでいた。その新出さん、大学開設のお祝いに、とやはりサクラの苗木を三〇〇本、寄贈してくれることになり、植樹は一族が奉仕の形でした。

植木屋さんとして一生を過ごしてきた新出さんは、一〇年後に桜が成長して咲くことも、五〇年後に空を圧する大樹となることをも、苗木を植えたときからすでに心に描いていられたのであった。
学監・教授（日文）庄野英二（一九六八年『大学通信』三一号）

「こだはら」の台地を緑の森に、空を圧する桜の園に。ボイラー作業の「西村さん」が、植木職人の新出さんが、そして庄野が描いたこの夢は、学生、教員、同窓生の手に引き継がれていく。

研究室前の空き地にバラ二〇〇本の花壇が出現した。…粉雪の舞う寒い日に、連日、奉仕の学生諸君がツルハシで土を起こしていた。か弱き女性とは思えぬたくましさであった。
「みどりのニュース」（一九七〇年『大学通信』一一号）

この作業奉仕には、文学部美学美術史の学生が汗を流した。本当にか弱かったのかな？

67日文 鈴木妙子は卒業後、仕事で手にした給料から金一封を、植樹料として大学に寄付した。そのことが、次の言葉を添えて記録に残されている。

バルト海に面したエストニアにこんないいつたえがある。

「人は一生に木を一本植えたならばこの世に生まれてきただけの甲斐があった」

「みどりのニュース」（一九七二年『大学通信』一八号）

卒業の記念に、教員の叙勲祝賀に、海外旅行の思い出に、と様々な動機で樹木を、花をキャンパスに残そう。そんな機運が盛り上がりを見せる。

それが具体的な形で実を結んだのが「自然に親しむ会」の結成である。本学の学生、教職員が参加し、自然の観察と同時にキャンパスの緑化推進を目指している。

イ　会員は各自、構内空き地に畑を持ち花を咲かせることができる。

ロ　時々野山に遠足し自然の中に遊び、かつ草花や木の名を識ることにつとめたい。

ハ　また時に会合をもち、文学や美術その他色々な面における自然の問題を語りあいたい。

ニ　さしあたりわれわれの大学のキャンパスを花と木をもってよそおうことにしたい。

ホ　発起人、浅田善二郎、庄野英二、杉山産七、長沖一、源豊宗、吉田友之

主任教授（美学）源　豊宗（一九七〇年『大学通信』一二号）

前記はその「自然に親しむ会」への参加呼びかけ文から抜き出した。

この活動は、単なる緑化活動を超えるものを内包していた。「自然の中に遊び」「文学や美術その他色々な面における自然の問題を語りあいたい」と。自然を通して、文化や人の心を見つめ直す志向が、すでに芽生えていたのである。だからであろう、この活動は、キャンパスに集うすべての人々の心を結ぶきずなとして、根付いていくことになる。

同窓会は友情をきずなとして結ばれる集りであり、その結びつきは利害打算を越え、たがいに信じ、喜びも悲しみも、心から分かちあうところに特色があります。

卒業生が記念樹を残して巣立っていくという伝統は、今後も、長く、うけつがれることでしょう。そして狭山の丘は、記念樹の緑によっておおわれる日が来るのも遠い将来のことではないでしょう。

学長　西本三十二（一九七二年『大学通信』一九号）

この予言どおり、その日は遠からず訪れる。一九八九年十二月一日付で、狭山キャンパスは緑化の実績が認められ、大阪狭山市の「緑化推進及び保存樹木等指定地域」に新たに加えられることが決まった。健康で文化的な生活環境の確保を図り、豊かな緑を守り育てることを目的とした制度である。

これに基づき大阪狭山市から、助成金のほかに次の樹種が配布された、と記録される。

オオシマザクラ二〇本、ソメイヨシノ二〇本、キンモクセイ一〇本、モクレン一〇本、サツキ三〇本、ツツジ五〇本、ライラック三〇本、以上一七〇本。

（一九九〇年『大学通信』七一号）

寄贈樹木の一本一本を丹念に数え上げる繊細な心配りは、一人ひとりの学生を育てる大学としての使命感にも通じるものを感じさせないだろうか。季節の移ろいとともに装いを変える木々の一本一本に、個々の学生の顔を想像するような、そんなきめの細かさを。

わたしはさらに大学周辺に果樹園を作りたい。学生も教師も手当たりしだいに季節の果実をもぎって、舌づつみを打ちながら学べるような。

それはともかく、空想の果実よりも味わい深い女性をこの大学で現実に育てることをもって、わたしたちは瞑すべきなのだろう。などといったら、わが愛すべき女学生諸嬢は柳眉を逆立てるであろうか。

文学部長（日文）長沖　一（一九六六年『大学通信』一号）

季節の果物と一緒になんかされたくないわよ、だなんてふくれないでくださいね、お嬢様たち。植物などの自然を愛すること、人を育てること、そして文芸を学ぶことの相関性は、本学では次のように定式化されていたのですから。

人間と自然は文芸の二大要素であり、日本の文芸には日本の自然の微妙な相が素材として多く取りあげられております。

日本の文芸を学ぶために日本文学科へこられた方は、日本の自然に注意されたい。

ここ、さやまの丘は自然を観察するには恵まれた環境であり…うっかり見過ごしていた微妙な自然を再発見するようにぜひ心がけてください。初秋の明るい澄んだ光の中に咲く鄙びた木槿（むくげ）の花を知らなければ、

道のべの木槿は馬に食われけり

という芭蕉の句の深い味わいを感取することはできません。

主任教授（日文）浅田善二郎（一九七四年『大学通信』二三号）

本学は一九六六年、日本文学、英文学、美学美術史の三学科からなる文学部として産声を上げた。その発展を底から支えてきたのが、多くの人の力で育てられた緑の自然であることは、胸に刻んでさらなる五〇年後までにも残したい。

第一章　こだはらの丘で

第一節　文人集う

東京オリンピックも終え、日本がいよいよ本格的な経済成長期に差しかかろうかというその時期に、帝塚山学院大学は開学のときを迎えた。

帝塚山学院大学は、日本文学、英文学、美学美術史学科の三つの峰にわかれ、教授も学生も相たずさえて、それぞれ独自の学風をきずくことに力を傾けている。学問の道は険しい。しかし、その険しさを一つ、一つ、よじのぼっていくところによろこびがある。

学長　西本三十二（一九六八年『大学通信』七号）

狭山・こだはらの丘の「三つの峰」には、実に多彩な人士が集った。それぞれに自然をいつくしみ、友と交わり、書にふける、異能にして懐の奥深い人たちである。

初代文学部長　長沖一もその一人であろう。

平気で知らないときは、知らない、といわれる。その自然の呼吸は私をうちのめす。片々たる知識ではない。大きな余れるほどの自信が背後にないといえない。…字がわからなくなって学生にきかれることがあるらしい。それを、学生が、実に深い敬愛の情を以って我々に語る。

教授（日文）　杉山平一（一九七六年『大学通信』三一号）

一九七六年八月に没した長沖への、追悼の辞である。幅広い文筆活動のかたわら、お笑い芸能制作の世界でも活躍、手がけたラジオドラマ「お父さんはお人好し」は戦後お笑いブームの嚆矢ともいわれる。文芸・芸術で数々の賞を受けたその人が、キャンパスで見せた素顔のなんとおおらかなこと。

この丘の最も美しい季節に、若葉祭が催されるのは楽しいことだ。大いに青春を讃えるのもよし、若葉の陰でチョッピリ憂愁に眉をくもらせるのもよい。…そこで私は若葉祭に一つの提案をする。あなたがたの若葉祭の記念に、一人一人が、あるいはグループ毎に、キャンパスに青春の記念樹を植えてほしい。

ボーイフレンドができてそわそわしている人はバラを植えるがよい。片想いに心を痛めている人は、そっと矢車草を植えるがよいだろう。

学長　庄野英二（一九七八年『大学通信』三六号）

この年の学園祭（若葉祭）に寄せた青春讃歌である。筆を執った庄野は、

文筆に、絵画にと、あふれる才気を発揮し、一九七五～七九年、一九八一～八五年の二回にわたり本学学長を務めている。学生への語りかけには、常に優しさ、ゆとり、そしてユーモアがにじんでいた。

大阪を活動の舞台に、文化、芸術、学術の発展に尽くした人に贈られる今年の大阪芸術賞に、大谷晃一教授が表彰されました。織田作之助、梶井基次郎、武田麟太郎など数多くの伝記文学に独自の境地を開かれた業績が評価されたものです。

（一九八九年『大学通信』七〇号）

やはり文筆家であり、とりわけ大阪文化の独自性に注目した「大阪学」の提唱者として知られる大谷も、一九九七～二〇〇一年に学長職にあった。このように文人がひしめく本学キャンパスには、高貴な花の香りに引き寄せられるかのように、広範な分野から多彩な顔ぶれが参集した。

特別講義で来学された矢代静一氏にお会いできたことは、忘れ得ない出来事である。丁度その時期、主題に行き詰まりを感じていただけに、作者の意見を得ることができたのは幸運であった。…演劇が人と人とのつながりを表現しようとするものならば、その課程にもドラマがあって当然かもしれない。

79美学　田上京子（一九七九年『大学通信』四一号）

演劇研究会の一員として公演に打ち込んだ田上は、その課程でめぐり会った劇作家 矢代氏から学び取ったものの重さ、そして人と出会うことの意味を深くかみしめている。この年に始まった特別講義では、阿川弘之（作家）、桂米朝（落語家）、山室静（評論家）、阪田寛夫（作家）、外山滋比古（英文学者）の、矢代を含め計六氏が招聘されている。

一九六八年五月、本学を訪れた米国の現代詩人バーナード・フォレスト氏は学生の前でいくつかの詩を朗読した。

揺り椅子に
腰かけて
未来の通り過ぎるのを見るのが好きだ
ところで先日は
しくじって落ち
椅子からセメントの上へと――
まさに不幸な
現実との出合い

専任講師　中島　完（一九六八年『大学通信』八号）

中島の訳によるフォレスト氏の詩の一節がこのように記されている。当時の学生、こんな詩の朗読をキャンパスで楽しめるとは、なんとまあ優雅なご身分、と、嫌みの一つも言いたくなる。

様々な分野で見識を磨いた人々が、緑したたる丘の上のキャンパスに集い、のびのびと論じ合う、となれば学風はおのずと定まる。

専門性よりも一般性、技術よりも教養、実学よりも人間学。たしかな品性を身につけた心豊かな若者を育てる目標で、大方の意見は一致してみえる。

芸術の鑑賞という感情体験は、その中に必然的に知的要素をひそめているからです。その作品の美的特徴を理解することによって、はじめてその芸術に本当にアプローチできるのです。そのような理解への道を開いてくれるのは、やはり学問です。

主任教授（美学）源　豊宗（一九六七年『大学通信』五号）

感性と知性の結合という目標が、ここに簡潔な表現で姿をのぞかせる。

西洋美術展を見たことのある人は、ギリシャ・ローマ神話と聖書の中から題材を取った作品の多いことに驚き、西洋美術鑑賞に神話と聖書の知識の必要なことを痛感されたことでしょう。

主任教授（英文）小林清一（一九七五年『大学通信』二六号）

美術の鑑賞に歴史の素養が必要なことを説く小林の一文は、英文学科の新入生に向け、書かれたものである。美術と英文学の間に、隔壁はない。そこに門を開き、自由に往来する姿勢を学生に求めているのである。

このコースの大きな目標の一つは〝Writing in English〟で〝Writing English〟でない点に注目してもらいたい。即ち英語による表現能力を習得させることである。

重視することは「話す」、「書く」、「聞く」、の三面に限るという錯覚を多くの人が抱いているが、これは皮相的暴論である。

主任教授（英文）平岡照明（一九八一年『大学通信』四六号）

翌春（一九八二年）の英米語学コースに向けても、なお平岡が力説するのは表現能力、つまりここでも問われるのは、表現の源泉となる人間の内面をいかに磨くか、なのであろう。そうでない教育を「皮相的」と断じる歯切れのよさ。

わが卒業生たちも、研究を一生の仕事と考える人はおそらく絶無で、一回きりの研究者というべきであろう。だが、僕はこの一回きりの研究者であったことを、一方で寂しく思いながらも、大切にしたいと思う。大学、特にその文学部に存在の意義があるとすれば、それは叡智を磨く世界であると思うからである。大学はすぐに役立つ知識や技術を学ぶところではない。

主任教授（日文）吉井　巌（一九七五年『大学通信』二九号）

前記は、教え子の結婚に寄せて書かれた。「一回きり」だから尊い、大学という名の、知的世界。

学生もその呼びかけに応えている。

日本の中で西洋美術を見る時、日本の美とちがう何ものかを見るには見ますがそれは表面をとらえるだけであって、それの根ざす芸術意欲のちがいにまで目をむけることはむずかしいものです。欧州にいって始めて西洋の様々の美術はあの外、あの国々においてこそ生まれるにふさわしいと納得することが出来たような気がします。

66美学　漆原麻佐（一九六九年『大学通信』一〇号）

西洋美術を学ぶため、欧州への旅を試みた漆原もまた「一回きり」の研究者として、表面ではなくものごとの「根」に目を向け、叡智を磨くことに励んだひとりに違いない。漆原が一九七〇年大阪万国博に寄贈した聖書講読台は、いまも狭山キャンパスG棟一階にひっそり鎮座している。

すぐに役立つような知識、技術ではなくとも、人間として身につけるべきこと、教えるべきことがある――。これは開学以来、本学に貫かれた哲学であるように思える。

では、四年間の学びの意味はどこにあるのだろう。私はその意味を「人間よ気高くあれ、なさけ深くあれ」というゲーテの言葉の中に見いだす。

大学での学びの意義は、広く深い知識に裏打ちされた教養人になることにある。ここでいう教養とは、倫理的かつ総合的判断力のことである。わかりやすく言うなら、自分の姿を客観視し、他者の立場を思いやる能力のことである。

学生部長・教授（一般教養）川上与志夫（一九九三年『大学通信』七九号）

教養とは、自分を客観視し、他者の立場を思いやる能力のこと。主に新入生に向け投げかけられたこの言葉を、学生はどのように迎え入れたのだろうか。

せっかく英文学科に入ったのだから…「オセロー」を読んで、天使の言葉でオセローに疑うことを教えるイアゴーの近代的悪魔から何かを学んでほしい。今年卒業していった聡明な学生の多くが英米文学から人間認識と人間洞察を深めたとレポートの中で書いてくれている。嬉しい限りである。それは直接就職には役立たなかったかもしれないが、人生という長いスパンの中で、英文学科が与えた感情教育は決して無駄ではなかったことを知るであろう。

教授（英文）今西雅章（一九六六年『大学通信』八五号）

自分や他者を、人間として洞察する。その命題の重さを考えれば、それが就職に役立つかどうかなんて、どっちでもいいじゃないか。こんなおおらかなまなざしで、世俗を眺めやる気風、学風は、半世紀を経たいまに至るまで、この大学の底流にたしかに流れている。

広い視野と深い洞察力と鋭い批判力をそなえた人物が、まことの意味での自由人であり、教養人と呼ばれるものであろう。私はこの大学に学ぶ諸君にも、この意味での自由人となる資質を四年間を通して絶えず培ってほしいと思う。

学長　原　龍之助（一九八八年『大学通信』六五号）

この呼びかけの心を、学生もまた敏感にキャッチする。

この学問に少し足を踏み入れてみて、芸術作品は、歴史、文化など、あらゆる要素が絡まっているもので、一つを解けば、すべてを理解することが出来るというものではなく、とても奥深いおもしろみをもつものだと知り、ますます興味を持つようになった。

92美学　松田匡世（一九九四年『大学通信』八一号）

開学以来、本学が培ってきた基本理念の一面を、ずばり言い当てた言葉である。

本学が現在の、リベラルアーツ、人間科学（発足時は人間文化）の二学部体制を新たに迎えるにあたって示された、次の言葉を改めてかみしめたい。

本学院九十余年にわたって培われてきた伝統、品位というものはやはり大事に守っていきたい。すなわち「不易流行」である。「変えなければならないこと」と「変えてはならないこと」を峻別することが必要であろう。

理事長 石川　啓（二〇〇八年『大学通信』一〇三号）

「不易流行」とは江戸期の俳人・松尾芭蕉の生み出した語である。「不易」すなわち、変えてはならないこと。その先頭に掲げられるべきが、自由にして個性的な教育風土であるのは間違いあるまい。

第二節　書を愛し

フランス語初級文法のクラスだというのにわたしは毎年開講時に、「あなたの好きな日本と外国の作家を三名ずつ書いてください」といってしまう。たった六名の作家の名。その名前は、わたしに彼女たちの内面生活の方向を告げ知らせることによって、数十名の、まったく何の手掛かりもなくわたしの前に居並ぶ華やかな彼女らを相手にしゃべらなければならないという恐怖から救ってくれる…。

まずは書物との蜜月を。

専任講師（一般教養）梶谷温子（一九七一年『大学通信』一四号）

居並ぶお嬢様たち、いったい何を考えているの。何とかその内面を探り当てたい。そうだ、愛読書をあげさせたらいい、好きな文学者の名前をあげさせたら。

学生とコミュニケーションを取るその手掛かりを、梶谷は書物に求めたのである。

専門にとらわれない幅広い教養を目指した本学文学部にあって、書物重視は当初から共通の認識であった。本学のユニークな教科・読書演習は、開学間もない一九七〇年、開設された。教員による推薦図書目録から学生が選び、決められた冊数の感想をレポートにまとめて提出する。それに教員が批評を加える。そんな形式である。学生と教員のやりとりの様子を伝える記述が以下に。

まったく顔見知りのないKさんから次の手紙を貰った。「…面倒くさい読後感なんてまあ出せばよいだろうと適当に考えた内容に比べて、先生の一つ一つのもっともな指摘、そして文学作品の読み方味わい方などの教授、私は恥ずかしさとともに先生への敬意の情が涌いてくるのを感じました…」

私はもとより人に大きな変化を与える人間からは程遠いが、一枚の原稿用紙に記した自分の気持ちがちょうど人生の跳躍台を前にした人達にあって刺激となったことが無性に嬉しかった。

助教授（英文）中島　完（一九七六年『大学通信』二九号）

レポートを出す学生、受け止める教員。心の響き合いがそこに生まれる。

提出される「レポート」に対して感想とか批評などを吐露しなければならないとなると、私のような小説嫌いの者には実に苦行に類する。しかし提出された「レポート」を時間をかけて少なくとも一日に一篇ずつ三時間かけて同じ「レポート」を見詰めて考えていくと、提出者の考えなり、又性質が判って行くような気がする。

助教授　村山治雄（一九七二年『大学通信』一九号）

それにしても、ひとつのレポートと、三時間にらめっことは、なるほど苦行！　でも、それでこそ、双方の心は通い合う。

では、どんな書物が推薦されたのか。次はその一例。

英米文学を真に理解するためには、ぜひ読んでおかねばならない本が幾冊かあります。

主任教授（英文）小林清一（一九七五年『大学通信』二六号）

と、おもむろに切り出したあと、小林はたたみかける。

西洋美術展を見たことのある人は、ギリシャ・ローマ神話と聖書の中から題材を取った作品の多いのに驚き、西洋美術鑑賞に神話と聖書の知識の必要なことを痛感されたでしょう。

そのうえで、原書の書名を列挙しつつ、いわく。

ギリシャ・ローマ神話を知るには㈠ Thomas Bulfinch: The Age of Fable (Everyman's Library) 訳本「ギリシャ・ローマ神話」（角川文庫）が最良の書です。

次に聖書ですが、㈡ The New Oxford annotated Bible (Revised Standard Version)（口語）聖書（日本聖書協会編　三省堂）が最良です。

これは学生にもさぞかし苦行だったはず。それでも小林の次の一言には、さぞかし励まされたのではないか。

読了した時、貴女の英語力は物凄く向上しているでしょう。

まさしく、英米語学コース開設で目標に掲げられた、「Writing English」ではなく「Writing in English」。「英語を」ではなく「英語で」学ぶ精神

である。英文学科、美学美術史学科、といった枠にとらわれない自由な学風が、ここにも貫かれている。

それにしても学生たちは、なんとたくさんの課題を負わされたことか。だから、次のような光景が出現することにもなる。

気の毒なのは、一二〇枚ものレポートを書いたために腱鞘炎を起こした学生がいた。文豪谷崎潤一郎も書痙（腱鞘炎に同じ）に悩まされていた。腱鞘炎の痛みには同情するが、学生時代に文豪と痛みを共有したことは、レポートが充実している限り大いに誇ってよいことである。

学長　庄野英二（一九八三年『大学通信』五〇号）

学生にとって、肉体には痛みを、心には誇りを伴う、ほろ苦くも甘美な思い出として刻まれているのではないか、などと想像を馳せたい。

よく皆さんが、読書演習について話しているのを聞きます。「読むのはた易いが、レポートを書くのは難しい。」「自分で勝手に好きな本が読めるならよいが、あんな限られた中から選んで読むのは面白くない。」

その気持ちわかります。

こんな風に学生の苦労にいたく同情を寄せるのは、どこのどなた？　文章は以下に続く。

わたくしは平生、冷たい顔をして提出されたレポートに受付印を押しています。

学生時代、少なからず読書演習に悩まされたわたくしが、現在、読書演習を扱う仕事をしているのはどうも後ろ目たいのですが、三回生で再履修した読書演習は自分なりに有意義だった、と思っています。

日文研究室付　網本ユミ（一九七八年『大学通信』三六号）

ここにもまた、苦い思い出を抱える人がいた。担当職員として、そのほろ苦さをいつまでも引きずっている点で、感慨はまた格別であっただろう。「再履修」の記憶を「冷たい顔」に託し、ひそかに現役を観察する先輩が事務職場にもいるかもしれない、とは学生側も少し意識してしかるべきではないか。

「読書」の環境を整えるため、本学が図書館の拡充に注いできた努力は、充分に誇っていいことである。

設備面でも清掃の行き届いた清潔な校舎・教室、全国の「大学図書館ランキング」で総合二九位に位置づけられる素晴らしい図書館も整備され、コンピューター環境も整えられています。

「アドミッションセンター便り」（二〇〇六年『大学通信』一〇一号）

「総合二九位」の数字が、それこそ真珠のようにキラリと輝いて見えませんか？

その土台を支えているのは、書物への愛、そして書を読むことへの畏敬の念である。

図書館がまだ校舎の中に仮住まいしていたころ、次のようなことを訴え

る人がいた。

図書館を利用する人々は…手を洗って入ることがのぞましい。（…これは衛生上の注意でもあるが、又一方では目録や本をよごさぬことにもなる…）

書物をよく読む人は、書物を愛することを知る。学校の本はかわいがって読むべきであろう。一冊の本は長いあいだにいくたりもの人々から読まれる運命をもっているのが、図書館の本なのである。

教授（語学）杉山産七（一九七〇年『大学通信』一〇号）

とは言うものの、「読書演習に悩まされた」学生も少なからずいたであろう本学で、学生への読書の薦めは、そう容易な作業ではなかったらしい。

資料利用者の数が一日二〇人をこえることはないようだ。…魅力のある本があまりないか、それとも余裕のある子女ばかりで、よみたい本は買ってよむということにしているのであろうか。或いは世間並みに、本に無縁の学生が多いということかもしれぬ。

「図書館だより」（一九七三年『大学通信』二一号）

若者の本離れがすでに始まっていたのだろう、「新館長勉強記」と題したこの一文は、その風潮をいささか自虐的に嘆いている。

それをなんとかしなければ、と以下はさながら図書館の奮戦記。

図書館では以下のSを目指しています。

1　サービス
2　スピード
3　しんせつ

徹底した奉仕をすることによって初めて利用者に満足していただけるのではないか。

「図書館だより」（一九八五年『大学通信』五七号）

なんと手厚いサービス精神！

カードをひいてヘボン式と訓令式が混ざってしまったら、ふと頭を上げて下さい。一覧表が目に入ってくる筈です。

さあ、カードをひいてみて下さい！　きっと、こう言えるでしょう。ヘボン式も慣れると簡単ね!!

「図書館だより」（一九八六年『大学通信』六一号）

「ヘボン式克服法」と題した一文である。ローマ字表記のややこしさを考慮した、手とり足とりの心配り！

読書推進の工夫は、図書館の外でもなされていた。

（学生ホールでは）パンやコーヒー、ジュース等で、胃への栄養補給も盛んなようです。ところで学生部では、このたび頭への栄養補給もあわせてしてもらおうというわけで、ホールの一隅に書架をおき、新書版や文庫本程度の書籍を若干用意しました。

（一九七二年『大学通信』一八号）

次の一言も納得できる。

まさしく「図書館学は言説にあらずして実践である。」のである。

「図書館だより」（一九八八年『大学通信』六七号）

そして、涙ぐましい努力の積み重ねの結果が――。

貸し出し冊数は前年度よりやや回復し、一人平均が一〇冊を越え、一昨年の状態に戻りました。将来は一人平均一五冊くらいの利用を望みます。

「図書館だより」（一九九三年『大学通信』八〇号）

現実は一進一退、一喜一憂。それでも「実践」が功を奏したのはたしかである。

またそこには、キャンパスの緑化にも見られた全学挙げての取り組みが。

大学の卒業生、在校生及びご父兄、教職員その他各位にご協力方をお願い申し上げましたところ、心よくご賛同をいただき、おかげさまで別表のとおりの募金結果となりました。

大学同窓会会長　瀬川武美　学長　庄野英二

（一九七八年『大学通信』三六号別報）

帝塚山学院創立六〇周年記念事業の一つとして行われた「大学図書館建設ならびに充実」のための募金には七七〇万円に及ぶ浄財が寄せられた。

全国ランキング総合二九位の図書館の充実ぶりに触れたときなど、折々にこの歴史は思い起こされていいのではないか。

電動書架の設置によって資材の蓄積力を増すとともに、一方複写機の開発によって資料の拡散も自由になったといえよう。一つの図書館の資料能力を大げさにいえばグローバルなものにしてしまった。

「図書館だより」（一九七九年『大学通信』四〇号）

「グローバルな」能力を備えるに至った読書環境が、「グローバルな」人材の卵を育てることにも大きく寄与したことは、次の例にも示されている。

カナダで暮らしてみて、初めて、いかに私が日本について何も知らないか、又、何も考えていなかったか感じます。

安部公房の「砂の女」が大好きだという学生が私に感想を聞いてきました。この本はたしか大学二年のとき「読書レポート」を提出した本なので、記憶にあったので助かりました。

74英文　川戸葉津子（一九七二年『大学通信』三四号）

留学先のカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学からのこの一文。古来、芸は身を助く、という。ここでの芸は、まさに本学の読書演習で磨かれた賜物なのである。

第三節　世界を見据えて

「読書演習」などの授業で磨かれた教養、スキルを武器に、子女たちは臆することなく世界を目指した。そこに見た驚きの光景は――。

十月三十日はハローウィンでした。…外国ではじめてむかえるこの行事に私もそわそわと魔女のごとく戸口のまわりをうろついていましたが、ほんのり明るい月夜に、木々の間を敏捷にかける白い布などをつけた子供達は本当にとびかう霊のように思えて仕方がありませんでした。

67英文　庄野晴子（一九七〇年『大学通信』一三号）

庄野はカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に本学から留学の身。秋の収穫を祝う、欧州由来のハローウィンが日本に定着したのは、二一世紀に入ってから、といわれる。それをさかのぼること数十年の時期に、お化けカボチャや奇怪な黒装束が飛び出すその行事に接し、目を丸くする様子がうかがえる。これもささやかな異文化体験だったのだろう。

海外留学をはじめとする、国際理解への本学の取り組みは、創業間もないころからのものであった。

わが帝塚山学院大学は、「明日の大学」を目ざし、国際理解に関する講座をもち、昨年は、カナダとアメリカから留学生を招き、本年はさらに多くの外国留学生を受け容れ、交換学生として学院大学の卒業生や学生を海外の大学に送ることを計画している。

学長　西本三十二（一九七〇年『大学通信』一一号）

カナダ、米国など諸大学との間の留学生交換計画が西本を中心に練られ、一九七〇年秋、海外留学第一号として庄野ら三人がカナダに派遣された。

よく言われる「日本を外からながめる機会」という言葉を身をもって感じています。これほど「日本人だ」と意識し日本をはっきりながめられるとは思っていませんでした。そして私がこれほどあのごみごみした日本を愛しているとは！

67英文　松代侑子（一九七〇年『大学通信』一三号）

その三人のうちの一人、松代は、ビクトリア大学に進んだ。一八ドル入手にも手間取った為替管理が自由化されたのが、ようやく一九六〇年代半ば。海外旅行の道が一般にも開かれたそのころ、地球の裏側に降り立った心細さ、そして「あのごみごみした」故国へのせつない慕情がのぞいている。

日本を外国人に理解させるためには、先づ、我国の地理、歴史、文化等についての一応の知識を持たねばなりません。このことは留学生試験を受ける人だけでなく、日本人として当然のことであります。

国鉄の宣伝ではありませんが、学生諸君に前述の意味でのディスカバージャパンをお願いする次第です。

留学生課長・教授（一般教養）吉野大資（一九七三年『大学通信』二一号）

カナダからの交換留学生
1970年（昭和45）６月　狭山キャンパス

派遣された留学生には心細がっている暇など許されない。「日本を理解させる」使命が与えられていたのである。

プレッシャーの重さのほどはお察しします。

今のＪＲが国鉄と呼ばれ、テレビのＣＭで流した「ディスカバージャパン」（日本を見つめ直そう、の意味）のうたい文句は、当時の流行語でもあった。

一方、本学は海外からも学生を受け入れた。初年度の一九六七年には、米国、カナダから各一人が来学。

どうぞ学生の皆様どなたもためらわないで私たちとお話してください。また私たちは私たちの国の生活についてどんな疑問にも喜んでお答えいたします。このようにしてはじめて「留学生交換計画」がみんなの益となるような真の交換となることでありましょう。

留学生　パトリシア・タマセン（一九七〇年『大学通信』一三号）

タマセンはカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学からの留学生。関連して、次のような記述が少しばかり気になる。

昨年あたりから留学生に声をかけてくださる学生諸君の数が多くなった…一般に日本人には明治以来の舶来思想が強く残っているようで、外人に対しては卑屈になるか敬遠するか或いは無関心の紋次郎さんとなりがちです。

このような人種の違いをことさら意識した態度は避けねばなりません。

教授（一般教養）吉野大資（一九七二年『大学通信』一八号）

肌の色を指差して「ガ・イ・ジ・ン」とささやいた覚えもある私たち日本人、外に出ても、また内にあっても異文化との触れ合いには、必要以上に緊張する癖がある。「無関心の紋次郎さん」とは、「あっしにゃあ、かかわりねえことでござんす」のせりふで当時、人気を博したテレビ時代映画のニヒルな主人公 木枯紋次郎。異文化交流には、進んでかかわってもらわなくては、困るのでござんす。

そうした異文化との壁は、しかし、少なくとも本学にあっては、徐々に乗り越えられていく。

そこでは外国語教育の果たした役割が小さくない。

ドーナツとコーヒー、カクテルパーティーや中華料理のバッフェー等の社交行事も行われ、多くの外国語教師がおおいに語り合い、情報を交換し、日本の外国語教育の発展のための議論をした。

助教授（英文）Jim White（一九八二年『大学通信』四九号）

和やかな雰囲気が伝わるこの議論の場は、同年十月、本学で開催された全国語学教師協会（ＪＡＬＴ）の第八回全国国際大会。海外からも含め八五〇人が参加し、元文部大臣 永井道雄氏の基調講演もあった。ＪＡＬＴ会長としてこの会議を取り仕切ったのが、Jim White＝ジム・ホワイト、である。責務の重さは、いかばかりであったか。

顧問のホワイト先生による発音・アクセント・イントネーションのチェックを徹底的にうけました。

またライクロフト先生（本学非常勤講師）の演技指導その他先輩や留学生の方々の助言・協力をいただき感謝しています。

81英文 桶谷仁美（一九八三年『大学通信』四九号）

桶谷がキャプテンをつとめるＥＳＳ部が一九八二年十一月、宝塚市で開催された英語によるイングリッシュ・ドラマ・コンテストで入賞を果たした。桶谷はここで、ホワイトら外国人教員に加え、留学生たちの助力を挙げている。

一九七〇年に始まる留学生の受け入れは、カナダ、米国からさらに西独（当時）、オーストラリア、フランス、インド、台湾と、対象を広げ、それは本学に国際的な感覚を取り入れるのに、確実に貢献した。その効果の一つに、英語弁論大会での活躍を挙げたい。

「私にできるのは、この文章を心をこめてスピーチすることなんだ。相手にわかってもらえるように、自分らしく暗唱することなんだ。」と。なぜだかそう思ってしまうと今迄の緊張感も消えてしまい、思いっきり発表できたのです。そして結果は二位。私にとってこの暗唱大会は素晴らしい思い出になりました。「心をこめて話す」ことの大切さも学びました。

88英文 金井千恵子（一九八八年『大学通信』六七号）

ＥＳＳ部一回生の金井が同年六月、桃山学院大学での英語暗唱大会で快挙を達成した。「心を込める」意味を学んだのが、何よりの収穫だったろ

う。

関西国際空港の開港をもとに、〈国際理解〉ということを取り上げました。自分自身の経験もふまえて、〈国際理解〉というテーマを具体的に言葉の上で表現するのは決して容易ではありませんでした。

87英文　川口真生子（前記『大学通信』）

「容易でない」と知って、初めて難関は越えられるのだ。川口は同年十月、大阪・サンフランシスコ姉妹都市協会及び大阪・メルボルン姉妹都市協会主催の英語スピーチコンテスト大学の部で、地域の特性を押し出したスピーチでサンフランシスコ市長賞を獲得。

テレビ会議出席の学院大学中国文化コースの学生たち
（『帝塚山学院通信』45号）

私は日本人の親友達を通して、両国の人間がお互いの国をよく知りその人の国民性・民族性を認め尊重しあうことによってのみ、それ（注：真の友情）が成立し、素晴らしい人間関係を作ることはどんな政治活動にも勝る両国関係改善の一番の近道だということも知りました。

85英文　李　静愛（前記『大学通信』）

「コリアン」としての立場で李は、毎日新聞社主催全国学生英語弁論大会で相互理解を訴え三位に入賞、前記の報告では指導にあたったジム・ホワイトらへの感謝の気持ちも添えるのを忘れていない。

学生の活躍は、英語での弁論大会ばかりではない。

中継テレビ回線を使って日本、中国、韓国の学生が意見を交換する東アジア五大学国際テレビ会議に、本学は東京大学とともに日本代表として参加。一九九八年から二〇〇〇年にかけ計六回にわたって開かれた。

韓国や中国の人たちと海を渡らずにこんな風に声を聞きながら顔を見ながら交流出来たことがとても楽しく嬉しかったです。この三カ国がやる気になればなんだって出来てくるんじゃないかと言う思いになりました。

98国際文化　高　燦玉（二〇〇〇年『大学通信』九三号）

他の国の人から指摘されることで、今まで当たり前だと思っていたこと(割り箸の件、音消しのためトイレの水をながすこと)に疑問を持つようにもなりました。

98国際文化　野本千恵(前記『大学通信』)

日本での参加大学が本学と東京大学ということで開始前やや気後れしているようにも見受けられた彼女たちが、実際に会議が始まると、議論のうえで五大学を完全にリードしていた。

帰り道、疲れているはずなのに、彼女たちの背中は大きく輝いて見えた。

兼任助教授　杉本雅子(一九九九年『大学通信』九一号)

同年三月二、十の両日、大阪KDDテレビ会議での会議に参加した国際文化学科の学生は、本学国際理解研究所長　米田伸次、杉本が引率した。学生の背中だけでなく、本学の名前も大きく輝いて見えたに違いない。

この一連のテレビ会議にも象徴されるように、本学の世界へのまなざしの中には「アジア」が確かな位置を占めるようになっていた。

過去に朝鮮を侵略し、現在も歪んだ朝鮮観が存在する周囲の現実に目を向けるならば、この二つの企画に同じ姿勢で参加することはできないと思います。私自身は訪韓を、民衆の生活意識・情念を膚で感じとり、韓国理解の原点とする貴重な学習体験と考えており、後の日米学生会議では、社会構成を異にする双方がどのような価値基準・発想をもつものかという点を探ってみたい。

74英文　奥山倫子(一九七五年『大学通信』二七号)

国際ユネスコ学生交換活動で、訪韓、日米学生会議の二つの体験をした奥山は、世界の中で東アジアを見据える視座にはっきり目覚めていた。

ここにも見られるユネスコ(国連教育科学文化機関)と本学との歴史的なかかわりの深さは、世界にはばたく学生にとり、太い屋台骨であった。

世界中には人口の四分の一が字を識りません。そのうちの七割はアジアにすんでいるといわれています。読み書くが出来るという事は最低限の人権なのです。私達はアジア人です。欧米にばかり目を向けることよりも、まずアジア人に興味を持つことが大切ではないでしょうか。

93国際　青木純子(一九九四年『大学通信』八二号)

日本ユネスコ協会主催の「世界寺子屋運動」でカンボジアを訪問した青木もまた、実践活動を通じアジアの占める位置に気づいた一人である。

リンサン村最終日にはバーシー儀式でおくってもらいました。この儀式は村の人々が私たちの無事と健康を祈りながら、私たちの手首に白い糸を結びつけるという式です。この儀式の後私たちの手首は、包帯をぐるぐる巻きにしたみたいになりました。

98文化　平畝千鶴(二〇〇一年『大学通信』九六号)

国際NGOに協力する形で「ラオス・カンボジアに絵本をおくる活動」

韓国訪問
（大学案内『帝塚山学院大学2015』）

に参加、ラオスの小さな村に滞在した平畝は、包帯だらけになった手に、ラオスの存在をぐんと身近に感じ取ったことだろう。

韓流ブームによって、韓国のドラマ、音楽、食べ物など、韓国について教えてくれる多くの情報が日本に入ってくるようになりました。そして、これら多くの情報によって、それまで私たちが持っていた韓国についてのイメージが打ち砕かれました。このイメージのギャップが、かえって新鮮だったのかもしれません。

04国際　小田　翠（二〇〇六年『大学通信』一〇一号）

小田は、派遣留学生として韓国・高麗大学に向かうにあたってこう記した。

アジア、とりわけ東アジアと日本との間にいまだある、厚い壁を乗り越えるには、お互いが交流し、現実の姿を見詰め合うことをおいてほかにない。

本学でその糸口を開いたひとりが、次の人ではないか。

日本児童文学を勉強するために、そして昔から中国と深い文化交流の歴史を持っている日本を深く理解するために勉強しております。これから中日両国の子供らの世界を豊かにするために、私の人生を役立てたいと思います。

留学生　彭　佳紅（一九八一年『大学通信』四六号）

中国からの初の留学生として来学、その後、専任教員の道を歩む彭は、

四川省成都市訪問
（大学案内『帝塚山学院大学2015』）

早いうちから、本学の空気に溶け込んだようである。

私はここ数年、留学生彭佳紅さんの助太刀を乞いながら、中国の漢詩、現代詩、わらべ唄などを何篇かたわむれに訳してみた。ことばあそびとして楽しくてならなかった。

学長　庄野英二（一九八四年『大学通信』五五号）

ほのぼのと和む日中親善の風景が、三〇年余り前のこだはらの丘で展開されていた。

第四節　「お花畑」

本学は開学から二一世紀初頭まで、いわゆる女子大学であった。男子の姿の見当たらないキャンパスの、みやびの世の風情に想像をはせてみるのも、一興ではなかろうか。

多種多彩で、美しくきらびやかな、英米文学のお花畑を、逍遥したいと思います。お花畑に達する迄の道は、中々けわしいですよ。努力と辛棒が、ようし、やるぞという、根性が必要ですよ。みなさん、志を一つにし励まし合いながら、一歩一歩踏みしめて行きましょう。

主任教授（英文）桜井忠一（一九六九年『大学通信』九号）

ここでの「花畑」は、英米文学の香気、味わいのようなものを象徴する用語と理解できる。とはいえ、やはり「花」の向こうには、若さにあふれる女子の群像が見えてくるような、そんな表現ではある。

かつては図書館の正面に数十本のバラが美しく花を附けたこともあり、噴水横につるバラのアーチも見受けられたものだった。もう一度花が欲しい。あのバラ園を再現できないものだろうか。

主任教授（英文）中島　完（一九八〇年『大学通信』四一号）

もう一度花が欲しい！　これも、男子まじりの学園だったら、いささか場違いなせりふに聞こえませんか。

開学以前、この地は果樹園でした。幻想はもう始まっていたのです。伝説の種子は実り、今あらたな序章として幕を切っておとしました。限りなく華麗に、限りなく優美にしつらえた夢世界、葡萄狩りの乙女たちがご案内いたします。今日一日を桃源郷と信じお遊び下さいませ。

学生会会長　園田恵子（一九八三年『大学通信』五二号）

「０と無限の接点における幻想学の美」をテーマに掲げたこの年の葡萄祭（学園祭）に、学生会会長が寄せたメッセージが前記である。たわわに実りをつけた果樹、桃源郷、それに葡萄狩りの乙女たち、と幻想世界のお膳立ては、これでそろった。

さて、女子への教育、という現実世界の課題がそこから始まる。

民主的で平和な人間像、これをわれわれは女性により多くを求めることができる。どこかで、誰かが唱えた「女子学生亡国論」のような偏狭な考え方にはくみすることができない。

学長　原　龍之助（一九七五年『大学通信』二六号）

女性とは花、しょせんは飾り物。薫り高く、美しくあればそれでいい。そんな感覚が当たり前だった時代である。

もちろん、そうであっていいはずはない。

母は、人の子の一生を通じて大きな影響を与え続ける存在である。この事にも、女性たるあなたは深く思いをはせてほしいものである。このようにしてみてくると、女性が真実の教養を身につけて、豊かな

人間性を備えることは、男性以上に深い意義があると言わねばならない。

「学生部長」（一九七九年『大学通信』三八号）

母性を支える教養と人間性。それが本学女子教育の原点であった。

話の中で特に印象に残っているのは、年相応の経験をしていく事は大切であり、そして女の人はやさしさと教養をたずさえて置かなければいけないとの事でした。

79日文　一南尚子（一九七九年『大学通信』四〇号）

一南は、堀陽達のアドバイスクラス京都一泊旅行に参加し、ここでもその心がけをとっくりと諭されている。

美学美術史があるから美人が多いかというと、そうとは限らない。華美な服装、過剰な化粧、それが逆に美の精神的支柱を失わせるのだ。女子大生が本当に美しく見えるのは、彼女が恋しているときと勉強しているときだ。

教授（一般教養）　星野周一郎（一九七五年『大学通信』二六号）

外見より内面の美しさを。そのためにこそ勉強を。そう呼びかけるのにも「恋」の一言が必要なのは、これも女子大ならではのことか？

君は運転免許を持っていますか？　Ｎｏですか。それなら三分間だけがまんして、これを読んでくれませんか？　ボーイフレンドの車に乗せてもらった時、彼がここで述べている防衛運転を守ってくれていれば、彼は立派な男性に違いありません。Ｙｅｓなら、防衛運転の三原則を一日だけ試みて見ませんか。

助教授（一般教養）　平田啓一（一九七三年『大学通信』二一号）

「防衛運転」（安全運転）の注意にも「ボーイフレンド」が登場した。教職員のお説教より、こちらの方が効き目がある？

相手が「お花畑」となると、生活指導にも格段の心配りが大学には求められたのだろう。

たばこが健康（女性にとっては美容・胎児への影響も大）を奪うものであることは百も承知しながら、喫煙を続けている学生達をみると、たばこという嗜好品の存在をうらみたくさえなります。

（一九七六年『大学通信』三一号）

これは学生ホールでの禁煙措置を告げる一文。「うらみ」の語が、その頃のたばこの広がり具合をしのばせる。

食堂は禁煙となりました。無神経にタバコに火をつける事のないようにして下さい。そして食後のタバコをガマンする所から出発して、自分自身の長い人生の健康のために、是非これを機にタバコと絶縁する勇気を持ってほしいと思います。

「学生部」（一九八一年『大学通信』四四号）

母性の涵養の第一歩は、タバコの我慢から。禁煙は食堂にまで拡大した。

さすが禁煙は館内では常識としてうけとめられているようであるが、アメ玉やチョコレートを机上において、談話室なみの気分で平机を利用する場合が時にある。当然おしゃべりが伴うのでハタ迷惑を注意してまわらねばならないことがある。

「図書館長」（一九七八年『大学通信』三八号）

タバコにはじまりアメ玉、チョコレート、さらにはおしゃべりまで。女の子の楽しみをどこまで奪ったら気が済むのよ、という可愛いふくれっつらが目に浮かぶ。教育の場なのだから、制限は仕方がないことですよ。

多少のことさえ我慢すれば、キャンパスは若さと楽しさにあふれる空間であった。

第二四回スポーツ大会で〝はるみ〟チーム優勝!!

恒例の春季スポーツ大会が、大学・学生会の共催で行われました。若さあふれるパワーがぶつかり合い、最後までさわやかな試合を見せてくれました。

大学からは左記の賞品が贈られました。

一位　小物入れ袋
　　クマちゃんソープ
二位　ハンドタオル
参加者全員に参加賞
　　レポート用紙

缶ジュース

（一九八四年『大学通信』五四号）

このスポーツ大会は一、二回生を中心に一三二人が参加。「尾崎ファイターズ」「Erimaki Tokage」「MAYUGE」「見せろ土屋　バスケットボール」「高野山空海」「ビーナス」などなどと名乗る一三チームが、ぶつかりあった、と記録が残る。

参加者の皆さん、ハンドタオルとクマちゃんソープで、しっかり汗を落としたことでしょう。もちろん、レポート用紙で勉強もね。

学生会の企画によるクラス対抗ドッジボール大会も行われた。

ドッジボールという懐かしさのあまりか、体育の出席一回分か、優勝の豪華ディナーにひかれたのか、各クラス一生懸命、炎天下のもと汗を流して、興奮のあまりボールを地面に叩きつけながら歓声をあげていました。

［一位］ディナー（食堂）招待

（メニュー）

スモークサーモン　シュリンプカクテル　イカマリネ　むし鳥（ゴマダレ風味）　ローストポーク　ソフトサラミ　切り出し　鳥の唐揚げ　クリームコロッケ　ポテトチップス　サラダ　細巻　フルーツ（スイカ　メロン）　ピザ　カラオケ

87英文　田島攝子（一九八九年『大学通信』六九号）

オクターブの高いどなり声と、ボールのはじける音が行間から飛び出し

てでもきそうな文章である。

同年六月三日に開催されたこのドッジボール大会は、体育の授業一時限分に換算されたらしい。それにしても「豪華ディナー」のメニューが目を見張らせる。彼女たちの辞書に「ダイエット」の文字はなかった？　いや、食後のカラオケ熱唱で、カロリーはすっかり消化されたのでしょう。

それにしても、この熱気あふれるたくましさは、後に「肉食系」とも称されるようになった、女子のパワーアップ現象を先取りするものであったのかもしれない。

〝七転八起〟はもう古い。現代は〝七転八転〟の時代。どのような災難があなたの頭上に舞い降りてくるやも知れない。転んでも簡単に起き上がれるという甘い考えは捨て去ろう。転んだら、そこでもがけ、わめけ、泣き叫べ、そして考えろ！

78日文　舳松弘子（一九七九年『大学通信』三九号）

舳松はこの年の若葉祭（学園祭）実行委員長。この祭のテーマが「七転八転（ななころびやころび）」であった。斬新、大胆な訴えを、委員長はさらに激烈な表現で説いている。お嬢様大学の気配など、どこにも、かけらさえもない。

それどころか「お嬢様」は世の流れに先駆け、困難をかき分けて、世界を目指した。

移動手段は軍用改造トラックで、ここにキャンピンググッズ二〇人分、その名の通り命の水、約六〇〇Lが積み込まれている。時折赤土のラフロード、地獄のような道に遭遇し、私たちの脳ミソをふっとばしそうになる。道なき道を行くためにトゲアカシアの全面攻撃に出会い、体中傷だらけになることもある。それを楽しく愉快な経験にできるかどうかは性格次第であるが、私にとっては、これ程愉快な経験はなかった。

90国際　青木律子（一九九四年『大学通信』八一号）

前年の夏、アフリカ走破二〇〇〇キロのツアーに参加した青木は、満天の星空の下、大平原の真ん中で用を足し「地球上では人間も動物の一員なんだ」と感に堪えている。道中、もがき、わめき、泣き叫びたくなったことも何度かあったろうに。

青木がアフリカの砂漠で発揮したこのたくましさは、女性の社会進出という潮流にあって本学女子たちも、いつしか身につけていったものだと考えたい。

文学部では女性の新しい生き方を学ぶための多彩なプログラムを実践していますが、コシノヒロコさんのクリエイティブな生き方は文学部の目指す理念そのものです。

（二〇〇一年『大学通信』九六号）

岸和田出身のデザイナーとして、ローマ、パリからさらにはアジアを股にかけて輝いた女性。そのコシノヒロコさんを文学部客員教授に迎えるにあたっては、前記のような考え方が示されていた。

コシノヒロコさん招聘に込めた意図は、次のような実践としても生かされている。

髪を黒くするはずのモデルが茶髪で明るく「おはよう！」と来ました。理由を聞くと「ごめん忘れてた」との事でした。明治令嬢から訪日西洋貴婦人に急変身です。

00人間　南　麻衣子（二〇〇三年『大学通信』九八号）

前年の十一月、本学図書館で学生が開催した「香りのデザイン――明治期から見る香りの歴史」展での、思いがけぬハプニング。モデルの着物、着付けも時代に合わせて、工夫したはずが、それを身につけるモデルが茶髪姿では、あわてますよね。実社会に出てイベントを手がけるときの、貴重な経験となったことでしょう。

大学と社会のつながりが本学でも強く意識されるようになったのは、同じ時期、男女共同参画社会が叫ばれるようになったのと、無関係ではあるまい。

現代の情報化社会や人間の心の問題を学習する人間文化学部では、女性と男性がともに同じ場で、同じように学ぶことが大切だと考えました。

人間文化学部長　加納　武（二〇〇三年『大学通信』九八号）

男女共学制導入の理由は、新しい学部の性格にとどまらず、男女のあり方を巡る社会の大きな変化がその背景にあったのだろう。

かくして「女子大」の時代は、ここに終止符を打った。

第二章　二学部体制へ

第一節　「実学」を求めて

すでに引用した言葉を、もう一度、ここに掲げたい。

本学九十余年にわたって培われてきた伝統、品位というものはやはり、大事に守っていきたい。すなわち「不易流行」である。「変えなければならないこと」と「変えてはならないこと」を峻別することが必要であろう。

理事長　石川　啓（二〇〇八年『大学通信』一〇三号）

冷戦の終結、そしてＩＴ（情報技術）革命という世界規模の激動に対し、本学も、それまでの「不易」（変わらない）の構えに加え、「流行（変わる）」にも軸足を移す時期を迎えたことは間違いない。

東大を出て、屋台のラーメン屋になった男がいた。ハーバード大学を超優秀な成績で出たある若者は、思うところあって水道工事人になった。そう、君の人生は君がきめればよい。しかも人生は一度きりだ。君のいるその場所をぜひ一流にしてほしい。そこに君の幸せがある。

学生部長・教授　川上与志夫（一九九三年『大学通信』七九号）

最高学府出のラーメン屋のどこがおかしい、超秀才の水道工事人がいて何が悪い。「大学卒」の肩書きは、もうキャリアなんて保障しない。大学進学率が年々、伸び、その存在の意義が厳しく問われるようになった時代である。

そのご時勢、わが帝塚山学院大学もまた、「流行」への対応が求められたのは当然、といえるだろう。

美学美術史学科の学生は、いつも感性的なものを受信するアンテナを張巡らせている。これが新たな可能性を自分の内から引っぱり出してこられる秘訣。

ゆえに就職氷河期と言えども、学芸員を目指す人、週一回学校に通いながら働いて美術工芸職人を目指す人、理系へ進学する人、と様々な進路を取る。

94美学　松本由香（一九九七年『大学通信』八八号）

折りしも日本経済はバブル崩壊を経て、長期低迷の時期にさしかかっていた。そんな状況下、かすかな風音の変化をも、張り巡らせた感性のアンテナで察知する。その上で、進むべき道を探る。美学の学生がすでに時代の変化に備え、自己分析を試みていたのである。

この流れの特徴をひとことで言い表せば、「実学の再評価」であろう。

二一世紀に向けて、これからの社会を生きていく上で、欠くことのできないものに語学とコンピューターがあります。この学部では学科を問わず、この二つの知識と技術、そして応用力を育むことを大切にしています。

（一九九七年『大学通信』八八号）

知識と技術、そして応用力。それを支えるのが語学とコンピューター。翌年開設の人間文化学部の目標・特徴が、ここに明示された。

大学は理論だけを勉強するところだと言う古い常識を捨てて、大学は理論と実技と両方を教えるべきだと言う新しい常識が生まれました。新しい人間文化学部では英語を死語としてでなく、生きているものとして教えていきます。

教授（文化）ジェフ・バーグランド（一九九八年『大学通信』八九号）

理論と実技を等しく重視する「新しい常識」の実例として、バーグランドは「生きた英語」の教育を挙げている。

昨今の幅広い文化の学習や外国語、コンピューター学習や医療系学部のブームは、女性の適性にあった実学的志向の現れである。

教授（文化）森田恭二（一九九九年『大学通信』九二号）

「実学」の単語がはっきりと姿を現した。新学部を生み出した背景には、まさにこの語に象徴される社会の要請がある。そして、この要請は何も人間文化学部だけが直面していたわけではない。

文学部の我々が一番不得意だった、ビジネスコミュニケーション関係のカリキュラムについても、企業をはじめとする外部組織の力と経験を、多様・柔軟に学部教育に取り入れるという構想が固まり、「キャリアに直結！」のキャッチコピーが、実感できるものとなってきました。

教授（国際）下定雅弘（二〇〇三年『大学通信』九八号）

かつて「大学はすぐに役立つ知識や技術を学ぶところではない」（吉井巌＝一九七五年）と、誇らしく謳った文学部もまた、現実への「多様・柔軟」な適応が求められていたのである。

しかし、その一方で、こんな声にもあらためて耳を傾けたい。

私にとって帝塚山学院大学を卒業する事は、美術に出会うために紡いだ一本の糸の完成体だといえるかもしれない。

糸紡ぎはまだまだ続く。

98美学　井上美希（二〇〇一年『大学通信』九五号）

大学との出会い、学問との出会い、それらが自分にとっての糸紡ぎの課程であるととらえる若者の感性。これは社会の要請と真っ向から衝突するようなものでは、決してないはずだ。その糸紡ぎの作業は、社会に進んだあとも「まだまだ続く」のだから。

文学部だからといって文学だけという狭い枠に閉じこもった学習では、新しい時代に羽ばたけないのである。

本学は三学科であるという認識を捨てて、一般教養課程を含めた四学科であるとさえ考えたい。

主任教授（教養課程）平田啓一（一九八六年『大学通信』六一号）

文学の教育と研究とがアカデミズムと教養主義の二者択一的な分極化によって制度化されることのないような方向へ、いっそう発展していくことを願うばかりである。

主任教授（日文）乾　裕幸（前記『大学通信』）

いずれ新しい時代は訪れる。その時にしっかり羽ばたくための準備は、大学教育のあり方を巡るこのような議論も重ねつつ、早い時期から着手されていたのである。

そのためにも必要なのは、あくまでも「教養」。建学以来の本学がもっとも重視してきたものである。

今日、企業は通年で採用し即戦力を期待しているため、本当に力があるのは誰かが試され、その力というのは、明らかに「知識」の量なのである。資格は、簡単に取得できる種類のものは取っても最低条件にはなるが、決して金棒にはならない。

教授（人間）長谷俊彦（一九九九年『大学通信』九二号）

求められる「実学」は、必ずしも資格ばかりを目指すものではない。そこで問われるのは知識の量、つまり教養の深さなのである。

本学に招かれ心することは、建学の理念「力の教育」を為すためにまず「見る」「聞く」を育てることに力を傾注することである。

民主主義を最小単位の「個」から崩壊させないために教えなければならないことは山のようにある。

成果を急ぐ社会に対し、教育は投資の果実が実るまでひじょうに長い時間を必要とすることを大学人として毅然と伝えてゆきたい。

助教授（文化）椿　昇（二〇〇三年『大学通信』九八号）

成果を求める社会の要請に向き合うとき、大学はそれに振り回されるだけではいけない、と椿は訴えているように聞こえる。いつの時代にも、この気骨は忘れたくない。

第二節　ＩＴ時代を拓く

二一世紀の世は、情報技術（ＩＴ）の花盛り。インターネット、パソコン、スマホ、デジタル、ギガ、バイト…。片仮名書きの情報機器や用語が、身の回りにあふれ、それが私たちの暮らしを四六時中、支えてくれている。そんな時代の真っただ中に、私たちは生きている。

一九九八年、開設された人間文化学部（現在の人間科学部）に、情報メディアを扱う学科が置かれたのは、こうした時代性を反映したものであった。実は、そのことを、ずいぶん早くから予見していた先達が、本学にはいた。

アポロ一一号の月着陸実況中継によってテレビが科学の進歩と情報伝達の上に如何に大きな役割を果たしたかが証明された。

今や人類の文化は高度の科学技術化社会から情報化社会へと移行しつつあり、既存の科学知識や技術では役に立たなくなる。

学長　西本三十二（一九六九年『大学通信』一〇号）

そう、人類の月到達がようやく実現した一九六〇年代末、すでに西本は「情報化社会」の未来像を正確に読み取っていたのである。

さらには「情報化」の意味を、理論的に位置づけようと試みる人もいた。

われわれは、日常用いている言葉で、ものを考えてきた。しかしこれも、考える対象が複雑化すると限界がある。

人間の頭の中だけで考えて解決できた時代は去って、いまや機械による情報処理の助けが必要な時代である。

助教授（一般教養）平田啓一（一九七五年『大学通信』二六号）

有史以来、人間はことばでものごとを理解し、考え、そして表現してきた。二〇世紀中葉、それを肩代わりするかのような機械が文明社会に出現した。それがコンピューター。この機械は情報をデジタル信号で受け取り、処理し、発信する。この二つが補完しあう新時代を、平田は明確に見通していた。ことばではなく、デジタル信号による情報処理が幅を利かせる時代である。

そして、この見通しのもと、コンピューターは瞬く間に、本学に浸透していく。

彼女たちはエレクトロニクス界の最先端であるマイクロ・コンピューター（以下マイコンとする）を自分のものにしようと努力しています。

彼女たちは情報を自分の手でプログラミングさせているのです。これはむずかしさから言えば数年前の大型コンピューターとほぼ同等でしょう。

「ＡＶセンター　森石」（一九八一年『大学通信』四五号）

マイコン！　なんと懐かしい。いまどきのパソコンの、黎明期の呼び名がこれであった。珍しいものに触れるかのように「彼女たち」、つまり学生が白く細い指をキーボードに添える光景が、目に浮かぶ。

ちなみに「森石」が所属するＡＶセンターは、正式には視聴覚センター。一九七五年の開設当初は、映画フィルムやビデオ映像を主に取り扱っていたが、次第にコンピューターの果たす役割が重みを増していく。

昨年度は学生二五人に対して、コンピューターは二台しかなかった。しかし学生のプログラムには体育ゲート・ボールのルール説明用のアニメーション、中学教師用の生徒成績の予測など面白いものが多かった。

コンピューターのプログラムには著作権が認められることでもわかるように、それを作ることは一種の創作行動なのである。

教授（一般教養）平田啓一（一九八三年『大学通信』五〇号）

この一文で平田は、プログラミングに必要な創造性に加え、本学のコンピューターが学生二人に一台に増強されたことも、誇らしげに記している。

（学生は）初めて触る人がほとんどで四苦八苦しておりますが、何とかコンピューターにバカにされまいと、真剣に取り組んでいる様です。

「ＡＶセンターだより」（一九八三年『大学通信』五一号）

コンピューターに「バカにされまい」とは、言いえて妙。ことば対デジタル信号、「思考」対「情報処理」。その機能の類似性と違いにおいて、人間とコンピューターは当時も、今も、これからも、ライバルであり続けるのだから。

そこで、こんな挑戦状が、人間の側から叩きつけられることにもなる。

コンピューターを使う者の特権意識が気に入らぬ。コンピューターは間違いを犯さないなどというたわけた言葉はもっと気に入らない。自分で使う気持ちなどは毛頭ない。だいいちコンピューター言語を覚えるなど面倒臭くてかなわない。そうではなくて、コンピューターを使える人間を使う積もりなのだ。状況によっては、特権意識を持っているやつの、その特権意識をくすぐって、おだて上げて使えばいいのだから。

助教授（英文）松平　勝（一九八七年『大学通信』六四号）

頭に血が上った風を装って、けっこう冷静に人間とコンピューターの力関係を分析している。しかし、この一文のすぐ下の段に掲載された「図書館だより」のお知らせに、次の見出しがついているのには、意表を突かれたのではありませんか。

コンピューターによるサービス　十一月二日開始

（前記『大学通信』）

本学でコンピューターは、ＡＶセンターにとどまらず、図書館にもその使途を広げていたのである。時の勢いは、松平をすでに呑み込んでいたのかもしれぬ。

ついでにもう一つ、同じ号の『大学通信』から。

六月には、今迄使用してきたＪＲ２００に替わり、ＭＳＸが入りました。今後の目標は早くＭＳＸに慣れ、様々なプログラムを作ってい

く、ということです。

85美学　古谷　秩（前記『大学通信』）

マイコン部（という名のサークルがすでにあったようだ）キャプテン　古谷は、コンピューターも、専門用語も、自在に操っている様子。松平の目には「特権意識を持っているやつ」の一人に映ったかも。

どれほどコンピューターが浸透しようとも、しかし、その使い手が人間であることは、本学では片時も忘れられることがなかった。

情報化時代とよばれる今日、それを処理する技術も近年すばらしく発達した。

しかし、その反面、ややもすれば、人間が疎外され、そして真理とはなにか、人生とはなにかというような、人間にとって一番大事な問題が忘れられる傾向がある。

学院長・教授　原　龍之助（一九八四年『大学通信』五三号）

情報化の流れの中でこそ、何を措いても忘れてはいけないもの、それが人間。原の言葉はそんな警句に聞こえる。

これからの社会人は、日本語を道具として用いるだけでは不足であって、コンピューターをも道具として活用できる人間でなければならない。

主任教授（教養課程）平田啓一（一九八五年『大学通信』五七号）

言い換えるなら、日本語を使いこなせる人間であって、初めてコンピューターを活用できる人間たりえる、のであろう。

考えを形にする過程で起こる修正は特に時間がかかり、おっくうになるものです。この修正作業をワープロですると、まず考えた事をどんどん入力して行きます。変更や付け加えはとても簡単なので、心理的な圧迫がありません。ですからリラックスして考える事に集中出来ます。

「ＡＶセンターだより」（一九八五年『大学通信』五八号）

人間が「考え」を表に現す作業のうち、機械にできることは機械に任せ、人間にしかできない「思考」に集中する。そのことの意味が、本学ではこのような表現で、学生に日常的に教えられていたようである。

そして情報メディアは本学二学部体制のもとで、教育の重要な柱として位置づけられることになる。

私が世界最初のコンピューターの出現から二五年後にマイクロチップと出会い、さらにそれから二七年後の今年に本学の人間文化学部の情報とメディア担当として次の新しいステップを踏み出したことに技術革新のサイクルを感じています。

主任教授（文化）山本正樹（一九九八年『大学通信』九〇号）

コンピューター誕生からほぼ半世紀が過ぎた時点で、形が整った本学の「情報メディア」教育。時代の流れはいま、急である。

「MOS 世界学生大会2011」 9 位（日本では 1 位）入賞の川端優介
（人間科学部情報メディア学科 3 回生）

コンピューターが大好きな人、コンピューターに興味があるものの操作がわからない人、コンピューターは私たちに合わないと食わず嫌いな人、こんな人たちは、メディアセンターに立ち寄ってください。思いがけないカレッジライフの入り口を見つけられるかも知れません。

（一九九八年『大学通信』八九号）

新学部が誕生したその年、それまでAVセンターが担ってきたコンピューター関連の仕事を引き継いだ形で「メディアセンター」が発足した。

前記は、その活用を学生に呼びかけるお知らせ記事。

なんでもいいのです。自分のやりたいことから、自分に合った、自分のための〝ITを見つけるよいチャンス〟です。〝あなたのITを見つけましょう〟。

助教授（メディアセンター長）松本　章（二〇〇一年『大学通信』九六号）

無限の可能性を秘めたITから、自分のニーズに合わせた能力を引き出す。ここでも問われるのは、〝あなた〟の中身なのだ。

この呼びかけにこたえるかのように、〝あなたのIT〟に磨きをかけた学生がいた。

パソコンは手段なので、広告や広報であったり、新聞作りであったり、いろんなパソコンを使っての広告の可能性に挑戦してみたいです。広告の世界はものすごく広い世界の人が見ているんですけど、やはり文字の影響が大きい。

授業では「文章表現講座」で丁寧に添削指導していただけるのが嬉しいです。

11情報メディア　川端優介（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

川端は二〇一一年、世界五七カ国の学生がパソコン操作の腕を競う「MOS世界学生大会」（米・サンディエゴで開催）で世界九位の成績をおさめた。その川端が強調するのが、文字、そして文章の力なのである。デジタル情報の処理に長けて、人は改めて言葉の力を知るのかもしれない。

毎回、ＩＴ講座と言いながら、人間のこころの問題や感性に話題がおよび、あらゆる分野にリンクし、華が咲き、新しい展開をみせていく『花のドット・コム』。「ＩＴとは…」「情報とは…」―人間の五感やこころ、脳によってどのような形にも変化していくものかもしれない。

（二〇〇一年『大学通信』九六号）

人間文化学部に、情報科教員免許資格課程が開設されたのを記念し、催された連続講座「花のドット・コム」が紹介されている。

ＩＴは人間のこころ、脳によって変化する。つまり、ＩＴは人間に支配される。

この認識が本学に貫かれてきたことは、歴史の中に確かめることができる。

2013年（平成25）春の第２回 ICT プログラミングコンテストで「ICT 教育推進協議会賞」受賞の味谷梓
（人間科学部情報メディア学科４回生）

第三節　「心」の学び

その日、泉ヶ丘のキャンパスは全国から集まった四〇〇人の研究者で、時ならぬ賑わいを見せた。二〇一〇年十月二十九日。日本ロールシャッハ学会第一四回全国大会の初日である。陰の力として働く本学学生の姿も目立った。

臨床心理学教室が中心となって実施しましたが、大学から多大な協力をしていただき、教員一同随分助けていただきました。

本学には心理教育相談センターがあり、多くの人が相談に来られますが、その際にも使用されて多いに役立っています。そんなこともあって、今回、全国大会を引き受けることになった次第です。

心理教育相談センター長・研究科教授（人間）氏原　寛

（二〇一〇年『帝塚山学院通信』七号）

本学「心理学」研究の、全国規模での評価の高さを物語る日でもあった。ところで、多くの人が相談に来る、という「心理教育相談センター」って何？

これは泉ヶ丘キャンパスの地下にあり、普段学部の学生は、あることは知っていても、近づきがたい場所なのです。というのは、関係者以外立ち入り禁止で、地下に続くエレベータの行き先ボタンのB1のところが怪しげに透明のプラスチックで覆われ、それをめくり上げないとB1は押せないようになっているのです。

準教授（人間）広瀬　隆（二〇〇九年『大学通信』一〇四号）

なにしろ、このセンターは心理相談を求め全国から人が集まる、ある種の「聖地」。多少は秘密めいた雰囲気が伴っても、いいかもしれませんよ。

このように、本学の心理学教育への評価は、すでに定着している、といっても過言ではあるまい。

帝塚山学院大学の臨床心理士養成の専門職大学院は、いささか恐縮するほどの評価を得たと言えましょう。この評価のさらなる維持発展に努力したいものです。合わせて今回の評価の基礎を造られたのは、平成二十二年（二〇一〇年）三月で退任された氏原寛教授のご尽力によるところ大なるものがあったことを特記しておきたいと思います。

教授・人間科学研究科長　大塚義孝（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

臨床心理士養成の専門職大学院は「評価基準のすべてを満たし」た、とするこの認証評価は、学部も含む本学心理教育の底力の反映である。

その心理学が学科の形を取るのは、一九九八年、人間文化学部人間学科としての発足が最初である。しかし、心理学教育そのものは早い時期から教職科目として、文学部の中に根ざしていた。

そう言えば、最近私は棘恐怖症なる若いヤマアラシによく出会うようになった。かかわりをもつとお互いの棘で傷つけあうことになるので、かかわりそのものを避けて、自分の殻にとじこもり、表層的なつ

きあいしかもつまいとしているのである。

専任講師（一般教養）西川隆蔵（一九八三年『大学通信』五〇号）

ドイツの哲学者ショーペンハウエルの寓話「ヤマアラシのジレンマ」を引いて、西川は内に向かおうとする若者の心を分析する。引きこもり現象がますます顕著な流れにあって、学生との対応でも、心理学的処方はきっと確かな効果を示してきたはずである。

「この本の〈男性研究〉という項目をもっと早く読んでおけばよかった」という報告がいくつもあった。男性心理には、ただ甘えられることを喜ぶのでなく、「母を求める本能」もひそんでいるのだ、というあたりを指すのであろう。

教授（英文）西台美智雄（一九八五年『大学通信』五七号）

読書ゼミで、遠藤周作『恋愛とは何か』について、学生から提出されたレポートを材料にこう書く西台は、本来の専門ではなくても、心理学の発想を身につけ、活用していたとみえる。

異端な者がそのままグループの中で生きていけるのがいい。また新学期が始まり、たくさんの学生と出会うことになる。私はこれから「ともに生きるための心理学」をやっていこうと思っている。

助教授（教職専門科目）西川隆蔵（一九八七年『大学通信』六二号）

新入生に向けた一文。入学して間もない時期にかかりやすい、といわれる「五月病」の学生などに対しては、心理学は単なる学問研究を超え、若者との間の架け橋の役割も果たすのだろう。

自分の言葉が受け入れられ、聴いてもらえる時、人間は安心感を得ることができ、また、心が癒されると言えます。

このような観点から「人間とこころの癒し」ではカウンセリングにおける傾聴技法の体験学習などを通して、自分自身の交流パターンを分析するとともに、言葉が受け入れられる空間、関係といったものを考えてみたいと思います。

（一九九七年『大学通信』八七号）

これは、地域住民を対象に催された帝塚山学院大学公開講座「忘れられた〈心〉を問う」の説明である。心理学の研究者がキャンパスの垣根を越え、社会とも関わっていこうとする心意気が、にじんで見える。

心理・行動の分野では、人のこころとからだの働きを対象に、人間をとりまく社会を視野にいれて、いじめや不登校や少年非行など人間行動を全体的にとらえ分析する力を養うことができます。

新学部設置準備室長　皆川　基（一九九七年『大学通信』八八号）

翌年開設の人間文化学部のうち、人間学科（心理学）を説明するこの一文にも、具体的な社会現象に対し心理学が果たせる役割が強調されている。社会と向き合う心理学、とでも言っていいのか。

専攻している発達心理学のゼミのディスカッションでつぎの様な言葉がありました。「保護や援助の元では子供は主体的に行動出来ない。子ども力を信じてやらせてみて初めて、子供の力を引き出すことができる」というものです。私もその通りだと感じました。

98人間　稲山裕美（二〇〇一年『大学通信』九五号）

点訳部に所属し、視覚障害者とも触れ合う機会を持つ稲山が、ゼミでの学習に照らして述べている。心理学での学びを子どもとの触れ合いなどに生かすためにも、まずは、子供の力を信じることだ、と。

養護教諭は、心理療法の技法が生かせる仕事である。近年の学校現場での生徒・児童の身体の病は、ストレスによる心因性の病であることが多く…心理学、臨床心理学を学ぶことは、養護学の技術とともに養護教諭に求められる心のケアへの実践力を身につけるのに必要である。

教授（人間）森田　慎（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

心理学はこのように、即実践、につながる強みを持っている。そこで、改めて心しておくべきことは。

心理学とは関係性を科学する学問だといっても良いくらいである。人間とはもともと「世の中」、「世間」を意味し、俗にあやまって「人」の意味に転用されたと聞くけれども、このような意味で心理学はまさに「人間学」であり、人の心を理解するとは、関係を理解するということでもあるのだ。

教授（人間）西川隆蔵（二〇〇一年『大学通信』九五号）

子どもと接し、その力を引き出そうとするなら、その子どもと信頼関係を築くこと。西川が説く心理学の教えとは、たとえば、こういうことなのだ、と受け止めたい。

その上で「関係を理解する」という西川の表現が、なかなか意味深長に響く。

私の方といえば、分析心理学の訓練はもっぱら英語で通し、子どもたちを通していくらかなりとも現地と関わる格好になったわけだが、おかげでスイスの田舎町ラッパーズビルの生活の一部をかいま見せてもらった。

たどたどしい「グルエッィ」にも間違いなく一〇〇％の人が応えてくれる。

地下鉄の駅では無理でも、大学のエレベーターで見覚えのない学生に「おはよう」と言う感覚、これを何とか輸入しないと我々も危ないのではないか。

準教授（人間）広瀬　隆（二〇〇七年『大学通信』一〇二号）

「グルエッィ」とはスイスドイツ語方言の挨拶ことば。留学先で広瀬はことばの壁を前に、人間同士の「関係性」を、日々の暮らしを通じて学んでいく。

この「文化人類学」的手法のようなものまで取り込んでいればこそ、本学の心理学は強靭なのかな、と勝手な想像をふくらませる。

第四節　食を育む

成熟社会は何よりも健康を求める。それに欠かせない食、栄養を尊ぶ。まして、日本のような高齢化のもとにあっては、なおさらである。

その求めに沿って、人間科学部に食物栄養学科が開設されたのは二〇〇六年のこと。本学にあっては、ニューフェースである。

しかし、健康志向そのものはずいぶん前から、研究者の間に培われていた。

誰しも健康で、豊かでそしていつまでも若くありたいと願う。健やかな長寿社会づくりの決め手は私たち一人ひとりの自覚にゆだねられている。

助教授（体育）堀　良子（一九八七年『大学通信』六二号）

美しいものに憧れるというのは女性は特に意識が強いようです。スタイル・化粧・服装などには気を使います。しかし外面的な美しさよりも、内面の土台としての体を美しくすることが大切です。

助手（体育）小谷恭子（一九八九年『大学通信』六九号）

若くありたい、美しくありたい。とりわけ女性ならだれでも抱くこの願望を念頭に、この二つの文は、健康、そしてそのために運動の重要さを説いている。「内面の土台としての体を美しくする」とは、そのまま食物栄養学の基本理念ともとらえていいのではないか。

食と運動は、健康を支える両輪なのである。

健康・生活の分野では、基礎医学的な知識とともに食の科学を学び、その成果を健康管理の実践に応用し、さらに総合的な健康のための生活設計、福祉についての知識を広め、理解を深めることができます。

新学部設置準備室長　皆川　基（一九九七年『大学通信』八八号）

食物栄養学は、翌年開設の人間文化学部の中に「健康・生活分野」として位置づけられた。基礎医学の知識、それに食の科学という二つの面を備えた学問として。

研究者　入谷信子　他一名

肥満遺伝子発現と脂肪合成の食餌による調整を動物を用いて生理学的に研究し、さらに遺伝子レベルでその作用機構を解明する。

（二〇〇一年『大学通信』九五号）

共同研究助成対象者を発表するこの告知文に、食物栄養学の重要な一面が現われている。遺伝子レベルの生命機構解明に挑む、先進的、かつ野心的な基礎医学なのである。

解剖生理学は、人体の構造や機能を学びます。講義だけでなく、人体を見学する機会がありました。本物の臓器を観るということは、二度とないことなので、とても緊張しました。「食」を学ぶということは、「健康」と「生命」を守ることにもつながります。

食物栄養学科の調理実習

06食物栄養　片山千紘（二〇〇七年『大学通信』一〇二号）

その緊張が、学生にとって貴重な体験なのです。怖気づいてはいけません。食は健康、ひいてはいのちに関わることなのだから。手術台に向かう医師と同様の緊張感が求められるのは、むしろ当然だろう。

それと同時に、食べるとは、楽しいこと、幸せなこと。そうでなければ本当の健康だって生まれるはずはない。

家族みんなで同じお弁当を一緒に食べる。どんな世代でも満足できるような野菜たっぷりのメニューを考えました。みんなで同じ内容のお弁当を食べることで、個食が減ったらいいなという気持ちも込めて作りました。

メニュー①ちらし寿司にぎり ②豚肉のつづら折りカツ ③パプリカサラダ ④ブロッコリーの胡麻和えプチトマト添え ⑤キャベツのレモン風味 ⑥高野豆腐の野菜煮 ⑦にんじんオレンジゼリー

08食物栄養　寺本美華（二〇〇九年『帝塚山学院通信』四号）

この年の八月、大阪市内のデパートであったお弁当コンテストに、寺本はこのメニューで挑み、特別賞を手にした。ここにあるような、人と人とを結ぶ和みこそが、食の原点のひとつではないか、と考えさせてくれる。

「いただきます」と言って、朝食をしっかりよく噛んで食べて、「ごちそうさま」で締めくくる。ご飯を食べて、「やる気」を高める。食べ物を作った人に感謝し、それを食べることの価値を感じることが

食物栄養学科監修小冊子「メタボ対策ヘルシー弁当」のメニュー

できる人になりたいものだ。

教授（食物栄養）福田ひとみ（二〇〇一年『大学通信』九六号）

食はまた、日々の暮らしの原点でもある。マナーなども含む生活文化を考えるようであって、初めて食は栄養たりえる。体の、そして心の栄養に。

自分が知り得た知識を集めて天秤にかけ、自分で判断できる人が多くなればそれだけ社会で反映される機会も多くなる。例えば、抗生物質について正しい知識を持つ人が多ければ、今までのように漫然と使用されることがないかもしれない。

助教授（食物栄養）桂田昭彦（二〇〇一年『大学通信』九五号）

食の科学などを担当する立場から桂田が発する警告は、食物栄養を学ぶ学生に重く響くことだろう。たとえば、世にあふれる「健康食品」ひとつを取っても、それについての正しい知識を増やし、判断力を養い、しかもそれを他人に伝える義務があるのだ、と。

今年度からは将来の「管理栄養士」（アメリカあたりの病院では医師と同等ないしはそれに近い権威が与えられている）を目指す学科が人間文化学部に設置されました。

「アドミッションセンターだより」（二〇〇六年『大学通信』一〇一号）

メタボリックシンドロームは、生活習慣病の集積状態であり、「生活習慣病の九割はDiet error（食の誤り）」とも言われています。従っ

て、食の専門家である管理栄養士はこの中心的な役割を担うことができると考えます。

主任教授（食物栄養）小川　博（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

病（やまい）は気から、ではなく、病は食から。食は健康にとり、医療にも並ぶ重みを持っている。医食同源。それなら、管理栄養士が医師と同等の権威を与えられた、として少しもおかしくはなかろう。

疾病を抱えた方に的確な知識と思いやりをもって接する管理栄養士の養成に尽力いたします。

教授（食物栄養）細川雅也（二〇一〇年『大学通信』一〇五号）

新任教員としての決意が語られている。食の学びを通じて身につけた思いやりの心は、医療従事者のそれと比べても、どこかひと味違うはず。そんなことを思わせる言葉だ。

学生二〇名と約二ヶ月間にわたるミーティングと試作を重ねました。学生の新鮮な発想から生まれる新テイストと、食感の楽しさやリッチな味にこだわるパティシエの思いが響き合い、チョコレート・抹茶・チーズの三種類の新感覚エクレアが誕生しました。

教授（食物栄養）福田ひとみ（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

新テイスト、食感の楽しさ、リッチな味、パティシエの思い、新感覚エクレア…。

言葉が弾んでいる。こんな言葉を生み出す教室からは、食と健康についての素晴らしい発想と感覚を備えた若者が、次々と巣立っていくに違いない。

第三章　体を鍛え、心を磨く

本学のスポーツで、ゴルフが早い時期から熱心に取り組まれたことは、特筆すべきかもしれない。牧草地に囲まれた小高い丘に、コースが無造作にしつらえられた、イングランドの風景。英国紳士のスポーツ、ゴルフ。こんなことを思っていると、我がこだはらの丘で、淑女たちが優雅にクラブを振る様を、つい連想してしまうのですが。

ゴルフと他のスポーツとの大きな違いはプレーの一つ一つに対して審判官が居ないことである。スコアーをごまかそうと思えば出来ないこともない。この人目のない所でもルールを守っていくことこそゴルフの特有なものである。

専任講師（体育）田淵　哲（一九六六年『大学通信』一号）

田淵はここで、ゴルフを大学の体育科目にも取り入れるよう力説している。「お嬢様」に、公平なルール順守を教える助けにもなる、と。カネのかかるスポーツ、のイメージが今でもあるゴルフ、良家の子女にはうってつけ、となりそうだが…。

社会人のゴルフは趣味の域を越えませんが、学生のゴルフはスポーツであり、とことん練習に打ち込んで体力をつけ自分自身を試合にぶち込んで行かねばなりません。

67英文　上中好子（一九六九年『大学通信』一〇号）

上中はその年八月の全日本女子学生ゴルフ選手権大会で優勝。「とことん自分自身を試合にぶち込む」ド迫力は、「令嬢」のイメージからほど遠い。

ゴルフは勝負の世界です。自分との、そしてボールとの。生命のないボールにいかに自分の思うように生命を与えるか。私はこの勝負に幾度も失敗し、幾度クラブをやめようと考えたことでしょう。

69英文　加茂仁美（一九七二年『大学通信』一八号）

生命のないボールに生命を与える。一瞬に賭け、研ぎ澄まされた心は、こんなにも力強い言葉を吐き出す。ゴルフ女子連盟争奪戦に優勝した加茂ならでは、なのだろう。

クラブに入っていると、そんなボケーッとしている暇は、ほとんどありません。一週間先のクラブ仲間はどうなっているのか、プレー面でも上達しているのか、全くわからないことばかりです。

81日文　片木有紀（一九八二年『大学通信』四八号）

学院大学泉ヶ丘キャンパス体育館での交流

2002年（平成14）10月に大阪で開かれた「体操フェスティバル2002 OSAKA 国際大会　第20回記念大会」に参加したフィンランドの「バンタ体操クラブ アヤトマット」を10月22日に帝塚山学院大学に招待し、交流。

この年春、関西学生女子ゴルフ月例杯に優勝した片木は、日々の緊張ぶりをこのようにつづっている。

案の定、全神経と満身の力を振り絞った個々の打球は、「あそこへ!!」という心の叫びとは裏腹にその自然という脅威の前に無残にも風に流され、あらぬ方向へと散ってしまうのだ。

76日文　一貫坂美鶴（一九七九年『大学通信』三九号）

この年の関西学生ゴルフ春季女子一部校リーグ戦で、一打差で二位になった一貫坂は、緊迫した空気の中で、「自然という驚異」を肉眼でとらえていたに違いない。

後は私を一打差、二打差で追っている人のスコアー待ち、待っている間「このまま逃げ切りたい、お願いだから、追いつかないで」と思っていました。

81英文　西原利佳（一九八四年『大学通信』五四号）

その気持ち、わかりますよ。でも、そんな弱音を乗り越え、西原はこの年三月の関西学生女子ゴルフ連盟杯でプレイオフの激戦の末、優勝を成し遂げた。勝負に、相手の失敗を頼む受け身の構えは無用、と心得よう。

ある日突然、球を打った瞬間に何の抵抗もなかったと思ったら球がきれいに飛んでいました。そのときからそのような球をもう一度打ちたいと必死で練習をはじめました。

84美学　内本恭代（一九八五年『大学通信』五七号）

なにかのはずみで極意を摑み取る。武芸者のような境地を経験した内本は、この年四月、関西学生女子ゴルフ四月度月例杯で三位に入賞した。

まことにスポーツは体を鍛え、心を磨く。

あまり早い滑走順位であると選手もあがってしまい充分な演技が出きないうえ、得点もあまり出ない。また遅くなると体がかたくなってしまい、こういう風になると審判員に対する印象が悪くなってしまう。

75日文　松尾幸美（一九七六年『大学通信』三一号）

これほどまでに自分を見詰める機会を若者に与えるのは、種目を問わずスポーツをおいて他にあるまい。松尾はフィギュアスケート選手として一九七五、七六年を通じ、全関西フィギュア選手権大会女子Ａ級一位、全関西フリースケーティング女子二年連続団体優勝を果たした。

毎朝六時からの練習で一日が始まり、平均五時間の練習に明け暮れ、ウェイトコントロールの為のトレーニングジャズダンス…。毎日、スケート地獄の中で時間にばかり追われる生活をしてきました。

今迄はできなかった早寝遅起き(?)と大好きなチョコレートをたくさん食べて体を休めようと思っています。

86英文　松若尚美（一九八九年『大学通信』六八号）

「地獄」の語に、鬼気迫るものを感じる。

こう述懐する松若もフィギュアスケート選手としてこの年一月、冬季国体フィギュア成年女子の部で三部門優勝をやってのけた。地獄を抜け出し、温かい寝床の中で、チョコレートをかじる様子が目に浮かぶ。

一九七〇年代から八〇年代にかけ、彼女たちをはじめ本学学生のフィギュア部門での活躍ぶりは、目覚しいものがあった。

だが、元気がいいのは、ゴルフ、フィギュアだけのことではない。

毎日炎天下の中で汗を流して一射一射精神を集中して打ち込みました。そのおかげで射型も安定し、おもしろいように点がでるようになり、すっかり矢の魅力に取り付かれてしまいました。

82英文　小島逸子（一九八三年『大学通信』五二号）

大学のグラウンドで、四季折々の自然を一番身近に感じながら、ただ夢中で矢を射続けて来ました。

84英文　松澤恵子（一九八七年『大学通信』六四号）

この二つはアーチェリーの世界の出来事。小島は関西学生アーチェリー個人選手権大会で優勝し、松澤は大阪府民体育大会成年女子の部で三位に入賞した。努力のたまものとはいえ、四季折々の自然を身近に感じ取るほどに、精神は集中できるものなのだ。

自分自身の力を抜き、相手の力や勢いを利用し技をする合気道。受け、取りという二つの違った動きは各々の持ち味を失わず、一つの技の中でやがて一つの美しい動きとなる。

81美学　西田多賀子（一九八四年『大学通信』五五号）

美学美術史専攻だから、というわけではあるまいが、西田は合気道の技に「美」を見出している。彼女はこの年の関西学生合気道連盟で優勝。

このように様々な種目で、輝かしい偉業を残した本学のスポーツ活動だが、もちろん一人の勝者の陰には、数知れぬ敗者が存在することを忘れてはいけない。

女子大生が野球をする大会とあって報道陣も集中し、わがチーム、トムボーイズも大阪代表としてとりあげられました。けれど、結果は惨敗！　スコアは2―36と大会ワースト記録を見事に更新してしまいました。

でも、スポーツに限らず何でも大切なのは結果でなく、その過程だと思います。

87英文　田島攝子（一九八八年『大学通信』六七号）

この年八月、富山県魚津市で開いた第二回全国大学女子軟式野球大会に、結成間もない本学軟式野球同好会トムボーイズ（おてんば娘たち、の意味）は、胸を張って参加。キャプテンを務めたのが田島である。

敗者は、勝者よりも、多くを学ぶ、という。「ワースト」な記録から「ベスト」な教訓を得て、おてんば娘さんたち、きっと大きな成長をとげたことだろう。

第四章　地域に根ざし

大阪狭山市今熊二丁目一八二三

ほかでもない、本学の住居表示である。この大地に根を下ろし、本学は半世紀の歴史を歩んできた。その根を通じ、地から多くを吸収し、同時に多くを地に還元した、と信じる。この根が地域から支えられないようなら、大学の未来はおぼつかない。

応募者の熱意にこたえるため教室定員ぎりぎりの一〇六名の方に傍聴券を発行したが、最低二一歳の女性から最高七九歳の男性まで、一言もききもらすまいと真面目に先生方の講義に耳をかたむけ、またはじめてのコンピュータ学習にとまどいつつも熱心に努力されていた。

「公開講座事務局」（一九八四年『大学通信』五五号）

大学の一部を開放し、地域の住民を対象に催した公開講座の模様である。このときのテーマは、大阪の歴史と文化。講座の後、本学茶道部よる茶席サービスがあり、喜ばれた、とある。大学と地域の双方が、ともに熱くなければ、この光景は生まれない。

生涯学習への関心の高まりや、本年度で一〇年を迎えたという区切りもあり、全講座の三分の二以上の出席者に対し「修了証書」を発行することになった。また全講座出席の受講者には皆勤賞（大学名入りテレフォンカード）も出すことになった。

（一九八九年『大学通信』七〇号）

この年の公開講座の終わりを告げるお知らせから。大学、住民の心がひとつになっている。そのことが、大学名入りテレフォンカードにくっきり表象されて見える。

大阪狭山市にある帝塚山学院大学ではなく、大阪狭山市民の一員としての帝塚山学院大学になる。そんな一歩になればと思います。

92国際・学生会会長　岩崎純子（一九九四年『大学通信』八二号）

この年の葡萄祭（学園祭）は、活動の一環として、学生たちが初めて地域の市民スポーツ、市民バザーに参加した。「市民の一員」の表現に、思いの丈がこもる。

私たちは地域の一員である――。この意識は、大学がこの地に誕生したころから育まれてきた。日々の何気ない出来事の中にも、それが顔をのぞかせる。

私はこの事を知り、本当に恥づかしい気持ちで一杯でした。幸いにも健全な身体を与えられている私達が、弱い方へのいたわりの気持ち

が持てない有様で、一体何の教養を身につけようと言うのでしょうか。

（一九七七年『大学通信』三四号）

「スクールバスの金剛駅前乗降について」と題した匿名の一文は、何を嘆いているのだろうか。本学スクールバスの乗降地が、事情あって、養護学校バスのための乗降地のすぐ近くに移動した。そこにはテントが置かれていた。ある雨の日、テントの下は本学学生で一杯だった。バスを降りた養護学校生はテントが使えず、雨打たしにされた――。

通報でこれを知った匿名筆者は、地域や弱者との共生に思いを馳せないような学生に、その「教養」を問うているのである。

対面朗読というのは、盲人の方と直接向かい合って、希望されるものを読むというものです。

子供たちが、新しい記事を待ち望んでいるのだと思うと、一日も早く仕上げるよう、一所懸命取り組んでいます。

「点訳部」（一九八三年『大学通信』五一号）

よく、電車の切符売り場の横に、黄色いプレートの上に白い点が打ってあるのを見かけることがあるでしょう。あれら盲人の方の為の点字を打つのが私達点訳部の仕事なのです。

85日文　倉内麻紀（一九八七年『大学通信』六三号）

倉内は点訳部キャプテン。地域の視覚障害者のためにこつこつと点字を打ち、そこから学生も何かを学び取る。真の教養がそこに生まれる。バスの乗降で弱者への配慮を欠いた本学学生に、匿名筆者が厳しく問うた、あの「教養」が。

今年は女子学生の献血の状景をテレビで放映させて欲しいとの申し出があり読売テレビの「大阪86」で十一月一日(土)午後六時二十六分より放映されました。

「医務室だより」（一九八六年『大学通信』六一号）

献血車の本学来訪は、一九八一年から定期化されていた。学生、教職員の協力が、どれほどの人命を救ったことなのか。地域との、温かく固いきずな。

にわか雨にあいましたが、お客様と一緒にお水屋のテントで雨宿りしたこと、香港からきたダンサーの一員と記念写真を撮ったことなど、たくさんの思い出ができました。

（一九八九年『大学通信』七〇号）

この年十月、堺市の大茶会に本学茶道部が参加し、野点を披露した。その模様が前記の一文。千利休を生んだ土地・堺でも、晴れて「市民の一員」になったのですね。

お茶を知る人・知らない人、家族連れや団体旅行の人、さらに海外からの日本旅行者といった、実に様々な方をお迎えしたためか、最初は、少し緊張してしまって、思うように接待できずにいましたが、お

昼を過ぎる頃になると、それぞれに自分の役割もわかり、全員一丸となって無事に一日を終えることができました。

88国際　八木克子（一九九〇年『大学通信』七二号）

八木は茶道部キャプテン。この年五月、大阪・花の万博会場で、本学茶道部がお茶席を担当した。向かい合う相手が近隣を越え、一気に広い世界となれば、多少の緊張は無理もありませんよ。

私たちにとり地域とは、キャンパス周辺に限定された地理的概念を意味するものではない。たとえば一人ひとりが生まれ育ったふるさと、出身地もまたそれであろう。

母校に帰って、小さな弟や妹にあたる中学生たちから先生と呼ばれるのであるから、しっかりやってもらいたいものである。

助教授・学生部長　堀　陽達（一九七二年『大学通信』一八号）

母校での教育実習に、学生を送り出すに当たっての激励文。未来の「先生」たち、本当にしっかりね！　本学の学生を育んだ土地は、本学を支える地域とみなしたい。

大きな災害に苦しむ人が住む地もまた、私たちの「地域」になり得る。

被災支援プロジェクトを通じ、学内外で様々な交流が生まれた。地図印刷という共通の目的の中で、多くの学生、教職員も含めお互いの事を知ることができた。今回のプロジェクトの中で得られた経験や出会いは、今後の彼ら・彼女らの人生の何かに生かされると信じたい。

準教授　吉田大介（二〇一二年『大学通信』一〇六号）

東日本大震災の被災地をとらえた衛星写真から現況地図をつくり、被災地に届ける活動が、吉田を中心に本学の学生、教職員の手で担われた。

この活動を通じ東北の被災地は、私たちと手を結び合う「地域」になった。その地域のために私たちは汗を流し、その汗を糧にして私たちは成長する。

急ぐ社会であってはならない。まして人を育てる教育にあっては特にそうだ。じっと待つこと、見守ること、これこそが「育てる」ということにつながるのではないだろうか。

05コミュニケーション　小池知香（二〇〇八年『大学通信』一〇三号）

小池は、授業につまずいた児童を脇から助ける特別支援教育サポーターを、堺市立小学校で半年間、つとめた。給食は席を並べてとり、休憩時間には子どもたちとドッジボールに歓声を上げる。そうして得た実感がこれ。育てる＝待つ。地域のただ中に身を置いて、初めて学び取れる、貴重な教訓なのではないか。

ボランティア活動で、私自身が育てられた。人と人とが支え合うことの大切さを知った。そこから信頼が生まれる。弱い立場の人にとって住みやすい社会には「信頼関係」を土台にしたぬくもりと、優しさがある。

04文化　鈴木恵理子（二〇〇七年『大学通信』一〇二号）

高校一年から続けてきた地域のボランティア活動を、鈴木はこう振り返る。信頼を土台に、ぬくもりと優しさのある地域社会であってほしい、とだれもが願い、そのために力を尽くす。

＊　＊　＊

狭山と泉ヶ丘と。私たちの二つのキャンパスは、南大阪の地に立つ。小高い山並みをはさみ、東は河内、西は泉州。双方を分かつ尾根筋に、天野街道が延びる。古来、熊野信仰のための参詣道として知られてきた。ほど近い狭山池は飛鳥の時代、灌漑用につくられ、今年、造営一四〇〇年が祝われた。

ゆったりとうねる悠久の歴史を、肌で感じさせる風土である。その地への愛着は、老若男女を問わず、深く、そして静かに熱い。

男たちが、命をかけ走るなら、女たち（観客）はその勇姿と力強く、華麗に走るだんじりを絶好の場所で見るために闘います。この闘いは、想像を絶するものです。絶好の見場を確保するために、何日も前から場所とりをするのです。

だんじりを愛する人たちにとって、一年の始まりは、一月一日ではなく、祭りの日なのです。

96日文　辻坂玲子（一九九九年『大学通信』九二号）

うら若き乙女をここまでとりこにする。なるほど南大阪は、血潮のたぎるだんじり祭をこよなく愛する土地柄である。地域の底に流れるこの物狂おしいばかりの情念を、地域に生きようとする私たちなら胸のどこかに収めておきたい。

古い町並みが両側に続く少し狭い道に出ると、…その道が二つに分かれている所には道標が立っていて、「左かうや山（注：高野山）」とひらがなでしるされてあった。私は頭の中に、この道を賑やかに往来する昔の人々の姿を描いてみたりした。

74日文　波多野弘子（一九七四年『大学通信』二四号）

あたりを散策していて波多野は、路傍の古びた道標に目をとめ、高野参詣の通り道でもあったこの土地の歴史に思いをかき立てられている。それから四二年を隔てた今、私たちもまた波多野にならい、往事の賑わいと佇まいに想像を巡らせながら、帝塚山学院大学開学五〇年の時をここに刻みたいと思う。

―われら　一期生―

帝塚山学院大学の一期生一七六名は、一九七〇年（昭和四十五）三月七日に第一回卒業式をあげ、社会に巣立っていった。大阪・千里で日本万博博覧会が三月十四日から九月十三日までの半年間開かれ、六四二一万余人が訪れた年だ。当時は、女子の四年制大学が今ほど市民権を得ていたわけではなく、「女性の社会進出」はいうまでもなく、「女性の社会参加」という言葉すら、耳慣れないものだった。男女雇用機会均等法の施行など夢想だにしない時代だった。「事務局横の求人コーナーにはたった一枚『婦人警察官募集』のポスターが貼られていた」と、一期生で第二代大学同窓会長をつとめた桐本文枝さん（二〇一五年五月三十一日　逝去）が同窓会誌『紫苑』第二号（一九九三年三月発行）に書いている。

176名が卒業した第１回卒業式
1970年（昭和45）３月７日　（『帝塚山学院創立六十周年記念誌』）

帝塚山学院大学は、学院創立五〇周年にあたる一九六六年（昭和四十一）四月二十三日に、大阪府南河内郡狭山町（現大阪狭山市）で四年制女子大学として開学した。文学部（日本文学科、英文学科、美学美術史学科）に一八二名の新入生を迎えた。

当時、関西にもいくつかの女子大学が誕生していたが、一期生の一人は「帝塚山学院の持つ『明るく自由で個性が生かされる』校風に惹かれ、また、新設の大学に対する期待感もあって、本学に進みました」と振り返っていた。

五〇年前―帝塚山学院大学の「今」につながる一歩を踏み出した一期生の「声」からは、その時、その場所にいて、そのあともずっと母校をみつめてきた同窓生の記憶にだけ刻まれている「静かな応援歌」が伝わってくる。学院大学の現在をみつめ、未来を考えるための、きわめて大切な伝言だ。

新入生182名を迎えた第１回入学式
壇上は森礒吉理事長兼学長　1966年（昭和41）４月23日
住吉校舎講堂　（『創立十五周年記念誌』）

日本文学科

ひたすら鉛筆を走らせた九〇分

木下豊子（旧姓 下村）（境田四郎ゼミ）

「女子大亡国論」などと囁かれる中、私たち一期生としてこの大学を派手なお嬢さん学校と揶揄されないよう、世間に恥じない学生でいるように心がけました。卒論の出来は大したことはなかったけれど、学生時代は一番私らしかった時代でした。

教授の方々と近しく話せるのも勉強でした。コンパの帰りに、教授の青春時代の話を聞かせていただいたこと、ゼミの境田先生と話し込んでしまい授業開始時間に遅れ、先生共々慌ててしまったことなど、楽しく思い出します。

一般教養では個性的な教授もおられました。ただひたすら九〇分鉛筆を走らせ、授業終了時に肩が痛かったことを覚えています。特に記憶にあるのが「詩論講義」です。その中で、小野十三郎先生が「戦友」という軍歌を「これは反戦歌だよ」と言っておられたこと、今でもその光景が目に浮かびます。

学院大学を卒業できたことは、親が私に残してくれた財産だと思っています。

一期生最高！　帝塚山学院万歳の青春

葛野加代（旧姓 多和田）（山田博光ゼミ）

日々スクールバスでの登校で気づかなかったのですが、古びた金剛駅から歩いてきたとき、高台にある大学の校舎に至る長い階段があるのを知ったのは随分、後になってからでした。記念に一度だけ降りたことがあります。すべてが新しく、それはそれは気持ちのよい校舎でした。

一期生ですから日に日に新しいクラブができていき、掲示板の部員募集を見るのが、とても楽しみでした。ゴルフクラブの立ち上げで、練習場の無料開放やコースの無料使用の交渉に臨んだのですが、なぜかスムーズに成立し、ラッキー！　「簡単だな～」思っていました。しかし、一期生としてがんばる姿と、帝塚山学院という大きな看板が、私たちの後ろ盾になっていたことを、後々社会に出て気づかされました。一期生での入学を少し躊躇していたときもありましたが、大学時代の友人と今でもよく話をしています。

一期生最高！　帝塚山学院万歳の青春でした。

西本先生との出会いで教育研究の道に

瀬川武美（浅田善二郎ゼミ）

顧みれば、第二代学長西本三十二先生の「教育原理」を受講したことが教育研究者の道への入口だった。課題レポートのタイトルは忘れたが、秀をいただいた。卒業式で「皆さんの中から必ず母校に帰って来てもらう人がいます」という旨のお言葉があった。他人事として聞いていたが、関西

学院大学大学院修士課程を修了する年度に、西本先生から「放送講座」を開設するので手伝ってほしい、とのお言葉をいただいた。

現在の「放送大学」の運営と、将来の大学教育の内容と方法の改善のための実践的研究だった。学生は録画されたＮＨＫの放送大学テレビ実験番組を教材として視聴。私は教材の補講や学生のレポートの添削、評価などを行い、西本先生の要請でその実践結果を教育系の学会や機関誌に次々と発表していった。

元来、教育に強い関心があったので、これを契機に教育分野の勉強と研究に邁進した。その過程で師と仰ぐ方に出会え、私の教育学の基盤ができたのである。

一生を決めたギターマンドリン部

常　磐　純　子（旧姓　坂本）（吉井巌ゼミ）

青春は部活でした。勉強でなくてごめんなさい。小中高の部活はお付き合い程度だったのに、大学でははまりました。入学と同時に始めたギターが上手になりたいと、入ったギターマンドリン部。友人に代返してもらい、授業に出ても後ろのドアから一目散に部室へ。卒業後も二年弱、住吉の中等部へ部活のお姉さんとして、毎週水曜日に通いました。

結婚も部活で知り合った人と。夫の定年後の楽しみも、二人で楽器演奏。振り返るとギターマンドリン部に入るかどうかで、一生が決まった感じがあります。

数年前の同窓会で、体育館の下の部室を見に行くと、もう使っていない様子で、卒業した頃のまま時間が止まっていました。四〇年を遡って、懐かしい思い出が…。

泣いたり、笑ったり、怒ったり。将来が不安だったり。今は全部、楽しい思い出になりました。

後何年元気で過ごせるかわかりませんが、悔いのないように精一杯、生きていこうと思っています。

万博のコンパニオン　貴重な体験

西　　清　子（旧姓　井上）（長沖一ゼミ）

大学までは、阪急、地下鉄、南海、スクールバスと一時間半ほどかけて通学したのを、まず思い出します。途中下車して、そのまま大学へは行かずに、友達とブラブラしたのも、懐かしく思い出されます。当時の金剛駅から大学までは、緑の多い坂道が続き、新しい校舎の前も広々としていて、気持ちがよかったです。

また、居心地よい食堂。賄いは地元のおばさんたちで、その方々とのやりとりも楽しかったです。

卒論は、川端康成。当時、彼が身に負うているような寂しさを、私は自分の背中に感じていたので、なぜだか選んだような気がします。

在学中に、日本万国博覧会・古河館のコンパニオンに選ばれ、歩き方の作法、メイク、合宿と訓練を受けたことも貴重な体験でした。その後の私の人生にも、大きな指針になったようです。

最後に、これからも、わが母校の未来に続く道を願っています。

個性的で多彩な　人的パワー

葉　山　蓉　子（旧姓　白須賀）（向井芳樹ゼミ）

私たち一期生は、日本文学科、英文学科、美学美術史学科の三学科合わせて二〇〇名足らずでのスタートだった。皆、すぐに顔見知りとなり、和気あいあいとした雰囲気だった。

一年次の必修科目の授業では、全員が階段教室に入り、その間、学内は人影もなくひっそりとしていた。恩師の姿も次々と蘇ってくるが、今ではもうお会いすることも叶わぬ現実に五〇年の歳月を実感する。

まだ図書館などもなく、設備面では不十分だったが、個性的で多才な人たちが多く人的パワーは大きかった。頼る先輩も前例もない中で、いろんな行事やクラブを次々と立ち上げていった。「皆、熱気にあふれていたな」と、今は懐かしく思い出される。

長く続く階段が印象的な丘の上の学舎の周りにはまだ、田畑が広がっていた。金剛駅も田舎ののんびりした駅だった。大学までの道順ももう定かではないが、バスのない時は話に花を咲かせながらのどかな道を連れ立って歩いたことも忘れられない一コマである。

楽しかった日本文学会の会報づくり

松　原　伸　子（旧姓　本庶）（境田四郎ゼミ）

狭山駅で降りた私は、丘に立つ真新しい建物を見て圧倒されました。

「これから大学生活が始まるのだ」と自分に言い聞かせながら、入学式を迎えたのが思い出されます。

その後、日本文学会が発足し役員を仰せつかり、浅田善二郎先生、吉井巌先生、大橋清秀先生方の御指導で会報作成などに携わりました。会合では、先生方が学会みやげのお菓子を持参して下さりご馳走になりましたのも楽しい思い出でございます。

講義で忘れられないのは、向井芳樹先生の御指導です。二名に一つのテーマを与えられ、発表するのです。一生懸命準備をしましたが、授業での発表を失敗して先生から厳しく注意を受けてしまい、残念な結果でした。

卒論では、境田四郎先生からいつも笑顔で御指導頂き感謝しております。

先輩がいない私たちは、心細くはありましたが、のびのびと学生生活を送りました。やさしく、親切で、心豊かな先生方、級友、後輩のおかげで四年間を楽しく過ごせました。感謝申し上げます。

初代「帝塚山学院大学新聞部」

若　生　礼　子（旧姓　佐武）（山田博光ゼミ）

学院生活一六年の締め括りを、と鄙びた駅舎から、ひたすらのどかな田園風景の果てにそびえ立つこの学び舎に入学しました。

二回生になったころ、長沖一先生から「新聞部を」とのお話を頂きました。丁度、父が脳血栓で倒れたこともあり躊躇しましたが、創部に関わることにしました。その際、別の先生から同様の声をかけられていた日文のクラスメイトと初めて出会い、「異質のコンビ」誕生となりました。

昨年（二〇一四年）、久しぶりの総会出席を機に、図書館に眠っていた帝塚山学院大学新聞のコピーを手にしました。校正の酷さに赤面の至りでしたが、そこに「編集長　宇野文枝」とあるのを見つけました。新聞部をい

っしょに創ったその友です。

十分な後進指導もできず、未熟で多くの課題を抱えたまま卒業。二十数年後、同窓会長（第二代　桐本文枝さん　二〇一五年五月三十一日　逝去）、広報委員長として再会しました。二人は、逞しく、スキルアップし、互いにリスペクトし合える存在に成長できていました。ほろ苦い部活が、生涯の糧、楔となりました。

卒業後も友人と素の交わり

吉田　保子（旧姓　広瀬）（山田博光ゼミ）

広い田園風景の中を、南海電車にゆられて金剛の駅に着いた時は、「えっ　こんな場所に大学があるのか」と思ったことでした。何せ地方（福岡）から都会の大学へいく。あこがれのような気持ちが充分にあったのですから。

学生時代の四年間は、やはり有意義な時間だったと思います。一期生のため、学生数も少なく先生方に顔も、名前も覚えていただきました。今でも先生方のお名前、お姿、講義ははっきり思い出します。大講義室の講義、教室での授業を受け、たくさんの知識を頂き、またクラブにも参加。他の学科の友人や後輩の方々とも交わることが出来たのは、大きな財産になっています。

卒業後も、学生時代の友人と素の自分たちで親交をもてるのは、本当にいいものですね。まだ、しばらくは元気で頑張っていくつもりです。

五〇年経った大学を、友人たちと訪れたいと考えています。

帝塚山学院大学　おめでとうございます。

英文学科

今も　私の人生支える軽音楽

岩井ゆき子（旧姓名　磐井由紀子）（今西雅章ゼミ）

一期生ですから、大学の何もかもが一から始まりました。そのすべてが思い出ですが、中でも一番の思い出は、クラブ活動です。私たちは軽音楽部を立ち上げ、ほんの数人で活動を始めたのです。楽器は各人が持ち寄り、一つずつそろえていきました。最後にピアノが来たときには、心から感激しました。教えを請う先輩もいない中、自分たちでなんとか工夫しながらやっていったのです。

ほかの大学を見学した時に、先輩たちとともに演奏する友人が本当にうらやましかったです。それでも続けているうちに、楽器も少しずつ手に入るようになり、仲間もだんだん増えてきます。やがて、演奏したいと思っていた曲も演奏できるようになりました。

四年間のクラブ活動を通して、すばらしい経験と友人を得ることができ、楽しみながら学んだ大学生活でした。音楽は、現在もミュージシャンの私の人生を支えています。

学院中学の教師　定年まで

泉　和子（旧姓　宮崎）（小林清一ゼミ）

私は岡山県出身で、何もわからないまま大阪に来て、大学生活を始めま

した。下宿生活で家庭教師のアルバイトをして、真面目に大学と下宿を行き来する毎日でした。金剛駅周辺はまだまだ、殺風景で畑も残っており、「ずいぶん田舎に来たものだなあ～」と思ったものです。一期生だからどうのこうのという意識はあまりなく、自分のことだけで精一杯でした。

卒業と同時に万国博覧会で仕事をして、その後すぐ帝塚山学院中学校の教師の職を得て、定年退職するまで長年にわたり学院にお世話になりました。感謝しております。今はもう大学の恩師も亡くなられた方もいらっしゃり、その先生方の言葉やくせを思い出すにつけ、時代は流れた…と感じております。

「女の子は友達が一番」父の勧めで

江田裕子（旧姓 竹下）（桜井忠一・小林清一ゼミ）

二〇一五年十二月三十一日。私が最後の投稿者でしょうか？

一期生として、一番に思い出すのは硬式テニス部を八名で立ち上げたことです。経験者は倉橋公子部長一人。出来たてのコートにローラーをかけ、皆で整備して、やっと素振り。ボールはなかなかネットを越えません。休講になれば部室へ、コートへ。雨が降れば京都の美術館や散策。真っ黒に日焼けした肌は今も、悩みの種です。

大学対抗ダブルス戦で、あろうことか沢松姉妹との顔合わせになってしまいました。コテンパンのアッという間の終了（笑い）。そう、語り草になりました。この時の友こそ、主人を紹介してくれた上田幸子さん。中学時代からの心の友―クミ子さん。卒業後、より一層仲良くして頂いている佳代子さん。結婚後もテニスを楽しみ、家族ぐるみの友、順子さん。父が「女の子は友だちが一番」と帝塚山学院という場を与えてくれたお陰です。感謝です。

四三歳で癌を経験。それから生き方をみつめ、今第四ステージに向かいます。毎日が大切!!

明日は元旦。三人の子供と孫が揃い一三人のお正月を迎えます。すべてに感謝です。

何もかも新しい環境　迷わず決めた進学

斧谷和子（西台美智雄ゼミ）

高等部卒業の年に、大学が設立されるという恵まれた年でした。何もかも新しい環境の中で大学生活を送れることに、迷わず進学を決めました。

小さな駅、学舎へと続くのんびりとした穏やかな景色は、喧騒の町中に住んでいる私にとっては、新鮮なものでした。

一学年だけという少人数と、帝塚山の校風とで和気あいあいとした学生生活でした。部活動も一からです。古美術研究部に所属しました。研究という名のもとに、京都や奈良の社寺を廻り、宿坊に泊まって座禅を経験したこともありました。学科を超えた友達、また他府県から来られた友達も増えました。今でもお付き合いは続いております。四年の間に出かけた数々の旅行とともに、部活動は楽しかった思い出です。

駅へと歩いて帰った時に途中の畑で苺を買ったこともあり、あの畑は今はどうなっているんだろうと、この度思い出しました。

今の生活につながる　大学での努力

栗　丘　成　子（旧姓　久田）（桜井忠一ゼミ）

秋晴れの一日、私たち夫婦は昔からの仲間とテニスを楽しみました。テニスは、いつも私たちに仲間の輪を作ってくれます。幼少の頃からの運動のドクターストップが解けたのが大学生の時でした。

初めてラケットを握ったのが、帝塚山学院大学の時でした。有志数人でテニス部を創立。テニスコートもないスタートでしたが、四回生の時には、関東学生やインカレに出場する選手も輩出する部に成長していました。

夏休み中も、暑い太陽の下で赤いアンツーカーの上を白いボールを追い、走り続けた頃がなつかしいです。

「赤毛のアン」や「トムソーヤの冒険」を原語で読みたいと英米文学科に入ったのに、あまり真剣に勉強しなかったことを夫の米国駐在の時に後悔しました。でもテニスクラブに入り、英会話もテニスも上達しました。

帝塚山学院大学でその時の自分の出来る限りの努力をしたことが、今の私の生活の楽しみに続いているのが不思議です。英語も、テニスも、授業で習ったゴルフも発展途上です。

学生、教職員和気あいあいの歴史

戸　石　知　子（旧姓　竹内）（桜井忠一ゼミ）

大学生活は緑に囲まれた伝統あるキャンパスで、と漠然と思っていました。

しかし、「学院に四年制大学ができるのだから…」との父の一言で即変更。英文科一期生としての学生生活が始まりました。

開学前の定礎式の後、南河内郡狭山町に建設中の学舎を案内され、みかん山の上からの眺めや、建物の大きさに感嘆したものです。とはいえ、一年目は授業が始まってても運動場は未完成で、体育の授業は硬いコンクリートの上でした。

先輩が存在しない分、学生会やクラブ活動も一期生が立ち上げました。

大学祭は教授を巻き込んでの仮装行列、大小の道具は教授の研究室に保管依頼。校務員さん、食堂の調理師さんとも親しく、と大学の歴史は教職員と学生との和気あいあいから始まりました。

私は狭山学舎の麓に住んでいますが、学舎は成長した木々で見えなくなりました。五〇年間に晴美台学舎の増設、学部改編、男女共学など、時代とともに発展する大学ですが、その歴史の初めの一歩を踏み出したことを誇りに思います。

四六年たった今も仏語で歌を

富　澤　　苑（旧姓　治島）（小林清一ゼミ）

私が一七歳の時、婿養子だった父が家を出て、四年間の大学生活は楽しいことばかりではなかった。講義や部活は楽しかったが、言いようのない不安がいつも心の底にあった。

そんな時、友と京都の桜井忠一先生宅に二回伺った。人生や宗教の矛盾など私の「青臭い」質問を思い切り先生にぶつけた。先生は一つ一つ丁寧に答えて下さった。

お庭の大きな木に白い花が咲いていた。泰山木だとその時初めて知った。

今の私の庭にもあり、お話の内容は忘れても、先生の誠実さを思い出させてくれる。

一番印象に残っている授業は仏語。梶谷温子先生の研究室でカミュの「異邦人」を五、六人で翻訳した。マリーというビスケットを頂きながら、主人公との不条理を考える。そんなアットホームな雰囲気が好きだった。後に「異邦人」は映画になり、皆で観に行った。

先日、「私の心はヴァイオリン」を初めて仏語で歌ってみた。四六年経っても仏語の基礎が頭に残っていて楽しむことができた。

自分らしい道の一歩　万博のコンパニオン

宮　﨑　千　代（旧姓　山口）（今西雅章・薬師川虹一ゼミ）

その頃の私には想像もつかない人生の道でした。帝塚山学院大学英文科に入学したのは、英語が大好きという理由でした。それからが始まりです。

ちょうど四年生になり論文を提出した頃、日本万国博覧会電力館コンパニオンの募集を掲示板で目にして、迷わず応募。推薦枠は二人。しかも数十倍の競争率を幸運にも突破して合格！　六ヶ月間、初めての仕事に生き生きとした毎日を過ごしました。

閉会後の事です。冊子の表紙に写っていた仕事中の私を見た電通から誘いを受け、ＣＭ制作などに携わるようになり、かけがえのない仲間もできました。

しかし、私は大好きな英語の国、イギリスに行きたいという夢をどうしても実現したかったのです。それまでの貯金と、実兄が教授をしていた大学の学生の欧州研修旅行チャーター機に便乗させて頂き、途中から一人でイギリスへ!!　帰りはヨーロッパ十数ヶ国を旅行。満足いたしました。それからは、英語を生かせる仕事と、英語ニュースディレクターなどの仕事に数年、就いていました。

そして、主人と出会い結婚。一人娘も生まれ手が離れたあと、書道の猛勉強をし、師範・会友・検定一級の三種の神器（？）すべての資格を取得しました。

現在は気楽に絵手紙に自分の心を描いております。幸い住んでいる街中に外国人が多く、時折英語を話したり耳にしたり、昔を思い出しながら楽しんでいます。

そうなのです。あの大学推薦の初めての仕事から私の自分らしい道がずっーと続いていたのです。

続けること、不断の努力は今も私のモットーです。

もう一度、戻りたい花の女子大生に

三　宅　富　恵（旧姓　布施）（西台美智雄ゼミ）

創立五〇周年に当たり、「われら一期生の声」を寄せるとは思ってもみませんでした。入学した当時は、「何かに付けて一期生と言われるね」と話していました。

金剛駅に降りると周りは田んぼと畑ばかり。駅といっても形だけのものでした。当時としては、ハイカラな物珍しいスクールバスに一八歳の「花の女子大生」の集団が乗り込むのは、今思えば異様な光景ですね。

何をするのも私たち一期生のみで、クラブ活動も立ち上げるのが大変でした。当時としては女性が大学、それも英文学科に入るなんて、という時

代背景でした。が、私たちは、運良く卒業の春に開催された「万国博覧会」という夢のような場所で働くことができました。四年間の英語の勉強が役立った六ヶ月でした。

今でもその頃のことがつい昨日のように思い浮かびます。もう一度、若い頃に戻れるなら、もちろん花のある女子大生の時代です。五〇年たった今、つくづく思われます。

密かに名付けた「金剛パルテノン」

山田昌子（旧姓 浅野）（桜井忠一ゼミ）

大学開学の春、狭山キャンパスの新築工事完成が五月にずれ込んだため、入学式を住吉学舎でおこなった後、入学生一同バスでキャンパス見学に訪れたように記憶する。のどかな田園風景の中、小高い丘の上に輝くばかりの白亜の学舎。友人たちと密かに「金剛パルテノン」と名付けた。

幼稚園からお世話になり、慣れ親しんだ帝塚山学院ではあったが、何もかもが目新しい環境の中で始まった大学生活にワクワク、ちょっぴり大人気分で胸の踊る思いだった。

英語が好きで勉強を続けていた私の、長年の海外への憧れ。三回生の夏、アメリカへの短期留学を実現することができた。当時はまだ、大学からの留学制度はなく、民間プログラムを受験し、夏休みを利用して二ヶ月余り、UCバークレーでのキャンパスステイとミシガンでのホームステイを体験した。若き日のこの経験は、その後の人生の貴重な糧となった。

私の思いを酌み惜しみなく応援し続けてくれた両親に、心から感謝している。

帝塚山学院大学　今も生きている

山口美代子（旧姓 仙田）（桜井忠一ゼミ）

おめでとう五〇周年
有難う一生の友と学んだ四年

一期生キャンパス広くウロウロと
する事皆に「創」や「初」の字

時計台　長い階段
友情の花言葉持つ黄色のミモザ

図書館の貸出しカード
意気込みは全て頭に自分の名前

尊敬の庄野先生授業受け
あらためて知る庄野英二を

九〇分　英語尽くしのクラスでは
置いてきぼりの時間頻発

帰り道　友と歩いた通学路
友と作ったレンゲの冠

帝塚山学院大学　生きている
今も暮らしに続くつながり

合宿して　学生会会則づくり

吉田喜美子（旧姓 嶋津）（小林清一ゼミ）

初代学生会の役員として、学生会の会則作りに放課後役員たちが集まり、その後も暗くなるまで駅のホームで話していますと、駅員さんが「早く帰りなさいよ」と声をかけて下さいました。

当時の金剛駅のプラットホームはアスファルトやコンクリートではなく、雨が降ればぬかるみ、各停しか止まらない駅でしたが、のどかな風景の駅前とともに、なつかしく思い出されます。

夏休みには、一人の役員のお宅で合宿もいたしました。やっとのことで会則が承認された時にはホッとしました。

学生食堂でも、調理員のおばさんたちとも仲良くなり、手作りのお菓子をプレゼントしたり、苺をお安くわけてもらったりしました。少人数の良さですね。

お教え頂いた先生も、亡くなられた方が多く、同窓会に出席しましても、存じ上げない先生がほとんどですが、学生時代を思い出したくて、時々出席させて頂いています。これからも帝塚山学院大学が続きますように。

美学美術史学科

商売の道開いたゼミ旅行

有田まさみ（旧姓名 漆原麻佐）（源豊宗ゼミ）

私たちが卒業したのは、日本で初めての万国博覧会（大阪）の年でした。多くの友人たちがコンパニオンとして採用されました。

私の実家は古美術商で、中学・高校は奈良の帝塚山に通っていました。学院大学の開校と美学美術学科の開講で一期生としての入学は、実に自然ななりゆきでした。

女子が大学に行くのも多くはない時代、源ゼミの一ヶ月のヨーロッパ旅行は私に大きなチャンスをもたらしました。「めったに行けないチャンスだから」と、親が物ではなく経験を買いなさいと持たせてくれた一〇〇万円（当時は固定相場）が、商売の道を開いてくれました。まだ舶来品という言葉が当たり前の時代。輸出用サンプルとして買ってきたもので、すぐに百貨店の催事がスタートしました。万博でも、輸入業者の片隅に売り場をもたせてもらえました。

その後、結婚、出産、事業と三足のわらじをはいて生涯を過ごしましたが、五八歳でリタイアしました。孫も男二人、女一人で、年長はすでに大学受験。

平凡な毎日！

叔母、従姉妹　周りは学院出身

遠藤　睦子（旧姓　高石）（源豊宗ゼミ）

創立五〇周年おめでとうございます。

受験に失敗し、母の勧めで、学院大学に北畠の知人宅から通学。何しろ一期生だけでしかも、すごい田舎。夢の都会での大学生活とは少し違うと思いながらも、すっかり順応して、クラブや同好会にフル参加しました。

ゴルフ部では、帝塚山高等部の教室や橋本カントリーの紀の川荘での合宿。

ハワイアン部の練習合宿、ダンスパーティの演奏。古美術部では智積院会館に泊まってのお寺巡り。映画同好会では無料映画鑑賞…。

そうそう帰り道、よく「やきもきや」さんや、菊一堂へ…よく食べ、よくしゃべり。その上、お料理教室や洋裁教室へと、今思えば忙しく楽しい学生生活でした。

わたしの周りは、主人の叔母一族、従姉妹を始め、学院出身の方が一杯！

皆さま、いろいろな分野でご活躍で、頑張っているお姿を拝見して、嬉しいことです。

学院とのご縁を頂き、本当によかったと喜んでおります、学院のますますのご発展を楽しみにしております。

自分の生き方決めた　日本画研究

小西　淳子（源豊宗ゼミ）

四回生の時、指導教授だった源豊宗先生に引率されて、オランダからカイロまで、三週間にわたる旅行に参加しました。ヨーロッパ各地や大英博物館、ルーブル美術館、教会やお城の建物など、寸分の暇もなく訪ね歩きました。装飾豊かで、絢爛豪華な美術や建築物から多くのことを学びました。

一方、私は自然の風景を題材とした日本画の魅力に改めて気づくことができました。そこで、日本美術史研究家であった源豊宗先生の指導を得て、卒論の研究テーマを、川合玉堂にしたのです。彼は独自の風景画を発展させた近代風景画の先駆者といわれています。懐かしい自然の風景を描きましたが、それは心の内側で熟成させたイメージの風景であり、それが日本人に共通する心の風景になり得たと思われます。

自然の流れに沿って表現された日本画の研究が、自然の流れに逆らわないこと。困った時、二者択一を迫られた時、その時々の流れに沿って方向付けをしている私を育ててくれたと思っています。四年間の学園生活、長寿を全うされた源先生に感謝を込めて―。

大学で得た戸惑うほどの自由

中村　陽子（旧姓　松永）（源豊宗ゼミ）

一二年間、ミッションスクールの厳しさの中におりましたので、帝塚山学院大学入学で得た自由は、戸惑うほどでした。でもとても嬉しかったの

を覚えております。

今に続く良き友にも出会いました。

考古学クラブで、飛鳥の遺跡発掘体験をしたことも一生の思い出です。

美しい物を美しいと感じる心も、大学が育ててくれたのでしょうね。

色々な所に美を見つけながら、フワンと生きて行きたいと思います。

―忘れえぬ出会い―

心の扉──心理学科の今、昔、これから

副学長・人間科学部教授　西川隆蔵

二〇一五年十一月、泉ヶ丘キャンパス　学生掲示板前

事務室での用事を終えて、学生用掲示板のところに立ち寄ってみた。四限目の授業中ということもあり、学生の姿はまばらであったが、掲示板の一番食堂よりのコーナーに心理学科の二回生の来年度（平成二十八年）のゼミ登録状況を示す紙が貼ってある。夏休み明けの十月頃にゼミ説明会が開かれ、学生は事前にゼミ担当教員の研究室を訪問して、教員から直接説明をうけるなどしながら、ゼミを選択し、登録するという仕組みになっている。競争率の高いゼミは、落選者も多く出て、それなりに悲喜こもごものゼミ登録がここ数年、この時期に繰り広げられている。今年は私の研究室にも、そこそこの数の学生がやってきた。学生の話を聞いてみると、ゼミではどのようなことをしているのか、自分が研究したいテーマ、あるいはゼミでやりたいと考えていることをそのゼミでやれるかどうかといったことが一番の関心事で、自分と教員とのマッチングを真剣に考えて行動していることがよくわかる。周囲の雰囲気に押されてという学生もいるが、熱心な学生はそれなりの思い、希望を抱えながら、幾人もの教員の研究室を訪ねている。どの教員も学生の訪問に丁寧に応えておられることは学生の話から伝わってくる。私などは、このような情景がかねてから求めていた学科の姿とも重なることもあって、ある種の感慨を憶えるし、このような学生の積極的な動きの背景には、現在の心理学科教員の努力や苦労があることをまずは書いておきたいと思った。

ともかく、五〇周年記念誌の原稿を依頼されて、頭に浮かんだのはこのことであったが、ここでは心理学科のここまでに至る道のり、まずは大学が社会に向けて「人間文化学部・人間学科」という「心の扉」を開いた頃にさかのぼって、思い出すコトや人にふれてみることにする。

モノの時代から心の時代へ

一九九八年（平成十年）、泉ヶ丘キャンパスにあった短期大学を廃止し、人間文化学部が新設された。学部新設のプロジェクトのリーダーが中西進先生であった。中西先生のことはあらためていうまでもない。万葉集研究の第一人者であり、二〇一三年（平成二十五年）に文化勲章を受章されている。筑波大学教授、国際日本文化研究センター教授、トロント大学客員教授を歴任、一九九五年に本学に教授として着任された。二年後、他大学での学長をされた後、二〇〇一年から一年間、帝塚山学院理事長・学院長をされている。学部新設の当時、私を含めた狭山キャンパスの文学部所属の教員数名、短期大学所属の教員が集まり、中西先生のリーダーシップのもと、夜遅くまで、新学部のカリキュラムやスタッフ編成について会議を重ねたことが記憶に残っている。

人間文化学部は短期大学の廃止を含めた大がかりな学部新設のプロジェ

クトのもとにできた学部であった。教員スタッフとしては短期大学の文芸学科スタッフと新たに加わった情報系教員の混成で文化学科が構成されて、もう一つの人間学科は短期大学の食物栄養や服飾といった家政系教員と新たに心理学、行動学、精神医学の専門教員の混成で出発している。学部としては文化学科と人間学科の二つのユニットで構成されたわけであるが、中西先生の超一流の人脈を通して、文化学科では松岡正剛、心理学科に小田晋、香原志勢といった著名な先生方がスタートメンバーに加わっておられた。その後、食物栄養の専門教員を中核にして、新たに食物栄養学科が開設されるまでの九年間、人間学科の開講科目、特に専門科目は心理学分野と食物栄養を中心とする健康科学分野の二分野に大別され、学科全体のテーマは「心と暮らし」のようなモノであったと記憶している。当時、心理学を専門とする教員は当時の狭山キャンパス文学部の教員であった私と、泉ヶ丘キャンパスの短期大学におられた長谷俊彦教授の二人だけであったが、この二人にさらに新たな心理学専門教員を加える形で、心理学を専門的に学べるカリキュラムをおき、これを新学部、新学科の機軸にするというものであった。当時日本社会は物質的な豊かさによってカタルシスを得ようとする時代は終わりに近づいていて、感覚的・感性的体験から生まれる象徴的意識・意味に価値を見いだそうとする傾向が強まりつつある時期であったように思う。まさに「モノの時代から心の時代へ」と社会の意識が動き出した時であり、心理学ブームが到来しつつあった。まことにタイムリーなスタートであった。

ここで話は人間学科スタートの頃に戻って、小田晋、香原志勢、両先生のコトにふれてみたい。まず小田晋先生のこと。小田先生は精神科医として数多くの重大事件の容疑者の精神鑑定を行っておられたが、私の記憶に残るのは、先生が自ら「反人権派」を公言され、人権派を批判する時には、「暴走族友の会」「社会解体促進同盟」などの造語を用いて批判されていたことである。これは人権が強調され過ぎる余り、警察、学校、家族などが犯罪の芽を摘むことができなくなり、社会秩序が崩壊してしまうという考えをお持ちであったからであるが、普段に大学でお見かけするのは、穏やかで静かな物腰、物言いの先生であっただけに、その厳しい犯罪分析の言葉が印象的であった。

ともかく当時の入学試験の面接で「本学、人間学科を志望する理由を答えてくれますか？」との問いに対して受験生からの答えの多くは、「犯罪心理学をやりたい」であった。犯罪心理学自体は、心理学が今ほどに普及する以前から有名であり、犯罪を犯す人間の心理を分析し、犯罪の傾向と対策を生みだす手法は小説やドラマの制作に引用されていた。「犯罪プロファイリング」という言葉も当時は犯罪心理学の一種としてたびたびメディアが使用した言葉となっていたように思う。

次に、香原姿勢先生のこと。香原先生は東京生まれであるが、信州大学医学部での教鞭を振り出しに、立教大学に勤められた後、本学人間文化学部教授として勤務された方である。専攻は人類学、比較行動学であるが、日本顔学会の初代会長、のち顧問をされており、まさに顔学会の「顔」とも言える先生であった。行動学者であるだけに、チョウチョや昆虫のことにまで造詣は深く、私も昆虫大好き人間なので、よく話しを聞かせてもらったことを憶えている。また先生は一九八九年に『石となった死』で毎日出版文化賞を受賞されているが、何かの折に「死を考えることは、すなわち生を考えることだ」と話されたことが今でも耳の奥に残っている。先生は科学者として永年「死」と関わってこられ、死者を思い、その「死」を

通して人間の生を考えるということをされておられたのであろう。

両先生のことはこれくらいにしておこう。小田晋先生が退職された後は、精神科医の香山リカ先生が着任された。当時は今以上にテレビ、雑誌などマスコミでの露出度が高かったように思うし、臨床の仕事も続けておられたようで、いつもたくさんの仕事を抱えてのなかで、学科の仕事なども頼めば嫌な顔一つされずに引き受けてくださった。ありがたかった。学生たちとも気さくにつきあっておられて、「リカちゃん」は大人気であった。

とにかく、あの頃は「犯罪(者)心理学?を学びたい」、『犯罪に興味がある?』、あるいは「プロ・カウンセラーになりたい」という言葉を口にする学生で、人間学科という器はいつも溢れていた。今思うと、表面張力するくらいの心理学徒の数に教員は圧倒されつつも、本当によくがんばっていた。少し前までは『心理学をやっています』などというと「心を読まれるので怖い」と言われたり、心理学そのものが何か「うさんくさいもの」としてとらえられたり、「占い」まがいに扱われることもあった。それがなぜこのようなブームがおきたのか。これは一つの社会現象でもあったと思う。その頃日本の社会はというと、安定していた景気も後退し雇用不安や老後への不安などが噴出しているような状況になっていた。言わば将来が見えにくい時代になっていて、そのため将来を悲観したような事件がおこるなど、相手の心を求めるあまりに極端な行動に走ってしまって犯罪行為を起こしてしまうケースもあった。誰もが心のよりどころを求めているのだけれど、かといって宗教などに頼るのはうさんくさい。そんななかで私たちは何を心のよりどころにするべきなのか、ということをみんなが模索しているような状況だった。その模索する選択肢のなかに心理学も含まれていて、いたるところで心理学の学徒が現れたのではないか。もちろん、心理学が全ての人の心のよりどころになるわけではないとは思うが、日々相対する相手の心を知りたい、その仕組みはどうなっているのかという思いが若者の間に伝染的に増えたと思う。とにかく、雨後の竹の子のように心理学科が新設されていた。しかし、思い起こしてみると、当時の心理学科は人の心に興味があるという学生も確かに多かったが、大学でどこか「自分探し」をしているような学生も多くて、彼らにすれば、先の見えない不安な自分の身の置き場所として、心理学を学ぶ場というのは好都合だったのかもしれない。

あえて大学、いや社会を俯瞰してみれば、こんな感じである。文学部開設の一九八〇年代末から一九九〇年代初めにかけて、バブルとはいえ稀にみる豊かさを経験した日本人は、物質的豊饒だけでは心が満たされないことに気づいたのだ。生の充実感・幸福感は必ずしも物質的豊饒とパラレルでないことが、体験的に明らかになったわけである。少し大げさかもしれないが、帝塚山学院大学の五〇年は日本社会の意識変革のうねりとともにあったのかもしれない。

人間文化学部は二〇〇三年(平成十五年)に男女共学となった。入学者の入学志望動機として、相変わらず「犯罪心理」という言葉も根強かったが、次第に「カウンセラーになりたい」という言葉が増えるようになってきた。大学の心理臨床バブルの到来であった。次はこのことを少し書いてみたいと思う。

大学院、臨床心理学専攻設置
―カウンセリング・ブームの到来

二〇〇三年（平成十五年）、本学に大学院人間科学研究科人間科学専攻が開設され、臨床心理士養成のコースができた。かつて、私が大学院にいた頃、臨床心理学を専攻出来る大学は数えるほどしかなかった。全国で見ても、せいぜい一〇校あるかないかであったが、現在は臨床心理士資格認定協会指定の大学院が一五〇校あり、まさに臨床心理学が「バブル的」に増えたのである。わずか二〇年足らずの間に、このような「発展」をとげた理由をリアルタイムで経験した一人の大学人として書いてみたい。

一九五〇年頃から「いじめを苦にして自殺」とか「不登校」などが社会問題化してきた。そうした問題をどう解決するか、当時の文部省で問題になり始めて、「全国の小・中学校にスクール・カウンセラーを配置しましょう」ということになった。しかし、全国の小・中学校にスクール・カウンセラーを配置するには膨大な数の臨床心理士が必要となったわけである。時代的にはもう少し後になるのかもしれないが、少子高齢化社会が進み、高校生（大学受験生）に比べて大学の数が多くなりすぎたこともあり、あちこちで定員割れを起こす大学が現れだした。こうしたスクールカウンセラーのニーズと、大学のかかえる問題に加え文部科学省（当時、文部省）の「いじめや不登校への対策施策」も合わさるという状況の中で、臨床心理学を中心とした大学、大学院があちこちに出来上がったように思う。指定大学院の制度化とスクール・カウンセラーの需要、大学の経営の問題などを鮮やかに解決して、臨床心理士の権益を守られたのが、文化庁長官として活躍されたユング心理学の巨匠、河合隼雄先生であった。

さて、本学も大学院臨床心理専攻を設置するにあたり、まず中核を担っていただける教授ということで招聘したのが氏原寛先生である。今でも、心理学科の森田愼教授（当時は助教授）と一緒に大阪駅近くのホテル一階の喫茶店で、氏原先生にお会いしたことを憶えている。氏原先生は既に本学大学院の招聘に応じられ、教授として着任していただけることは約束されていて、私と森田先生とで、大学院の説明に行ったのである。氏原先生は日本でも屈指の心理臨床家で、学術的研究の業績はいうまでもなく、心理臨床関係の学会等では常に中心的な働きをされている先生であった（今も）。私たちは先生のお顔も知っているし、こちらからすれば初対面ではなかったが、私などは大臨床家を前にして、大学院の説明もおぼつかなくなってしまったことを今も思い出す。ともかく氏原先生あっての大学院であった。臨床実践に重心をおいた独自の臨床心理士養成のプログラム、国内著名な心理臨床家による連続公開講座の運営など、氏原先生あってこその活動であり、大学院の発展があったと今あらためて思う。

その後、ソンディ研究、運命心理学の権威、大塚義孝先生が着任され、二〇〇七年（平成十九年）には大学院人間科学研究科、臨床心理学専攻　専門職学位課程として定員二〇人の新たな課程がスタートした。さらにロジャーズ研究所での臨床実践を重ねた後、帰国後は大阪教育大学、京都大学大学院で教鞭をとられた東山紘久先生が氏原先生の跡を受ける形で着任された。ビッグネームの先生方が次々と着任される中、現在、臨床心理学専攻、専門職大学院として、毎年、数多くの臨床心理士の卵を輩出するに至っている。

人間学科から心理学科へ、そして「これからの心理学科」へ

大学は二〇〇九年(平成二十一年)に、人間文化学部から人間科学部へ名称変更し、人間学科から今日の心理学科へと改組転換が行われ、現在は心理学の基礎から、認知・行動科学、臨床心理・犯罪心理、発達心理・健康科学の三つの専門領域にいたるカリキュラムとなっている。また二〇一〇年(平成二十二年)には養護教諭養成課程を設置して、今年で七年目を迎えることになる。六年前にまいた種から芽が出始めたという状況で、四年間を通して、厳しく手をかけ育てる姿勢が少しづつ成果をあげているようだ。また学科教員が中心になって、勉強会を作って公務員や一般企業への就職を志望する学生への支援も行っていて、心理学科の「面倒見の良さ」はこれからますます磨きがかかっていくように思う。

さて、今年になっての一大ニュースは、二〇一五年(平成二十七年)に、心理学領域での初めての国家資格「公認心理師法案」が成立したことだろう。「公認心理師」国家試験の受験資格を得るために、大学で心理学とその他の必要な科目を修めて卒業する事が求められることになる。これまで以上に、医療、福祉、教育、産業といった場面で、心の専門家の活躍が期待されるが、心理学科、大学院もこのような動きを視野に入れて、改革に向けて歩を進めているところだ。

研究室にて

階段をあがって四階にある研究室に戻って来た。グラウンドに面した窓のところに行き、降ろしたままになっていたブラインドを引き上げると、陶器山の姿が眼に入ってきた。今はすっかり木々の葉が落ちて、もう冬支度になっている。細かな棘がいっぱい立ってギザギザになった稜線の上には灰色の空が広がっている。空の色は不吉にも見えるけれども、心の安寧をもたらすようにも感じる。硬くなって動きにくくなっている窓鍵をはずして、ガラス窓をいっぱいに開けると、外の空気がサァーと入ってきて、思わず肩をすぼめたが、その冷たさが新鮮で心地よい。窓を閉めて、ゆっくりとイスに腰をおろすと、廊下から、ドア越しに、授業終わりで帰りを急ぐ学生たちの声が聞こえてくる。彼らのやりとりになぜかザワツキを覚えたが、やがてそれも消えて静寂が訪れた。机の上のコーヒーカップを手にとり、飲み残しのコーヒーを飲むうちに、昨日の学長室会議での話題がよみがえってきた。なんとなく、大学の「これから」に思いをはせていると、脳裏に『凜として…』という言葉が浮かんできた。そして胸が少し熱くなった。

庄野英二先生と私

人間科学部教授　彭　佳紅

一　庄野英二先生と私の日本留学

一九八一年四月四日に、私は生まれて初めて中国を出てひとりで日本・東京の土を踏んだ。桜色に染まった東京練馬区で父の詩友である詩人松永伍一にご挨拶した後、日本文学を学ぶために帝塚山学院大学の初めての中国人留学生として来阪した。それまでは上海で中国工芸品の国際貿易の仕事に従事しながら余暇で、日本の児童文学作品をいくつか翻訳し出版していた。当時、学長をつとめていた庄野英二先生に本格的に日本文学を学ぶために、辞職して留学を決意した。上海で生まれ育って二四歳になっていた。

入学した翌月から、庄野先生の特別講義を受けることになった。週に一回、庄野先生から一対一の指導を受ける贅沢な時間だった。先生は児童文学や日本文学のみならず東西の文学名作の話を作家の視点で講義され、時には先生と一緒に中国文学作品の翻訳をすることもあった。

学院大学開校一六年目の一九八一年春から四年間、初のアジア留学生として私はここで学んだ。その後、学院大学は多くの韓国や中国の留学生を受け入れるようになった。今年は大学五〇周年という節目の年で、私が来日して三六年目になる。そう思えば、庄野英二先生との出会いが、私を日本に長居させたのかもしれない。

来日したときには、中国で一九六六年にはじまった政治・思想・文化闘争の嵐「文化大革命」の体験から、どこか人間不信になってしまい心の傷を抱えていた。ご縁があって帝塚山学院大学で留学し学んだ四年間、庄野英二先生をはじめ多くの先生方からいただいた教えは、知識や学問だけではない。庄野英二先生は魔法使いのように、私の感性と努力を褒めて伸ばし、いつの間にか、固く閉ざしていた私のこころがほぐれて、人を信じ愛せるようになった。私の人生観に大きな影響を与えた四年間だった。

当時、六七歳の庄野英二先生は著名な作家でありながら、大学の学長も務めておられた。昼間は教育、校務、深夜には文学の創作。少し長い休みになるとすぐひとりで木曽の山荘へ行き、手紙と電報以外は連絡をとれないほど、「萬作小屋」で小説や絵画の創作に専念された。庄野先生はよく演劇や美術展にも出かけ、新劇が大好きな私を悦子夫人と共に観劇につれていっていただいたこともあった。庄野先生は何事にも精力的で、少しせっかちなところもまた懐かしい。

庄野先生はお正月に帰れない留学生たちを、毎年のように元日から自宅に招き、悦子夫人のすばらしい手料理で御馳走を振舞ってくださった。そして、今思えば、なんと凄い場を体験させていただいたことか。先生はお正月恒例の挨拶で大阪文学の大御所・藤澤桓夫邸に二年続けて留学生の私を連れて参加した。その場に詩人の杉山平一先生、文学評論家の大谷晃一先生もいらっしゃった。大阪文学を研究しているフランスからの留学生も

いた。日が暮れるまで薫り高い文学のはなしの花を咲かせていた。

私を含む七人の女子学生は、庄野英二先生が在職中最後のゼミ生である。私たちはいまでも年に一度は集まって学生時代のいい思い出を楽しく語り合っている。忘れもしない。毎週ゼミの時間には、先生はかならず素敵なネクタイ・スーツ姿で凛とした表情で、教室に入って来られた。ビシッとした先生の姿に快い緊張感を覚えた。先生の文学の話はいつも「演劇」のようだった。

庄野先生のある文学の授業で期末テストのかわりに、「一〇〇枚レポート」の宿題を課したことでたいへんな話題になった。一枚を書いたら一点獲得というユニークな評価方法だった。それで受講した女子学生のなかに、いろんな「創意工夫」をこらして枚数を増やした者が続出したことで、先生を驚嘆させた。それほど自由で「花園」のような学院大学だった。

私の学生時代に、幸運にも「名優」のような先生が本学に何人もおられた。たとえば、先生の同人誌仲間、「映画論」を講じた詩人・杉山平一先生や、「万葉集」のノートを添削までしてくださる学者・吉井巌先生、講義がはじまると決まって階段教室の最上段まで軽快に駆け上って私語の学生を注意する「源氏物語」の大橋清秀先生、そして心理学の若い先生や美学の個性豊かな先生など…今でもその講義風景が目に浮かぶ。

中国では、むかしから教師は「たましいのデザイナー」と呼ばれている。学院大学で学び「力」の教育を実感し、人間を「信じる力」「愛する力」を頂いた。私は、大学の教員になって二二年になる。微力ながらすこしでも在学生や卒業生の「力」になれるよう、今も日々精進あるのみである。

二　庄野英二という生き方―その問いかけるもの―

1　日中文学のこと

(1)　庄野英二先生は訪中で陳伯吹と出会い、そして「猫」の童話を共訳

一九八一年六月十七日から七月一日まで、庄野英二先生は中国作家協会のお招きを受けて、日本作家代表団(団長・山本健吉)の一員として井上ひさし、上田三四二、竹西寛子、丸山才一などと共に中国を訪問し、北京、西安、紹興、杭州、上海を巡った。

庄野英二先生にとって何よりも一番嬉しかったのは、訪中の最終日に、上海黄浦江から長江への遊覧船で、わざわざ中国の代表的な児童文学作家陳伯吹、任溶溶両氏との懇談会が計画されたことであった。その船上懇談の風景を庄野英二の自伝(一九九〇年創元社刊行『鶏冠詩人伝』二三七頁)にこう綴っている。

陳伯吹は銀髪温顔気品高く、わが師坪田譲治の温顔と重ね合わせになり、一目で尊敬と親愛の情が湧くのを禁じ得なかった。任溶溶も微笑を絶やさない温厚な人柄であった。

私は冒頭、現代の中国児童文学をまるっきりしらないで対談する非礼を許してほしいと断ってから、まず、日本の児童文学発展の過程を説明した。その間、テレビカメラマンが私たちを撮影していた。あまりに話に夢中になっていてると、中国の誰かが、「もう長江まで来ていますから、ちょっと外の景色でもご覧になってはいかがですか」と言った。私は十分間ほど気ぜわしく、にぎやかに上下する船や、沿岸

風景をスケッチしてから、また両氏との懇談を続けた。帰路は、主として、解放後の中国児童文学について話を聞いた。

七月、庄野先生は中国から大学に戻ってきて、さっそく私を呼んだ。陳伯吹から贈られた氏の代表作『一只想飛的猫』（「一匹の飛びたい猫」）を一緒に翻訳することになった。翌年に、偕成社より『ネコ大王のぼうけん』という書名で出版された。このことは、一九八三年三月『帝塚山学院広報』一二号に紹介された。

師弟で中国の童話共訳

庄野英二学長と留学生彭佳紅さん

毎日新聞

帝塚山学院大学長と中国女子留学生

師弟"2人3脚"で翻訳

珍しい 現代中国の童話

「ネコ大王のぼうけん」

偕成社から出版

1983年１月11日付『毎日新聞』の報道記事

庄野英二学長と、中国から本学へ留学中の彭佳紅さんが、師弟協力して現代中国の童話を共訳、出版した。作品は、中国の代表的な童話作家・陳伯吹さんの「一隻思飛的猫」で、「ネコ大王のぼうけん」として翻訳されている。彭さんが、庄野学長のもとで児童文学の研究を一層深めてゆくことを期待している。なお、このことは五十八年一月十一日の朝日、毎日各紙にも大きく報道された。

彭佳紅さんの話「庄野学長をはじめ学院の先生方の協力をいただいて共訳の出来たことを大変嬉しく感謝しています。是非日本の沢山の大人や子供の皆さんに読んでいただきたい。一冊の小さな本だけど、現代の中国の童話について少しでも理解してくださることを願っています。

中国・日本双方の民話・昔話の類は翻訳されていますが、現代の童話についてはほとんど翻訳されていません。私はこの分野に今後の勉強を集中していきたいと思っています。」

(2) 庄野英二先生は中国で詩人雁翼と出会い、そして「愛」の訳詩

訪中の際、上海で中国の詩人・劇作家である雁翼にも出会った。庄野先生は前から、戦後慶応大を出た私の父・彭銀漢から雁翼を紹介されていたので、北京に到着するなり、雁翼との対面の希望を出しておいた。すると、創作の仕事で武漢市に行っていた雁翼は日本の作家庄野英二に会うために多忙なスケジュールをやりくりして、庄野先生の帰国前夜、六月三十日に上海のホテルまで会いに来た。庄野先生は次のように当時のことを記述している。

…雁翼は彭銀漢の友人で漢口から私に会うために、わざわざ飛んできたのであった。私は帰国後、彼の「愛について」その他の詩を翻訳した。

初めて御目にかかって感激の握手を交わしたものの、互いに作品を知っているわけではないのです、親愛的、友好的ではありながら、少々間のびした対面になってしまった。

雁翼は本名、顔洪林、一九二七年河北省の農家に生まれ。小学校二年の一九三七年七月、日中戦争がはじまった。一九三八年、少年兵として八路軍に入隊し抗日戦争に参戦した。負傷して一九五三年復員するまで一五年間、中国共産党の軍人として過ごしていた。戦後、その経歴なら容易に政治家や行政幹部などの高い地位につくこともできたのだが、彼は復員して三年後、独学で作家の道を自ら選択した。中華人民共和国建国後の五〇～六〇年代に、彼は詩や劇で社会主義建設に参加する「戦士」を謳歌し、賛美した。ところが、「文革」の体験は、彼の文学に深みと質的な変化をもたらした。「文革」後の雁翼の詩のモチーフは「戦士」から「人類愛」「生命への悟り」へと変わってきた。とくに熟年になってから「愛」をテーマにした作品を数多く発表した。

戦後、慶応・経済学部を出て日本の経済界に入らず新しい中国の建設のために帰国した父・彭銀漢は、上海にある同済大学の教授をつとめながら上海文学者連合会の委員もしていた。「文革」後の雁翼と上海で知り合い、互いの文学観に共鳴しあい親交を深めた。父は中国に帰国後も、日本の詩人松永伍一などと日中現代詩学を交流し文通していた。七〇年代後半、雁翼は彭銀漢から日本の詩人や文学のことを聞いて強い関心を持つようになった。

一方、雁翼より一二歳年上の庄野英二先生は、戦後復員してからすぐ児童文学の創作活動を始めた。戦後、最初に入選したのは、ＮＨＫ懸賞募集の放送児童劇「野鴨と少年」（一九四六年）である。教師を職業にしたが、ひとりの詩人、作家として生きたといっても過言ではない。七〇～八〇年代、とくに日中復交後、中国の文化や文学に強い関心を示し、晩年、それらをテーマや素材として『孫太郎南海漂流記』（一九八〇年）や『海のシルクロード　鄭和の大航海』（一九八五年）などの創作にも取り込んだ。さらに、教育者として、早い時期に国際理解教育の仕事にも携わっていた。

たとえば、「江南の旅」という紀行文がある。それによると、庄野英二先生は一九七七年に訪中するが、中国へ出かける前には中国との戦争による記憶がある為ためらう。しかし、南京で日本軍に虐殺された数十万人の霊が祭られている雨花台に参拝する。大抵の日本人は避けたくなるが、庄野英二先生は日程に入れるように自ら頼んだ。「江南旅の吟」に「南京にて」という題の自作の詩がある。

長江をまたぎし春の銀河系
革命の烈士の廟や迎春の花
革命は成れり窓前の海棠花
周大人の庭にろう梅匂いけり

ここの「周大人」とは、もちろん中国の政治家としても知られている周恩来総理のことで、「大人」とは、大局的な判断ができる成熟した立派な方という尊敬の念を込めた表現。南京に「梅園新村記念館」がある。当時

周恩来が率いる共産党代表団が国民党政府と和平交渉を行うために使用した場所で、周恩来夫婦の宿舎でもあった。庄野英二先生はその梅園を訪れたあとこの詩を創作した。

その紀行文によると、南京の劇場でトイレが満員で行列して待つ。前の便器があき、中国の青年と自分が同時に進もうとした。日本人だと知り、青年は先を譲ってくれた。その瞬間、感じた民衆の親愛なるまなざしを庄野先生は描いている。

このように、それぞれの経歴の持つ、文学を愛する三人がひとつの素晴らしい「化学反応」を起した。つまり、庄野英二先生は父・彭銀漢の媒介で、中国の詩人雁翼と出会った。あの戦争体験で二人の初対面が「少々間のびした」ものになってしまったが、しかし、庄野英二先生は帰国後、さっそく私に「雁翼さんの恋愛詩を訳したい」と言った。強い創作意欲で先生のお顔が輝いているように見えた。その要望に応えて私は早速、雁翼の詩を直訳して先生に渡した。すると、なんと三日も経たないうちに、庄野先生はとても嬉しそうに出来あがった素晴らしい翻訳創作詩「愛について」の原稿を見せてくださった(訳詩は『こだはら』第五号に掲載)。そのとき、私は深く感動した。人間への「愛」という接点を持つ二人の文学者は詩作を通して、過酷な戦争体験を超越し互いの生き方に共鳴しあい、真の相互理解ができたからである。

2　庄野英二文学の「核」となる作品たち

(1)　庄野英二文学の原点―『星の牧場』と『アレン中佐のサイン』

『星の牧場』は、日本児童文学の受賞作。後に『アレン中佐のサイン』とともに『庄野英二全集』第一巻に収録されている。両作品は、日本では「戦争児童文学」に分類される傾向がある。また、両作ともブックメディアにとどまらず、劇団民芸などによって演劇化もされている。

一九六三年に理論社より刊行された『星の牧場』は、庄野英二の代表作となり、第二回野間児童文芸賞、第四回日本児童文学者協会賞、第一一回産経児童出版文化賞(いずれも一九六四年)と次々と受賞。庄野英二の児童文学作家としての基盤を固めたといっても過言ではない。また、『星の牧場』は二度も映画化され、庄野英二が亡くなったあとの二〇〇〇年「文化の日」にＮＨＫで特別番組としても放映されていた。

一方、『アレン中佐のサイン』は、一九七二年十二月に岩波書店から出版された。『星の牧場』が出版してから九年後のことである。これは、庄野英二が「どうしても書かなければならない」と明言してつくられた作品である。

両作品を読み解く興味深いヒントがある。『星の牧場』については、物語の場所設定は、都市部ではなく、田舎の山奥。主人公は、戦場から復員した記憶喪失の青年モミイチと、彼がいつも幻覚で見る戦争から戻れない愛馬ツキスミ。主人公モミイチの精神を救ってくれたのは、村人やインテリではなく、ジプシーとクラシックの名曲である。

一方、『アレン中佐のサイン』については、物語の場所設定は、日本ではなく、南太平洋のインドネシア諸島。主人公は、俘虜の将校アレン中佐と日本のジャワ俘虜収容所所長椎崎。主人公である椎崎の人間性を肯定し戦後の人生の希望をもたらしたのは、同胞ではなく、敵の将校である。

『星の牧場』と『アレン中佐のサイン』は、庄野英二文学における代表作である。戦後、著者が復員してから一七年後の一九六三年に出版された

『星の牧場』は、戦争体験によるこころの疼きがまだ癒され切れず、モミイチという戦争のショックによる記憶喪失の主人公の青年を通して、ひとりの人間の持ついつまでも消えない精神的な苦痛と「理想郷」への憧憬が描かれた。『星の牧場』はある意味で、戦争で失った友と馬への「鎮魂歌」とも読める。

『星の牧場』が世に出てから九年後の一九七二年、『アレン中佐のサイン』は岩波書店によって刊行された。戦時中、同じく俘虜収容所の所長を勤めた庄野英二は、最晩年まで俘虜に関する事実を記録した資料を読むのをやめなかった。『アレン中佐のサイン』の創作動機について、「どうしても書かなければならない」と語る庄野英二の言葉に、一種の義務感さえ感じる。当時の時代風潮を考えると、たとえ世の無理解や批判などを受けても、「書かなければならない」という、作家生命をかけてもという覚悟を持って書かれた作品とも言える。

著者が作家生命をかけても書いておきたいのは、「人間肯定」であろう。時代や国を超えた善たる人間性を謳歌するためである。

『星の牧場』は「童話」で美しいファンタジーとすれば、『アレン中佐のサイン』は、リアリティックな描写の詰まった「小説」である。

事実として、著者は復員してから一七年目に『星の牧場』を、二六年目に『アレン中佐のサイン』を世に出した。戦後四半世紀を経て、著者は「ためいき」を漏らした「鎮魂歌」から、強い意志を込めた「人間礼賛」に変化した。つまり、ひとりの作家として「脱皮」し、更なる成熟の段階に入ったと言えよう。

『星の牧場』と『アレン中佐のサイン』の背景に、共通した戦争体験がある。戦後、庄野英二は教育者であり多作の作家であった。私たちはこの二つの代表作から作家庄野英二の成熟の軌跡を窺うことができる。庄野英二文学の原点がそのなかに内包されていることも記憶しておきたい（拙論「庄野英二文学の原点―『星の牧場』と『アレン中佐のサイン』に関する考察」〔『人間科学部研究年報』第一三号　二〇一一年　帝塚山学院大学〕を参考にされたい）。

(2)　『木曜島』―『アレン中佐のサイン』の姉妹篇として

一九七二年十一月に、『木曜島』が理論社より刊行された。その翌月の十二月に、『アレン中佐のサイン』が岩波書店から出版された。二つの作品はほぼ同時、世に送り出されたことになる。

これは、決して偶然のことではない。『星の牧場』が世に出てから九年後、作家はまた新たな行動を起こしたのだ。

『星の牧場』の刊行から『アレン中佐のサイン』と『木曜島』が誕生するまでの間、庄野英二は主にどんな作品を書いたか。

一九六六年頃から、庄野英二はたびたび熊野灘へ取材に出かける。その時期から『木曜島』刊行されるまで間、随筆集『愛のくさり』などを除いて、庄野は熊野灘の漁師に関連したものを、下記の長篇・短篇五作（創作童話、小説）を世に出した。一方、師である坪田譲治が主宰する創作児童文学雑誌『びわの実学校』でもメーン作家として活躍した。一九六六年から一九七〇年までの間下記の通り、三つ（①④⑤）の短篇が、『びわの実学校』に掲載されている。

①「桶屋甚八のはなし」（童話。初出：一九六六年五月『びわの実学校』第一六号、挿絵は庄野光）

②『うみがめ丸漂流記』（一九六八年十一月十日、ポプラ社より刊行、初

版挿絵は吉崎正巳）

③『ごちそう島漂流記』（一九六八年十二月、あかね書房より刊行、初版挿絵は田島征三）

④「白い帆船」（童話。初出：『びわの実学校』第三六号、一九六八年八月、挿絵も庄野英二）

⑤「原音松さん」（童話。初出：『びわの実学校』第四〇号記念増大号、一九七〇年四月、挿絵は田代三善）

長編小説『木曜島』の主人公は、朱貝佐太郎という郷里・串本からオーストラリアのアラフラ海の漁業基地木曜島（タースデー）に向かう青年である。時は昭和十三年（一九三八）、佐太郎は一六歳。佐太郎は木曜島にいる二人の伯父に迎えられ、コックとして真珠貝採集のダイバーボートに乗りこんだ。航海中、父が遭難事故で亡くなった報せがきた。佐太郎と串本の家族とは頻繁に手紙の遣り取りする。その日記や手紙をふんだんに引用されていて、物語がより真実味が増した。それらの貴重な文字記録資料は、庄野英二が熊野灘への取材とアンケートにより得られたもので、その史実が作品のなかで巧みに活かされた。

一九四一年十二月、日本は太平洋戦争に突入し、オーストラリアと敵対関係となった。日本人である雑貨船長と佐太郎はオーストラリア兵に連行されるが丁重に取り扱われる。現地のオーストラリア人住民は長年、日本の漁師が良き働き者でオーストラリア漁業に大いに貢献したと称え同情した。小説はここで終わる。長年、帝塚山学院の教育において庄野英二の協力者でありその文学の良き理解者でもある佐貫新造元文学部教授は、『木曜島』について、次のように論じた（『こだはら』第三号「庄野英二全集を読んで」より）。

…作者は自分の持駒を巧みに総動員して、海の生活者としてのアラフラ移民を描き切っている。読者にもそういう心おきのない満足感が、読了とともに湧き起ってくる。

荒天、サメ、操業に伴う突発事故などで生命を失う危険率の高い仕事をするために、何のためらいもなく佐太郎はタースデーに向かう。どこそこのガキと呼ばれる一般的な浜の家に生まれると、家庭の貧しさを助けるためにそうするのが普通である。タースデーへ渡って船に乗りさえすれば、直ちに小学校高等科の担任の先生と同じ月給がもらえるというのは、なるほど大きな魅力だ。佐太郎はコックとして激務に耐え、次第に成長していく。彼は父を亡くした串本の家族に予定通りの仕送りをし、暇を見つけては手紙で弟妹を励ましている。佐太郎は家族から遠く隔てられているが、一方では、「タースデーは紀州もおなじじょろ」という気安さもある。また彼らにとって海とは、遠く隔てるものではなくて遠くを繋ぐものだ。彼等の労働は厳しいが、その生活は海の男らしく、どこまでも開放的で明るい。

『木曜島』は、一九七六年に演劇化され、『南の島』として劇団民藝によって同年の七月は東京などで、八月には福井、九月はまた東京、十月七日から二十七日まで大阪、京都、神戸、名古屋の各地で公演されていた。庄野英二は『木曜島』の演劇化をたいへん喜んだ。公演広告用の「解説文」まで自分で用意したほどだった。

その後、一九七六年九月に、司馬遼太郎も木曜島について『木曜島の夜会』という小説を書いた。木曜島に対して共通の関心を抱いていることと、先に小説を出した作家庄野英二への挨拶も兼ねてのことであろうか。昭和

五十一年(一九七六)九月十八日付の司馬遼太郎から庄野英二宛の手紙が見つかった(「司馬」苗字入りの原稿用紙三枚分の司馬遼太郎の手紙については、『人間科学部研究論集』三六号に掲載)。

庄野英二は、一九七六年十月、劇団民藝「南の島」京都公演の際、「労演」十月号(No.224)に、次のように語った。

私はもともとタースデーのことを取材に熊野の浜を歩き廻ったわけではなかった。

海の民族や海に生きる男たちに興味があって雑賀崎(サイガサキ)の雑賀五人衆の調査を手始めとして次第に南下していったのであった。

私は大島(串本の対岸の島)の樫野という集落で始めて、タースデー帰りの漁民らとあうことができた。タースデー帰りの人たちは、何れも木曜島のことをタースデーと呼んでいる。

その人は、タースデーでダイバーをしていた。私は一晩ダイバーの生活について詳しく聞いて非常に興味をそそられた。

このあたり(大島、串本、周参見、古座川、宇久井、新宮)にはタースデー帰りが多いことを知った。

それ以後、私はタースデーに的をしぼって漁民談話の採識にとりかかったのであった。

私は数人のタースデー帰りに会った時には、もう単なる学問的調査といったような気持はふっとんでしまっていた。

私は、作家としての人間に対する興味と共に、誰にも知られていないタースデー漁民集団のことをぜひ書き残しておかなければならないという憤りに似た感情が胸の中に燃えだしていたのであった。

タースデー出漁者は日本全土が緒戦の勝利に興奮している昭和十六年十二月八日、開戦と同時に逮捕され、オーストラリア砂漠の中のヘイという町のキャンプに送られた。そして、機関銃に威嚇されてやむなく「戦時俘虜」になる事を承諾されてしまったのであった。

自分の金もうけが目的であったとはいえオーストラリアの産業開発に協力していたシーマンが「戦時俘虜」の取扱いをうけなければならないことは、どう考えても理解できないことであった。

かれらは罪なくして、敗戦の日まで虜囚の生活を続け、いのちをかけて働いて得た財産はすべて没収せられ裸のままで祖国に帰ってきた。

その後度々の陳情も黙殺されて国もかれらの物質的損害を補償しようともしない。

かれらはつぶやくようにいう。

「あがら漁師はあかなよ、国から金とるちえもなし、あがらのこと訴えてくれる人もおらな」

アラフラ海で、ダイバー病や、サメや暴風と戦ってきたいのち知らずの漁民でありながら、かれらはもうあきらめに近い心境になっているようであった。

タースデーのことを知っている人は意外とすくない。

しかも、タースデーからの帰国者は年をとって段々と死んでゆく。今度の「南の島」で船長になった人は、私が樫野崎で何回も取材した人をモデルにしているのだが、その方も亡くなられてしまった。その方は、十四年もあちらにいて英語も上手であった。キャンプに入ってからは渉外係りをして、毎日タイプで日報を誌し、オーストラリア軍に提出していた。

生存者中、最も若い人でも六十歳近くなっている。これらの人が死に絶えてしまえばタースデー出漁者のことは歴史にも残されず、やがては熊野の人たちからも忘れ去られてしまうのである。

庄野英二は数年間にわたって、紀州の漁師が受けた戦争被害を明らかにしようと、資料収集や現地取材に度々、熊野灘周辺へ出かけた。そこで得た収穫をその時期の作品に盛り込んだ。年代順でみると、まず短篇を書き、それから長編へと展開する傾向がみられる。

そして、紀州の漁師たちが出稼ぎ先でやっと手に入れたささやかな平穏な生活も戦争によって壊されたこと、罪もないのに敵国の人間ということで「捕虜」や「抑留者」にされた不合理性に突き動かされて、戦争の被害者である紀州の漁師たちのために代弁したいという庄野英二の気持ちが強く現れている。

さらには、戦時中、紀州にも多くの戦死者が出ている。戦争の犠牲者に対して庄野英二は、「桶屋甚八のはなし」の中で描いたように、たとえ「骸骨」になったとしても、たとえ国籍がわからなくても、「ていねいに」土葬し、その魂を祭ることがよいと考えている。

庄野英二は、戦争によって被害を受けている民間人であれば、どの国のひとであろうと、ひとりの人間として尊重されるべきだと考え、それを描くことに精力を注いだ。そして、戦争の酷い状況下におかれても失われていない人間同士の信頼を描こうとした点では、『アレン中佐のサイン』にも通じるもので、終始一貫して変わらないことだ。

作家庄野英二は、『木曜島』と『アレン中佐のサイン』という姉妹編を通して、「民間人」と「軍人」という二つの側面から人間同士による信頼の尊さを謳歌した。そして、それを自分の文学の核として据えたのである。

三　「文学」と「真実」について

庄野英二先生は、最晩年までポルトガルの軍人・外交官・文筆家のモラエスに強い関心を持っていた。庄野先生に父親の庄野貞一初代学院長も徳島の地でモラエスと出会っていたという記述がある。私も近年、晩年のモラエスが気になり研究調査のため何度も徳島を通っていた。モラエスはポルトガル外交官・文筆家でありながら、日本の風土と女性をこよなく愛した。孤独な晩年は、みずから徳島を終焉の地に選んだ。そのモラエスの何かが、庄野英二文学に通じるものがあるような気がしてならない（拙論「庄野英二文学試論―『猫とモラエス』に見る詩情と孤愁」『日本文学研究』第三五号をご参照ください）。

ある年の庄野英二邸での新年会の席で、同席の杉山平一先生に庄野先生は留学生の私を紹介されたときに、「彭さんにはなんでも話が通じる」とおっしゃった。歳の差は二世代もはなれているので、「なんでも話が通じる」ということは客観的にあり得ないことが分かりきっているが、しかしこれは、先生から頂いた最高の褒め言葉としていまでも大切にしている。そうおっしゃって頂けたのは、それはきっと戦争や時代の動乱を体験した人間同士しか分からない心の疼きと人間の「善」への信頼から発した言葉であろうと推測する。

周知のとおり、コペルニクスの「地動説」が本にして公表された当時、「科学の大発見」としてではなく、（友人の神学者アンドレアス・オジアン

庄野英二先生の作品「カニ」
庄野先生が亡くなられたあとも、悦子夫人に折を見て会いにいっている。庄野文学の研究論文を差し上げた時、壁に飾ってあったカニの色紙を「思い出に」と、いただいた。

ダーの書いた一枚の前書きによって）「仮説」として世に出したからこそ、「天動説」しか信じない当時の世の中でも、ヨーロッパの天文学者たちの強い興味を惹いた。作家庄野英二は、青春の一〇年間にも及ぶ戦争体験を個人的な体験にせず、戦争という状況に置かれた人間の「真実」に「普遍性」をもたせるために、ドキュメンタリーではなく、「小説」という手法を用いて、世に問いかけた。

五〇〇年以上も隔たるコペルニクスと庄野英二のあいだに、何の関係もないように見えるが、実はこの二つの事例から分かることがある――いわゆる「通説」というものに「否」を唱えるときには、「写実」よりも、「仮説」「虚構」＝「文学」の方がより有効で、「仮説」「虚構」でしか表現できない「真実」もあるということだ。その意味で、いまの時代だからこそ、庄野英二の文学を読み直す価値があると、つくづく思うこの頃である。

―学長が語る
帝塚山学院大学の
昨日・今日・明日―

第七代学長　山田博光

就任　一九八九年(平成元)四月
退任　一九九七年(平成九)三月

志願者が激増　国際文化学科を新設

帝塚山学院大学は、学院創立五〇周年の一九六六年に創設されました。それから二二年間は日文・英文・美学美術史三学科からなる文学部の単科大学として推移しました。昭和から平成に代わるころ、第二次ベビーブーム世代が大学進学期に達し、進学率の上昇と相まって浪人の激増が危惧され、文部省から各大学に門戸を広げるように要請されました。そこで、帝塚山学院大学も新しい時代にふさわしい新学科を増設することになったのです。

私が学部長であった時代(一九八五年～一九八九年)に文部省に申請し、一九八八年四月から国際文化学科が始まりました。ソ連のペレストロイカ(改革)、ベルリンの壁の崩壊、東欧諸国の資本主義国への復帰、ソ連の瓦解とロシアへの復帰は、世界史的には東西冷戦時代の終結を意味し、世界が一つになって平和を謳歌する時代を予感させたのです。

国際文化学科は、アメリカ・カナダ文化コース、オセアニア(オーストラリア・ニュージーランドなど)文化コース、中国文化コースの三コースからなっていました。どのコースも対象地域に提携大学を作り、海外研修・留学・教員の交流を図りました。新学科の動きに刺激されて、日文・英文・美学の既成三学科も海外研修を取り入れるようになりました。

蘇州・北京大学と交流　日中交流時代の先端走る

中国文化コースは蘇州大学と北京大学の二校と交流を始めましたが、私が学長に就任して四年目の一九九二年に、蘇州大学が戦後出発四〇周年を迎え、記念式典に招待され、祝辞を全校学生の前で披露いたしました。

一九〇〇年にアメリカの宣教師によって設立された東呉大学が前身で、関西学院大学と姉妹校のキリスト教系の私立大学でした。新中国になって三年目の一九五二年に江蘇省立の蘇州大学として再出発したのです。姉妹校の関西学院大学と帝塚山学院大学、花園大学の三大学が招待されたわけですが、現在蘇州大学が三〇校を越える日本の大学と交流している現状を知りますと、本学が日中交流時代の先端を走っていたことが分かります。

国際理解研究所が誕生　市民講座が好評

帝塚山学院大学にはもともと国際理解教育の伝統がありました。一九五六年に中学部がユネスコ国内委員会からユネスコ教育協力校に指定され、五年後の一九六一年に高等部も指定されました。それを受けて、一九七一

年に学外の有識者も加えた国際理解教育研究所が誕生したのです。これらの活動は国内外の注目を受け、国外からも視察者の訪問を受けるほどでした。しかし、活動の中心メンバーが定年退職する事態となり、その活動を維持するために、一九九三年四月に大学の付置研究所として再出発することになりました。名称を国際理解研究所と改め、大学の国際文化学科の先生をはじめ、たくさんの先生に研究員として加わってもらいました。初代所長は学長の私が当分の間兼任しましたが、以後優れた所長に恵まれ、今日に至るまでユニークな活動を続けています。

大学は以前から市民を対象に文化講座を毎年開講していました。既成三学科と教養課程の先生方が持ち回りで、大学の教室を開放して、続けていたのです。毎回盛況で、多くの市民の好評を博していました。国際理解研究所が誕生すると、大阪狭山市との協力で、市の文化会館であるさやかホールを会場に、国際理解の講座が開講されました。「イギリスとアイルランドを知る」「アメリカとカナダを知る」「中国を知る」のような表題で、これには他大学の専門家もお願いして、広く地域の聴衆を集めました。この講座は今日に至るまで二〇年以上続いていますが、一九九九年十一月三日の文化の日に、国際理解の講座を推進したという理由で、私が代表で市の表彰を受けました。

二〇〇〇人前後まで膨らんだ学生数　教育面では課題も

私が学長を務めた一九九〇年代は、文学部が四学科になったこと、第二次ベビーブーム世代が大学に進学する時代であったことなど、客観的な理由で学生数には恵まれていた時代でした。初期には全学で八〇〇人前後であった学生数が、この時代は一学年が五〇〇人で全学が、二〇〇〇人前後まで膨らんでいました。キャンパスが学生で溢れ、活気に満ちており、クラブ活動が活発になったのは良かったのですが、教育面では必ずしもよかったとは言えません。私の所属していた日本文学科は、初めの内は一学年五〇人ほどでしたが、一九九〇年代には一学年が一九〇人ほどになりました。五〇人くらいですと全員の顔を覚え、個性に応じた教育が出来るのですが、二〇〇人近くになると個別教育が難しくなります。私の担当していた「比較文学」は日文・英文・国際三学科の選択科目ということで、また定年前の数年間担当していた「日本ポピュラーカルチャー」は全学科が受講できる科目ということで、毎年二〇〇人～三〇〇人が受講していました。多数が受講してくれれば教師の励みになりますから、やる気が出るのですが、一人一人の顔を見ながらの教育はできません。

また、文学部は教養ある国際人を育てる方向では優れていましたが、女性の社会進出を考慮して、社会人としての有能な能力を育て、その資格を取得させる点では、中高の教員資格取得を除いて、あまり配慮されていませんでした。その点についての反省のないままに次の段階に進んでしまったことは、学長であった私の甘さであり、責任を感じています。

短期大学を廃止　新学部の設置に舵切る

次の段階とは、短期大学の廃止と新学部設置のことです。一九九三年に私は学長に再選され、二期目に入りました。二期目に入って間もなく、短期大学の定員割れの問題が理事会で話題となり、短期大学の学長を中心に私も参加して議論を重ねました。結果として短期大学の廃止と新学部の設

置の方向に舵が切られました。人間文化学部（後に人間科学部と改称）が誕生したのは、私の学長としての任期が終了した一年後の一九九八年四月のことでした。そして、新しい学部が誕生して志願者が増えるにつれ、文学部の志願者が減っていったことは事実です。

帝塚山学院の評価高める学院ゆかりの人たち

昨年（二〇一五年）十一月一日、帝塚山派文学学会の創立総会があり、私も一会員として出席いたしました。帝塚山学院の卒業生、教職員には文学史に名を残すような文学者がたくさんおります。私が三二年間専任として勤務している間に親しく接して戴いた先生方だけでも、庄野英二・杉山平一・長沖一・小野十三郎（敬称略）など、錚々たる名前ばかりです。会場の私のとなりには芥川賞作家庄野潤三先生のお嬢さん、その隣には庄野英二先生のお嬢さんがおりました。これら帝塚山学院にゆかりのある文学者を顕彰することは、実学を尊重することと並んで、学院の評価を高めるゆえんだと私も信じています。

文学者以外でも、大学の草創期に学長と学院長を兼務で長らく務められた西本三十二先生は、昭和初年代にＪＯＢＫ、すなわち現在のＮＨＫ大阪放送局長として、ラジオを使っての教育放送を創始し、広めて、日本国民の教育に多大な貢献をした功労者です。

私が理事会で接していた専務理事の阿部喜兵衛さんがいつぞや、日中国交回復後の宝酒造時代に紹興酒を日本に初めて輸入された話をお聞きしたことがあります。二〇一四年から二〇一五年にかけてＮＨＫで連続テレビ小説「マッサン」が放映されました。主人公の亀山政春（竹鶴政孝）が最初に就職した住吉酒造のモデルは、阿部家の摂津酒造だと知り、ネットの検索で調べてみました。すると、阿部家では当主が代々阿部喜兵衛を名乗り、私が知っている阿部喜兵衛さんは四代目であること、三代目の阿部喜兵衛さんの時代の一九六四年に摂津酒造は宝酒造と合併していたこと、などがわかりました。

当時の理事長は宇野収さんでした。関経連の会長として日本全国に雷名を轟かしていましたが、理事会で接してみて、柔軟な思考といつまでも夢を持つその若々しさに感服させられました。宇野さんがアメリカの詩人サムエル・ウルマンの「青春」という詩を信条にされておられることを知り、宇野さん自身が東洋紡会長時代に出版された『「青春」という名の詩』を入手して拝読し、私もウルマンのファンになってしまいました。

一九九八年のある日、ジョン・万次郎の没後一〇〇年を記念して、彼の幕末・明治維新後の活躍と貢献を顕彰する講演会が開催されました。私も興味がありましたので出席しますと、一九八〇年代後半帝塚山学院の専務理事をしておられた酒井芳申さんがその顕彰会の会長として挨拶されていました。ジョン・万次郎と坂本龍馬は土佐出身の二大偉人です。もしかしたら酒井さんも高知県のご出身なのかお聞きしようと思っているうちに、お尋ねする機会を失ってしまいました。

思いつくままに数人だけお名前を挙げさせていただきましたが、帝塚山学院の卒業生や経営者の中には、帝塚山派文学者に比肩するほどの知名人・大阪を代表する偉人が多いです。いつか帝塚山人物誌を作ったら、帝塚山学院のブランド性がより世人の理解を深めるだろうと思い、あえて綴ってみました。

第一一代学長　酒井信雄

就任　二〇〇七年(平成十九)四月
退任　二〇一四年(平成二十六)三月

改革に継ぐ改革

私が学長に就任したのは、平成十九年(二〇〇七)、奇しくも「大学全入元年」の幕開けの年でした。少子化が進む中、一八歳人口(受験生)の減少によって、すべての大学にはなにがしかの恒常的な改革が求められ、大学は自らの適正な規模に応じた経営体質の変革を真剣に模索しなければならない、そうした現実が目の前にありました。振り返ってみれば、それからの平成二十六年(二〇一四)三月までの学長職の七年間は、一瞬の気も抜けない改革に継ぐ改革の連続であったと思います。なかでも当時、数年に亘って定員数を割り込み、補助金の削減を受けていた文学部の改革は待ったなしの課題としてありました。

受験生は漸減　大学数は増加

すでに平成十七年(二〇〇五)、中央教育審議会(中教審)は大学の〈機能別分化〉を高等教育の将来の方向として打ち出していました。受験生人口が漸減する一方で、大学の数は増え続け、とりわけ私立大学を取り巻く環境は年々そのきびしさを増していました。入試制度の抜本的改革から学生の修学時間の確保、実社会との連携を視野に入れた就職の有効な支援活動など、まさに入口から出口まで大学に求められる役割は以前とは随分と様変わりしつつありました。「学士」の質の保証を求める声はますます強く、学生の主体的な学びをいかに支援できるか、その取り組みをもって大学の実力を測ろうとする大きなうねりともいえる力が大学環境を取り巻いていたと言えます。

特色ある教育の実践　差し迫った課題に

さらに平成二十年(二〇〇八)には、学士課程教育の構築に向けて汎用性のある基礎的能力の養成が打ち出され、〈大学間連携支援事業〉というものも始まります。この大学間の連携は、一つの大学では対応の難しい課題を複数の大学が連携しあって取り組むことを推進するものであり、「教育研究資源の有効活用」、「効率的・効果的な大学運営」と「地域の知の拠点づくり」を目指すものでした。しかし、それはまた同時に大学の〈機能別分化〉を促し、合併・統廃合すらも遠くに見据えた高等教育の基本方針の流れを加速させるものでもありました。大学全入時代の中、いかにして他大学との区別化を図り、特色ある教育を実践しえるか、この一点がどの大学にとっても喫緊の課題であることが明確になったわけです。

「面倒見の良い」大学目指し

こうした流れの中で、本学は平成二十一年(二〇〇九)、教学と経営がこれまでになく一体となって改革に取り組み、幅広い教養と専門的能力の育成、さらに地域貢献を目指す「面倒見の良い」大学としての特色を打ちだすことになります。総合的・学際的教養力と専門分野をバランスよく学び、段階的に専門性を追求するリベラルアーツ学部と、科学的視点を踏まえて人間を取り巻く諸問題にアプローチする人間科学部のスタートです。二学部四学科の、両学部合わせてリベラルアーツ&サイエンス型大学として、「学士力」をしっかりと培う教育機関として新しく出発することになったわけです。

「第三者の評価」に耐えうる大学づくり

さらに、平成二十二年(二〇一〇)には大学設置基準が改訂され、教育課程の中に「キャリア教育」の導入が義務づけられました。本学はいち早く〈キャリア形成支援〉という視点から、卒業後の職業生活への移行を円滑にするキャリア教育を学部教育の大きな柱としていましたが、それにしてもこの時期、「学士力」にはじまり、「社会人基礎力」、「就業力」といった言葉がいたるところで飛び交ったものでした。ひと言でいえば独りよがりの〈内部〉ではなく、〈外部〉の評価に耐えうる高等教育機関のみがその存在意義を持つことができるのだと、それこそ、その声はまるで〈黒船〉となって押し迫ってくるかの観がありました。第三者による〈外部〉評価に耐えうる「学士」の質保証をいかに担保するか―教職員の真剣な模索が各大学で始まっていたのは言うまでもありません。学士教育の質の保証を、第三者の外部の者に目に見える形で公表し、その評価に耐える大学でなければならないということ―我が国のこの外部による評価制度は、実はその六年も前の平成十六年(二〇〇四)にすでにスタートしていたものでした。すべての高等教育機関は七年に一度、第三者の外部機関による評価(認証評価)を受審することが義務化されていたのです。

本学も平成二十一年(二〇〇九)、「日本高等評価機構」を第三者評価機関として審査を受けることになります。まず、あらかじめ「自己評価報告書」というものを作成して評価機関に提出し、その後、実地調査を含む九ヶ月にも及ぶ審議を経て適格評価を受けることになるのです。ところで、この制度が意図するところは、第三者による大学としてのお墨付きを得られるかどうかということではなく、大学自らが自己評価の過程で、不足している点や不得手な点、あるいは十分満たしている点や得意な点など、普段は気付かなかったことを見つけ出し、その改善・強化に真剣に取り組むこと―そこにこそ、この制度の真の意図と意義があるわけです。本学においてもそのことは十分に理解され、すべての教職員が一丸となって足元を見つめなおし、それこそ「諸規程」の一からの見直しに始まり、時には深夜に及ぶ諸作業に打ち込み、ほぼ二年をかけて組織運営の整備に取り組んだものでした。今、振り返っても懐かしく思いだされます。少し大げさな言い方になりますが、なかでも「建学の精神」に共鳴するものが集う私学というものの存在理由を、みんなで再確認できたことは、大きな収穫のひとつでした。

「教育開発・支援センター」と総合的な学生支援

ところで、この認証評価の受審に際しては、平成二十年度に設置された「教育開発・支援センター」が、実に大きな役割を果たすことになります。ご承知の通り、本学は堺市と大阪狭山市に二つのキャンパスを有するがゆえに、ややもするとキャンパスごとの自立性が偏重されすぎる傾向があり、それが常に悩ましい多くの問題を引き起こしていたこともまた事実です。「センター」はそうした両学部教育を統合するユニティの象徴として、「全学的な見地から、教育の改革・改善を図り」、「総合的に学生を支援」するとともに、「地域に開かれた大学」を目指すという重要な役割を担わされて設置されたものでした。両学部に共通する部門の企画と運営に携わり、就学面・生活面において学生の支援を行い、地域の知の拠点として地域貢献の役割を果たしていく―そうした明確な目的をもって「センター」は文部科学省からの大きな支援を受けて設置されたものです。

この「教育開発・支援センター」を拠点としたプログラムは、期待通りすぐさま多岐にわたって広がっていきました。入学前教育や初年次教育、およそ一〇〇にも届く自主講座や地域連携型のサービスラーニングなどの修学支援、学習相談やメンタルヘルス支援、さらには課外活動支援など、こうした活動を通して、より充実した学生生活を支援する役割を担って「センター」は活躍していきます。両学部教育と並んで本学を牽引するもう一つのエンジンとなり、本学発展に寄与するものであり、これまで本学には存在していなかったプロジェクト発信型の一元的に統合化された学生支援の拠点でもあったわけです。あの未曾有の大災害「東日本大震災」の直後、被災地から遠く離れた本学学生有志と教員は、財団法人リモート・センシング技術センターの呼びかけにいち早く手を挙げ、東北沿岸部一〇五か所の被災地の震災前と後の衛星画像地図印刷作業に取り組みました。彼らによって印刷された膨大な枚数の大判紙の被災地衛星画像地図は、総務省、現地災害対策本部に届けられ、広く各自治体の復旧活動において活用されたと聞いています。被災地に想いを馳せた学生たちが発信するこうした連携プロジェクト活動、チームワークを、何にもまして私たちは誇りに感じたものでした。

チャレンジ精神をいつまでも

こうして振り返ってみると、改革に継ぐ改革に教職員のみなさんとひたすら打ち込めたことは、実に幸せであったと思います。近年ますます時代の要請の下、高等教育の向かうその目標は明確になっています。たとえば文部科学省の支援事業も、「教育の質的転換」「地域発展」「産業界・他大学等との連携」「グローバル化」などの改革に、積極的かつ全学的・組織的に取り組む大学を対象にしています。そうした大学には、経常費・設備費・施設費を重点的に支援・強化しようというのです。本学が受審する二度目の「認証評価」では、「データベース化された教育情報の公表、エビデンスと根拠資料の提示」が強く求められていると聞いています。教育改善に向けての評価基準は、ますます細部にわたり厳密化されていくようです。

また、平成三十年（二〇一八）には一八歳人口がおよそ五万人減少すると言われています。それに伴い入学定員五〇〇人規模の大学がさらなる淘汰の試練を受けるとも言われています。年々きびしさをます大学教育環境の

下で、平成二十六年（二〇一四）、本学は「食習慣」と「運動習慣」に基づく予防医学の考えをベースに、実践的専門知識と技能を備える人材を育成する「健康実践栄養士課程」を設置し、翌年の二十七年（二〇一五）には、実践的英語力を「仕事」に活かし社会に貢献できる人材の育成を目指す「キャリア英語学科」をスタートさせています。今後とも〈自学自習の建学の精神〉を踏まえ、地域に必要とされる大学を目指してさまざまな改革に取り組んでいくことになるのでしょう。

帝塚山学院の学院歌は、「のびやまぬ　みやこ難波津／昨日（きぞ）の丘　けふの八（や）ちまた／ゆくりかに　さまこそかはれ」とはじまります。次に、大阪南の地を理想の学問の場と決め、学院を設置した創設者たちの、その当時の心意気が高らかに謳われています――「ここの地を　よしと定めて／学び舎のもといし（基石）置きし／そのかみの　人は活きたり」。これが、社会に貢献できる有為な人材を世に送り出したいと、その沸き立つ情熱を胸に秘めて、一〇〇年前の大正六年（一九一七）に学院の設立を世に問うた創設者たちの心意気です。このチャレンジ精神をいつまでも持ちつづける帝塚山学院大学であってほしいと、開学五〇周年を迎え、陰ながら切に願っている次第です。

第一二代学長　津田謹輔　就任　二〇一四年（平成二十六）四月

帝塚山学院大学の今日

はじめに簡単に自己紹介をしたいと思います。

私は平成二十五年（二〇一三）京大を定年退職して、本校人間科学部食物栄養学科特任教授として着任しました。私は糖尿病を専攻している臨床医です。糖尿病は平成の国民病といわれる疾患で、研究分野は分子生物学から生活習慣や臨床心理まで幅広いのです。私はそのなかでも食事療法を専門にしていました。それで日頃から栄養士の先生方と一緒に勉強する機会が多く、その縁で本学にお世話になりました。そして予期せぬことに着任二年目に学長職をお預かりすることになりました。

毎年大学としての目標をたてることにしました。一年目は、「チーム帝塚山」。教職一体になって大学改革に取り組みたいと考えたからです。二年目は、「学生も教職員も輝ける大学」としました。教職員が生き生き働いていないと学生だけが輝けるわけはありません。大学にくるのが楽しい。そのような大学にしたいと思います。三年目の今年、目標は、「信頼される大学」です。帝塚山学院幼稚園から高校まで学院すべての方々から信頼される大学、そして広く高校や企業からも信頼される大学を目標にかかげました。おりしも新理事長が大学にくださった大きな旗印「小粒でもきらりと光る大学」の年次目標ということになります。

巻頭言も執筆しましたので、ここでは、学生に対する思いを、入学式や卒業式式辞を引用して責めをはたしたいと思います。入学式や卒業式は原稿を読むのではなく、できるだけ語りかけたいと考えました。紙面の関係で一年目の式辞を披露します。

問うことを学ぶ　これが学問

二〇一四年四月三日入学式式辞

みなさん、ご入学おめでとうございます。今まで支えてこられましたご家族や関係の皆様にもお祝いを申し上げます。本日は多くの来賓のご臨席のもと、平成二十六年度（二〇一四）の入学式を挙行できますことは、大学の教職員にとりまして大変な喜びとするところです。

本日入学されますのは、リベラルアーツ学部九五名、人間科学部三三九名、人間科学研究科二二名です。私たちは皆様を歓迎いたします。改めて入学おめでとうございます。

入学式に際し二つの話をしたいと思います。

まずは勉学の話です。

わが国には七四〇校余りの四年制大学がありますが、皆様が入学される

帝塚山学院大学は二年後創立五〇周年を迎えます。創立以来、「力の教育」すなわち「意志の力」、「情の力」、「知の力」そして「軀幹の力」を含む全人教育を建学の精神として教育が行なわれてきました。また大学が学問の府であることもこれからも変わることはないでしょう。しかしながら、大学が社会から求められるものはその時々で変わってくると感じています。現在のキーワードはグローバル化、そしてすぐに役立つ人材でしょうか。したがってすぐに役立つことも勉強しなければなりません。しかし、社会のめまぐるしい変化や急速な科学技術の発展によりすぐに役立つことは、すぐに役に立たなくなることも多くあるでしょう。みなさんには、すぐに役立たないけれどいつまでも役に立つことを学んでほしいと思っています。すなわち基礎、基本や真理を身につけていただきたいと思います。

みなさん方は、小学校から高校まで多くの先生から多くの知識を学んできたと思います。先生から学ぶことは大変効率の良いシステムなのです。みなさんはそれを疑うことなく受け入れてきたことと思います。また答えがある問題を解きながら過ごしてきたと思います。大学でも同じような勉強は必要です。先生方から効率よく知識を授かって下さい。しかしそれだけでは不十分です。学びから学問へ。自分で問題を見つけ出し、あるかないかわからない答えをさがす積極的な勉学を臨みます。問うことを学ぶ、これが学問であると私は思っています。

これからの四年間は、みなさんの一生の方向付けとなる大切な時間です。そこでもう一つの話、学生生活の話をしたいと思います。それはこの大学を好きになってほしいということです。

好きでこの大学を選んだとおっしゃる方も多くおられるでしょう。その方にはもっと好きになってほしいのです。授業がおもしろい、クラブがおもしろい、毎日大学に行くのが楽しい。そのためには大学に早くなじんでほしいのです。

ここにはいろいろな専門の先生がいらっしゃいます。どうぞ一年生の時から先生の研究室を訪れて下さい。専門も考え方も違う多くの先生がいらっしゃいます。多くの多様性を受け入れること。これがグローバル化ということではないかと思っています。多くの先生と接し、いろいろな考え方を知り、そして何でも相談できる大学の恩師をみつけて下さい。

毎日充実した生活を送り、四年後に誰一人欠けることなく卒業していくことを祈念してお祝いの言葉とします。

本日はおめでとうございます。

回り道には　何一つ無駄はない

二〇一五年三月二十日卒業式式辞

卒業生のみなさん、本日はおめでとうございます。多くの来賓や保護者の方々のご臨席の元、このように卒業式を挙行できますことは、教職員にとりましても大きな喜びであります。

みなさん改めて卒業おめでとうございます。小学校から数えると、一六年あるいはそれ以上、多くの苦労を乗り越えて、今学校生活を終え、社会へのスタート台に立とうとしています。皆さんの中には、大学院に進学してさらに勉学に励む人もありますが、多くの人は社会に出て、それぞれの選んだ道を歩もうとしています。未来に期待を膨らませている諸君に心からお喜びを申し上げます。また今日まで諸君を見守り、支えてこられましたご家族の皆様にも、心からのお喜びを申し上げます。

卒業式にあたり、回り道の話をしたいと思います、

先ほどから背広姿や着物姿の皆さんを見ながら、もう四二年前になりますか、私が大学を卒業した時のことを思い出していました。

私は昭和四十八年に京都大学医学部を卒業しました。しかし卒業したのは九月で卒業式はありませんでした。私一人落第したというわけではありません。私が大学生だったころ、日本中の大学に政治の嵐がふきまくっていました。学生運動のため、バリケードで封鎖された研究室、キャンパスに、ゲバ棒や火炎瓶が飛び交い、機動隊と学生が衝突する姿を何度もみて過ごしました。私の所属する医学部は一年近く授業がなく、そのため卒業式が九月になったわけです。

本来おめでたい卒業式に、いささかふさわしくない話題になって参りましたが、その頃を振り返って思うことは、たしかに卒業は回り道をして半年遅れましたが、教室では学べないことを数多く学んだ気がします。たとえば、自分の生き方や、職業と社会の変わりについて考えました。なによりも、一つのできごとがあると、必ず異なる多くの考え方や見方があることを知らず知らずに学んだと思います。そしてみなさんに申し上げたいことは、若いときの経験は、そのときには回り道のように思えたとしても、成功したことはもちろんうまくいかなかったことであっても、何一つ無駄なことはないということです。

みなさんが飛び込んでいく現代社会は、グローバル化によって、世界は一つに融け合いながら、しかし一方で激しい競争と文化の摩擦を起こすという、かつて人類が経験したことのない時代を迎えています。どうぞ広い視野をもち、失敗を恐れず何にでも挑戦してほしいと思っています。

回り道の話として、ノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥先生の話をしたいと思います。先生は大学を卒業後、臨床医、整形外科医として仕事をおはじめになりました。しかし手術がうまくなかったようで、普通二〇分くらいの手術が二時間もかかったそうです。手術室では、山中でなく、ジャマナカと呼ばれていたというエピソードがあります。そして臨床に挫折し、しかし多くの患者を救いたいと研究の道に進みました。血圧の研究から始まり、動脈硬化の研究へ広がりました。そこでみつけた遺伝子ががんに重要だと思い、がんの研究に転向されました。さらにそこでみつけた遺伝子が万能細胞に大切だと考え、また方向を変更して今のノーベル賞にとつながったのです。先生は、万能細胞研究一筋ではなく、むしろいろいろ回り道をしながら現在のｉＰＳ細胞にたどり着いたのです。

ここから学びたいことがあります。

先生は挫折や壁にぶち当たっても負けなかったことです。

レジリエンスという言葉をご存じでしょうか。精神的回復力といったいいのかもしれません。心理学科の諸君は勉強したかもしれません。最近では災害時にも使われる用になってきた言葉です。

挫折やつらい出来事にあった時、しなやかに生き延びる力のことです。最近レジリエンスは鍛えることができるということがわかってきました。どうすれば良いのか？その一つの方法は人に感謝することです。感謝のこころが挫折に負けないレジリエンスを鍛えるというのです。

以上お話ししましたように、どうか若者らしく広い視野と高い志をもって、希望に満ちた未来へ羽ばたいて下さい。時に疲れたときは羽を休めに本学に戻ってきてください。

教職員がいつでも待っています。

最後になりましたが、やりたいことができる心身の健康を保ち、思う存

分活躍されることを祈念しましてお祝いの言葉と致します。

卒業おめでとうございます。

大学は　人と人との出会いの場

二〇一六年三月十八日卒業式式辞抜粋

私たちの体は、毎日毎日入れ替わっています。毎日食べるもので、体はたえず新しくなっていくのです。物質としては、おおよそ七～八年で総入れ替えになるといわれています。毎日の食事に気を付けることが、健康な体を維持していくことになるのです。

心や人格も同じ事がいえるのではないでしょうか。毎日毎日出会う人や毎日のできごとがあなたを形作っていくのです。ちょうど食べたものがどこに行ったかはわからないものの、体のどこかで役に立っているように、毎日の出会いや経験が、どこかはわからないけれど、しかしどこかには入っていてあなたを作っていくのでしょう。

You are what you eat. あなたはあなたが食べたものからできている。

You are what you meet. あなたはあなたが出会った人からできている。

大学は、社会の要請に応じてかわるところがありますが、学問を通じて、人と人との出会いの場であり、「知情意体」を育てる場であることはこれからも変わらないでしょう。

―小粒でも
キラリと光る大学―

帝塚山学院大学創立五〇周年の転機に

野村正朗理事長・学院長が語る

──理事長就任から六ヵ月、その前の専務理事をいれると八ヵ月余り、大学の現場を自分の目で見て、教職員と対話を重ねています。この半世紀で培われた学院大学の今をどのように感じていますか。

大事なものを見失い　帝塚山らしさ消えたのではないか

私自身、学生時代から、帝塚山学院の短期大学、そして女子大として開学した大学を見てきました。当時、この住吉の土地は、文学・美学・英文学などの教養を身に付けた学生が行きかう、品格のある女子大の街というイメージがありました。時代は移り変わり、短期大学が住吉から堺市の方へ移り、歴史の流れの中で、四年制大学へ、そして共学へと変遷を重ねてきました。今回、初めて狭山キャンパスおよび泉ヶ丘キャンパスを訪れましたが、昔イメージしていたものとは違い「もったいないな」と感じました。「なぜだろう」と考えました。時代に翻弄され、きめ細かい養育など大事なものを見失い、帝塚山らしさが消えたのではないかと感じました。

──女子大に戻すということですか。

女子が行きたがる大学に　「品格のある帝塚山」イメージ活かす

一〇年後、二〇年後このまま少子化が進めば、自然といくつもの大学が消えると言われています。そんな中で、生き残っていくためには、他大学とは異質の大学をつくるより他ありません。それには、いまなお伝統として残っている「品格ある帝塚山」のイメージを活かすことだと考えます。女性のしなやかさに活路を求めることです。決して女子大にするということではありません。厳しい道ではありますが、私の中ではできると信じています。

個性豊かで、上品で、香り高く、社会人になってもおしゃれで、エスプリも効いている人物を輩出できる帝塚山学院大学にしたいと考えています。過去のいいところを伸ばしていければ「小粒でもキラリと光る大学」に繋がっていくはずです。そのためには、「女子が行きたがる大学」になることがポイントです。女性が居心地のいい設備に変えていき、華やかさを感じるキャンパスにする必要があります。そして、ハード面だけではなく、ソフト面として、人間形成につながる教養を身に付けるようにします。卒業の時に、就職への目的意識、基礎学力、教養、専門スキルを手にしてい

るようにします。本当の意味での「スチューデント・ファースト」を実現するには、今のカリキュラムは多様化しすぎて、学生に戸惑いを生んでいるように思います。

――大学再生への最初の一歩として何をしますか。

生き残りのため「スリム化」図る

昨年から続いている大学の赤字を二〇一六年度で「黒字化」することです。今、入学者が劇的に増える状況にはありません。言うならば、「自分の教える場がなくなる可能性がある」ということを教職員のみなさんに理解していただきたいと思っています。給与・経費面での「スリム化」を図らないと生き残れないということが、改革を推し進めるための大前提です。しかしながら、社会から注目される人材を「新しい風」として採用することも考えています。

――大学の役割は何だとお考えですか。

学生の社会的・経済的自立、人格的自立促す場にする

まず、大学の重要な役割は、学生一人ひとりが知性を磨き、自分が生きている意味について考え、生きる目標を模索することにあります。大学は、学生たちの社会的・経済的自立と共に、その人格的自立を促し、助ける場であるわけです。言い換えるとするならば、一八歳から二二歳という多感な時期に、どれだけひとりの学生の人生に影響を与えることができるかということです。歳を重ね、学生時代を振り返った時に、師として仰ぎ学んだ記憶が、卒業後の人生の助けになることは往々にしてあります。大学の役割とは、実は出会いそのものなのではないでしょうか。

――現在は、人間科学部が心理学科、食物栄養学科、情報メディア学科、キャリア英語学科、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科の二学部五学科ですが、学部学科の再編・改革は考えていますか。

学生サービスのため「ワン・キャンパス」も視野に

現在、キャンパスは狭山と泉ヶ丘の二ヵ所に分かれていて、融和性の点でいくつか問題があります。学生にとっては不便なこともあり、学生サービスの面からも、「ワン・キャンパス化」も視野に入れています。

そもそも大学には、「研究」「教育」「地域貢献」の三つの柱があります。私はこの大学にはあえて「教育」の比重を高くして、教養教育を充実させたいと考えています。学部学科の再編・改革も考えていますが、まず共通教育の強化です。帝塚山学院大学に入学したなら、自分の考えを、自分の言葉で表現できる国語力を持ち、英語でもリスニングも、スピーキングもできる物怖じしない人物。そしてキャリア教育では、ＳＰＩを意識した対策、そしてＰＣを使いこなせる情報教育など、とにかく社会で求められる基礎教養を最低限身に付けた人物となって頂きたいと思います。

一回生のときから四回生まで、教員が自分の担当する学生の学習・生活態度をていねいにフォローし、習熟度もつかみ、資格合格あるいは就職まで育て導いていくシステムが、まだまだ確立されていません。「面倒見のいい大学」へと改革していきたいと考えています。

――「面倒見のいい大学」にするために、「学生支援」の体制を見直す用意はありますか。

「攻めの対象」にして就職に挑む

必要な素養・教養・スキルをしっかりと身につけて社会に送り出す

学生のニーズに即応できる組織体にしたいと常々考えています。全体では、スリム化しながら、不十分なところはテコ入れしていきます。就職のキャリアと広報部門にキーパーソンをおきます。また、「学生サービス」の窓口を一元化し、就職・学生の生活と学習支援・学生相談・保健室の四つの部門を整えます。

小中高校では、管理職を増やし、ガバナンスを強化します。学力向上と確かな進路保証を実現するためです。

大学の場合は、学生をどう就職させるか重要です。一人ひとりの人生をより豊かにするためにも必要な素養・教養・スキルを学生生活の中で、しっかり身につけさせ、信頼に応えることのできる人材として世に送り出していけるかは、大学の責任でもあります。

とはいえ、就職に関しては、「攻めの対象」として取り組んでいきます。帝塚山学院の小中高校の卒業生には大阪の名門・老舗の経営者も多くいらっしゃいます。こうした同窓生・保護者とのネットワークができていないのが非常に残念です。就職に強い大学づくりには、大阪の名面企業に輩出する「インナーサークル」づくりは欠かせません「帝塚山学院大学の学生なら」と言っていただけるように、一つひとつ丁寧に説明し、ネットワークを広げていきたいと考えています。

――所信表明で、帝塚山学院は「一貫校」から「総合学園」へ。幼稚園、小中高校、大学とエレベーター方式ではなく、個々の学校が独立した存在として取り組む、との方針を打ち出しました。この基本方針の枠組みのなかで、大学をどう位置づけているのか説明してください。

大学に次世代教育の研究機関つくりたい

中学校高等学校・泉ヶ丘中学校高等学校の生徒も行きたがる大学にしなければなりません。その一策として大学内に、次世代の教育について研究する研究機関を作りたいと思っています。たとえば、ゼロ歳から九歳までの期間は、音感や感性を磨く時期であり、好奇心を豊かにする大切な発達段階です。全国的に見ても、大脳生理学、発達心理学を踏まえた良質な児童教育のあり方に取り組む組織がこれからの時代にはますます重要になってくると考えています。

帝塚山学院は、幼稚園や小学校、中学校、高等学校を有する総合学園です。経験の後ろに理論があれば、子育て中の家庭のしつけも含め、保護者とも一体となった、幼児教育の「帝塚山方式」を生み出すことが可能となります。また、ゆくゆくは、それらが地域貢献にもつながっていくと信じています。その他の連携としては、地域の人たちの学び直しの「知の拠点」としての貢献も考えられるが、そのためには尖ったもの、抜きん出た能力・魅力を持った人材が必要です。現状では貢献の範囲は限定的になってくるかもしれませんが、これらも実現したいと考えています。

――理事長はりそな銀行の頭取・社長として二〇〇三年に、深刻な経営危機に陥った銀行を多額の公的資金注入、外部企業から経営陣を招くな

ど画期的な手を打って、経営再建をやりとげました。その経験を踏まえて、帝塚山学院大学の再生への決意と覚悟をお聞かせください。

大学再生の自信ある

りそな銀行で公的資金を注入したときは、もっと厳しい条件のもとで再生しました。帝塚山学院大学を再生する自信はあります。そのための中期計画の概要は、すでに固めています。少し時間が必要ですが、三～五年で形は見えるようにしていきます。

重要なことは、次の五〇年に向けてものごとを動かしていくためには、関係する皆さんの力が必要だということです。大学がこれから進むべき道は、同窓生・保護者のみなさんも含めて、学生・教職員一丸となり、いっしょに力を合わせて誇りを持って学びの場にすることであると考えます。

――最後に

イノベーション起こせる自己革新力もつ若者育てる

帝塚山学院が創立一〇〇周年を迎える節目に、大学が創立五〇周年を迎えますこと、喜ばしくもあり、新たに時を刻むスタートの年としてふさわしい限りです。

これからの時代に社会から求められる人材は、イノベーションを起こせる自己革新力のある人物です。本学の建学の精神「力の教育――意志の力、情の力、知の力、躯幹の力」がまさに活かされ、自学主義教育で育った若者たちが、日本だけでなく世界へ羽ばたく時代になると確信しています。

二〇一五年十二月二十一日、帝塚山学院法人本部で

聞き手　大学五〇周年記念誌編纂委員

中川　謙（なかがわ　ゆずる）

新妻　義輔（にいづま　よしすけ）

帝塚山学院創立一〇〇周年記念式典を終えて

二〇一五年十二月にインタビューを受けてから約五ヶ月たち、この間にも、大学再生に向けて新たな歩みを積み重ねました。まだまだ改革の途上ではありますが、進むべき道がより明確になってきたように思います。

二〇一六年五月八日の学院創立一〇〇周年記念式典では多くの同窓生にお会いしました。また、五月十四日におこなわれた帝塚山学院大学開学五〇周年記念の大茶会や庄野英二絵画展では、旧交を温める出会いもありました。

「帝塚山学院」という誰もが知るブランドを支えているのは、何よりも帝塚山学院を愛する同窓生の皆さまであり、学院をこれまでご支援くださった方々であることを改めて実感することができました。

理事長として、これからの一〇〇年に備えて万全の体制を整える所存です。

（二〇一六年五月末日　追記）

第二部

未来を拓く

大学がたどった五〇年

―帝塚山学院大学五〇年の歩み―

第一章　誕生と発展

第一節　学院半世紀　帝塚山学院大学誕生

総合学園が完成

帝塚山学院大学は、学院創立五〇周年にあたる昭和四十一年（一九六六）四月二十三日に、大阪府南河内郡狭山町（現大阪狭山市）で四年制女子大学として開学した。文学部（日本文学科、英文学科、美学美術史学科）に一八二名の新入生を迎えた。

第一回入学式は学院住吉校舎講堂でおこなわれた。理事長・院長を兼務していた森礒吉初代学長は式辞のなかで、「あなた方は人類平和のための天使になっていただきたい。そのために大学において深く学問を研究し、かつ広い教養を身につけるよう努力しなければならない。大学は学問を究めるだけで、人間としての徳性を忘却するならば、それは重大な過失といわなければならない」と述べた。

誕生したばかりの大学の管理職・役職者として、森学長のほかに次のような人たちが顔をそろえていた。

学　　監　　庄野英二（高等学校長兼務）
事務局長　　三苫光邦（短大と兼務）
学部長　　長沖　一
図書館長　　日野忠夫
教養課程主任　　原　龍之助
教務部長　　澤井幸樹
学生部長　　牧野博彦
教務課長　　田中斐太夫
学生課長　　弘光秀子

入学式のあと、第一期生たちはバスに分乗して狭山の大学校舎を見学した。大学が来るまえは、「高祖原（こだはら）」と呼ばれていたこの台地は、村はずれに広がる雑木林の丘で、土地の人は開発しようなどと考えもしなかった所だ。近くを流れる三津屋川の清流にはモロコ、ハゼ、エビなどが泳いでいた。校地は二万一九一七坪（七万二三二六・一平方メートル）。文学部日本文学科（入学定員七〇名）、英文学科（七〇名）、美学美術史学科（六〇名）の一学部三学科で、開設のときの校舎は二一〇六坪（六九四九・八平方メートル）が予定されていた。

生き生きと活気に満ちた空気がただよっていたが、赤土の丘とコンクリート塊のような校舎が象徴するように、まだ荒削りで、すべてが未完成の時期だった。

建学の基礎をかため新しい学風を樹立することは決して容易ではなかった。当初の法人役員の粒々たる辛苦と卓見、教職員の熱情と教育

行、学生の母校愛に加うるに全帝塚山学院教職員、同窓、父兄、学生生徒の熱い支援を得て着々と創設の難事業が遂行されていったのであった。

（『創立十五周年記念誌』庄野英二　第五代学長の巻頭言）

第二節　準備に動き出してから六ヶ月半で　大学設置許可申請

理事会が帝塚山学院創立五〇周年記念事業の一つとして、四年制大学をつくることを正式に決めたのは、昭和四十年（一九六五）一月三十日だった。この決定をうけて約一ヶ月後の三月二日に、大学設置準備委員会（委員長森礒吉学院長）が発足、日野忠夫・牧野博彦・三苫光邦・澤井幸樹・田中斐太夫の五人が設置準備専門委員に任命され、昭和四十一年（一九六六）四月開学に向けて動き出した。用地の買収を進めながら学部、学科、学科科目について検討。同時に、庄野英二高等学校長（当時）を中心として名門私立大学の視察など情報収集・検討が精力的におこなわれた。さらに、学院高等部から幼・小学部までの全保護者を対象におこなった「新しい大学に希望する学部」など大学設置に関するアンケート調査の結果や文部省当局の大学認可の方針を踏まえ、準備委員会はまず、文学部を設置することを決めた。文学部の場合、哲学、史学、文学の三学科が基本的な学科体系とされているが、最初から考えていた文芸学的志向を生かし、まず文学としての日本文学、英文学、次いで哲学としての美学、史学を美術史学にしぼった。美学美術史学は当時、これらの学科を設けている大学は極めて少なく、新生・帝塚山学院大学の特色になると判断した。

準備委員会でつくりあげた原案は昭和四十年（一九六五）六月十九日の理事評議員会で承認され、女子大学として文学部を開設し、日本文学科（入学定員七〇名）、英文学科（七〇名）、美学美術史学科（六〇名）の三学科、定員二〇〇名にすることが正式に決まった。

これを受けて、開講される学科の編成、担当教員の選考と就任依頼が、連日、精力的に続けられた。私大の建設ラッシュ時代に重なり、有資格の大学教員は引く手あまたで、有能な人材を獲得するのは容易なことではなかった。蒲田政治短大学長、庄野英二高等学校長、長沖一短大教授（いずれも当時）を先頭に、準備専門委員も全員が北は北海道から南は鹿児島まで走りまわり、これぞと思う大学教員を候補者リストにあげてきた。アメリカ留学中の学者にも打診した。

まず、美学美術史学科、続いて日本文学科、最後に難航していた英文学科と実力のある教員の顔ぶれがそろった。同時に、教養課程の教員の体制も整った。九月上旬には、申請する専任教員四〇名（教授二三名、助教授九名、専任講師八名）、非常勤講師二四名が決まっていた。これだけの短時日で、これだけの有能な人材を集められたのは帝塚山学院の社会的評価の高さを物語るものだった。同時に、帝塚山学院短大と高等学校、中学校の内部で蓄積されていた厚い人材の層に負うところが大きかった。

昭和四十年（一九六五）九月二十八日、文部省に大学設置の許可申請書を提出した。膨大な申請書類づくりは五名の準備専門委員の任務で、一週間に一名の割で上京して文部当局の意向を聞き取り、暑い夏の間も、一切の休暇を返上して準備に取り組んだ。三月に大学設置準備委員会ができ、専門委員が本格的に動き出してからわずか六ヶ月半しかたっていなかった。開学に向けての第一の峠は越えた。第二の峠は、十一月十六日の大学設置審議会の現地視察と十一月二十四日の私立大学審議会の視察だった。結局、教員申請者は全員が大学設置審議会の厳重な資格審査に合格、一名の差しかえもなかった。

学部、学科が決まったことで、図書の選定と購入がはじまり、申請の時には一万冊を超える専門書が仮図書室の書架に並び、関係書類も完全に整えられた。

一方、校舎の建築は、五社による入札の結果、昭和四十年（一九六五）七月二十日の理事会で鴻池組が請け負うことが決まった。第一期工事分の費用は二億七八〇〇万円。土地造成と校舎建築の地鎮祭は七月二十四日におこなわれ、突貫工事がはじまった。校舎建築の完成度などを調べるための大学設置審議会の現地視察が十一月におこなわれることになっており、土木と建築を合わせて三ヶ月の工期しかなかった。この難工事を担当した鴻池組の責任者は当時を振り返って、「実に強烈な想い出を残す工事であり、秘かに誇りに思う工事でもあった」と語っていた。

とくに、半地下五階地上四階をもつ塔屋部分の工事進行がほかの全工事の工程を左右するものであったため、時間を切り詰める必要上、土砂崩壊の危険をあえて冒して、工事の完成にこぎつけた。十一月の大学審議会の現地視察のときには必要な工程を完全にやりとげていた。当時の常識では考えられない成果だった。

昭和四十一年（一九六六）一月二十五日、大学の設置申請が文部省に認可された。

三月七日　大学第一次入学試験。

三月三十日　大学第二次入学試験。

第三節　豊かな一般常識、人間としての教養の向上をはかる

初代学長になった森礒吉学院長は四年制大学創立の決定の意味をこう位置づけていた。

大学は今のところ、文学部三学科だが、近代化されたよい装備と、よい教授陣とによって、学院の伝統方針である「力の教育」を実践し、真の実力を養うとともに、個性を尊重し、特技を生かし、しかも情趣豊かな人間育成をめざして、独特の学院風の大学を樹立したい。ちなみに、幼・小・中・高・短大・大学の六部を有する、およそ人間の発育の各段階に応ずる系統的な総合学園は、全国にも「帝塚山」をおいて、他に類の少ないところのものである。（『帝塚山学院月報』一四号）

『帝塚山学院大学通信』（以下、『大学通信』と記す）が昭和四十一年（一九六六）十一月に発刊された。

原龍之助教授が、一号に「大学と人間―学生諸君へ」と題する随想を寄せ、帝塚山学院大学のめざす教育・人づくりの基本方向を示している。

大学においては、とくに、一般教育ないし教養教育の意義と重要性を、あらためて、十分認識する必要があるとおもう。本学は、日本文学科、英文学科、美学・美術史学科の三科よりなる文学部であり、それぞれの基礎的な専門科目がとりいれられているが、それらと並んで、ひろく豊かな一般的常識や、真に人間としての教養の向上をはかるために、一般教育科目として、歴史、文学、美術、心理学、哲学、法学、経済学、社会問題、国際理解、自然科学、生活科学、科学史が配せられていることが注目される。（中略）単に専門的な知識の断片をつめこむだけの人間であってはならない。ひろく豊かな人間的教養と社会的常識を身につけることが必要である。とりわけ、今日は、女性も、家庭にとじこもるだけでなく、複雑な社会のあらゆる層やあらゆる範囲に接する機会が多く、弾力ある良識とひろい社会的常識が必要とされる。それには、こまかい専門の教育をうける前に一般教育科目の学習を通じて、ひろく人生の基本にかかる問題を思索し、自然と社会・経済の基本理論を学び、文学や芸術に関する一般的教養を高め、あるいは、合理的に物事を判断する能力を養い、さらに、国際的理解を深めることが必要である。この意味で、学生諸君は、すべてこの教養科目の学習を重視されたい。

第四節　新しい大学めざし本格的な一歩

創立からちょうど一年たった昭和四十二年（一九六七）四月、学長が代わった。森礒吉初代学長が辞任し、第二代学長に西本三十二元学院高等女学校主事が就任した。高等学校長をつとめていた庄野英二が初代学監（現在の副学長）として大学新体制に加わった。

当時、森礒吉は帝塚山学院の理事長・学院長だっただけでなく、帝塚山学園理事長、学園長、大学長も兼務していた。その責務はきわめて重く、新生・帝塚山学院大学の最高責任者としての学長の職責を加えることには初めからためらいがあった、とみられていた。名誉学長になってから西本三十二が当時を振り返りながら、「昭和四十年ごろからすでに帝塚山学院大学の初代学長就任の要請が同窓会幹部や学院関係者からあった」と話しており、森礒吉初代学長としては、西本に最初から大学を任せる心づもりだったことがうかがわれる。

西本学長は、戦前、コロンビア大学で学び、戦後はとくに放送の学校教育への利用に取り組み、日本放送協会で要職を歴任し、そのあと日本放送教育協会を創設して、放送教育を盛んにするために主導的役割を果たした。放送教育での功績は、その創始者としての名誉だけでなく、その普及と発展、新たな地平を切り拓くために精力的に努力しつづけたことである。

放送現場での実践を積み重ねたあと、国際基督教大学に教授として招かれ、一五年間、放送教育、通信教育、視聴覚教育、教育社会学などにたずさわっていた。実務経験が豊かな教育学者だった。その教育理論は、情報科学、マスメディア志向型で、自分の教育理論を実践に移すことを強く意図していた。

学長就任の決意と覚悟は「新任のことば」（『大学通信』四号）にはっきりとあらわれていた。詩人高村光太郎の「僕の前には道はない。僕の後ろに道は出来る」を引用しながら、次のように述べている。

人生は「一寸先は闇」とも言われ、未知未見の世界との対決である。未知の世界に漕ぎ出すことは、冒険であり、おそろしいことでもある。しかし、それには開拓のよろこびがあり、創造のよろこびが伴う。殊に、若い人たちにとっては、その可能性をためすのに得がたい機会が与えられていることにもなる。こう考えてくると「道のない」ことは、未来への挑戦を意味し、未来への希望を意味する。それと同時に、「自分の歩いたあとに道ができる」という言葉に言いしれぬ意味が見出される。新しい世界を拓くことは楽しい。しかし、多くの苦労の伴うことも覚悟しなければならぬ。

新しい大学には、足りないものも少なくないであろう。しかし、その足りないものに対して、苦痛や不満をかこつのではなく、これを乗り越えて、未完成なものを完成していくところに、よろこびがあり、楽しみがある。また、これを克服していくことによって、人間が鍛えられ、偉大な人格が生まれてくる。これは、多くの大学の歴史の中に見出される事実である。（中略）

わが帝塚山学院大学の設備は、その近代的であるという点については、これらアメリカ一流の大学（注：手前でアメリカの女子大学数校が例示されている）にくらべて、何等遜色のないことを誇り得ると思う。しかし、大学にとって建物や設備のよいことも重要なことではあるが、

それにも増して重要なことは、その教育内容と研究の高さであり、学生の研究および研究活動であり、これを指導する教職員の学問と教育に対する高い水準と熱意である。

この大学は、帝塚山学院創立五〇周年を記念して、学院の在学生、同窓生約一万人と、その両親父兄、および創立以来の学院理事者、教職員の長い年月にわたる願いと希望と祈りと協力によって生まれたものである。わたくしは、これら多くの人びとの意のあるところを、よく汲みとり、新しい開拓者精神をもって、新しい時代にふさわしい「明日の大学」として、立派な学風をつくりあげるために、あらゆる努力を傾ける覚悟であります。みなさんのご協力とご支援を、切に希望する次第であります。

大学づくりに取り組む西本学長の考えの太い底流として据えられていたのは、極端なアカデミズムを排して教養主義を広めることと能率主義の重視だった。それは制度の改変や行政的な指導にあらわれていた。

そのひとつは、教養課程が専門課程の前段階的、あるいは準備的課程であるという考え方をやめて、教養科目の履修は卒業年次までに終えればよいことにした。卒業に必要な修得単位数も、全体として抑制する方針をとった。当初、卒業に必要な履修単位は一三六単位だったが、これを一三〇単位にした。また、語学習得の効率化をはかるため、第一外国語重点の志向がなされ、第二外国語は選択とされた。

これらの措置は、予習六〇分、授業六〇分、復習宿題六〇分をワンセットとする教育システムの実現をめざしたものだった。このため、当然のこととして図書館、ＬＬなどの利用が奨励されたが、図書館もＬＬも西本学長の理想に応えるには程遠い状況だった。

能率主義の重視の面では、通年四単位の科目をできるだけ前期と後期にわけ、それぞれ二単位の独立した科目とするよう指導がなされた。これは専門科目ではほとんど採用されなかったが、教養科目ではかなりの科目で取り入れられた。さらに、二学期制のロスを改善するために三学期制にするとか、週一回九〇分授業を六〇分二回にするなど新制度を提唱したが、実現には至らなかった。

科目の新設も次々行われたが、最も強力におし進められたのは放送講座だった。西本学長が一貫して取り組んできた学問、教育上のテーマである放送教育の「大学版」ともいうべきものだった。この科目はほかのどの大学にもおかれていなかった。最初は、放送大学の番組として放映された「日本文学の思潮と作品」を主教材として、長沖一文学部長、瀬川武美助手の担当、西本学長、平田啓一助教授（いずれも当時）の協力という四人掛りのかたちで開講され、その後「日本文化史」「言語と思考」「日本語の世界」の三つがつけ加えられた。

このほか、昭和四十四年（一九六九）から始めていた留学制度は、昭和四十七（一九七二）年度から国庫助成金の交付を受けるなど帝塚山学院大学の特色となった。

西本学長の在任期間は二期八年だった。その間に打ち出された構想がすべて定着したとは必ずしも言えないが、一貫して保守化を戒め、社会的、国際的情勢に対応する柔軟で創造的な大学を構想しつづけたことは、学院大学の将来にとっての「西本時代」の意義として評価されてきた。

第五節　最初の卒業生一七六名巣立つ

大阪・千里で日本万国博覧会が開かれた昭和四十五年（一九七〇）の三月七日に第一回卒業式をあげ、一七六名の最初の卒業生が社会に巣立っていった。

西本三十二学長は昭和四十五年（一九七〇）四月九日発行の『大学通信』一〇号で、大学の「新たな明日」に向かって踏み出す決意を語った。

一九七〇年代は、進歩の年であり、発展の年である。（中略）日本万博は、人類の進歩と調和をモットーとし、その国際的、科学的意義とともに、その文化的、教育的意義は高い。（中略）わが帝塚山学院大学は、「明日の大学」をめざして、国際理解に関する講座をもち、昨年は、カナダとアメリカから留学生を招き、本年はさらに多くの外国留学生を受け容れ、交換学生として、学院大学の卒業生や学生を海外の大学におくることを計画している。

大阪万博は昭和四十五年（一九七〇）三月十四日から九月十三日までの半年間開かれ、入場者は六四二一万人余にのぼった。第一期の卒業生の中から多数が万博のコンパニオンとして採用された。

大学の教育実績をはかる重要な物差しは、卒業生の就職状況である。

第一回卒業生一七六名の約半数に近い就職希望者が「各々志すところに就職して一〇〇％の高い率を示した」（『大学通信』一二号）。昭和四十六年（一九七一）三月二十五日に一八五名が第二回卒業として学窓を巣立ったが、希望者七一名がそれぞれめざすところに就職した。決定率は一〇〇％で一流銀行、中堅企業への就職が増えた（『大学通信』一五号、『創立十五周年記念誌』）。極めて順調にすべりだした。

昭和四十七年（一九七二）卒は前年夏のニクソン米大統領のドル防衛策の発表、円切り上げなどの影響で景気が後退したことが響き、就職決定率が七二・〇％と落ち込んだが、昭和四十八年（一九七三）卒九四・二％、昭和四十九年（一九七四）卒九〇・二％と予想以上に持ち直した。だが、日本経済も円切り上げには勝てず、不況のなか大企業の採用減が目立ち、昭和五十年（一九七五）卒八五・一％、昭和五十一年（一九七六）卒七二・七％と厳しさを増した。長期不況の中ではあったが、昭和五十二年（一九七七）卒九一・九％、昭和五十三年（一九七八）卒八七・四％とかなりの就職率をあげた。産業界の減量経営も進み、景気に微かな光が差しはじめたが、就職戦線はなおきびしく、昭和五十四年（一九七九）卒は八〇・九％にとどまった。昭和五十五年（一九八〇）卒は、前半期景気が予想以上に回復、後半下がりはじめ、採用は少数精鋭主義が強まったが、九〇・一％、昭和五十六年（一九八一）卒九一・〇％と厳しい状況の中でも、好結果をあげた。

昭和五十七年（一九八二）卒の就職決定率は、九一・八％、昭和五十八年（一九八三）卒九六・六％、昭和五十九年（一九八四）卒九四・九％、昭和六十年（一九八五）卒九五・八％、昭和六十一年（一九八六）卒九六・四％と高い就職率を保った。大卒女子の就職環境は一時、「土砂降りも覚悟しなければ」といわれたが、景気が回復から拡大に向かい企業の採用意欲も強まり、大卒女子にも薄日がさし、晴れ間が広がっていた。

第六節　キャンパスの緑化

学院大学は開学から一年余たち、校舎も管理研究室棟・教室棟・大教室棟はすでに整い、昭和四十二年（一九六七）六月二十日には、講堂兼体育館（延面積二一七五・二七平方㍍）が完成した。

体育館としては、バスケットコート一面、バレーボール二面、バドミントン二面が配置され、高さは約一〇㍍の天井は平らで、水銀灯を含めたカクテル光線が柔らかくフロアーを照らすようになっている。講堂としては、体育フロアーの東側に間口一二㍍、奥行六㍍のステージがある。緞帳は庄野英二学監（当時）の油絵を原画として作ったもので、大学の敷地に変わる前のこの地に広がっていた果樹園が描かれており、文学と芸術を象徴的に表したものだ。

収容人員は一階フロアーに一五〇〇名、二階のロビーおよびギャラリーに二〇〇名。

運動場（一万二三〇〇平方㍍）も時を同じくして完成。テニスコート、一〇〇㍍直線コース、一周二〇〇㍍のトラックがあり、フィールドには芝が植えられた。運動場の西側には、観覧席や野外舞台などに利用できる土手があり、芝が張りつけられ、緑が少なかった当時の大学敷地に色取りを添えた。

建物・施設が着々と整っていくなかで、もう一つ重要なテーマはキャンパスの緑化だった。大学の創立以来、学長を補佐していた庄野学監は「一年中、花を咲かせたい」との思いから一貫して大学の緑化に専念。「文学や芸術の心は講義や理屈から学ばれるのではなく、思索と美しい環境をつくることが、自ずから文学や芸術の心を学ぶのに役立つ」といつも語っていた。

キャンパスのある高祖原（こだはら）はもともとは、ブドウ、ナシ、ミカン、モモがたわわに実る果樹園だった。だが、丘を削り、谷を埋める造成工事のため、大学が発足した当時は見る影もない、赤土の山とコンクリート塊の集りのような姿になっていた。これを再び緑に返し、狭山町（当時）の郷土の鎮守の森のようにしたいというのが庄野学監の念願だった。上述のように、完成した講堂兼体育館の舞台に懸ける緞帳の原画「果樹園」が、オーストリアの詩人リルケの詩集「果樹園」に触発された庄野学監の作品であることからも、その強い願望が推しはかられる。

荒涼たる赤土の高祖原の丘・狭山キャンパスが、学内外の協力者、年度ごとの卒業生、そして黙々と汗を流しつづけた校務員たちのたゆまぬ奉仕によって、奇跡的に「森の学園」に姿を変えた。この一歩一歩を、「キャンパス樹譜　植樹十年誌」（『大学通信』三一号）が克明に記録している。筆者は、その時の庄野英二第三代学長だ。

大学に始めて植樹して下さったのは、昔から帝塚山に住んでいる新出芳太郎さんというお爺さんであった。大正六年、帝塚山学院が大阪住吉の帝塚山の地に開校した頃、帝塚山に家があったのは、新出さんと私の家ぐらいであった。新出さんは植芳という植木屋さんを一族でやっていて、住吉帝塚山学院開校以来ずっと、植木のことはお世話になっている。大学が出来た時は、芳太郎さんはもう老人になって、仕事は子供にまかせていた。芳太郎さんは大学開設のお祝いをぜひさせてほしいといって、桜の苗木を三〇〇本寄贈して下さった。そして植

植樹中の校務員
（『創立五十周年記念誌』）

狭山キャンパス木花里園（もつかりえん）

芳さん一同の手で記念植樹をして下さったのである。勿論奉仕して下さったのだ。老人は桜の咲くのを見ることなく、その後他界してしまわれた。植木屋さんとして一生を過ごしてきた新出さんは、一〇年後に桜が成長して咲くことも、五〇年後に空を圧する大樹となることをも、苗木を植えた時からすでに心に描いていられたのであった。

また、「キャンパス樹譜　植樹十年誌」は、昭和四十三年（一九六八）の先生たちの植樹の取り組みにも触れている。「西本（三十二）学長先生（当時）が千早村からクスノキの大樹を運んできて教室棟前に植えて下さった。これでコンクリートの庭が一挙に面目を一新した。しかし、こんな巨木が根づくものか、また大風で倒れてケガ人をだすのではないかと案じられたが、無事に根づいてくれたのは有難いことであった」と綴っている。さらに、「西本学長は、このクスノキの値段も移植費用のことも一切おっしゃらなかった。後で、一本の値段が六〇万円であることを知ってわたしは感激した。移植費用もふくめてすべてご寄贈して下さったのであった」と付け加えている。

時計塔のある正面石段に、ライラック、白ヤマブキ、ヒラド、バラ、サザンカ、エニシダ、ジンチョウゲを植えたのは、庄野学監（当時）だ。

この他にも、昭和四十二年（一九六七）秋から、昭和四十三年（一九六八）春にかけて、研究室棟前に、タイサンボク、ウバメカシなど数十本の木が植えられたが、これは学生の家からの寄贈だった。

昭和四十五年（一九七〇）三月の第一回卒業生は、母校への記念植樹料として二〇万円を贈り、泉佐野の植木屋に頼んで、キンモクセイ四〇本をグランドの南北両縁に植樹した。卒業生の記念植樹が慣例となり、その後も

学院大学狭山キャンパスに移設された茶室
（『帝塚山学院年譜』）

移設された十三重の塔

つづけられた。

昭和四十六年（一九七一）三月の第二回卒業生はイチョウ四〇本、昭和四十七年（一九七二）三月の第三回卒業生はドイツトウヒを四本、教室棟の前に植えられた。この年の七月には山本アヤ学院理事から寄贈をうけた茶室と石塔のある日本庭園が完成した。茶室と日本庭園をふくむ区域が、山本藤助元理事長別邸の呼称に因んで「南華園」と名づけられた。

昭和四十八年（一九七三）三月の第四回卒業生はクスノキ二〇本をグランドの南側に植樹、昭和四十九年（一九七四）三月の第五回卒業生はシュロを校舎前のフェニックスの間に記念植樹した。

このほかにも、母校への就職記念に、あるいは退職・結婚記念に、他大学の大学院合格のお祝い、こどもの誕生を記念してなど、ある人は一本の樹を、ほかの人は何百本の木を、「善意の花と緑」が届けられた。ニセアカシヤ、ツツジ、トチ、ヒラド、ポプラ、ヤナギ、マツ、エニシダ、カンナ、モミノキ、ライラック、ナンテン、レンギョウ、ウツギ、コスモス、ツタ、ピラカンサ、クチナシ、ツバキ、アジサイ、ミモザ、ユーカリ、フェニックス、クスノキ…みんなが学院大学のキャンパスを緑にしようと努力を惜しまなかった姿が浮かび上がってくる。大学は一歩一歩また一歩とキャンパスの緑化がすすみ、めざす花と緑の「森の学園」に近づいていった。

赤土の丘がいま、緑におおわれているのを目にしているが、この陰には、人目につかない下積みの仕事があった。高祖原は全体が酸性土で樹木が育ちにくく、土質の改良や施肥に大変な労力がいったが、そのほとんどが当初三人しかいなかった校務員の奉仕活動で行われたのもそのひとつだ。

学院大学開学のときからコツコツと取り組んでキャンパスの緑化、「森

の学園」づくりが、社会から評価された。大学の狭山キャンパスが平成元年（一九八九）十二月一日付で、大阪狭山市の「緑化推進及び保存樹木等指定地域」になった。この指定地域は、健康で文化的な生活環境の形成をはかり、大阪狭山市の豊かな緑を守り、つくり、育てることを目的に設けられた。この指定をうけると助成金が交付され、樹木の配布をうけることができる。

平成元（一九八九）年度は、オオシマザクラ二〇本、ソメイヨシノ二〇本、キンモクセイ一〇本、モクレン一〇本、サツキ三〇本、ツツジ五〇本、ライラック三〇本と合わせて一七〇本が届いた。

さらに、大学の豊かな緑が、大阪府の「みどりの景観賞」の優秀賞に選ばれ、平成八年（一九九六）九月十二日に大阪市西区の建設交流館で授賞式が行われた。受賞にあたって、「キャンパスの周囲に密植された木々が、緑豊かな丘陵景観をかたちづくっている。南河内の景観は、古墳群をはじめとして緑豊かな丘陵がその特徴であったが、近年は、開発によってそれらが消失する場合が少なくない。こうした中にあって、帝塚山学院大学は、広い敷地と地勢を巧みに活用し、地域のランドマークとしての緑豊かな丘陵景観となっている。また、卒業生をはじめとする有志の記念植樹によって年々、緑が増している点も評価に値する」との講評を得た（『帝塚山学院通信』四四号）。

学院大学は開学以来、植樹に力を入れ、卒業記念などの折にも木々を植えてきており、これが今回の指定のきっかけになった。「緑の学園」をつくろうという旗印を掲げ、教職員、学生、同窓生、保護者が心をひとつにして取り組んだことは、「赤土の丘」を緑豊かな丘陵に変えただけでなく、キャンパスに生き生きとし空気を生みだしていた。

第七節　飛躍と発展の時代を迎える

昭和五十年（一九七五）四月、第三代学長に庄野英二教授が就任した。選挙による推薦制度が施行された最初の学長だ。大学の教育方針として三つの柱を打ち出した。

一、「一に力、二に力、三に力」の実力主義
一、個性の尊重
一、高い志と気品

帝塚山学院では創立当初から、「上品」指標としていたが、「上品」をムード的なものと誤解されてはいけないので、高い志と気品と私が書きかえたのである。高い志があれば、気品も自から備わってくるので二つ重ねる必要はないかもしれないが、私は念を入れておいた。

（『大学通信』二八号）

さらに、庄野英二学長は、昭和五十一年（一九七六）六月に発行された『帝塚山学院広報』創刊号で、この年の四月に行われた入学式での式辞の要旨を再録するかたちで教育方針をくわしく説明している。

力の教育という言葉には、いろいろな意味もふくまれていることと思う。人格の力、学問の力、不撓不屈の体力実行力、意志の力もあろう。私は、この力の教育を「独立心を育てる」こと、と一つの解釈をしてみたいと思っている。アメリカ合衆国は、本年独立記念祭を迎え

る。一七七六年にフィラデルフィアで、Libertyを旗印にアメリカは独立宣言した。独立とは、他人に頼らないことである。依頼心を持たないことである。今日の日本の若い世代は過保護の中で育ってきた。その結果あまえの心情が抜きさしならないところまでしみこんでいるのを無視することができない。

何にも妨げられず、自由に思索し、遊び学ぶことのできるのが大学にいる間の特権である。ただし、自分で蒔いたたねは自分で刈ることだけは覚悟しておかねばならぬ。どうか諸君、これからこの丘の上で考える葦になっていただきたい。

「庄野英二学長時代」の新たな歩み、学生に向きあう姿勢を『創立十五周年記念誌』（昭和五十七年二月十日発行）の座談会「発展と充実――飛躍の時期を迎えて――」が浮き彫りにしている。

出席者　北村ひろ子（教授）　瀬川武美（専任講師）
田中斐太夫（教授・教務課長）　西田文男（助教授・図書課長）
弘光秀子（教授・学生課長）　山田博光（教授）
山本節子（教授）　吉野大資（教授・留学生課長）
司　会　牧野博彦（副学長）

以下、主な発言を収録する。

一　親切に厳しく

・学生の指導については「親切に厳しく」といつも言っていた。これは留年生の増加にあらわれてきた。昭和四十九年までは留年者はいなかったが、昭和五十年以降に急に増えた。

二　芸術的雰囲気

・学問と芸術を一体のものとして雰囲気づくりに力を入れていた。学長自身が描いた絵を廊下や部屋にかけ、美を愛する心を、教えるということではなく自然な行為の中で育てようとしていた。庄野英二学長は旅行中など画帳をはなさなかった。

三　アカデミズムとの調和

・庄野英二学長の理想の学校は、人格教育、教養主義に要約できる。この両方が歩み寄った、他の大学にはない新しい学問、雰囲気ができている。

・アカデミズムと教養主義という二つの立場のたたかいを通して、この大学が形成されていくのではないか。路線がひかれてしまっているのではつまらない。真摯な学問研究の志なしに、大学における教養主義といったものはありえない。

・伝統的な学問体系と庄野学長の理想とされる大学の内容とは整合的でない面もあるが、現実には両者が一つとなっている。

四　読書演習・特別講義

・教務関係の特色としては、読書演習や特別講義がある。読書演習は昭和四十五年に始まり、最初、日本文学科で出た案だったが、全学でとらせることになった。学生に読書体験を積ませ、習慣をつけさせるのが目的だった。（注：全教員が分量によってA類、B類、C類に分けてつくった推薦図書目録のなかから、任意に本を選び、決められた冊数を読み終え、大学所定のレポート用紙二枚以上を書き、読書カードを添えて提出。教員が批評や意見を書き、学生に返す。「読書演習」は空き時間に図書館や自宅での読書が原則だが、必修科目で二単位になる。読まな

ければならない冊数は、文庫本一冊分の文学書や、岩波新書、中公新書あるいはそれと同じ程度の単行本〔A類〕に換算して、一年間で一〇冊以上。B類は、A類の二冊以上四冊以下に相当する書籍。C類は、A類の五冊以上に相当する書籍。目録以外の本でも関係の教員の許可を受けたものであればよい。)

- 特別講義は昭和五十四年から始まった。迎えた特別講師は阿川弘之(作家)、桂米朝(落語家)、矢代静一(劇作家)、山室静(評論家)、阪田寛夫(作家)、外山滋比古(当時お茶の水女子大教授)といった、各界の第一線で活躍する人たちだった。
- この時期、学生数も増加し、新任の先生も増え、専任教員の充実がはかられた。また、科目数が広がってきたため非常勤講師の数も増えていた。

五　図書館、AVセンターと校門

- 施設面で大きいのは、図書館とAVセンターの建設。図書館は創立以来の懸案で昭和五十一年六月二十二日に竣工、ようやく実現した。この時は大学の教員や職員も寄付をして、大学の熱意を示した。その太い底流には、図書館は大学の学術研究の象徴であり、未来の可能性を秘めているとの思いがあった。
- 所蔵図書の増加の傾向は、昭和五十年を境に急に強まってきた。それまで年間の増加数は三〇〇〇冊ぐらいだったが、昭和五十年からは五〇〇〇冊を超えるようになり、さらに、寄贈図書を含めると最近は一万冊ぐらいになっている。学長をはじめ理事会の理解の結果だ。
- それ以前は図書予算を増やしてもらうのは大変困難だという雰囲気だったが、昭和五十年ころからはあまりそういうことも意識しなくなった。過去には予算が増えないどころか年度途中で一割カットなどと言われたそうだ。現在では全体で年間四〇〇〇万円程度になっており、予算編成に支障をきたさなくなった。
- AVセンターは昭和五十三年九月から使用がはじまった。図書館の開館から二年遅れた。AVセンターはすでに退職している西本三十二教授(二代学長)の考えにもとづいて企画、運営されている。
- 学生部の長年の念願だった門が昭和五十二年にできた。五十三年には守衛が置かれた。出来るまでは、外部の人が無断で来て、グラウンドでソフトボール大会やゴルフの練習をしょっちゅうやっていた。女子大としては校門の出来るのが遅すぎた。男子学生らが勝手に車を乗り入れるなど自由に入りこむので本当に困った。
- 門柱の文字は曰くのある文字で、美術史学科の先生方が苦心して合成したものだ。漢籍のあちこちからとられたもので、一字一字拡大したり合成したりしてまとめたものを石屋に渡して彫ってもらったのだ。一字一字、書いた人はわかっている。元々は拓本からとったものだ。

昭和五十四年(一九七九)三月三十一日、庄野英二学長は任期満了で辞任。原龍之助学院長が四月一日、大学学長代行を兼務、六月十五日に、学院長兼務のまま第四代学長に就任した。

『創立十五周年記念誌』の座談会「発展と充実──飛躍の時期を迎えて──」(司会　牧野博彦副学長)は、「原龍之助学長時代」の実績に移る。

講演する英国の女流作家マーガレット・ドラブル女史
昭和55年(1980)11月13日　山本節子・学院100周年記念誌編纂委員所蔵

六　奨学金制度

• 原龍之助学長時代で挙げられるのは奨学金制度。それまで困窮学生のための制度をずっと求めていたが、実現しなかった。原学長になって突然、話が出て、昭和五十四年度に制度化され、五十五年度から帝塚山学院大学奨学金制度が実施された。財政的余裕が出てきたということもあるが、社会一般がそうなり、大抵どこの大学でもやっている。在学生に対する給付制になっていて、返済の義務はない。まだ、受給者の人数が少なく、せめて二桁にしてほしい。家計状態が在学中に悪くなった学生の救済が目的だが、年度途中から家計が悪くなった人の救済はできない。年度初めに枠が一杯になってしまっている。普通そんな場合は学費免除とか分納制度があるが、本学の場合は温情的にケースバイケースになっていて、制度化していないのが問題だ。

七　国際化へ　地域社会へ

• 昭和五十五年度の行事で十一月のマーガレット・ドラブルの招聘は、画期的だった。その後、毎年、外国人作家の招聘ができるようになった。この企画は元々、本学の英米文学会の発案ではじまったもので、帝塚山独自のユニークなものになる可能性がある。実際、昭和五十七年十一月には、代表作「黄金のノート」で知られるイギリス人の女流作家ドリス・レッシングが来校、講演した。レッシングは平成十九年にノーベル文学賞を受けた。

• 内地留学制度の発足も原龍之助学長時代だ。昭和五十四年の内田賢徳講師が最初だった。海外留学制度は昭和五十三年ごろに教授会で審議されたが、その後正式には決まっていない。

・原龍之助学長は盛んに国際化社会の中での大学の使命を強調していた。海外帰国子女の受け入れについてはよく意見をもとめられた。これは庄野英二学長時代からあったが、原龍之助学長も資料集めなどをしていた。海外帰国子女受け入れを制度化している大学は国公立で各一、私立で一二校しかなく、まだ少ない。昭和五十六年四月から再び庄野英二教授が第五代学長になり、第二次庄野学長時代に入った昭和五十六年にその制度が実現した。

・原龍之助学長は地域社会とのつながりも強調されており、長い間懸案になっていた公開講座も原龍之助学長の時代の昭和五十五年にはじまった。

八　来るべき一五年

・英文としては留学制度をもっと拡充してほしい。せっかくその制度がありながら余りに少人数ではさびしい。予算や組織の点で強力なものにしていく必要がある。対外的に宣伝効果は大きく、受験生も、それを聞いて来たというのが多い。海外留学制度の発足以来、毎年継続して国の助成金を受けている大学は少なく、全国でも六大学しかない。近畿では本学だけ。

・大学志願者の絶対数が減少していく傾向を考えると本学も将来展望をしっかりと持って特色を出していかなければならない。

・四年制女子大で文学部というと、学生も真剣に将来とのつながりを考えるようになってきている。帝塚山学院六五年の歴史を生かした小規模で価値ある大学として存続し得るよう必死に考えていかねばならない。

・学院六五年の伝統をどう生かすかという面と、新しい社会的要請にどう応えていくかという面、もう一つは学問の本質を追求していく面と三つのものがからまって何かができていくのだと思う。総合学園の中の大学として責任を十分自覚してこれからの一五年を切り開いていきたい。西本三十二学長時代のあとをうけた庄野英二学長時代は、西本時代とはまた違った特徴がはっきり出た時代だった。

今も息づく庄野英二学長の残したもの

大学狭山キャンパスの図書館と一号館の間にある庭園・木花里園（もっかりえん）に、半円形の文学碑がある。二度にわたって学長をつとめ、著名な児童文学者であり、自らも絵筆をとっていた故庄野英二名誉学長の記念碑だ。縦一メートル、横一・五メートルの岡山産の白石に、代表作『星の牧場』の一節が自筆の文字で刻まれている。

レモンのような日の光が、かじ場をのぞきこんでいた。鈴がひとつ
できあがるたびにモミイチは月の光にかざして鈴をふってみた。

「星の牧場」より　庄野英二

碑の裏側には「わが大学を創立し、こよなく愛し続けた庄野英二先生をしのび　この文学碑を建つ　先生の魂魄　とこしえにここに留まらんことを　平成六年十一月二十日　帝塚山学院大学　帝塚山学院大学同窓会」とある。

庄野英二は、野間児童文学賞、「赤い鳥」文学賞、巌谷小波文芸賞などたくさんの賞に輝いていた。戦争体験を中心に、幻想的な手法と厳しい文

『星の牧場』文学碑

章で青少年にも楽しまれる著作などを集め、昭和五十四年（一九七九）四月から刊行されていた全一一巻の「庄野英二全集」が昭和五十五年（一九八〇）三月に完結した。

庄野は美術にも造詣が深く自ら絵筆をにぎり、創作活動をしており、素朴で暖かな作風は学内外に多くのファンをもっていた。大学には、平成十年（一九九八）十一月二十六日にご遺族から寄贈された三〇点を合わせ作品は五九点、法人全体では七三点となった。「大学のキャンパスに先生の作品をいっぱい飾って、美術館にしてしまおう」（大谷晃一第八代学長）の提案を受けて、「庄野英二記念美術館運営委員会」（館長　河崎良二教授）が組織され、平成十一年（一九九九）七月二十五日の大学キャンパス見学会に向けて開館の準備に入った。美を愛する心が自然な行為の中で育つことを願って、「春雪浅間」「読書する女」「赤い燈台のある港」「火の島の火の鳥」「果樹園」「バラ」「SUMMER 1984 AFRODITE」「赤いソックスの少女」「読書」など水彩、油彩の作品が、廊下やホール、図書館、学長室、応接室などに飾られており、帝塚山学院大学の持つ豊かな芸術的学問風土を今に伝えている。

庄野が情熱をこめて取り組んだのが、年一回刊行の雑誌『こだはら』だ。昭和五十三年（一九七八）十二月二十日に創刊された。誌名は、総数六〇名の教職員からの応募があり、編集委員会で大学のある土地の古称である「こだはら」に決めた。題字は、版画家の棟方志功の版画からご家族の好意で寄せ字された。表紙は創刊号からカラーで、平成十二年（二〇〇〇）の第二二号以降は、「庄野英二記念美術館」の絵画が表と裏表紙に順次使わ

れている。

創刊号の「あとがき」で、刊行の意図を庄野学長が書いている。「教員と学生、あるいは教員と父兄の方たちと気楽に肩のこらない話し合いの場を持つことが出来れば結構なのであるが、その機会を作ることもなかなかに難しい。学生が四年間在学しながら、アドバイザーの先生と、ゼミナールの先生としか交流がないということであれば、これは余りにも味気なさすぎる。何とかよい方法はないものだろうかと考えていた結果いくらかでもその溝を埋めようとして編集したのがこの雑誌である。教員の研究余録、研究の周辺、エッセイなどを書いて頂いた。将来希望があれば学生や同窓生のためにも紙面を提供したい」。この雑誌が教職員はもちろん、学生、卒業生などの心の架け橋になってほしいとの願いを込めていた。この精神はそのまま引き継がれている。平成七年(一九九五)発行の『こだはら』第一七号は、「庄野英二先生追悼特集」を組んだ。

だれからも親しまれていた巻頭詩をかざっていたのは、詩人でもあり映画評論でも知られていた杉山平一帝塚山学院大学名誉教授だった。『こだはら』二九号(平成十九年三月十日発行)に人々を励ます「希望」という詩がのっている。

夕ぐれはしずかに
おそってくるのに
不幸や悲しみの
事件は
列車や電車の
トンネルのように
とつぜん不意に
自分たちを
闇のなかに放り込んでしまうが
我慢していればよいのだ
一点
小さな銀貨のような光が
みるみるぐんぐん
拡がって迎えにくる筈だ
負けるな

平成二十四年(二〇一二)五月十九日に亡くなった。九七歳だった。平成二十五年(二〇一三)発行の『こだはら』三五号は、特集「追悼・杉山平一先生」を組んだ。

大学図書館が編集・発行の実務を担い、創刊から途切れることなくつづいて、平成二十六年(二〇一四)に三六号を数えた。

第八節　新しい図書館の誕生

一　大学図書館の新築

学院大学の創立当初は、独立の図書館はなかった。B棟三階の一画（三一三号室～三一六号室）に、閲覧席六六席の小ぢんまりした図書室として産声をあげたのは、昭和四十一年（一九六六）九月十二日だった。蔵書数は哲学、歴史、社会科学、自然科学、工学、産業、芸術、語学、文学それに総記をあわせ一万七二七冊。雑誌は一二六種（和雑誌五一種、洋雑誌七五種）だった。初代図書館長には、日野忠夫教授が就任した。

昭和五十（一九七五）年度には、日本文学科の管理に委ねていた日文合同研究室（一〇六号室）の図書を図書館管理に移し図書館分室として再発足。手狭になった図書室から、自然科学・工学・産業部門の図書を食堂棟二階の二二二号室に移したり、各研究室に図書を預かってもらっていた。このように、資料が三ヶ所に分散しているのは管理、運営上も不便であり、図書館建設が切実な問題として浮かび上がってきた。

学院創設六〇周年記念行事の一つとして、大学図書館の新築が昭和五十年（一九七五）八月九日の学内理事会で承認された。この年の四月に就任していた庄野英二第三代学長が九月五日の学内理事会で「図書館は学術研究の象徴であるから厳粛、美観、能率性など十分に考慮する」と報告した。庄野学長は「今後一〇年間、有効に活用できる図書館」を作るのを、基本方針としていた。昭和五十年（一九七五）十月末に地鎮祭を行い、木花里園南側につづく平地に建築されることになった。経済不況のなかで、大学図書館の建設に踏み切ったのは、理事会の勇断だった。

これを受けて、昭和五十年（一九七五）十二月に開催された大学同窓会は「大学図書館建設並びに充実」のための運動を展開することを決めた。大学図書館の鉄筋新築工事費・事業費は二億七一二〇万円。庄野英二学長は昭和五十一年（一九七六）六月に発行された「帝塚山学院広報」の創刊号で「大学としましては、同窓会だけの好意に甘んずることなく、同窓生と一体となって教職員、在学生、父兄の方々にもご協力を呼びかけるべく目下計画を立案中です。すでに図書館の工事は進捗し、外観だけは整いましたが、これから内部施設が整備される段階に入っています。先生方、学生諸君の研究は一日としてゆるがせにすることはできませんので急いで工事に着手したのでありますが、資金はまだこれから私学振興財団その他から金策を仰がねばならない実情であります。大学の教育と研究の中心である図書館充実のために物心両面でのご協力をお願い申し上げます」と呼びかけた。

大学同窓会が昭和五十一年（一九七六）四月一日から昭和五十三年（一九七八）五月末日まで取り組んだ「大学図書館建設並びに充実のための募金」に、総額七七〇万三九四四円が寄せられた。

昭和五十一年（一九七六）六月二十二日に竣工した。当初はかなり大規模なものを計画したが、オイルショックによる資材の急騰などの事情により、計画よりはかなり縮小したものになった。

しかし、完成した図書館は鉄筋コンクリート二階建て、床面積約一一二六平方メートル、座席数二一八、蔵書収容力約一〇万冊と堂々たるものである。

一階は開架閲覧室、書庫、マイクロ・リーダー室、コピー室及び事務室。開架閲覧室は、レファレンス・コーナー、雑誌コーナー、ブラウジング（閲覧）・コーナーに分かれている。

二階は自由閲覧室（自習室）になっている。

新館への図書の移動は夏期休暇中に行い、新しい図書館は九月八日に開館した。

昭和五十一（一九七六）年度に図書課長のポストを新設し、組織面の整備をはかった。昭和五十二（一九七七）年度には、これまでの分類目録と書名目録に著者目録（カード）を加え、「雑誌目録」も整えた。

昭和六十一年（一九八六）九月三日の理事会で、牧野博彦副学長が大学図書館の増築問題で説明した。

1．増築の必要性について

(1)大学創設以来二〇年たち、図書館蔵書も一三万冊を超え、現在の書庫では収納不可能な状態になっている。

(2)本年七月二十二日、文部省による大学の視察が行われたが、図書館の内容の充実を勧告され、とくに書庫の増築を可及的速やかに実施するよう指導があった。

(3)現在の大学生の急増急減対策の一環として、新学科増設を検討しているが、これに伴う研究室、教室の増設が必要になっている。

2．増築内容の概要

(1)全体の概要

位　置：現図書館南西隣接空き地

建築面積：六六九・五平方メートル（二〇二坪五）

延床面積：一九四六・六平方メートル（五八九坪八）

構造規模：RC一部S造

地下（一部）一階　地上三階

(2)使用区分

一階：書庫（約八万冊収納見込み）

二階：教室（約一五六人収容のもの一室、一九〇人収容のもの一室　但し一階書庫が満杯となり次第逐次書庫に改造使用の予定）

三階：研究室（ゼミ併用のもの九室、合同研究室一室）

(3)工事スケジュール

着工　昭和六十二年四月

竣工　昭和六十三年二月十五日

(4)概算予算

約五億円

審議の結果、全員異議なく承認可決した。

大学図書館の増築工事の着工に先立って、昭和六十二年（一九八七）三月三十一日に地鎮祭がおこなわれ、四月一日から工事が始まった。大学図書館の新館（延べ一九四六・六平方メートル）は昭和六十三年（一九八八）二月十五日に完成した。

二　蔵書の充実

開学当初一万七二七冊だった蔵書は、「蔵書をもっと増やしてほしい」という利用者の要望に応えるために、年々その充実につとめた。昭和五十一（一九七六）年度五万一五七五冊、昭和五十五（一九八〇）年度末には、九万五三五三冊、昭和五十七（一九八二）年度末には約一一万五〇〇〇冊、昭和六十一（一九八六）年度一三万一〇一一冊となった。また、逐次刊行物は、昭和四十一年（一九六六）に一二六種（和雑誌五一種、洋雑誌七五種）だったが、

二〇年後の昭和六十一年（一九八六）には一〇〇四種（和雑誌八七八種、洋雑誌一二六種）に増えた。とくに、昭和五十（一九七五）年度以降の蔵書の伸び、充実には著しいものがある。蔵書・資料の収集は、そのほとんどは大学独自の予算で購入したものだ。それ以外に、蔵書の中には、まとまったコレクションとして寄贈されたものがある。それらには、寄贈者名あるいは所蔵者名を冠した文庫名を付している。

〈杉道助文庫〉（六五八冊）　ご遺族から寄贈されたもので、美術書が中心。

〈吉田留三郎文庫〉（九一七冊）　演芸作家・上方芸能の研究者として知られる。ご遺族から寄贈されたもので、上方芸能や漫才、落語などの庶民芸能に関するものが中心。さらに、浪速叢書や、坪内逍遙訳のシェイクスピア全集などもあり、いままでの大学図書館の蔵書にないものが多い。

〈井島勉文庫〉（一六〇〇冊）　ご遺族から譲り受けたもので、美学・美術史に関するものが中心。

〈西本三十二文庫〉（約一二〇〇冊）　本学の学長を務めた西本三十二名誉学長から寄贈されたもので、教育学、放送教育に関するものが中心。

なお、杉道助文庫、吉田留三郎文庫、井島勉文庫、西本三十二文庫は、二〇一四年現在、一般図書の中に収められている。

関西学院大学から帝塚山学院大学国際文化学科に着任した大島襄教授からは、オセアニア関係図書一五八九冊と学術雑誌三七冊が寄贈された。

二度にわたって学長をつとめた庄野英二の名を冠した「庄野英二コレクション」が書架の一角を占めている。現役だった昭和五十七年（一九八二）以前から贈られた自身の著書だけでなく、平成九（一九九七）年度にはご遺族から二〇五五冊（和書二〇四二冊、洋書一三冊）が寄贈された。児童文学が中心だが、自分の作品だけでなく、坪田譲治、串田孫一など著名な作家のサイン入り献呈本も数多くある。このコレクションには貴重な自筆原稿や日記、書簡類も含まれている。これらについては、貸出はしていないが、館内での閲覧はできる。

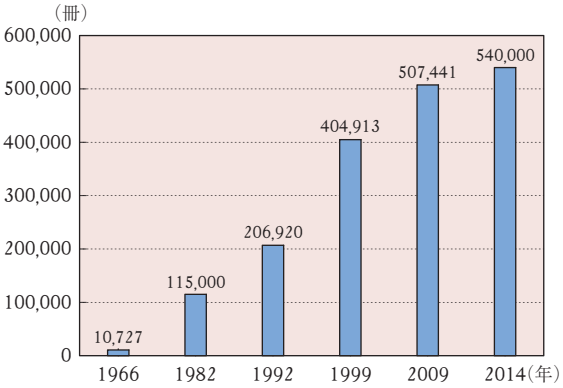
大谷晃一第八代学長の名を冠した「大谷晃一コレクション」も狭山館にある。平成十一年（一九九九）四月に、生涯にわたって全蔵書を寄贈するとの覚書を大谷学長と学院大学図書館長との間でかわし、それまでにすでに寄贈されていた三〇〇余冊に加え、第一回寄贈書として五〇四冊を、平成十二年（二〇〇〇）十二月に七六〇冊、平成十三年（二〇〇一）十二月に五一四冊、平成二十四年（二〇一二）三月に七四四冊、平成二十五年（二〇一三）十二月に五九一冊を受け入れてきた。大谷元学長は「大阪学」シリーズなどの著書で知られた作家でもあったが、平成二十六年（二〇一四）五月二十五日、九〇歳で死去した。

学院大学の図書館が蔵書の充実に力を注いできたことを物語るのが、狭山キャンパスの新館一階の書庫にある書架を埋めている「四庫全書」一五〇〇冊だ。全国の大学でも所蔵している図書館は三〇館ほどしかない。中国・清朝の最盛期に君臨した乾隆帝（けんりゅうてい）が入手できる限り集めた書籍、総計三四六二種、七万九五八二巻を「四部（経・史・子・集）」という伝統的な分類法で編集させた中国最大の叢書。さらに、「四庫全書」編纂以後、清末までに著された学術的著作を中心に、五二一二種の書籍を収録し、二〇〇二年に中国・上海で出版された「続修四庫全書」もそろっている。

平成三年（一九九一）三月、大学図書館所蔵の「梅塵本一茶八番日記」が、影印本（写真版）になった。これは、昭和六十一年（一九八六）に大学図書館が俳人粟生純夫氏旧蔵の小林一茶関係本一七七冊を購入したなかにあった。

平成四年（一九九二）には全所蔵冊数は二〇万六九二〇冊と二〇万冊台を

年　度	全所蔵図書数(冊)	年　度	全所蔵図書数(冊)
平成12(2000)	416,965	平成19(2007)	489,436
平成13(2001)	428,182	平成20(2008)	498,955
平成14(2002)	440,293	平成21(2009)	507,441
平成15(2003)	454,193	平成22(2010)	515,548
平成16(2004)	464,809	平成23(2011)	522,667
平成17(2005)	470,163	平成24(2012)	530,127
平成18(2006)	481,091	平成25(2013)	535,912



帝塚山学院大学図書館の蔵書充実の歩み

突破した。一〇万冊目は昭和五十七年(一九八二)一月二十七日付、『帝塚山学院大学創立十五周年記念誌』だった。最初の一〇万冊に一五年四ヶ月、次の一〇万冊に一〇年五ヶ月かかったことになる。

平成五年(一九九三)二一万四四八九冊、平成六年(一九九四)には二二万一四〇四冊、平成七年(一九九五)二三万三五七〇冊、平成八年(一九九六)二四万一三三四冊、平成九年(一九九七)二五万一二六三冊。人間文化学部の発足に伴い平成十年(一九九八)四月から、泉ヶ丘キャンパスの短大図書館が「帝塚山学院大学図書館泉ヶ丘館」となった。泉ヶ丘キャンパスの増改築工事は平成十年(一九九八)夏に完成し、泉ヶ丘館は装いも新たに快適な図書館として出発した。これに伴い、蔵書一三万冊の移動・配架作業が行われた。狭山キャンパスの図書館の名称は「帝塚山学院大学図書館狭山館」だ。狭山館二六万一三三三冊、泉ヶ丘館一三万四三三冊で合わせて三九万一七六六冊にのぼった。

平成十一年(一九九九)には、狭山館二六万九四三〇冊、泉ヶ丘館一三万五四八三冊合わせて四〇万四九一三冊と二〇世紀中に四〇万冊台に入った。平成十二(二〇〇〇)年度から平成二十五(二〇一三)年度までの全蔵書数の推移は別表の通りで、平成二十一(二〇〇九)年度には五〇万冊を超えた。

学院大学を取り巻く内外の厳しい事情が、図書費・新聞雑誌費に影を落し始めた。平成十一年(一九九九)に図書費は五一〇〇万円、新聞雑誌費一九五〇万円だったが、一〇年後の二〇〇九年には図書費が二五四七万円、新聞雑誌費一一八六万円とほぼ半減、二〇一三年に図書費一八三三万円、新聞雑誌費一〇〇八万六〇〇〇円になった。

図書館では、昭和六十(一九八五)年度から自館作成ソフトを用いて整理業務の機械化を行い、九万冊の目録データを保有していた。整理業務の迅速化とサービスの拡充をめざして、システムの充実も進んだ。平成五年(一九九三)十一月から、学術情報センターと接続するとともに、サーバー・パソコンによる図書館トータルシステム(New Lib)を導入し、図書の発注・受け入れ・目録システムの開発に取り組んできた。平成八年(一九九六)四月からは、オンライン蔵書検索およびバーコード貸出がはじまった。

三　図書館利用の定着

蔵書が増えるにしたがって、利用も増加していった。利用統計を取り出したのは、昭和五十二(一九七七)年度からだ。

昭和六十(一九八五)年度の入館者は五万四八〇一人、昭和六十一(一九八六)年度六万九九四九人、昭和六十二(一九八七)年度七万七七二六人、昭和六十三年度(一九八八)八万三五八九人と、図書館の利用人数が増えていっ

年　　度	入館者数	貸出冊数
昭和52(1977)	51,515	8,873
昭和53(1978)	48,042	8,802
昭和54(1979)	43,106	8,616
昭和55(1980)	39,551	9,378

た。

平成元年(一九八九)には年間の入館者数が九万三一一〇人と九万人台になり、平成二(一九九〇)年度に九万五六二六人、平成三(一九九一)年度には一〇万四一三人と一〇万人を超えた。しかし、平成四(一九九二)年度の入館者は八万七七二四人、平成五(一九九三)年度九万一六四七人、平成六(一九九四)年度九万七四三四人、平成七(一九九五)年度八万七〇七八人とピーク時に比べると減ってきている。

貸出冊数は、利用状況を示す最も主要な指標だ。平成四(一九九二)年度の学生への館外貸出は二万九六六冊、学生一人平均一〇・一六冊、平成五(一九九三)年度は二万二七七一冊、学生一人平均一〇・五六冊、平成六(一九九四)年度は二万四五一六冊、一人平均一一・三五冊、平成七(一九九五)年度は、入館者総数が八万七〇七八人で、学生への館外貸出は二万五五八四冊、学生一人平均が一一・八四冊だった。

このような状況について、「帝塚山学院大学の概況　一九九五年度　自己点検・評価報告書」は次のように報告している。

全国的にも上位にランキングされるものであり、かなりよい数字を示している。貸出冊数・入館者数がともに年々増加傾向をしめしており、利用状況は概して活発な状態で推移している。これは開館日・開館時間の維持、貸出冊数制限の緩和、完全開架制、分類・目録の整備など、従来からの利用者の便宜を重視した図書館運営が、功を奏しているものと思われる。ただし、貸出冊数の増加率が、年々減少していて、平成七(一九九五)年度は四・四％の伸びにとどまっていることから、ほぼ上限に近づいているものと考えられる。

平成九(一九九七)年度は全所蔵冊数が二五万一二六三冊、学生への館外貸出は二万三八二七冊、学生一人平均一〇・七九冊。「帝塚山学院大学の概況　一九九七年度　自己点検・評価報告書」は、「一九九七年度は貸出冊数が減ったが、これといった原因は見当たらず、全般的な読書離れの影響かと思われる。ただし、カウンターから観察した利用状況は非常に活気があり、むしろ利用が増えている印象を受ける。減少したとはいえ、学生一名平均一〇・七九冊は、依然として高い水準といえる」と述べている。

平成十(一九九八)年度は、新しく人間文化学部が発足し、従来の文学部と合わせて二学部体制となったうえ、英語学習用の簡単なリーダー、約九〇〇〇冊を貸出し始めたこともあり、館外貸出が学生一人平均一三・三〇冊と極めて高い数字を記録した。平成十一(一九九九)年度から平成二十二(二〇一〇)年度までの学生一人平均貸出冊数は別表の通りである。

年　　度	学生１人平均貸出数(冊)
平成11(1999)	14.43
平成12(2000)	12.86
平成13(2001)	13.08
平成14(2002)	12.96
平成15(2003)	15.05
平成16(2004)	16.08
平成17(2005)	14.31

年　　度	学生１人平均貸出数(冊)
平成18(2006)	13.56
平成19(2007)	12.75
平成20(2008)	12.26
平成21(2009)	13.14
平成22(2010)	16.40
平成23(2011)	15.21

学院大学は、学生を図書館に足を運ばせるとともに、地域の人たちに大学を開放し、魅力を広める工夫を重ねている。その代表的なものが、平成十三年(二〇〇一)七月から狭山館の一階入口横の常設の展示室ではじまった、所蔵する様々な貴重な資料・書物を紹介する

展示会だ。皮切りは「竹久夢二と京都のアール・デコ ── 京都発信のグラフィック・デザイン ── 展」（七月十八日～八月三日）。山田俊幸文学部教授の協力を得て、抒情画として女性の美を追求した竹久夢二の初期の作品とポスト夢二と言われている京都のグラフィック・デザインを展示した。以後、教員と図書館のいわばコラボによる出色の展示が次々と企画された。

「妖怪大宴展」（九月九日～十月三十一日）。人間は自分とは違う異形のものを幻視し、畏れ、忌み嫌い、求めつづけてきたことに注目。サルタヒコ神（明治期の掛け軸）、ヤマタノオロチ（大江小波述、尾形月耕画『日本昔噺第十三編八頭の大蛇』明治二十八年刊）、オロチ（木版画　谷中安規）、『怪談全集歴史編』（田中貢太郎著、谷中安規装幀、改造社、一九二八年刊）、『暁斎百鬼画談』（折本、明治二十八年再版）など。

十一月十一日から二十一日までは、「えほん展」第一弾。日本の絵本（学院大学客員教授の松谷みよ子氏の作品『モモちゃんシリーズ』、庄野英二元学長の作品『きゅるきゅる』）、中国の絵本、英米の絵本（ほんとうの手紙の入ったアリータ・リチャードソン『メイペルおばあちゃんからの手紙』、レイモンド・ブリッグズ『風が吹くとき』とその原作『When the Wind Blows』）、ヨーロッパの絵本。

平成十三年（二〇〇一）の図書館の展示の締めくくりは「文庫本誕生５００年」展だった。七月末から八月初めにかけて東京・町田市立国際版画美術館で催された「文庫本誕生５００年」の一部を借り受け、学院大学所蔵の文庫本を併せて展示。気谷誠氏（琉球大学附属図書館情報管理課長、美術史家）の講演会と藤井敬子氏（製本家、版画家、エストニア賞受賞）によるワークショップも東京展と同じ内容で開催した。

平成十四年（二〇〇二）に入って、「えほん展」第二弾として、「日本の絵本１００年展」（一月十日～二十九日）、「午・馬・うま ── 馬の形象～版画、挿絵本を中心に ── 展」（二月一日～二十八日）が開催された。後者の企画では、この年の干支である「午」をテーマに、蔵書を中心に馬のコレクションを探し出し、シャガールが友人のクレール・ゴルのために作った挿絵本『馬の物語』など、一九二〇年代から七〇年代までの馬の形象が集められ、展示された。

平成十五年（二〇〇三）には、狭山館で「切手に見る音楽家たち ── 浅若コレクション展」（五月二十六日～六月三十日）。大阪の音楽愛好家、故・浅若文吾氏のご遺族からいただいたコレクションだ。モーツアルト、ベートーベンをはじめとする音楽家たち、オペラやバレエ音楽、さまざまな楽器をテーマに、世界各国から収集した音楽に関する美しい、貴重な切手を中心にした展示になった。展示会は、「楽しい年賀絵葉書の世界展」「生活習慣病を予防する展」「コミュニケーション能力展」「童話に親しむ展」「教師になるには展」「栄養士・管理栄養士になるには展」「カウンセラーになるには展」など、狭山図書館・泉ヶ丘図書館で毎年、二回程度開かれている。

平成二十三年（二〇一一）には泉ヶ丘館で、この年の十月五日に五六歳で亡くなった、世界的なＩＴ企業・アップル社の創業者、スティーブ・ジョブズを悼むと同時に、就職試験に取り上げられるだろうとの予想のもとで関連著書などの展示会を行うなど、時の動きをとらえ、学生の関心に応える展示会を重ねてきている。平成二十四年（二〇一二）には、狭山館と泉ヶ丘館で「新入生歓迎展」（四月十日～五月二日）を催した。新入生に役立つパソコン入門や学習に必要なレポートの書き方など、図書館所蔵の資料の中から展示した。テーブルマナーをはじめ、人との付き合い、冠婚葬祭で

必要なマナーに関わる図書・資料を揃えた「マナー展」、一般常識、面接試験の対策など就職に関する知識や心構えに関する図書・資料を取り揃えた「就活展」なども開いた。

第九節　新しい時代への模索

一九八〇年代に入り、国際的な動向としては若者の大学離れ、進学率の低下が一八歳人口の減少と相まって、学生不足を引き起こし、大学は危機に陥ってきていると言われ始めた。しかし、日本は例外だった。一九八一年の一八歳人口約一六一万人から一九九二年約二〇六万人のピークまで増えつづけ、ピークが過ぎた一九九五年にも約一七八万人と推定されていた。日本の大学の危機は学生不足の危機ではなく、当面は学生が増える危機だった。同時に、二〇〇七年には一八歳人口が約一三九万人になると推定され、ピーク時より約六七万人減るという新たな事態を迎えるとされていた。この約一〇年間の急増とそれにつづく長期減少に対してどう対応するか――当面する日本の大学とくに、高等教育の新しい道を模索するなかで大きな役割を演じている私立大学にとって、避けて通れない重大な問題になってきていた。

大学を取り巻く状況が大きく変わりつつあるなかで、帝塚山学院も経営と教学の視点から、どのような大学政策を展開すべきかに取り組み始めた。まず、学生数を増やすために就職につながる新しい学科の開設の検討が始まった。

昭和五十八年(一九八三)六月の学内理事会では、「大学では美学のほかに、デザイン工学・ディスプレー法などの就職に適した新しい学科の開設を検討して、学生数の増加を図ってほしい」との意見が出された。同年(一九八三)十月の学内理事会では、大学・短大の学生定員の変更についての基本的な原則について、いくつかのケースをあげて試算している。

「同一キャンパス内での学生定員変更の場合」、「移転による学生定員変更の場合」、「同一キャンパス内での学生定員変更、および学部・学科増設の場合」、「移転による学生定員変更および学科増設の場合」、「学生定員変更なしで学部・学科増設の場合」など五つのケースについて現在の定員と新定員を想定して試算し、比較した。

「今後、新学部・新学科開設のためには、中央との接触を保ちながら前向きに努力する必要がある」ことを確認した。

昭和五十八年(一九八三)十二月二十二日に開かれたこの年の最後の第三一四回学内理事会で、酒井芳申常務理事が新しい時代に向けた大学改革の必要性を訴えた。

今や、大艦巨砲時代は去り、ミサイルの時代に移った。今に於いて将来を図り、新しい時代の進展に対応した体制の整備を急ぐべきである。今年は泉ヶ丘校の開校、住吉校教育改革の答申等があったが、大学・短大に於いても、国の高等教育機関整備計画実施の機会を捉え、新しい時代の求める分野への学科の開設に注力し、学生数の増加とともに内容の充実を図り、きびしい私学間の競争に遅れを取ることは許されない。若しも、現状の儘推移するならば、一〇年后に現出する事態に掛かる問題の責任は、現在の学内理事会にあることを銘記すべきである。

これを受けて、実際の動きが始まった。牧野博彦副学長らが文部省の関係部門から聞き取ってきた事項について、昭和五十九年(一九八四)二月九日の第三一九回学内理事会で報告した。

大学の場合、現在の実員と定員の比率の解決が先決であり、まず、現在の二倍を一・五倍に下げてから次の計画を出すべきではないかとのアドバイスを受けた。したがって、学科の増設はそのあとで申請するのがよいと思われる。

この報告にもとづき、今後の方針として、大学・短大はまず、定員増を実現し、そのあと学科増を行う方向でいくことを決めた。「このため、院長並びに大学・短大の両学長は週一回程度、基本構想を持ち寄り対策を協議するとともに、大学・短大にてプロジェクトチームをつくり、一丸となって足繁く文部省を訪問し、担当官を下から攻めるとともに、必要があれば政治的な手段をも併せて考えながら計画の実現を目指す。なお、短大は開学以来三三年、大学は一七年を経過したが、その間、時代の変革に対応することをなおざりにして今日に至ったことを反省し、今后は計画の実現のために全力を上げて推進する」(同議事録)ことを確認した。

一週間後の二月十六日の第三二〇回学内理事会で、大学・短大の定員増・新学部増設計画を推進するために事務局を設け、大学・短大とともに本部事務局も加わり、文部省に働きかけることが決まった。

具体的な進め方としては、学院長、大学・短大の両学長が基本方針をつくること。事務組織としては、大学・短大・本部の三者が協力して必要な資料の作成にあたり、緊密な連絡と統制を保ちながら文部省と接触することを確認した。「六〇年代・大学教育整備計画対策委員会」(略称「六〇年代委員会」)が動き出した。

原龍之助学院長が昭和五十九年(一九八四)三月一日の第三二一回学内理事会で、「大学の現状と改革の諸問題」について考えを明らかにした。

一、大学進学率の上昇とこれに伴う大学の大衆化の問題
二、大学における研究の重視と教育の軽視の傾向
三、今後の私立大学のあり方
　建学の精神に立脚した大学の特色作りの必要性
　時代に対応した教育内容の充実と教育方法の改善
四、教養課程と専門課程との関係を再検討する必要性
五、人間性探求のための教育課程の改善工夫
六、大学の自治と学問の自由
　教授会中心の「象牙の塔」より、閉鎖性を排除した「開かれた大学」へ
七、大学の管理運営について
　従来の教授会中心から、学長・副学長を中心とする中枢的な管理機構による指導性の発揮が肝要であろう

次に、学院大学の改革について、私案を示した。

一、教育の工夫
二、研究教育活動の一体的な運営のために、学長の指導性の発揮が望まれる
三、臨時的および長期的視野に立っての学科の創設ならびに既設学科の転換・改組の必要性
四、専門三学科の割拠主義を排除して、総合的立場から組織編成の合理化をはかる
五、大学の管理運営についての改善工夫
六、職員人事の改善私案
七、大学の質的・量的向上をはかることにより、大学ランクの地位向上が望まれる

第一〇節　大学の現状と改革の基本方針・主要課題・方向と対策

一　大学教育改革の構想

原龍之助学院長より、『大学の現状と将来の課題』と題する大学教育改革案が学内理事会に提案され、種々議論を経て、大学の教育改革の構想が、昭和五十九年（一九八四）六月四日の理事会で示された。

〈現状と基本方針〉

学院大学は、昭和四十一年狭山の丘に創立されてから、すでに一八年、その間、学院の建学の精神に立脚して、着々、個性があり、特色ある大学づくりをめざして、独自の学風をつくりあげることに努めている。本学は、官学に比べて、より自由で弾力性をもつ私学として、画一化を排し、社会の多様化、国際化に対応して、個性豊かな、主体性と創造性をもつ人間形成をめざし、専門課程として、日本文学科・英文学科のほか、他の大学に比べてユニークな美学美術史学科をおき、それぞれの研究分野に応じて独自の教育内容や方法を展開している。また、専門教育のほか教養教育を重視し、人文・社会・自然に関する一般教育科目のほか、読書演習・放送講座、各界の権威者による特別講義など、ユニークな講座を開設し、幅広い教養人の養成を配慮している。このほか、AVセンターの設置、視聴覚機器等の導入によって、一斉教授による単一的な教育から学生を解放し、個人の能力差に応じた、個別教育の徹底を期している。また、現代の国際化時代に対応して、学院がユネスコ実験校の一つとしてはたしてきた実績を生かし、大学においても、国際理解教育に力を注ぐとともに、海外の大学との間で留学生を交換するほか、最近は海外帰国子女の受け入れなど、教育文化の国際交流をはかっている。（中略）

本大学は、さきにのべたように創立以来相当の年月を経過したが、依然として大学のランクが近畿地域において低い地位にとどまっている。これは、いわゆる偏差値という基準による格付けにもよるが、他方、大学に対する外部の評価が比較的低いことを意味するものとおもわれる。外部の大学に対する評価や意見には、いくらか誤解にもとづくものや理解の不充分な点もあるであろう。しかし、われわれは、これを謙虚にうけとめ、教育の現状と問題点の所在を根底から吟味し、新しい発想にもとづき学院教育を見直すとともに、学生の質の向上、ひいては大学の地位の向上につとめる必要がある。そのために、カリキュラムの改編、新学科の増設または既存学科の改組・教育内容の充実・教育方法の改善等により、入学志願者の量的拡大、ひいては学生の質の向上をはかり、外部の評価を高めることが大切であるとおもわれる。

〈学院大学改革の課題〉

学院大学の教育改革当面の課題として、定員の改正、新学科増設、一般教育と専門課程の再編の三つがある。

㈠定員の改正

(1)現在、定員は日本文学科七〇、英文学科七〇、美学美術史学科六〇

の計二〇〇名であり、実員の定員に対する倍率は約二倍となっている。現在（昭和五十八年度）四年制大学の全国平均水増率は一・三六倍で、文部省は将来これを一・二ないし一・一倍の水準にするよう行政指導を行っている。本学の場合、この水準まで水増率を圧縮するとすると、現在の四〇〇名（予算定員）の実員を確保することは困難になり、教職員・施設等に大きな影響を及ぼすことになる。

(2)私学振興財団の私学補助金交付条件は、昭和五十九年度まで二・五倍の水増倍率を上限としてきたが、昭和六十年度には、二倍を上限とし、逐次引き下げられることが予想される。このまま放置すると、私学補助金の削減や全額カットを生ずる恐れがある。

㈡新学科の増設の問題

上述の定員の改正が行なわれた場合、定員の減少が避けられないのでこれを補うとともに、私学としての経営規模の維持拡大を図るために、新しい構想による定員一〇〇名程度の新学科を増設することが必要である。

㈢既設専門課程の日文・英文・美学の三学科と一般教育課程の改革問題

開学以来一八年を経た今日、既設の専門教育、一般教育の内容のマンネリ化、あるいは閉鎖的な独善に陥っている傾向がみられる。教養課程と専門課程との関係を根本的に考えてみること、社会的ニーズの変化や、学生の資質、学生の希望等を取り入れ、カリキュラムの改正、専攻、コース制等の検討により、より魅力ある教育内容を創り出すとともに、講義内容や方法についても改善を加える必要がある。

㈣学院大学教育改革の方向

(1)定員改正の方向

新定員については、次の通り認可申請をする。

日本文学科	一〇五
英文学科	一〇五
美学美術史学科	六〇
計	二七〇

(2)新学科の増設

新学科として、次の二つの構想がある。

㋑総合文化学科または人間関係学科

この学科の構想の要点は次の通りである。

①人文・社会の諸分野に可能なかぎり有機的な関連をもたせ総合性を実現しようとする意図から、とくに、学際的研究に重点をおく。

②この学科に、四つのコースを設け、これにかかわるものとして、人間研究・社会文化研究・日本文化研究・西洋文化研究の四講座をおくことが考えられる。

③他の学問分野に対して開かれた意識をもち、総合的判断力と創造的思考力をもつ人間の育成を主眼とする。

④この構想の難点

教員の編成が複雑、広範囲となるため、多数の専任教員を新たに採用する必要を生ずる。

㈡国際(英米)社会語学科

①設置の目的

今日の国際社会において、国際都市として性格を強めつつある大阪の地域的特性をとらえ、国際(当面英米)社会語学科を設け、欧米の文化・社会の事情に通じ広い視野と国際的感覚を身につけた女性を養成することを目的とする。

②カリキュラムの特色

- 一般教養科目は主として一年次で習得し、二年以降は、国際社会人として必要な欧米の思想・文化・民族・社会等の理解に必要な専門知識の教育を重視するほか、国際関係論・比較文化論・民族文化論・社会学・国際経済論等の科目を設ける。
- 欧米の事情を理解し、これらの国々とのコミュニケーションを可能にするため、外国語、とくに英米語の学習を重視し、実践的な会話力を身につけ、生きた外国語の習得に特に配慮する。このために、さまざまな英米語の教材のほか、視聴覚教材を利用して多角的な学習を行なうほか、英文タイプ・コンピューター、通訳等の実用的技術をも習得させる。このほか交換留学生・海外帰国子女の受入れ体制の一層の整備をはかるほか、外国での学習経験を生かすとともに、外国人教師の積極的な活用をはかりたい。
- もとより国際人としての条件は、何よりも日本の固有の文化・歴史・伝統に対する理解をふかめ、日本人としての自覚と誇りをもつことである、という考えに基づいて、国語教育を重視する。

③この学科の利点

現有教員の可成りの部分を充当できる点と、泉ヶ丘高女子国際科出身者を充分受けいれることができる点にある。

㈤一般教育課程改革の方向

さきにのべたように、専門課程に進む前に、二年間市民としての広い人間的教養を身につけることを狙いとする一般教育課程の理念が失われ、大学教育のなかで軽視される傾向があり、本学においても、一般教育課程の再検討を必要としている。改革の方向としては、基礎科目への移行と、人文・社会・自然の諸分野に有機的な関連をもたせ総合性を実現しようとする意図から、とくに学際的総合学科への編成がえを行う必要があると考える。なお、外国語科目については、新学科設置との関連で新たに編成を行い、効率的な授業方法の開発へ進ませることとする。

㈥専門課程改革の方向

①日本文学科においては、一応、日本の古代から近・現代までの授業科目を配置しているが、学生の近・現代文学への志向が強いので、これに応えるよう配慮を加えることにする。

また、従来の国語教育が、ともすれば、文章読解技術の習得に傾きがちで表現面が軽視されている点を反省し、書取・作文等の基礎的学力の充実を基盤として、より実践的な表現力を養うこととする。

このため、文芸コース(仮称)などのコース制の構想を検討する。

②英文学科においては、今日の国際化時代に対応して生きた外国語の

修得を希望する学生の多いことを考慮し、三年前英米文学コースのほかに、新たに英米語学コースを設け、原書の読解と英語の表現の能力の向上を期したが、その運営からして、新設の語学コースが所期の目的を達することができない実状を反省し、再改革が必要となっている。このため、従来のカリキュラムを見直し、昭和六十(一九八五)年度から新たなカリキュラムを実施する。すなわち、英文学科を統一的に再編成し、会話については、習熟度を高めるための能力別、小クラス制を全学科にとりいれる。

③美学美術史学科については、学科の性質上、入学者数を急激に増加させることは当面、不可能とおもわれる。しかし、ほとんど恒常的に定員を欠いており、経営面からも問題である。教育面からみて、本学科に所属する学生の資質や、教養志向型が多い実情に鑑み、学生側の希望等をもとり入れ、講義内容や方法について改善を加える必要がある。この点から、必須科目のうち、ドイツ語の学習を美学専攻学生に限り、他の選択にする等の処置を講ずるとか、美術史のカリキュラムにウエイトをおく方向で検討を加えることなどが、その考慮すべき例となるであろう。

(七)むすび

以上、学院大学の教育改革の構想についてのべたが、現代(ママ)大学のかかえる課題としての定員問題、新学科増設の問題については、大学内に六〇年代大学教育整備対策委員会(略称　六〇年代委員会)を設けて検討を加えている。なお、一般教育課程と専門教育課程の改革については、近く、別に対策委員会を設け、右の基本構想の方向に沿い検討を加えることとしている。

昭和六十年(一九八五)五月三十一日の理事会で、大学の文学部の定員を美学・美術史学科を除き、日本文学科と英文学科の収容定員を二倍にするよう学則変更の認可申請を文部省に対して行うことが決まった。大学・短大の志願者が年々増え最近は六倍を超えており、学校経営の長期安定化の面からも、実員の定員化をめざし、定員増について文部省と協議を重ね、ほぼ了承を得ていた。

この申請が認められると、大学の入学定員は二〇〇名から三四〇名となり、総定員は八〇〇名から一三六〇名となる。

	新定員	新総定員
日本文学科	一四〇	五六〇
英文学科	一四〇	五六〇
美学美術史学科	六〇	二四〇
合計	三四〇	一三六〇

この学生収容定員数の増加が実現することになったが、同時に、平成四年(一九九二)以降の学生数の急減期に備えて、昭和五十九年(一九八四)六月四日の理事会で打ち出された「学院大学教育改革の構想」に従い、社会的ニーズに合った新しい学科ならびに美学美術史学科の改革検討を進めていくことが、昭和六十一年(一九八六)五月三十日の理事会で報告された。

二　国際文化学科の新設

大学の新学科増設が具体的に動き出した。昭和六十二年（一九八七）三月三十一日と五月二十九日の理事会で、牧野博彦副学長が「新学科として国際文化学科の設置を申請する」として、その構想の概要を説明した。

学科の名称は国際文化学科。北米文化、太平洋文化、東アジア文化の三コース。入学定員は一〇〇名、収容定員は四〇〇名で、専任教員は一〇名。昭和六十二年（一九八七）六月三十日までに文部省に申請書類を提出。受理されれば、十二月に認可が下りる予定、という内容であった。

この説明に基づき審議の結果、全員異議なく承認可決された。

さらに、九月二十四日の理事会常務委員会で、国際文化学科新設にともなう既設学科の収容定員の変更を九月二十八日に文部省に申請し、昭和六十三年（一九八八）四月一日から施行する、と報告された。

	入学定員	総定員
日本文学科	一二〇（旧一四〇）	四八〇（旧五六〇）
英文学科	一二〇（旧一四〇）	四八〇（旧五六〇）
美学美術史学科	六〇（旧　六〇）	二四〇（旧二四〇）
国際文化学科	一〇〇	四〇〇

これより前、昭和六十二年（一九八七）五月二十九日の理事会で、宮地裕学院長は国際関係学科の増設について、次のような見解を示した。

国際化、情報化の時代を迎え、国際関係教育は一つのブームとなっていますが、これもある意味で当然のことと思われます。今日では帝塚山学院の国際教育は、世間でも周知のこととなっておりますが、今回の増学科はその先進的な性格を世の中に示すものであると確信いたします。また、南大阪地区の発展には各方面から多くの期待が寄せられております。そういった意味で今回の増学科は、帝塚山学院全体として推進すべきことであると考えております。

二一世紀にさしかかろうとしている時に「国際文化学科」を新設した目的、理由、背景について原龍之助学長が、昭和六十三年（一九八八）の『帝塚山学院通信』二五号で次のように説明している。要旨は以下の通りである。

- 国際人とは、必ずしも英語をペラペラしゃべる言葉屋になることではない。英会話のポイントは発音ではなく、その内容である。外国人との対話を成功させる条件は、こちらの意思を伝える表現技術と日本人としての豊かな人柄と教養である。
- 国際化ということを考える場合、より重要な点は、それぞれに地域や民族が固有の文化をもつことをよく認識して、異文化との相互理解を深めることだ。今後の日本人が世界人、国際人になるのを望む場合には、日本という民族的な伝統と文化について理解を深め、これを十分に生かす工夫がなされねばならない。他国の人々、異文化の人々とも親善を深め、対等に協調して、世界平和に貢献できるよう開かれた愛国心・民族愛をもった日本人こそ、真に国際人としての資格をもつものといえる。
- 二一世紀を展望して、主としてわが国と関係の深い海外の地域の生

活・文化について研究と理解を深め、地域の言語に習熟し、国際関係を正しく理解し、日本文化をこれらの諸地域に紹介するとともに、外国人に日本語を教えられる有為な人材を養成することを目的として、国際文化学科を新たに設置した。

・歴史的な事情もある。帝塚山学院が昭和三十一年以来、追い求めてきた国際理解教育の理想を、学院教育体系の頂点にある大学教育で実現しようとするもので、最近の国際化の要請に対応して今にわかに国際文化学科を設けたわけではない。昭和三十一年に学院の中学校が、昭和三十七年に高等学校が、文部省の勧奨を受けてユネスコ協同学校に指定され、国際理解教育の推進に努力してきた。昭和四十一年、大学の設置とともに、全国唯一の「国際理解」を開講し昭和四十二年、教職課程設置にあたって、教職専門科目として「国際理解教育」を始めている。

・昭和四十四年には、大学に交換留学制度が発足し、以後、アメリカ・カナダ・オーストラリア・西独・フランス・中国からの留学生を迎えるとともに、アメリカ・カナダへ留学生を派遣しており、とくにカナダのブリティッシュ・コロンビア大学とは、協定校として毎年、海外帰国子女の受け入れを行っている。

昭和六十二年（一九八七）十月一日から、帝塚山学院大学の住居表示が変わった。大阪府南河内郡狭山町大字今熊一八二三が、「大阪狭山市」に市制施行したのに伴い、「大阪狭山市今熊二丁目一八二三番地」になった。

第一一節　不安をかかえながらの臨時定員増

山田博光文学部長が平成元年（一九八九）四月一日、第七代学長に就任した。

大学拡張ブームの再来がいわれているときだった。大学・短大、とくに私立の拡張意欲には強いものがあった。前回のブームは二〇年ほど前、昭和四十年代にあった。最大の要因は、一八歳人口の急増だった。昭和四十一年（一九六六）の一八歳人口は、前年比で一挙に五〇万人以上増えるという空前の数字になった。放っておけば、大学進学をめぐって極めて激しい競争が起こり、大量の浪人がでる。経済の高度成長期で、家計も豊かになり、進学希望率が高まり始めていた時期なので、このままいけば社会不安になりかねない。文部省も、設置基準をゆるめてでも、新増設をすすめようと考えていた時代だった。こうした背景のなかで、たくさんの私立大学、短大がつくられた。

今回のブームも基本的には、一八歳人口がまた急増期に入り、平成四年（一九九二）のピーク時には二〇六万人に達すると見込まれていた。進学希望率が、仮に今のままだとしても、進学希望者の数は間違いなく増えると予測されていた。

しかし、五〇％のラインまで伸びつづけるとみられていた進学率が、昭和五十年代に入ってからも三六％前後で頭打ちになり、一八歳人口も平成四年（一九九二）のピークを越えたあとは、減少の一途をたどるばかりであった。昭和六十一年（一九八六）の新生児数が、一四〇万人の大台を割り込んだ。明治時代以来の低い数字で、大学や短大にとっては、未来への展望

は、決して明るくなかった。

こうした悲観的な見通しは、当面予想される進学希望者の対応策として、昭和五十九年(一九八四)に文部省が発表した高等教育計画にもはっきりと現れていた。恒常的な定員増は半分ぐらいにおさえ、残りの半分は臨時の定員増でまかなう、としていた。

悲観的な見方は、文部省に限らず、多くの大学関係者、とくに私学関係者には共通している、と言われていた。

平成二年(一九九〇)五月二十五日の理事会は、「大学学生臨時定員増の件」を審議し、山田博光学長が提案した。

帝塚山学院大学は平成二年現在、文学部日本文学科一二〇名、同英文学科一二〇名、同美学美術史学科六〇名、同国際文化学科一〇〇名の入学定員となっていますが、近年、一八歳人口の急増や大学進学率の向上により、平成二年度は全国で四〇万名を超える不合格者がでる事態となっており、本大学においても志願者の増加は年々著しく、平成二年度は志願者数二七八八名、競争率三・六倍を上回る結果になっています。特に日本文学科においては志願者数一〇〇〇名を超え、競争率も四・四三倍となっております。以上を勘案し、社会的要請に応えるため、次のとおり臨時定員増を図りたいと考えます。

〈臨時定員増案〉

文学部日本文学科	入学定員一六〇名	(現行一二〇名)
英文学科	入学定員一二〇名	(現行どおり)
美学美術史学科	入学定員　六〇名	(現行どおり)
国際文化学科	入学定員一〇〇名	(現行どおり)
計	四四〇名	(現行四〇〇名)

理事会は、審議の結果これを承認可決した。

この理事会では、定員変更、学科増によってでてくる教室不足や学生用施設不足などの問題を解決するための対応策も話し合われた。

坂井信介理事が、施設の現状と今後の計画を説明した。

大学校舎は昭和四十一年に学生定員八〇〇名規模で建設されましたが、その後定員変更・学科増によって現在では学生定員一六〇〇名となっております。その間、食堂棟二、三階の増築、図書館棟の新築ならびに増築などもいたしましたが、なお教室は不足しており、五時限目や土曜日午後の開講により補っているのが現状です。また、学生食堂が非常に混雑し学生ホールを仮の食堂とするなど学生用諸施設が不足し、学生の収容に困難を来たしております。この施設不足を解消するため、平成三年度中の完成をめどに校舎施設を新築する計画をすすめたくここにお諮りした次第です。また、この際、既設校舎の整備・改修も同時に行いたいと考えています。

審議の結果、提案が承認可決され、規模、必要な費用などについては、秋の評議員会・理事会に実施の具体案が提出されることになった。

学院大学日本文学科の期間付き定員増と校舎の増築については、平成二年(一九九〇)十一月一日の理事会でも審議された。庄司定男本部事務局長

が以下のように説明した。

大学日本文学科の期間付定員増は（中略）文部省には九月二十五日に申請、受理されております。見通しでは十二月の中～下旬には認可されるものと考えております。そうしますと、総定員は現在の四八〇人が六四〇人になり、大学全体では一六〇〇名の定員が一七六〇名になります。なお、この定員増の期間は平成十一年度までとなっております。

続いて、坂井信介理事が校舎増築について、大学新館建築委員会を中心にすすめている計画の概要の中間報告を行った。

建設場所は設計会社の技術的な意見を参考にし、既設校舎との連絡、日照、採光の状況、工事中の問題、将来計画への配慮等を検討して管理棟西側に決定いたしました。そこへ鉄筋コンクリート五階建て延二二四五平方メートル（六七九坪）の校舎を建てる計画でございます。また、既設整備（ママ）の改修につきましても、学生ホールを中講義室に改修する、博物館資料室を設置するなど懸案の解消を計りたいと考えております。なお今後の計画の進行予定としては、平成三年二月中に本設計を完了し、三月中旬に施工業者の決定、四月始めの着工を予定しています。建設費はだいたいの目処を一〇億円としています。

「期間付き定員増」と増築について、宇野收理事から「定員増は期間付ということですが、建物は永久的なもの、今回の増築についてその辺の関連はどんなものですか」と質問があり、坂井信介理事が「大学の設備としては現在でも教室等が足りない現状で、定員増に当たる分のみの増築ということではございません」と答えて、議案は原案通り可決された。

定員増はさらに続いた。

山田博光学長は平成三年（一九九一）五月二十九日の理事会で、大学学生の「期間付き定員増」を提案した。

一八歳人口の急増と大学進学率の向上で、昨年度は、全国で四〇万名を超える不合格者が出る事態になっていますが、本学におきましても年々志願者の増加が著しく、平成三年度は三五七一名となり、競争率は四・〇六倍を上回る結果になりました。一八歳人口は平成四年度をピークに急減期を迎えますが、最近、私学志向や女子の進学率が一貫して上昇傾向にあることから、平成十一年度の期間付定員増の終了時までは、多くの志願者があるものと予想されます。このような社会的要請に応えるために、また本学経営の安定面からも、かねてより内外の要望の強い国際文化学科について、現行の一学年一〇〇名の定員を、平成四年度から平成十一年度の期間、二〇名増員し、一二〇名に致したく存じます。

この定員増は期限付きのもので、期限は八年間である。八年が過ぎれば元の定員に減員することになる。理事会決定の後、定員増の申請が文部省に提出され、平成三年（一九九一）十二月二十日付で、国際文化学科に平成四（一九九二）年度からの期間付き定員増が認可された。

平成六年(一九九四)十月二十七日の理事会では、「将来計画委員会」と「将来計画実行準備委員会」の報告として、大学・短大の将来について宮地裕学院長が次のように懸念を交えた報告をしている。

短期大学への志願者が急減していること、短大卒業者の就職難が著しいこと、帝塚山学院大学が平成三年度から実施した日本文学科の四〇名の臨時定員増および平成四年度から実施した国際文化学科の二〇名の臨時定員増も、平成十一年度までとなっており、このまま放置すれば、入学者減と経営圧迫を招く。

このため、短期大学を大学の学部に改組することなどが考えられています。

この報告に対して、「短期大学を大学の学部にするのか」という質問が出たが、宮地学院長は「まだ結論は出ていない」と答弁している。また、「大学(文学部)を男女共学にすることについて大学はいかにお考えか」という質問には、山田博光学長が「男女共学には教授会の全体的な傾向として反対が多いように思われる」と答弁している。

第一二節　「人間文化学部」新設　二学部体制へ

平成七年(一九九五)三月三十日の理事会で、宮地裕学院長が「本年九月申請(状況によっては一年後)を目途として努力し、大学に新しく、例えば『人間文化学部』(検討中)を設置したいと考えています。そこで、『新学部設置準備室』を大学・短大協力のもとに開設することをお認めいただきたい」と提案、承認された。六月一日に「新学部設置準備室」が発足して、作業が本格的にはじまった。

新学部の設置は、平成七年(一九九五)九月申請、平成九年(一九九七)四月発足の意向で取り組んできたが、新しい学部の学科編成や人事・カリキュラム、さらには財政計画・マーケットリサーチなどで十分詰めることができず、申請を一年延期することになった。

この改組拡充案のねらいについて、宮地裕学院長は平成七年(一九九五)十月十九日の理事会で、「大学を二学部体制とし、国際化・情報化等に対応することはもとより、生涯学習・生涯教育とも関連して、大阪南部の地域社会教育との一層の協力・提携なども考慮に入れ、将来は、男女共学の大学院設置をも期待している」と説明した。

新しい学部の設置が平成八年(一九九六)五月三十日の理事会で承認された。宮地裕学院長の提案内容は以下のようであった。

1. 増設学部・学科・定員
(1) 増設学部　人間文化学部
(2) 学科・定員

	入学定員	編入学定員	収容定員
人間文化学科	一五〇	一五	六三〇
人間科学科	一五〇	一五	六三〇
合計	三〇〇	三〇	一二六〇

2．増設申請および開設年月

(1)申請年月　平成八年九月

(2)開設年月　平成十年四月

3．校舎増築・改修

(1)　校舎増築

(a)　狭山キャンパス（鉄筋コンクリート造三階建二三四〇平方メートル）

(b)　泉ヶ丘キャンパス

（鉄筋コンクリート造四階建二〇六〇平方メートル）

(2)　校舎改修

(a)　大学既設校舎の一部改修

(b)　短期大学既設校舎の一部改修

4．文学部の恒常的定員増

新学部の設置にともない、短期大学の入学定員三六〇名のうち六〇名を平成十年度から文学部定員に振り替える。

日本文学科　三〇（入学定員一五〇）

国際文化学科　三〇（入学定員一三〇）

なお、文学部の恒常的定員増の申請は、平成九年六月とする。

5．短期大学の廃止

新学部の設置にともない、短期大学の学生募集を平成十年度から停止し、在学生の卒業を待って廃止する。

新学部設置の経費についての質問には、阿部喜兵衛専務理事が「二〇億円程度と考えている」と答えている。

新設する学部「人間文化学部」について、その学科名を「人間文化学科」と「人間科学科」にするとしていたが、これを変更することが平成八年（一九九六）九月五日の理事会で決まった。宮地裕学院長が「学部名と学科名の整合性について、文部省との折衝のなかで問題点が判明し、新学部設置準備委員会にはかり、学科名を『文化学科』と『人間学科』の二学科にしたい」と提案。「人間文化学科」を「文化学科」に、「人間科学科」を「人間学科」に変更することが了承された。

新学部「人間文化学部」の「認可申請書」が平成八年（一九九六）九月三十日付で文部省に受理された。

宮地裕学院長は平成八年（一九九六）十月三十一日の理事会で新学部設置申請の報告を行った際、「短大・大学の全面的協力のもとに、短大を大学に昇格させて、大学を文学部と人間文化学部の二学部から成るUniversityとし、この厳しく困難な時代を力強く生き抜く学院の原動力ともし、新しい時代にふさわしい教学態勢をも整えたい」と述べている。

平成九年（一九九七）三月末日で、八年間つとめた山田博光学長が任期満了となり、大谷晃一名誉教授が四月一日付で第八代学長に任命された。

第一三節　共学化問題と「文学部再生のビジョン」

一　男女共学化問題

平成九年（一九九七）五月二十八日の教授会で、大谷晃一学長は新学部「人間文化学部」の男女共学問題について報告した。

- 新学部の共学問題につき、五月十九日に私が文部省の見解を質した。それには「共学にしてもよろしい」という回答だった。
- その条件として、1．学則を変更する　2．トイレなどの施設を整える　3．志願者募集に際して人間文化学部は共学、文学部は女子を明示し混乱を起こさない、の三点だった。
- 過渡期措置として同じキャンパスで共存するのは止むを得ないということだったが、いま文学部を共学にするのは考えていないと言っておいた。
- これを受けて、五月二十七日に宇野收理事長、宮地裕学院長、阿部喜兵衛専務理事と大谷晃一学長、三浦信一郎副学長の五人が会合して学院としての最高意志を三時間にわたり協議。
- その結果、宇野收理事長から、「文学部は女子大として行って下さい。特色を出す努力を願います。新学部は共学にしたいと考えます」との裁定が出された。
- この協議では、どちらにしても大学の施設、学生の福祉、宣伝、入試や就職室など事務局の拡充を強く要請し、「わかった」との返答を得た。

平成九年（一九九七）七月二十三日の教授会で、大谷晃一学長が七月十日の理事会常務委員会の決定を説明した。

1、新学部を平成十年度に男女共学として発足させることは見送る。
2、平成十一年度よりの男女共学実現を目途として、直ちに共学の可否を含めて調査検討等を行い、大学及び学院として平成十年四月末日までに成案を得ることとする。
3、調査検討等のために委員会を別途に設ける。

宮地裕学院長を委員長とする大学共学検討委員会は、あす二十四日に第一回の会合を開いて発足する。大学側からは大谷晃一学長と三浦信一郎副学長が出席する。

大谷晃一学長が平成十年（一九九八）二月二十三日の教授会で、「文学部新生のビジョン」を要旨以下のように提案した。

〈建学の理念に戻ろう〉

帝塚山学院大学は建学の理念に戻り、何らかの学問を勉学の核として自由に選択した上で、幅広い教養をつけさせて、現代社会に生きて行く力を身につけるのを教育理念としたい。学生たちに自分とは何か、これからどう生きるべきかを考えさせる教育を目指す。そのために、学生自らの考える力、判断する力、物事を見通す力などの生きるための力とそのための基礎になる学問を核とし、それを取り巻く広い教養を育てることが大事である。（中略）本学がいたずらに専門化してはいけないのである。このような基本に立って、帝塚山学院大学は教養的

大学を選択するのが、本大学の伝統にも即し、かつ本学の志願者の希求に合った、当然かつ最善の方法である。

〈改革の方向〉

文学部の名を改めるとともに、同時に大胆な内部改革をすることから始めたい。この学部は一学科から成る。そこに二〇以上のコース、分野、あるいはクラスを作る。たとえば、日本歴史・考古学、児童文学、女性学、図書館学、アメリカ文化、イギリス文化、カナダ文化、オセアニア文化、中国文化、日本文化、万葉集、源氏物語、西鶴・近松・芭蕉、現代芸術、映画学、演劇学、音楽学、日本美術、西洋美術、東洋美術、情報文化、大阪学など。つまり、自分の専門ないし専攻を多くの分野のなかから学生が自由に選択できるようにする。これからの本学での勉強の精神と形式は、「自由」とする。学生がどの分野を自分の核とするかは、より取り見取りである。受験生も入試の科目を当日に選択できる。学生は自由に好きな分野を専攻するが、そのために必修科目をできる限り少なくする。他のどんな科目も履修できる。分野の間を移ることも自由とする。履修も異動も、文学部と人間文化学部にまたがることも認める。

これらの改革こそが、日本の新しい教養大学が目指す形態であり、本学に活気をもたらし、現代の若い世代を育てる方法である。しかも、コストをほとんど増やすことは要らない。これによって、広く開かれた自由な魅力あふれた大学になるだろう。この自由な科目選択こそが、政府文部省や大学審議会がこれからの大学政策の基本としようとしている方向なのである。

〈当面の措置〉

このような根本的な文学部改革には、文部省の承認が必要である。四月に申請して十二月までかかる。書類を整えねばならず、すぐには実行できない。さらなる落ち込みに間に合わないかも知れない。そこで、差し当たり、今の学科をそのままにして日本歴史・考古学、児童文学、女性学、図書館学などの分野を新設する。今の学科制の下で実施するので、形式上はどこかの学科に属するが、受験生へはこれらの分野を学科と並べてＰＲする。一九九九年度から募集を始める。

大学改革には、教員ひとりひとりが何の痛みもないというわけにはいかない。自らのエゴや謂れのない驕慢や頑なな保守性を捨てるべきである。新しい思考と大きな勇気をもって前進するために。

平成十年（一九九八）三月十一日の教授会で、大谷晃一学長が二月二十三日の教授会に提案した、生き残りのための「文学部新生ビジョン」を審議するために、学長の諮問機関として「文学部改革委員会」が発足した。その構成と人選は島本浣文学部長に一任された。

二　危機管理システム

平成十年（一九九八）六月十七日の大学評議会で、それまでなかった危機管理システムを整備することが決まった。この危機管理システムについて、大谷晃一学長が六月二十四日の教授会で説明した。

- 想定されるあらゆる事態に備える。学内紛争（理事会対教授会、学生対大学）、災害と事故、公害と環境破壊、訴訟、労働問題、教職

員の犯罪、スキャンダル、暴力やセクハラ、マスコミの誤報、大学経営不安情報など。

- これに対応し情報の混乱を防ぐために、組織を整備する。学長を本部長とし、副学長を副本部長（スポークスマン）とし、情報は両学部長と事務局長を経由してすべて本部長のもとに集める。
- 情報の発信は本部長から両学部長を通じて流し、学外に対しては入試広報室を窓口に一本化する。

平成十七年（二〇〇五）六月十五日の大学評議会で、海外での研修及び海外留学の危機管理について話し合い、海外のリスク情報、事故発生時のメディア対応、研修先の情報入手などのために海外留学安全対策協議会（JCSOS）に加入することが承認された。

七月二十日に開かれた大学評議会で、JCSOS作成の基本マニュアルを踏まえて、学院大学仕様のマニュアルをつくり、八月一日から施行したいと報告され、承認された。これまでの危機管理システムでは連絡網が役職者のみで一般教職員への連絡網が整備されていなかったので、一般教職員への連絡・周知方法の規定を入れることになった。

一方、国内研修旅行に関する危機管理体制についても、平成十九年（二〇〇七）五月十六日の大学評議会で、森田学生部長から要望が出され、海外研修旅行危機管理マニュアルに沿って国内研修旅行等の危機管理体制を整えることが了承された。

三　人間文化学部出発

新しい「人間文化学部」が平成十年（一九九八）四月一日に発足した。文部省が認めた定員三〇〇名のほぼ一・二倍の入学者があり、文化学科が一・二倍、人間学科が二・九倍で平均二・〇倍の競争率があった。

四月一日から、新しく増築された狭山キャンパスで学年が始まった。

従来の文学部だけの単科大学としての帝塚山学院大学が、人間文化学部と合わせて二学部体制となった。文学部は狭山キャンパスに、人間文化学部は主として泉ヶ丘キャンパスに展開することで、二キャンパス体制になり、まさしく「ニュー帝塚山学院大学」に生まれ変わった画期的な年になった。

学部と学科の構成は以下の通りである。

〈帝塚山学院大学の構成〉

	収容定員
文学部	
日本文学科	五一〇
英文学科	四八〇
文学コース	
語学コース	
美学美術史学科	二四〇
国際文化学科	四三〇
中国文化コース	
アメリカ・カナダ文化コース	
オセアニア文化コース	
人間文化学部	
文化学科	一五〇
人間学科	一五〇

皆川基人間文化学部長と島本浣文学部長は「二一世紀にむけて」の抱負を、『紫苑』八号（一九九九年三月）において以下のように語った。

皆川人間文化学部長

人間文化学部は、人間と文化との関わりを幅広い視点から追求する学部で、「こころ・からだ・くらし」をキーワードとする諸問題の学際的な教育・研究を内容が分かりやすい四つの基礎分野に分け、情報メディア文化を中心とする文化学科（メディア文化分野、文芸文化分野）と心理学、人間行動学を中心とする人間学科（心理・行動分野、健康・生活分野）の二学科が設置されています。この学部では学科を問わず実用英語教育と情報処理の知識と技術、そして応用力を育むことを大切にした実践に役立つカリキュラムが編成され、それを自由に選択できるようにし、二一世紀の日本と世界で活躍する有為な人材を育てることを目指しているが、今後さらに意欲と情熱をもつ学生がそれぞれの知的好奇心を探求する場に相応しい、個性的な学部の構築に努力していきたい。

島本文学部長

近年、女子大学や文学部は旗色があまりよくありません。受験情報誌などの調査にも明るい数字は見当たりません。そうした世の中の波をわたしたちの文学部もこうむっています。しかし、ほんとうに女子文学部は存在価値が薄く、暗い未来しかないのでしょうか。私はそうは思いません。逆に、二一世紀の日本社会を見据えれば、大きな可能性が開かれていると考えています。日本が質の高い社会を実現するためには、女性の自立、国際化、伝統の更新、豊かな精神生活といった内容をいっそう向上させることが必要でしょう。女子文学部はこの要請に応えうる教育実践の格好の場となるはずです。（中略）このような理念と展望のもとにスタートするのが、新年度からの「分野制」です。従来の四学科を一六の分野に分け、なおかつそれらと有機的に組み合わせた新しい文学部です。これまでの学科領域に加え、児童文学、歴史・考古学、英語コミュニケーション、英語翻訳、国際女性学、国際社会学、現代アート、芸術学などが加わりました。

就職率は学部の勢いを映し出す。文学部は平成十（一九九八）年度九一％、平成十一（一九九九）年度八五％、平成十二（二〇〇〇）年度八九％、平成十三（二〇〇一）年度八五％、平成十四（二〇〇二）年度八七％と比較的高い水準だった。

一方、平成十年（一九九八）四月にできた人間文化学部が初めての卒業生を出した平成十三（二〇〇一）年度の就職率は九一％、平成十四（二〇〇二）年度は八九％で、順調な滑り出しを示した。

大谷晃一学長が平成十二年（二〇〇〇）五月二十五日の理事会常務委員会で、学生獲得のために、①学院内部進学者の入学金の減額、②奨学金制度の拡充、③留学生の受入れ、の三点について、大学評議会で了承されたのですすめたいとの意向を表明した。

成績優秀者に対する奨学金を設けること、留学生の授業料は全額あるいは一部を免除することも考えている、との補足説明がなされた。さらに、指定校に重点的に力を入れること、和歌山県の紀の川流域と沖縄県の開拓

を重点的に行いたい、と付け加えた。

さらに、平成十二年(二〇〇〇)六月二十二日の理事会常務委員会で、大谷晃一学長は、今後大学が生き残る方法として、①社会人を受け入れる方法、②海外からの留学生の受け入れを拡大する方法、この二点について具体的に詰めたいとの考えを示した。

大谷晃一学長が平成十三年(二〇〇一)三月末日で任期満了となり、皆川基人間文化学部長が平成十三年(二〇〇一)三月二十九日の理事会で後任の第九代学長に任命された。任期は平成十七年(二〇〇五)三月三十一日までであった。また、この理事会で、大学の学則を一部変更し、教職員免許状(高等学校教諭一種「情報」)の取得資格の追加が確認された。

四　時代の風の中、問題に真剣に向き合った学生たち

学院大学が開学した一九六〇年代半ば、北ベトナム・南ベトナム解放戦線とアメリカ・南ベトナム政府とのベトナム戦争が、周辺諸国をも巻き込んで激しさを増していた。全米でも、全仏でも、日本でも反戦運動が広がった。同時に国内では、大学の管理・運営などのあり方などをめぐって東大、日大をはじめ多くの大学で、学生側と大学側の団体交渉、講堂・校舎の封鎖などが続いていた。当時の学生運動の激しい波は、誕生したばかりの女子大学である学院大学の学生活動にも及んでいた。

大学新聞部発行の『帝塚山学院大学新聞』三号(昭和四十三年十二月十一日)は一面に「大学の真のあり方とは―東大紛争に思う―」との要旨以下のような論説をかかげた。

- 開学二年あまり、来春には四期生を迎え、大学としての一応の陣容を整える本学においても、初期の基礎造りの段階から次の段階へとより飛躍、充実してゆく大切な時期である。それだけに現在の大学が共有しているところの問題点のいくつかが、本学でも提起され始めているようである。
- この半年の大学紛争で、社会は現在の大学が変革を必要としていることを感じてきた。しかし、だれもがその明確な未来図を描き出すことができず、模索を続けているのが現状であろう。そうして、同じく大学で学ぶ私たちも、このことに無関心でいられないことは言うまでもない。
- 私たちはこの貴重な四年間を何のために大学生活を送って行くのであろうか。ただ単に大学生という「身分」を得て、その身分に甘え、特権を享受しているだけでよいのであろうか。一つのことをあらゆる角度からとらえ深く探求していくという態度は、何事に対しても自分で考え、批判的精神と反省的態度を失うことなく積極的に学問その他に取り組んでいくという態度は、あらゆる可能性を生かして、知識を単なる知識に終わらせるのではなく、学問によって考え方、生活の態度を鍛え、人間を形成していくという基本的な姿勢はどこに生かされているのであろうか。

学生側と大学側の対話が昭和四十三年(一九六八)十二月五日に始まり、まず、スクールバス問題を話し合った。当時の南海・金剛駅は田舎の小さな駅で、改札口が片側にしかなく、電車の本数も少なく、スクールバスを急いで降りて、ギリギリ乗り込む、あるいは電車を止めて待ってもらうと

いう状況もあった。それだけにスクールバスの最終便に合わせて、クラブ活動を打ち切らざるを得えないときもあった。この協議を踏まえ、学生側は、いろいろな問題で相互理解と協力をすすめ、解決するために定期的な「話し合いの場」を設ける必要があるとの立場を打ち出した。

『帝塚山学院大学新聞』の記事・特集を追うと、誕生したばかりの時代の学院大学の学生たちが、大学の内外で起こっているどのようなことに関心を向けていたかが浮かび上がってくる。大学祭のあり方、学内でおこなわれている団体の設立、集会、行事、施設・備品の使用、学外での集会・行事などに関する「許可制度」、水俣病をはじめとする公害問題、出入国管理法、「女子大と就職問題」、留学制度、テストのあり方、「女性と結婚」、「ジーパン論争」、「出席制度の実態とは」などだ。

『創立十五周年記念誌』は学生会活動について、「学生紛争の頃」として、次のように総括した。

（昭和）四十三年度から執行部は大学運営に批判姿勢を打ち出して来たが、四十四年～四十六年が学生会と大学当局との対決空気の濃厚な時期であった。四十四年度には学生会執行部と大学側学生部委員会とで数多くの討議を持ち、学生側の要望で連絡協議会の設立をみるに至った。当時の学生代表達は学外の影響を受けていたにせよ自分達にかかわる問題を掘りさげて考え、体当りで解決しようという気力に溢れていた。対応する大学関係者も力を尽くしたという感が深い。四十四年度には専任教員で大学問題研究会を発足させ、学生の政治活動などへの対応を討論した。この時期の学生との討議で合意に達した事項は、現在も学生生活上のルールとして生きている。四十六年（一九七一）の秋には政治闘争に参加し活発な学内活動をする学生もあらわれ、イデオロギー闘争にあけくれたあの時期、その渦中にいた学生・教職員にとっては、今も尚その意義を問いつづけさせられる重い日々であった。

全国的に、昭和四十八年（一九七三）から昭和四十九年（一九七四）にかけて、学生運動の嵐が収まってきた。

学院大学学生会執行部は昭和四十九年（一九七四）十月、「学生の憩いの場」をつくる計画に資金提供を含めて取り組み、昭和五十年（一九七五）四月、管理棟南側の地に「木花里園」と呼ぶ憩いの庭園が完成した。庄野英二学長は六月十日、学生会執行委員会と緑化委員会に庭園美化とその努力に対して感謝状を授与した。

すぐ後に、図書館建設が具体化し、そのために庭園の一部はその敷地として消えたが、現在も、図書館と管理棟の間にある学生手づくりの木花里園では五月には青葉が、秋には紅葉が影を落し、四季咲きのバラがにおう憩いを与え続けている。

学生会活動は低調な時期もあったが、昭和五十四（一九七九）年度以降はクラブ育成を中心とした地道な歩みを続けた。

学生たちが生き生きと全力を注ぎ、楽しい思い出になっているのが大学祭だ。

大学祭は昭和四十二年（一九六七）十一月に第一回が開催された。テーマは、「学生の平和への役割　その発見と努力――最初の一歩――」。大学祭のテーマ・企画を見ていくと、学生たちの意識・感性、それぞれの時代の

ありさま、空気がうかがえる。第二回　昭和四十三年（一九六八）は「状況への参加――創ろう私達の歴史を」、第三回　昭和四十四年（一九六九）は「変革のいぶき――停滞から立ち上がろう」、第四回　昭和四十五年（一九七〇）「男と女　女とは」、第五回　昭和四十六年（一九七一）「飽くなき歩み」だった。昭和四十三年から昭和四十四年にかけて、日本では、日大や東大などでの学生紛争が拡大。パリでは学生・労働者がゼネストを決行、「五月革命」と呼ばれた。全米にベトナム反戦運動が広がっていた。秋の恒例行事として続いていたが、学生の希望で第九回（昭和五十一年五月）から、大学の丘に緑あふれる五月に変更し、「若葉祭」と名づけられた。

大学祭の企画・運営は全て学生の手によって自主的に、それぞれの役割を担って、責任をもって行われてきた。日頃のクラブ活動の成果を発表する舞台であると同時に、趣向をこらした模擬店もならぶなど祭りの雰囲気を楽しむ色彩が強くなっていた。大学祭は、多くの友、生涯の友と出会える場にもなってきた。

昭和五十七年（一九八二）まで「若葉祭」と呼ばれていた大学祭は、昭和五十八年（一九八三）秋から、「葡萄祭」と呼び名を変えた。庄野英二学長は「大学通信」五二号に「葡萄祭」に寄せてと題する一文をしたためている。

去年迄の若葉祭にかわってこの秋は葡萄祭が開かれる。ヴァッカス（注：ギリシャ神話の酒の神）と　そして君らの青春を　声も高らかに讃えるがよい。この丘は　昔、葡萄や蜜柑の果樹園だった。それがリルケの果樹園になった。　君たちは図書館の　葡萄唐草の下で本をひらく　あの青銅の葡萄唐草は　絹街道をこえてきた。　アジアの西のはずれ　ヨーロッパの東のはずれ　豊沃な三日月、デルタ地帯が葡萄の原産地だ。

この年の葡萄祭のテーマは、計画段階では「0と無限の接点に於ける幻想学の美」とされていたが、「美徳と感性との頂点――頽廃的ムードの中に流れる感性と知性の融合――」だった。翌年の昭和五十九年（一九八四）の第一八回葡萄祭のテーマは、「無限軌道――刹那の幻影そして出会いの予感――」、昭和六十年（一九八五）の第一九回は「玉石混交」、昭和六十一年（一九八六）の第二〇回は「夢幻飛翔」、昭和六十二年（一九八七）は「魅せます！今年のトレンド」。平成時代に入ると、平成二年（一九九〇）の第二三回のテーマは「発車オーライ―永遠の可能性を求めて」、平成三年（一九九一）第二四回は「Hi! Girls Enjoy Our Times!」、平成四年（一九九二）第二五回は「朝一で来て!!」。

平成六年（一九九四）の第二七回の葡萄祭はテーマはなかったが、エイズに関する知識を深め、感染者とともにいかに生きるかを考える展示室を設け、エイズ募金を呼びかけた。平成七年（一九九五）第二八回では、献血キャンペーンに取り組み、こどもを含め障害を持った学外の人たちも参加し楽しめるフリーマーケット、似顔絵コーナーなど、大阪狭山市の市民との交流を深めた。さらに、平成八年（一九九六）第二九回では、「GIRLS BE AMBITIOUS」のテーマを掲げ、大阪狭山市にある帝塚山学院大学ではなく、大阪狭山市の一員になる「一歩」となる大学祭をめざした。節目の平成九年（一九九七）第三〇回の葡萄祭は、「ハリキッテ行コウ！」のテーマで、老若男女が楽しめる大学祭をめざし、フリーマーケット、野菜市などをおこない、来客者の希望・感想を知るためのアンケート調査にも取り組んだ。

平成16年（2004）葡萄祭
（2005年卒『卒業アルバム』）

平成十一年（一九九九）三月二日の文学部教授会で、大谷晃一学長が「文学部日本文学科四回生の景山麻子さんが『ぶどうちゃん』という素晴らしいキャラクターを創作してくれました。すでに葡萄祭やサポートプログラムで活躍しています。卒業式で景山さんを学長表彰いたします」と報告した。

学生会の活動が落ち込んだ時もあった。平成十三年（二〇〇一）二月二十一日の大学評議会で、平成十三（二〇〇一）年度の次期学生会について、執行部員が三名しか集まらない状況が続いているとの報告があった。学生部が事態を静観しながら四月以降の学生会の活動によって然るべく対応することになった。三月七日に次期執行委員を希望している学生と大学学生部が話し合い、学生会規定の執行部員数には達していないが、教職員の協力を得て活動を続けることになった。その結果、学生会の執行部のメンバーが文学部四名、人間文化学部七名の計一一名に増え、規定の最低九名を超え、役割分担も決まり、半年遅れで正式発足すると、平成十三年（二〇〇一）六月十三日の大学評議会で、報告された。一時、開催が心配された葡萄祭も十月二十、二十一日の両日、行うことになり、急ピッチで準備に取り組んだ。「平成十四年度は学生会執行部の正常な進行が見込まれる」（平成十三年十一月二十一日の大学評議会記録）までに持ち直した。平成十四年（二〇〇二）の葡萄祭の開催予定日（十月十九日、二十日）が年明け早々に固まるなど、正常な状態を取り戻した。実際、プロのコンサートには五〇〇名以上の入場者があり、来場者も二〇〇〇人前後でトラブルもなく無事に終わった。

「海外」との交流にも動いた。

学院大学泉ヶ丘キャンパスの体育館を舞台に、帝塚山体操クラブ「パステル」が活動を続けている。この体操クラブは、昭和五十八年(一九八三)に短期大学が住吉キャンパスにあった頃に、学院の教職員や卒業生を中心に発足。平成二年(一九九〇)には会則を作り、担当の役員も決め、組織を整えて、自主活動を続けている。主な活動は、週一回のレッスンと、その発表の場として毎年十月に開催される「体操フェスティバルOSAKA国際大会」(於大阪中央体育館)に参加している。

「体操フェスティバル2002　OSAKA国際大会　第二〇回記念大会」(大会会長松本迪子人間文化学部教授)に出場のため来阪したフィンランド体操クラブ「アヤトマット」が、平成十四年(二〇〇二)十月二十二日に大学泉ヶ丘キャンパスを訪れ、公演と交流会を催した。狭山キャンパスでは、茶室で茶道部がお点前を披露した。

平成十七年(二〇〇五)十月十三日には、人間文化学部と泉ヶ丘中学校高等学校との共催で、デンマークのヴェステロン エリート体操グループの公演と交流会を泉ヶ丘中学校高等学校で開催された。飯田貴子人間文化学部選出大学評議委員は平成十七年九月二十一日の大学評議会で、この海外交流を事前に報告したうえで、「河内長野市は市をあげて同団体との交流会を開催していることもあり、本学にて同グループの公演と交流会を開催できることは大変貴重なことである」と位置づけた。

平成二十四年(二〇一二)十月、スウェーデンのジュミックス・イ・ヴェストが大学祭で公演した。

人間科学部情報メディア学科一回生川端優介が平成二十三年(二〇一一)七月三十一日から八月五日まで米国・サンディエゴで行われた「マイクロソフト オフィス スペシャリスト(MOS)世界学生大会2011」のパワーポイント部門に日本代表として参加、九位の成績を収めた。川端優介は、MOSの「世界学生大会2011日本大会」のパワーポイント高等学校部門で六月十七日に銀賞を受賞、日本代表に選ばれていた(二〇一一年六月二十二日と九月十六日の大学評議会記録)。

平成二十三年(二〇一一)三月十一日に起こった東日本大震災の復興支援に学院大学のボランティア学生三一人が協力した。財団法人リモート・センシング技術センター(RESTEC)がホームページに掲載していた震災支援の情報をもとに、震災の前と後の被災地(東北沿岸部一〇五箇所)の衛星画像地図の大判地図一セット(二一〇枚)を学内の大型プリンターで印刷し、四月十一日に第一回目を、五月に第二回目を現地に送った。これがきっかけとなって、RESTECが県や市区町村の被災自治体の災害対策本部などに衛星地図の無償配布を始めた。

第一四節　大学同窓会が船出

一　大学同窓会の発足

昭和四十七年（一九七二）五月三十一日に帝塚山学院同窓会の支部として発足した大学同窓会が、平成三年（一九九一）四月、独立した。庄野英二学監（当時）の提案を受け、学院大学に勤務していた第一期から第三期までの一一人の卒業生が支部を作ってから、一九年経っていた。

昭和四十七年（一九七二）十一月五日に、大阪グランドホテルで帝塚山学院同窓会大学支部の発会式・総会・懇親会を行い、動き出した。昭和五十一年（一九七六）五月には、帝塚山学院創立六〇周年および大学創立一〇周年の記念事業の一環として施工された大学図書館の建設に際して、「大学図書館建設ならびに充実のための募金委員会」として協力した。

支部の時代に一九年間、ずっと会長をつとめていた瀬川武美（一期生）が、独り立ちした大学同窓会の初代会長になった。二〇年を振り返りながら、「学校の全卒業生を会員として、会費を徴収する同窓会となると、親睦以外にも、会員や母校に貢献できるように組織的運営をしていく必要がある。これが私の理念である。（中略）大学同窓会は独自の同窓会活動を組織的におこなっていく体制に移行できた。長い冬が終わり、やっと春が到来した」と、新たな船出の抱負を語った（『紫苑』創刊号、一九九二年三月）。

山田博光学長と伊藤啓一事務局長らの理解と支援・協力もあり、大学事務所の一角に同窓会事務所もできた。大学と卒業生の「パイプ役」になりたいという同窓会の願いも、『大学通信』に「同窓会だより」のページを設けられることになり、実現した。

広報誌も「紫苑（しおん）」という名で平成四年（一九九二）三月十五日、創刊された。

当時、大学院研究室事務として勤務していた新井宏子（一七期生）はその広報誌創刊号のコラム「紫苑について」において、紫苑がキク科の多年草で、日本、朝鮮、シベリアなどに分布し、秋に紫色の小さな花をたくさん咲かせること、また、「源氏物語」の時代から愛されてきた花であることに触れた後、「帝塚山学院大学同窓会も、同窓生という小さな花をたくさん咲かせて、永遠に愛される会として大きく育つことを願い命名した」と広報誌の名称の由来を説明している。

二　母校支援に動き出す

独立二年目の第二代同窓会長を、大学を卒業してから二二年の一期生の桐本（旧姓宇野）文枝が引き継いだ。帝塚山学院同窓会大学支部として昭和四十七年（一九七二）五月に、五五〇名で出発した同窓会も、平成十一年（一九九九）春卒業の三〇期生を迎え、会員数一万一〇〇〇名の大所帯となった。波乱含みの世相ではあったが、大学同窓会は親睦を深め、会員と母校に貢献することを原点に、着実に歩んでいた。しかし、大学に吹きつける風は厳しさを増す兆しを見せつつあり、時代は転換期にさしかかろうとしていた。一八歳人口が、ピークだった平成四年（一九九二）には約二〇五万名だったが、二〇〇〇年には約一五一万名にまで大きく減る、と見られていた。受験人口の減少でどこの大学も例外なく、生き残りをかけて競争社会に踏み込んでいくことになる。帝塚山学院大学でも、平成十年（一九九八）四月から新学部「人間文化学部」が開設されるなど、さまざまな試みの中で男女共学化の検討も始まっていた。大学同窓会も、「母校も、二一

世紀への生き残りをかけ、その真価が問われている」と判断、将来の大学像をさぐる上で参考になる資料を集めるために、平成九年(一九九七)十一月に「緊急アンケート」を実施した。一万名の卒業生の中から、二〇歳代から五〇歳までの年代・学科が公平になるように配慮しながら、無作為で一四〇〇名を抽出。「大学で一番印象深いこと」「今後大学に望むこと」「新学部の共学化について」などの質問に四四四名(三二%)が回答を寄せた。

桐本文枝会長は「全学一致で　転換期の今こそ」とエールを送った(『紫苑』八号、一九九九年三月)。

いつまでも変わらないものなど、そう多くは存在しないと私も思います。ただうつむいて立ち止まっていては、何も解決しない、必要なのは現実を直視すること、また、この転換期を一つのチャンスととらえ、前向きに果敢にトライすることではないでしょうか。社会も個人も。私たちの母校、帝塚山学院大学もその例外ではなく、少子化の時代、これからも大学進学者数の激減期が続きます。このまま進めば二〇〇八年頃には、大学への進学志望者と全大学の定員総数が同じになるといわれています。まさしく、存続の危機に立たされています。

ここ数年、アンケート調査の実施、学長の要請に応え受験生の情報提供にも協力を行ってきました。親睦団体の枠をこえた活動であるかもしれません。けれど、母校のことを心配しない卒業生はいないはずです。

と指摘したうえで、次のように結んでいる。

サッカーでは、サポーターのことを『十二番目の選手』と呼ぶそうです。しかし、サポーター同様に私たち卒業生も心からの声援を送り続けるだけで、決してグラウンドに立って戦うことはできません。大学の将来は、学生たちの頑張りと、それを指揮する教職員の方々の肩にかかっていると思います。この正念場に、全学一致の協力体制をとり、全力投球で立ち向かってほしいと切に願うものです。一〇年後にも、狭山に、帝塚山学院大学が個性輝く女子大として存在し続けることを信じ、私たちも母校に一万一〇〇〇人のエールを送り続けようではありませんか。

平成十二年(二〇〇〇)五月、一期生の南(旧姓田中)真理が第三代大学同窓会長になった(『紫苑』一一号、二〇〇二年三月)。

一九九八年にはそれまで五〇年近くにわたって学院を支えてきた短期大学が「発展的に大学の新学部に改組される」という名目のもとに廃止され、大学に新しく人間文化学部が開設されました。一つの時代が終わって、新しい時代が来るということを間近にみて何とも言えない気持ちにさせられた出来事でしたが、あれから四年、わたしたちは今年、人間文化学部を卒業する新同窓生を迎えます。文学部の卒業生と合わせて総勢七〇〇名もの新会員です。

大学同窓会三〇周年を迎えた平成十四年(二〇〇二)五月に、英文一期の山田(旧姓浅野)昌子が第四代会長になった。『紫苑』一二号(二〇〇三年三月)に「心のふるさと　永遠に」という新会長のあいさつが載った。

数年前から、少子化や経済不況などの時代背景に伴い、大学、とくに女子大の存続が危ぶまれていることは皆さまご承知のことと思います。帝塚山学院大学も例外ではなく、生き残りをかけて大きな改革がなされようとしています。一九九八年に泉ヶ丘キャンパスに開設された人間文化学部が、二〇〇三年度より男女共学になることはその一つです。四年後には同窓会に男性会員を迎えることになり、それに即した対応も準備していかなければなりません。（中略）大学だけでなく帝塚山学院全体を立て直すための改革推進室が設けられ対策が講じられつつあるとお聞きしていますが、幼稚園から大学まで、全国でも数少ない歴史ある総合学園として、帝塚山学院の良き伝統を受け継ぎながらも時代に即したかたちで、魅力ある学院として発展してほしいと期待して止みません。

平成二十年（二〇〇八）五月、竹内（旧姓井本）純子（四期生）が第五代会長になった（『紫苑』一八号、二〇〇九年三月）。

現在会員数一万五八七七名です。全国は言うに及ばず海外にも多数の同窓生が生活しておられます。お一人おひとりが青春の一時期を大阪狭山の小高い丘の上のキャンパスで過ごしたという共通の思い出があります。（中略）母校がいつまでも健全で在り続けるために、また個々の同窓生の幸福のためにも同窓会が微力ながら協力できることは無いだろうかと考えます。

平成二十二年（二〇一〇）五月、西浦寿子が第六代会長になった（『紫苑』二〇号、二〇一〇年九月）。

季節は梅雨、高温多湿の雨降りは嫌なものの一つです。でも、私達に必要の無いものは何一つないと思いませんか。雨は樹木を育て、田に水を引き、稲を植える準備を促します。その昔、宮沢賢治は『雨ニモマケズ』を詠ったのです。私たちも『時代』という、雨や季節を上手く取り入れてゆかねばと思うのです。大学はあと数年で五〇周年。同窓会も総会を二七回終えたのですから、今日の一歩が歴史をつくるのだという重さを実感します。

三　二つの大震災、助け合いの輪広がる

平成七年（一九九五）一月十七日の阪神淡路大震災では、同窓生も被災した。

そのすぐ後の一九九五年三月発行の『紫苑』四号で、「一日も早く復興されますよう心からお祈り申し上げます」とお見舞いを伝えると同時に、調査はがきを同封して早くも支援に取り組むための呼びかけをした。そして、次のようなメッセージを掲げた。

被災した校友へ

不足している物、必要だが入手困難なものがありましたらぜひ、ご一報ください。またご安否やご住所の移動などお知らせください。

被災をまぬがれた校友へ

すでに震災直後より、被災地から登校する後輩のためにカセットコ

ンロ、ボンベなどを提供なさっておられる会員の方もおります。同窓の校友のため、後輩学生のため、提供していただけるものがありましたら同窓会事務局までご連絡ください。ボランティアにいかれた役員の話では男性用の靴（スニーカーなど）などが不足しているということです。ご協力よろしくお願いいたします。また、お友だちで被災された方の安否などもご一報ください。

調査はがきで、被災の生々しい様子や近況が次々と寄せられた（『紫苑』五号、一九九六年三月）。

地震の時、当時二ヶ月半のこどもがいて、おまけに主人が神戸市職員のためかり出されずっと家に戻ってこない日が続き、不安で不安で生きた心地がしなかったです。

「家、家族、職場は無事」とのほっとする知らせがある一方、「家屋は全壊。娘を亡くし、今後のことを考えるのが精一杯です」と悲しい便りもあった。

避難所になっている神戸の福池小学校対策本部からは、下着を届けたお礼の手紙も届いた（『紫苑』五号、一九九六年三月）。

みなさまより送っていただきました下着は、汗する毎日、どんなに重宝なものかしれません。避難所全員の人たち、男女とも最低上下一組はいき渡るように配られました。

平成二十三年（二〇一一）三月十一日の東日本大震災は同窓生をも襲った。同窓会は東北六県と栃木県、茨城県に住んでいる同窓生にお見舞いのはがきを出した。二〇一一年十月に発行した『紫苑』二一号は、「復興を願って」と被災した一〇人の同窓生の「現場からの声」を特集した。

仙台で牧師をしている伊藤（旧姓腰塚）ゆみ子（美学美術史学科五期生）は、大地震と巨大津波が残した爪跡を生々しく報告している。

わずかに残った田んぼを渡る風が、いつもの年とは違う臭いをかきたてます。それはむっとするような汚れた海の臭い。洗いきれない汚泥が粉塵となって鼻や口を襲います。（中略）女川では、まだほとんどの店が開いていません。遠くまで買い物に行きたくても、自動車は流されてありません。そんな中で、食料も日用品も分け合って生活しています。（中略）

余震は毎日のようにあります。ある方は急に机などにしがみつきます。すると間髪おかず、揺れが始まります。その時の恐怖に満ちた眼差し。夜も何度も余震のため、目が覚めます。そのため朝まで疲れが残ることはしばしばです。（中略）被災地の人々の中には、本当に助けが必要なのに、閉じこもり、心を閉ざしてしまって、助けの手さえ拒んでいる（それだけ傷が深いということ）方も、多くいます。（中略）

家を流された家族。絶対亡くなられたと思われる方。おひとり、おひとりの安否を確認しながら、直接目にした、むごい状況。先ずは、自分の家から持ち出せる役に立つものはなんでも、配って歩きました。そんな私たちのところに、親せき、教会、友人、支援の輪がぐんぐん広がって、海外からもいろいろなものが届けられました。（中略）

ボランティアには外国人が多くいます。ブラジル、韓国、中国、アメリカの方が目立ちます。また、津波から逃れようとした時、中国や韓国から出稼ぎに来ていた方たちがご近所のおばあちゃんや、足のご不自由な方をおぶって逃げてくださったので助かったという話は、いくつも聞いています。大きな地球家族ができつつあるように思います。

帝塚山学院大学時代の先輩、後輩、同窓生がメールで、電話で、手紙で語り合い、寄り添い、手をつなぎ、助け合い、気づかい、励まし、応援する…「学び舎の絆」が、苦境を乗り越えようとしている被災地の同窓生たちの背中を押した。

平成二十四年(二〇一二)五月十九日の第二九回総会で、西浦壽子会長が前年から募集してきた同窓会の愛称について、「紫苑会(しおんかい)」に決めたことを報告した。

平成二十六年(二〇一四)七月七日現在の同窓生は、一万八一九三名を数えている。

第二章　国際理解・国際交流

第一節　国際理解教育研究所

一　ユネスコ精神を掲げ

帝塚山学院は戦後、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の提唱する「国際理解教育」の精神を重要な基礎の一つに据え、その実践の上で全国の中心的役割を果たそうと志してきた教育機関である。

昭和四十六年（一九七一）の国際理解教育研究所開設は、まさにそれを象徴し、具体化する出来事であった。

全国組織の形を取るこの研究所は事務局を帝塚山学院大学におき、初代所長には帝塚山学院院長・学院大学学長の西本三十二が就任した。西本は研究所にかける意気込みを以下のように記している。

第二次大戦後、核兵器をはじめ、戦争科学の著しい発展によって、もし、世界が二つの陣営に分れて、第三次世界大戦が起るとすれば、人類の破滅は必至である。これを未然に防ぐために、国際連合において世界各国の代表が集って世界平和と国際親善への努力が重ねられている。（中略）その一つの拠りどころは、教育、文化、科学の世界的規模による国際的協力を通して世界平和を達成しようとするユネスコの精神とその実践である。

（国際理解教育研究所発行『国際理解』創刊号、昭和四十七年一月発行）

ユネスコは大戦終結直後の昭和二十一年（一九四六）に創設された国連の専門機関であり、日本は国連本体より早い昭和二十六年（一九五一）にこの機関への加盟を果たした。ユネスコと帝塚山学院の結びつきは早く、世界各地に制度化されたユネスコ協同学校の研究学校としてまず中学部が昭和三十一年（一九五六）、次いで昭和三十七年（一九六二）には高等部がそれぞれ指定されている。

中学部、高等部には生徒自身がユネスコ精神の実践を図るユネスコクラブが相次ぎ結成され、学院大学開学直後の昭和四十二年（一九六七）には中学部、高等部に大学のクラブも加えた連合組織が発足した。

昭和四十一年（一九六六）に産声を上げた学院大学教養課程カリキュラムに、本学の独自色を、と「国際理解論」「国際理解教育論」などの講座が開講されたのは、自然な流れだったのであろう。全国に先駆けた講義内容だけに、当初は科目としての認可が困難視された、とも伝えられる。

それが実現に至ったのは、学院ぐるみの多年にわたるユネスコ教育の実績が評価されたものと見ることができる。むしろ学院大学は全国的なユネスコ活動にあって、国際理解教育の拠点としての役割を果たしていたと捉えるべきなのであろう。昭和四十三年（一九六八）八月、ユネスコの韓国派遣日本学生団の団長をつとめたのは本学の牧野博彦助教授（後に副学長）で

あった。牧野助教授はさらに昭和四十五年（一九七〇）九月、総理府が派遣した青年日本代表の一一名を率い、米国、メキシコ、チリ、アルゼンチン、ブラジルをほぼ二ヶ月がかりで巡る長旅の団長役もつとめている。本学の国際活動に対する信頼が、政府レベルでもきわめて高かったことを物語るものである。

二　関西財界を支えに

そうした流れの延長上に誕生したのが、本学を拠点とする国際理解教育研究所である。設立総会は昭和四十六年（一九七一）二月二十五日、大阪国際サイエンスクラブで開催された。

もともとは本学を中心に運営されてきた国際理解教育研究会があり、それが発展的に解消し、新たな全国組織としてスタートを切った、と位置づけることができる。

その組織編成は森礒吉学院理事長が副会長を、さらに西本三十二学長が研究所長を、また牧野博彦助教授（直後に教授に昇格）が事務局長をそれぞれ兼任するなど、実務の中核は本学が担う態勢を敷いた。その一方で、会長は森寿五郎阪神高速道路公団理事長（関西電力相談役）、また理事には芦原義重関西電力会長、川勝伝南海電鉄社長、阪本勇住友電工社長、酒井芳申酒井鉄工所社長、寺尾威夫大和銀行頭取ら関西経済界の錚々たる重鎮が、全国諸大学の研究者らとともに名を連ねている。

本学院を陰に日なたに見守ってきた関西経済界上げての支持が窺え、同時にその熱い期待が明確に感じ取れる陣容である。

研究所は早速、行動を起こす。同年八月、長野県にある学院の施設「聖山校外学舎」で、国際理解教育夏季セミナー、また十月八日には大和銀行御堂筋支店を会場に第一回国際理解講座を開催。国際理解講座では外務省職員を招き「日本を巡る米中関係の諸問題」をテーマに取り上げている。その年はキッシンジャー米大統領補佐官による電撃的な中国訪問があり、米中和解の歴史的うねりのただ中にあった。こうしたテーマの設定にも、時流を鋭敏につかんだ着実な門出の様子が想像できる。

研究所が何よりも力を注いだのが、全国高校生に広く参加を呼びかけた論文コンテストである。初代所長の西本三十二はその意義を「（平和と相互理解のユネスコ）精神が普及し、行動となって現われる世界を招来するには若い世代の心に訴え、その行動に期待するよりほかはない」（『国際理解』二号）と説いている。

世界平和、国際理解への思いを綴る論文コンテストは昭和三十七年（一九六二）以来、学院として取り組まれ、それを研究所が引き継いだ形で、第一回の発表が昭和四十七年（一九七二）一月二十二日に行われた。青森、神奈川、埼玉各県などからも含む計一四名が入賞者に選ばれ、これらの高校生は第一回海外親善使節団として同年三月、韓国を訪問した。

論文の募集はその後、一般の社会人にも広げられ、国際理解教育奨励賞が研究所によって設けられた。昭和五十一年（一九七六）五月には第一回入賞者が決定。計四名と二団体が選ばれた。うち特別賞は「国際理解教育の理念と実践」を題目にした東京在住のＮＨＫ勤務・村山卓也氏に贈られた。

もう一つの柱である国際理解講座は、当初から地域との一体化を心がけ、毎年ほぼ五回前後のペースで進められてきた。平成六年（一九九四）からは、大学所在地である大阪狭山市にオープンした同市文化会館「ＳＡＹＡＫＡホール」でも定期的に開催されるようになり、これはその後も継続された。地域住民と大学による知的交流の必要を感じた市当局による要請に対し、

本学としても積極的に応じたいきさつがある。

第二節　国際理解研究所

一　大学付置機関として

これと前後して、研究所には組織上の重要な進展があった。

平成五年（一九九三）四月一日、国際理解教育研究所は解消、同時に帝塚山学院大学国際理解研究所が本学の付置機関として発足した。旧研究所が発展的に解消したものである。山田博光学長（当時）を中心とする本学教学小委員会は平成三年三月、国際化と情報化を柱とする学院教育将来計画の骨組みを発表。大学付置の国際理解研究所の構想は、国際化に備えた学院教育の一環としてすでにこの中に盛り込まれていた。

新たにできた研究所規程によれば、その目的は「国際理解および国際理解教育についての研究・調査を行うとともに、本学の国際交流および、学院ならびに我が国のこの分野の振興・発展に寄与する」とある。従来に比べ、活動の対象を教育だけにとどまらず、国際理解の研究からさらには国際交流の実践にまで広げたことになる。初代所長には山田学長が就任した。

この一九九〇年代初頭は、国際理解・国際交流の取り組みが大学全体できわめて活発になされた時期として注目される。東西冷戦の終結という世界史的な時代の流れを背景にしたものと位置づけることができるだろう。

「大学開学二五周年記念国際交流基金」創設の事業もその重要な一環である。「本学では、豊かな社会性と新時代にふさわしい国際感覚をそなえた幾多の有為な女性を世に送り出してきたが、二一世紀を目前にして、尚一層力を入れているのは国際交流である」（『大学通信』七七号）との理念のもと、大学創設二五周年の時期にあわせて平成四年（一九九二）一月、「国

際交流基金」開設のための資金募集が開始された。募集要項によると、目標は一億五〇〇〇万円。

帝塚山学院大学は昭和四十一年の開学以来、そのときまでにカナダ、米国、オーストラリア、フランス、ニュージーランド、中国、ドイツ、インド、台湾の九ヶ国・地域から計五八名の外国人学生を受け入れてきた。一方、本学からは計四八名の留学生をカナダ、米国、ニュージーランド、中国の四カ国に派遣。あわせて教員レベルの交換も行われ、教育・研究の両面からの国際交流・理解の推進には安定した資金が必要、との判断があった。

その結果は、平成五年十二月末の締め切りの段階で目標はいくぶん下回ったものの、一億二四三七万円の募金が寄せられ、満足できる内容を達成した。

募金に応じてくれたのは卒業生、在校生、教職員ら個人が計八〇一名、連合同窓会など団体が六、それに企業が四九に上った。すでにこの時期、日本はバブル経済がはじけ、右肩上がりの成長の終焉が明らかだったにもかかわらず、金融、建設、電鉄、書籍、各種製造業など幅広い在関西企業から快く協力の手が差し伸べられたことは、注目に値する。この事業もまた、関西経済界の手厚い支援があって成立したのである。

こうしてスタートした基金は平成六年の初年度事業として、①本学が派遣する交換留学生に対する学習奨励補助（六〇〇万円）、②本学が選考した派遣留学生に対する学習奨励補助（一〇〇万円）、③本学の専任教員に対する海外派遣補助（五〇万円）、の三つに対し、それぞれの金額が計上された。この基金はその後も、本学の国際交流事業を推進するのに欠かせない後ろ盾の役割を果たしていくことになる。

二　世界を視野に

二〇世紀も終りに近づいた平成十一年（一九九九）三月、本学学生はグローバルな異文化理解の舞台に参加する機会を得た。国際理解研究所が、三菱国際財団、ＫＤＤなどの諸団体と企画し、文部省、外務省、通産省の後援を得て進めた東アジア五大学による国際テレビ会議である。中国から北京大学、香港大学、韓国から又石大学、そして日本からは東京大学と並び帝塚山学院大学が参加した。

会議は五地点をテレビ回線でつなぐ形で二日、十日の両日、開催された。本学からは国際文化学科中国文化コースの学生一〇名が、大阪市内の大阪ＫＤＤテレビ会議室に参集。異文化理解、環境問題などをテーマに、二日間で計一〇時間におよぶ討論をこなした。その雰囲気は「日本での参加大学が本学と東京大学ということで、開始後やや気後れしているように見受けられた彼女たち（注：本学からの参加学生）が、実際に会議が始まると、議論のうえで五大学を完全にリードしていた」（『大学通信』九一号）と記されている。このあと、北京大学とのテレビ会議は大学に場所を移して、国際文化学科中国文化コースと北京大学の間で数回行われている。

その後、地球上の多地点をテレビ回線で結ぶ会議は急速に普及していくが、その先駆的役割を演じたこの会議は、メディアからも強い関心が寄せられた（同年三月十一日付朝日新聞など）。

同じ年の九月十八日、国際理解研究所は、こんどは日本ユネスコ連盟との共催で「『平和の文化』の創造に向けて」と題した公開シンポジウムを開催した。翌平成十二年（二〇〇〇）は二〇世紀最後の年として、ユネスコの提唱で国連が「平和の文化国際年」に定めていた。大阪市の大阪ＹＭＣＡ会館を会場に開かれたこのシンポジウムは、哲学者鶴見俊輔、恵泉女学

園大学教授内海愛子、龍谷大学教授中村尚司の三氏がパネリストとして参加。副題に「寛容・和解・対話をキーワードとして」を掲げ、「平和の文化」の理念と実践について議論を戦わせた。

その内容はシンポジウムを後援した読売新聞の九月二十四日付紙面で詳報された。

ユネスコという大きな影響力を持つ国際機関の、本学に寄せる信頼と期待を改めて示す機会にもなった、といえるだろう。

第三節　国際女子の育成

一　交換留学生

帝塚山学院大学は開学の黎明期から若者たちにとって、世界に開かれた学びの場であった。同時にまた、世界に雄飛する跳躍台でもあった。

開学二年目の昭和四十二年（一九六七）、英文学科一回生の岩崎慶子が快挙を遂げる。当時、最も権威があるとされた毎日新聞社主催の全国大学「英語弁論大会・関西大会」が六月二十七日に開かれ、そこで五人の入賞者に次ぐ準入賞を果たした。すでに経験豊かな他の三六大学からの参加者を相手に、岩崎慶子は自らの米国留学の体験を踏まえ、国際理解のためにはまず自国とその文化を知る必要性を訴えた。発音は誰にも負けず流暢だった、との評もあった、という。

岩崎慶子はその後、さらに活躍の場を広げるが、それについては後述する。

海外に開かれた学びの場、としての本学は、海外からの留学生受け入れを昭和四十四年（一九六九）に始めている。第一号はカナダのビクトリア大学二年ポーラ・アレン、米国のカリフォルニア・ウェスタン大学四年メアリー・エレン・クインタナの二人。ポーラは日本語、そしてメアリーは日本語と日本の歴史・文化の学習が目的であった。

本学はこのころからすでに西本三十二学長を中心にカナダ、米国などの諸大学との間で、留学生交換制度の構想を進めていた。この制度によれば、留学生の往復旅費のほかは大学の入学金、授業料、食費、部屋代などを双方の大学が負担する。折しも昭和四十五年（一九七〇）、北摂・千里丘陵を

舞台とする万国博覧会の開催を控え「世界は一つ」の気運が関西中心に高まっていた。そうした時代の流れの先端を、本学が率先して歩もうとしていたのである。

一方、本学から留学生の第一号が海外に旅立ったのは昭和四十五年（一九七〇）秋のこと。米川和世（同年三月卒業）、松代侑子（英文四回生）の二名がカナダのビクトリア大学に、また庄野晴子（同）がカナダのブリティッシュ・コロンビア大学にそれぞれ派遣された。その一人、庄野晴子は「万国博会場と同じくらい大きなキャムパスで、さまざまな年代のさまざまな個性と背景を持った学生、先生と出会うことは、大変興味深く楽しいことです」（『大学通信』一三号）と、気持ちの高ぶりを現地からつづってきている。

また同じ年、本学はブリティッシュ・コロンビア、ビクトリア、カリフォルニア・ウエスタンの三大学などから計六名を交換留学生として受け入れた。

交換留学制度はその後も、順調に進展した。昭和四十六年（一九七一）には西独（当時）チューリンゲン大学、ビクトリア大学などから計五名を受け入れ、本学からは三名を派遣。この三名のうちの一人が昭和四十二年の英語弁論大会・関西大会で活躍した岩崎慶子で、すでに本学を卒業していたが、大学院生として二五〇〇ドルの奨学金を与えられてブリティッシュ・コロンビア大学に送られた。

翌昭和四十七年（一九七二）には日本政府による奨学金支給制度が初めて本学学生にも適用され、その支給を受けて英文学科三回生岡島加代子が八月、ブリティッシュ・コロンビア大学に旅立った。この奨学金は当時、全国の二六大学が対象になり、本学はそのうちの関西では唯一の私学であったことは特筆に価しよう。

海外から本学への留学生はその後、カナダ、米国、西独、オーストラリアに加えてフランス、インド、台湾へと国・地域の幅を広げ、昭和五十六年（一九八一）には中国から初めて上海・業余工業大学の彭佳紅を迎えた。日本の児童文学研究を志した彭佳紅は、庄野英二学長（当時）に師事し、その後は本学において専任教員の道を歩むことになる。

二　英語パワー

このように国際社会を視点に据えた本学の特徴は、英語学習への意欲という形でも発揮される。

昭和五十一年（一九七六）十月十六日、大阪市の大阪弁護士会館で開かれた大阪・サンフランシスコ姉妹都市協会主催の英語弁論大会・大学の部で、出場した本学英文学科三回生・川戸葉津子が大阪市長賞を獲得。本学では当時、英語を母国語とする教員の招聘が進められており、その教育指導が実ったものといえるだろう。

その効果は演劇の分野でも示される。昭和五十五年（一九八〇）十二月二十一日、藤井寺市民ホールで開催された関西英語連盟主催のドラマコンテストで、本学のＥ・Ｓ・Ｓ（英語研究会）が木下順二作「夕鶴」を演じ、六つの賞のうち四つの賞を獲得する活躍ぶりを見せた。キャプテンの本学英文学科四回生高橋祐子によれば、三ヵ月前から週末も含め連日夜遅くまでの練習を重ね、その間、全体のイメージにも三回にわたって変更を加えたという。「もう本番はこわくない。メンバーの愛があふれる舞台のなかでは何もこわくない。最後の最後まで、あきらめずにガンバロー」（『大学通信』四四号）と、本番に向けた闘志を披露している。英語、そして演劇にかける当時の学生の意気軒昂ぶりを、如実に示した一幕ではある。

昭和五十七年(一九八二)十月、全国語学教師協会(ＪＡＬＴ)の第八回国際大会が本学を会場に開かれた。ちなみにその時の同協会会長は、本学のジェームズ・ホワイト教授。この開催会場に本学が選ばれたこと自体、会長の存在に加え、本学の語学教育の水準と、それに対する評価の高さを物語るものであったのは間違いない。日本で開かれるこの種の会合では最大級の八五〇名以上が海外からも含め参加。九日から十一日までの三日間、うち約一一〇名の参加者が延べ一五〇時間以上の研究発表を行い、特設されたワークショップ、展示コーナーなどでも活発な意見交換がなされた。

展示コーナーは本学体育館に設けられ、四〇以上の出版社が参加、世界中から取り寄せた最新の語学教材が並べられた。開会式後の記念講演で、文部大臣も務めた教育学者・永井道雄氏が述べた「他国の人を言葉のみでなく、文化的障壁を乗り越え人間として見ることが大切」という精神が終始、貫かれた国際会議であった。

三　国際文化学科

このように国境を越えて学生、教員が活発に行きかい、同時に語学教育でも先進的な取り組みをしてきた本学に「国際文化学科」の新設を、という気運が高まったのは当然の流れであったのだろう。

開学以来、本学の国際理解教育を担ってきた牧野博彦教授が『大学通信』六五号(昭和六十三年四月発行)に寄せた一文によると、同学科開設は昭和五十八年(一九八三)、当時の庄野英二学長から提唱されて以来、検討が重ねられてきた。四年間の論議を経て昭和六十二年六月二十六日、文部省に「国際文化学科」設置の認可を申請。翌昭和六十三年(一九八八)四月、定員百人での開設に至った。東アジア(中国語圏)、北米、太平洋(いずれも英語圏)の三コースからなり、「これらの地域の文化、実用語学に習熟し、同時に日本文化の紹介と外国人に日本語を教えうる国際女性の育成」を目指すことをうたった門出であった。

それに合わせて大学図書館は関係する分野の強化につとめ、とりわけオセアニア・南太平洋に関しては歴史、地誌、文化にわたる二五〇〇冊が新たに増強された。いずれもオーストラリアから輸入されたものであった。

南大阪に位置する本学として、関西国際空港の泉州沖開港を平成六年(一九九四)に控え、地域の国際化を期待し、教育機関としてもそれに応えようと構想したものであろう。同じ名称の学科を持つ大学は当時、全国を見渡してもほかに西南学院大学(福岡市)、愛知学院大学(愛知県)と、それに本学と同時に認可された北海道東海大学(札幌市、学部規模)、帝京大学(東京都)、フェリス女学院大学(横浜市)の計五大学だった。

牧野博彦教授は上記の『大学通信』の中で「一見時流に迎合した流行学科のように受けとられがちであるが」とした上で「本学二十余年の歴史に一つの期を画すであろうと思われる新学科設置という事実を、われわれは厳しく受けとめる必要があろう」と決意を述べている。目前に迫った一九九〇年代は全国的に大学生急減が予測され、すべての大学がその現実への対応を迫られていた。そんな環境の下での国際文化学科誕生であった。

四　「元気印」の国際女子たち

大学全体が直面する厳しい状況にあって、この国際文化学科から「日本文化を外国人に教えられるような」、当時の流行語を借用するなら「元気印」の国際女子が、何人も巣立っていったのは間違いない事実である。

平成六年(一九九四)卒業の青木律子もその一人である。四回生の夏休み

を利用し、アフリカ南部カラハリ砂漠一帯をトラックで一六日間かけ、走破する旅をやってのけた。

以下は『大学通信』八一号に青木律子が寄せた体験記から。

英国企業主催のこの旅行は、寝場所は参加者がめいめいで用意する。砂漠のブッシュに自分でテントを張り、料理はもちろん燃料の薪や水汲みもすべて独力で。改造された軍用トラックの荷台に国際色豊かな二〇名あまりの旅行者が詰め込まれ、赤土の道路を突っ走る、まさに「私たちの脳ミソをふっとばしそうにもなる」ハードな旅程であった。

このように黄熱病、マラリア、コレラの蔓延する道なき道を、困難を乗り越え進んでこそ、初めて「アフリカ大陸の表情の豊かさ、文化の違い、歴史の深さを感じ取ることができる」と実感する。砂漠でハリケーンに遭遇し、「突然のヤリのようなスコール」を浴び、五〇度の猛暑を耐え抜いた体験を踏まえ、「水の大切さ、野生動物の保護、森林の必要性から始まり、日本の援助に至るまでを私に改めて考えさせてくれた」旅であった。

もう一人、中村博子は国際文化学科三回生だった平成八年（一九九六）の冬休みに、ユネスコの主催する「世界寺子屋運動」に参加してカンボジアに旅した。

この運動は教育の機会に恵まれない途上国の子どもや、字の読めない成人を対象にする世界規模の識字活動である。二〇年以上に及ぶ内戦の混乱をようやく脱しようとしていたカンボジアは、当時、識字教育を最も必要とする国の一つであった。

内戦で学校に行けなかった多くの大人、子どもが文字を学ぶ姿を目の当たりにした中村博子は「全員が授業に対して真剣に参加していた。退屈している人は一人もおらず、みんなが生き生きと学んでいるという印象だった」（『大学通信』八七号）とつづっている。そして「私でも何らかの形で彼らと関わっていけるのだという勇気が湧いてきた」とも。

国際文化学科最後の学生となった三井明子は、中国の国家漢語弁工室主催のスピーチコンクールに出場、優秀学生として中国での漢語キャンプにも招かれた。卒業後は北京大学大学院に進学し、現在は博士課程で、勉学に励んでいる。

このような学生を何人も生み出せたことこそが、国際文化学科設置の目に見える成果であり、それは大学全体の財産として後の世代に引き継がれていくことになる。

第三章　二一世紀の帝塚山学院大学

第一節　学部再編と共学化

特色をどう発揮するか、知恵を出し汗を流して、中身の充実を図るために内からの改革・改善の地道な努力を積み重ねた。

学部在学生の数が大学の勢いを見極める物差しになる。

平成十三(二〇〇一)年度からの在籍学生数の推移をみると、人間文化学部は横ばい状態を保っているが、文学部は下降線をたどっている。対策をとりはじめた。文学部と人間文化学部の学科の名称変更だ。

大谷晃一学長は平成十三年(二〇〇一)二月二十二日の理事会常務委員会で、「文学部と人間文化学部の両学部で学科名称の変更が承認されたので、手続きに問題がないかどうかを文部科学省の大学設置・学校法人審議会の仮審査にかけるため、二月二十一日付で資料を提出した」と報告した。新しい学科名は次の通り。

	旧	新
文学部	日本文学科	日本文学文化学科
	英文学科	英語コミュニケーション学科
	美学美術史学科	芸術学科
	国際文化学科	国際文化理解学科
人間文化学部	文化学科	情報メディア学科

一　学部再編の具体策

二一世紀に入って、大学をとりまく環境は大きく変わった。少子化によってもたらされた大学教育での需要と供給の逆転現象、規制と助成を受けてきた政府の財政危機による高等教育予算の削減という外的な変化が、大学を直撃し、その存亡さえ左右しかねない影響力をふるいはじめている。こうした中で浮かび上がってきた最も重要な動向は、「大学の市場化」だ。学生の確保、教育内容の質の向上、地域・社会との関わり、出口としての就職指導の充実、経営の効率化など、あらゆる面で厳しい競争の渦の中に置かれている。このような「市場化時代」を生き抜くために、帝塚山学院大学は自らの個性や

在籍学生数の推移

年度	学部	一回生	二回生	三回生	四回生	四回生以上	計
平成13(2001)	文	172	222	390	338	37	1,159
	人間文化	300	332	378	358		1,368
平成14(2002)	文	155	161	212	376	33	937
	人間文化	299	289	338	375	11	1,312
平成15(2003)	文	145	146	156	206	28	681
	人間文化	359	285	293	328	13	1,278
平成16(2004)	文	108	136	144	174		562
	人間文化	382	342	293	296		1,313

平成十三年(二〇〇一)五月二十四日の評議員会で、大学を取り巻く厳しい状況が議論の焦点になった。平成九(一九九七)年度には文学部だけで六〇〇名程度の入学者がいたのに、平成十三年度の文学部は一七二名(定員四六〇名)、単純に計算して三分の一以下になった。平成十三(二〇〇一)年度は、大学全体つまり文学部と人間文化学部の二学部あわせて五〇〇名を割った。また、収入の不安定要素になる中途退学者も平成九年(一九九七)で四四名、平成十年は四二名、平成十一年は五六名、平成十二年は四一名と多い。入学者が減りつづけていることについては、同窓生などからも懸念の声がではじめた。

平成十四(二〇〇二)年度の入学者数は文学部一五五名(定員四六〇名)、人間文化学部二九九名(定員三〇〇名)だった。

中西進学院長は平成十四年(二〇〇二)四月十八日の第五三二回理事会常務委員会で、大学改革の具体的な提案をした。平成十三年(二〇〇一)七月二十六日の第五〇三回理事会常務委員会で改革の基本方針が決定され、大学改組検討会議で検討され、固まったものだ。

- 文学部四学科を二学科に改編する。
- コミュニケーション学科の申請を今年五月末に行い平成十五年度から開設する。
- 国際文化学科を平成十六年度から国際理解学科に名称変更する。
- 人間文化学部を平成十五年度から男女共学にする。
- 新しい文学部二学科の入学定員をそれぞれ二三〇名ずつとする。

討議の結果、上記提案は原案通りに承認された。

平成十三年(二〇〇一)四月、第九代学長に就任した皆川基学長は、文学部の学科を四学科(英語コミュニケーション・日本文学・芸術・国際文化)から コミュニケーション学科と国際理解学科の二学科に改編する背景について、平成十四年(二〇〇二)五月九日の評議員会で説明した。

近年の複雑多様化した社会や、大学を目指す者の多くが教養型教育より、実務実践型教育を望む傾向が強い中で、文学部が学生募集にこ こ数年苦戦を強いられてきました。この状況から抜け出す方策として、学科の再編成を行って学生のニーズに対応し、加えて今後の変化に即応できる構成に改めたいと考えております。すなわち、既存の英語コミュニケーション学科、日本文学科、芸術学科の三学科を廃止し、国際性に加えてビジュアルな感性の涵養をめざしたコミュニケーション学科に改編することを計画しております。入学定員はコミュニケーション学科二三〇名とし、残る国際文化学科は今後の学科名称変更も企図して二三〇名とする。この変更は平成十五年四月から実施いたしたい。

この説明に対して、評議員から、コミュニケーション学科というのは受験生に分かるのか、また、国際文化学科を国際理解学科と名前を変えることで二三〇人の定員を確保できるのか、と言う趣旨の質問があった。皆川学長は次のように答弁した。

コミュニケーションというのは、新しい智の学問であり、世界に通用する言葉でありまして、コミュニケーション学科は既に一八大学で

置かれています。国際文化学科は一年遅れで国際理解学科への変更を検討しています。その目標は、地域に根ざしつつ、国際関係の枠組みやシステムを学ぶ学科として、地球市民理解、国際文化理解、国際ビジネス理解の三群に分けて、実習的なケーススタディをすることを現在考えています。

文学部は、平成十五年(二〇〇三)四月から、コミュニケーション学科と国際文化学科の二学科体制で船出した。

二　人間文化学部の共学化

さらに、皆川学長は人間文化学部を男女共学にしていく理由についても説明した。

人間文化学部は情報メディア、心理学関係を主体とする実学的な学部であり、女子大としての特色を出しがたく、むしろ共学によって、教育的効果が出せる学部です。平成十年度の学部創設時から共学は望まれていたのですが、文学部が女子のみであったことから、当面、女子大でスタートしました。しかし、近年、女子高校生の女子大離れはますます顕著になっており、特にこのたび設置を予定しています大学院では共学は欠かせないものです。平成十五年度入学生より、男女共学制の実施をお諮りするものです。

この提案説明に対して、評議員から、共学が将来よりよい結果をもたらすという客観的データがあるのかという質問が出され、皆川学長は次の通り答弁した。

人間文化学部は設置の時から共学を検討してきた学部でして、教育内容から見ましても共学向きです。将来的には、両学部とも共学でいくのが理想的だと思っています。しかし、文学部の方は、改革終了時にどれだけ、内容的に共学向きになるのか、この共学問題と定員問題を検討することにしています。学院のこれからの発展のために、男子を阻むようであっては、大きなマイナスになるのではないか。女子生徒の九八％もすでに共学を希望しているというデータがはっきりと出ていることを考えると、幼稚園から大学まである本学の色々な点から男子を阻むデメリットの方が、将来的に大きいのではないかと思っています。

理事会はこの提案を受け入れ、平成十五年(二〇〇三)四月人間文化学部は男女共学となった。名門女子大として関西にその名を知られた帝塚山学院大学の大きな転換である。皆川学長はこの日開かれた理事会でも、文学部学科改編と人間文化学部男女共学について同様の説明を行い、議案は可決された。

三　アドミッションセンター発足

こうした改革の動きの中で、アドミッションセンターが発足した。平成十五年(二〇〇三)四月十六日の大学評議会で、三宅泉ヶ丘キャンパス事務局長が平成十五年度の活動方針要旨を以下のように報告した。

・文学部入学者数二〇〇名を目標とし、人間文化学部は少なくとも現状を維持する。
・地方での高校回りを重視し、地方の教育委員会と連携し、教員対象講演会を実施する。

平成十七年(二〇〇五)十月十九日の大学評議会で、入学前事前教育プログラムの導入について報告された。アドミッションセンターが企画したプログラムで、指定校、専願推薦、ＡＯ入試合格者および併願推薦の手続き者に対して、英語と国語の通信添削講座を行う。事業はベネッセが代行するが、大学名での実施となる。

入試委員会ではすでに承認。合格通知とともに連絡し、プレテストを三回実施した後、テキストを送付、通信講座を始める。参加は自由で、必要経費は一人当たり、四〇〇〇円程度、総額三〇〇万円程度。アドミッションセンターの予算で実施する。ＰＲの目的で、高等学校の進路指導部にも案内する。

第二節　大学院の設置

皆川基学長は平成十四年(二〇〇二)五月二十二日の理事会で、人間文化学部を基礎とした大学院設置の構想を明らかにした。同学長は、平成十(一九九八)年度に設置した人間文化学部の文化学科と人間学科が、平成十三(二〇〇一)年度をもって計画通り完成したので、準備期間一年をおいて、平成十五(二〇〇三)年度から、以下の内容で大学院をつくることを提案した。

研究科の名称：帝塚山学院大学大学院人間科学研究科人間科学専攻修士課程
申請時期：平成十四年六月末日
開設年度：平成十五年四月一日
開設場所：堺市晴美台四―二―二(泉ヶ丘キャンパス)
入学定員：一〇名

第二号議案のこの案件は異議なく承認された。

学費については、平成十四年十一月二十六日の理事会で、皆川基学長が「一二九万円。大学院としてはかなり高い方になります。今回は大変有名な先生を採用していただいたり、大学院生の勉学と研究を支援するために、年額三〇万円で貸与ですが、奨学金制度を設けることになっております」と提案、可決された。

大学院の誕生が決まったのをうけて、帝塚山学院大学大学院心理教育セ

ンターが平成十四年(二〇〇二)十二月に泉ケ丘キャンパス新館一階に開設された。初代センター長には、氏原寛教授が就任、抱負を語った(『紫苑』一三号、二〇〇四年三月)。

一般市民の方々に広く門戸を開放して、心の健康の増進に役立たせていただきたいと考えてのものです。ただしこのセンター設立の本来の趣旨は、平成十五年月から発足した大学院人間科学研究科臨床心理学コースの学生たちの実習の場を提供することにあります。だから、もちろん教員も実際の相談活動に従事しますが、主力は若い大学院修士コースの学生諸君です。当然、相当厳しいスーパービジョン(指導・監督)が教員によってなされます。幸いにかなりの方たちが相談に訪れて下さっており、今のところ学生・教員ともども嬉しい悲鳴をあげたくなる程忙しい状態です。(中略)市民サービスにも力を入れておりますが、何といっても学生たちを一人前のカウンセラーに仕立て上げるのがわれわれの仕事と思っております。したがって修士コース終了と同時に受験資格のできる(現在申請中です)、日本臨床心理士資格認定協会による資格試験にできるだけ多くの学生が合格し、臨床心理士の資格を取得してくれることを第一の目標として、学生も教員も日々努力している次第です。

日本ロールシャッハ学会の第一四回全国大会が平成二十二年(二〇一〇)十月二十九日から三十一日までの三日間、学院大学で開かれた。全国から約四〇〇名の研究者が集り、研究発表や学術講演、ワークショップが開かれた。

ロールシャッハテストは、臨床心理学や精神医学の領域で、最も有効とされている心理テストの一つで、学院大学の心理教育相談センターに相談に来る多くの人にも使用され、役に立っている。大会会長は、本学大学院臨床心理学専攻主任の氏原寛教授がつとめた。

国際理解研究所、メディアセンター、国際交流センター、生涯学習センター、心理教育センターなどの関連施設も整ってきた。

第三節　教養教育に新たな試み

教養教育に新たな試みがなされた。学科の専門教育の前段階あるいは専門教育の補完的な役割として教養教育が行われた。

文学部では、人間形成のための教養教育は「基本教育科目」を中心に「専門教育科目」や資格関連科目などと連動することで進み、広がっていった。平成十六(二〇〇四)年度の「自己点検・評価報告書」が、教養教育が十分できるようにとられている「組織上の措置」としてあげている講義には、専任教員、兼任教員のほかに、医師、心理学者、詩人、企業出身者などさまざまな分野の専門家が関わっていた。また、文学部では外部から客員教授を招き、通常の授業とは異なる内容の教養教育を、前期・後期の適当な時期に公開講座の形式で行った。茶道の武者小路千家の家元、ファッションデザイナー、ＮＰＯ法人学習学協会代表理事、元大阪城天守閣館長らが客員教授として招かれている。

人間文化学部の教養教育は、学部の重要な柱である。多くの教養講座の中で特に重視しているのはコミュニケーション能力開発のための教育である。平成十七(二〇〇五)年度から一年生全員を対象に日本語の文章表現講座を開講している。一クラス二五人。文章を作る基本的なルール・決まりごと、ほかの人に誤解なく読んでもらうための必要最小限の工夫など、わかりやすい文章を書くワザ・コツ・ヒケツを身につけている。書く力がつけば、読む力が深まり、考える力も強くなる。この基本的な力が身につけば、ほかの授業・講義に取り組む学生たちの姿勢・意欲にもよい影響が出てくると期待している。さらに、この文章表現講座は、学科それぞれの専門分野の学習のみならず、生涯にわたる社会、地域、家族、個人とのコミュニケーションのための基本的・実践的な力を育てている。同時に、「文は人なり」「文は心なり」なので、文章表現講座を通じて自分を見つめるだけでなく、相手の立場に立ってその心をつかむ力にもつながっている。

平成十七年(二〇〇五)四月、第一〇代学長に加納武教授が就任した。

第四節　文学部の改革続く

厳しさを増している文学部への対応が続いていた。

平成十七年(二〇〇五)六月三十日の第六九一回理事会常務委員会で、加納武学長が「大学将来構想委員会が六月二十三日に開催され、平成十九年度に文学部国際文化学科を募集停止するための準備作業を進めることが決定した」と報告した。

平成十七年(二〇〇五)十月二十七日の理事会で、文学部改革と募集定員の削減問題が話し合われた。磯村隆文理事長は志願者の動向の推移などの資料をもとにして、文学部は厳しい状態にあると前置きした上で、「教育の場であるため、不採算部門を即座に切り捨てるなどは出来ませんし、何とか再生の道がないかと様々の手立てを考えてまいりましたが、いずれも有効ではありませんでした。しかし、このまま放置すれば大学のみならず学院全体に及ぼす影響も多大でありますため、大学将来構想委員会および理事会常務委員会では、定員を削減すること、学科内容を再検討することを急ぐこととして、今、具体的な検討に入っています」と報告した。

続いて、今後、進めていくべき課題について、加納学長が説明した。

(1)文学部国際文化学科を平成十九年度に募集停止する。
(2)文学部の全教員によって、平成十九年度に文学部現代コミュニケーション学科に五～六コースを開設する。
(3)定員は一学部一学科で二三〇名とする。
(4)平成十九年度に男女共学にする。
(5)人間文化学部の動向も考えながら、専任教員ならびに非常勤教員の適切で有効な配置を考える。
(6)現代コミュニケーション学科が学生を集められない場合は、人間文化学部との一本化も視野に入れて検討する。

この学長提案を受け、文学部は平成十九(二〇〇七)年度より、現代コミュニケーション学科一学科、男女共学での募集となった。女子の文学部として出発した学院大学は、これにより完全な男女共学大学として再出発した。

加納学長は続けて、「学長提案」の「現代コミュニケーション学科」一学科案については、十月二十六日の教授会で、二学科案つまり、「国際コミュニケーション学科」と「次世代育成学科」を新設する案が裁決・可決されたため、今後、大学将来構想委員会で検討していく、と付け加えた。同時に、文学部の新しい案でも国際文化学科の募集停止とそれに伴う一五〇人あるいは一八〇人までの定員減は動かないと述べた。

国際文化学科の平成十九年度からの募集停止と現代コミュニケーション学科の定員を二三〇名とする案件は承認された。

文学部からは学芸学部二学科案(国際コミュニケーション学科・次世代育成学科)が提案されていた。これについて、平成十七年(二〇〇五)十一月十六日の大学評議会で、「十一月十日の大学将来構想委員会および理事会で以下のことが決定された」と報告された。

・文学部から提案された学芸学部二学科案については採用せず、学長案の六項目に基づく学科編成を十九年度の文学部改革案とすることが決定した。
・各教授会に報告願いたい。学長からも説明する。

文学部改革について大学将来構想委員会および理事会常務委員会での決定に対して、理事会常務委員会で文学部長から文学部教授会で反対の決議がされたと報告されたことについて、平成十七年十二月七日の大学評議会で取り上げられた。

加納学長が理事会常務委員会の報告として、要旨を以下のように述べた。

文学部教員は納得している人もいるが、納得できない人もいるだろう。しかし、大学将来構想委員会および理事会常務委員会で決定されたことは事実であり、各委員会で決定されたことについては、受け入れて改革をすすめてほしい。カリキュラム案を考えるのは組織に所属している教員であれば当然、業務として考えるべきことである。

平成十九年度文学部改革について、平成十九年度カリキュラム委員会が発足したことが平成十八年(二〇〇六)二月十五日の大学評議会で報告された。

第五節　キャリア支援体制の強化

学院大学が完全な男女共学となった背景には、日本における大学の役割が大きく関係している。学問中心であった大学に「就職」という二文字が、大きな要素として求められるようになってきたのである。殊に、平成十五年(二〇〇三)から男女共学となり、平成十八年(二〇〇六)に第一期の卒業生を輩出する人間文化学部にとって、就職状況は非常に重要であった。女子大学であれば、必ずしも卒業イコール就職ということにはならなかった以前とは状況が異なる。就職状況は、大学の名声を左右する大きな要素となっていた。

平成十七年(二〇〇五)四月に、それまでの就職課を「キャリア支援センター」と改組し、単なる就職支援からキャリアを意識した支援へと組織の役割を拡大した。平成十七年九月二十一日の大学評議会で、大学のキャリア教育をより一層強化するために、現状のキャリア支援センターをキャリアセンターに名称変更し、キャリア支援センターとキャリア教育センターの二本立てとし、お互いが連携して機能させたい、との提案があり、了承された。

平成十九年(二〇〇七)四月には、企業での人事・事業管理など幅広い経験を持った人材を確保し、実習や実験、職場体験など実際の経験を通して、現場で必要な実践力を養う、実践的なキャリア教育にも重点を置くようになった。ユニークなのは、「プロジェクト型インターンシップ」。企業や団体が抱える問題点や課題に関して、企業に対して、学生の目線で調査や研究を重ね、企業・団体側に企画を提案している。実際、大阪の大手ホテル

に提案した。企業に入る前に仕事の現場を知るいい機会になった。

小規模大学の特性を生かし、学生に対する個別対応を重視している。三回生全員を対象に、キャリアセンターのスタッフと数名の資格取得職員により、夏休み前に個別面談を実施し、個人カルテを作り学生一人ひとりを把握すると同時に、キャリアセンターを気軽に利用できるきっかけにしている。三回生対象の就職講座は年間、約五〇回にのぼっている。

就職に向けて、一回生から段階的にキャリア教育に取り組むために、キャリア教育の考え方として、「キャリア開発の４Ｃモデル（キャリア開発ピラミッド）」をつくりあげた。

「移行」（CHANGE）一回生：高校生から大学生へと意識を入れ変え、将来のキャリアについて考える大切さを知る。

「考察」（CONSIDERATION）二回生：職業や人生について基本的な知識や情報を得て、自分の可能性や方向を考える。

「挑戦」（CHALLENGE）三回生：自分の将来の希望を実現するための活動に取り組み、挑戦する。

「選択」（CHOICE）四回生：進路を選択・決定し、大学生活の総仕上げと卒業後のキャリアの準備をする。

第六節　食物栄養学科誕生

平成十七年（二〇〇五）三月三十日の理事会で、皆川基学長が人間文化学部の新学科設置について提案理由を説明した。

- 平成十八年四月一日から人間文化学部食物栄養学科を開設する。
- 入学定員八〇名（収容定員三二〇名）。文学部国際文化学科の入学定員二三〇名から八〇名を振り替える。従って、文学部国際文化学科の入学定員は平成十八年度から一五〇名とする。
- 初年度の年間納付金は、学科の特殊性を考え、他学科に比べ実験実習費を四万円高く設定し、総額一四一万円とする。

続いて、武澤誠常務理事が施設の増改築などについて報告した。

- 人間文化学部泉ヶ丘キャンパスに校舎一棟を建てる。管理栄養士養成課程に必要な実験実習室をつくるほか、現在でも不足気味の普通教室や心理学科の施設も増設する。
- 延べ面積は約四一〇〇平方メートル。地上五階、地下一階鉄筋コンクリート造り。
- 建設工事の予算は、改修を含む建物工事費に九億円、什器、機器備品費として二億円の総額一一億円を予定している。

食物栄養学科の設置は可決された。新設のための書類を平成十七年（二

〇〇五)四月二十七日に文部科学省に提出、受理された。さらに、食物栄養学科の管理栄養士課程および栄養士課程の申請書類を九月二十八日に厚生労働省に提出し受理された。また、九月二十九日に、栄養教諭免許について文部科学省に申請書を提出した。

その新学科は、豊かな人間形成に欠かせない「食」のあり方や病気の予防を視野に入れた健康管理について、科学的に追究し、総合的に判断できる人材を養成し、より高度な専門知識を持った「食」の専門家として活躍するための管理栄養士を育てることを目標としていた。

このようにして、学院創立九〇周年を迎えた平成十八年(二〇〇六)四月から、人間文化学部に食物栄養学科(管理栄養士養成課程)がスタートした。「自分の健康は自分で守る時代」に、食と健康を考え、実行する学科が誕生した。生活習慣病の増加など、国民の健康問題、少子高齢化社会に対応する管理栄養士が求められており、その必要に応えるための「大学の新しい顔」であった。

必要な単位をとれば卒業と同時に栄養士資格が与えられ、さらに管理栄養士(国家試験)の受験資格を得る。食物栄養学科の専任教員は、教授一二人、准教授一人、助手五人の専任と五人の兼任教員が教育・研究にあたっている。

定員八〇名を二クラスに分けて講義、実習ともに四〇名で行い、実験・実習科目に対応するための実験室、実習室を新設、「完璧」との評価を厚生労働省から受けた。

栄養士は職業上まず自らが健康でなければならず、禁煙はもちろん、健康の自主管理ができなければならないので、「ホームルーム」の時間を設け学習指導のほかに生活指導も行っている。また、「管理栄養士セミナー」では、管理栄養士の実務経験が長い教員が各種の管理栄養士の実際の仕事について教えている。

食物栄養学科では、三回生の後期までに管理栄養士課程の講義および実験実習科目をほぼ習得し、三回生の春休みから四回生の夏休みまでに、合計四週間の臨地実習を行う。病院に出向いて現場での臨床栄養を学び、病院、小学校、老人施設などの給食施設で給食経営管理の実際を学ぶ。これらは合計三週間行う。さらに、保健所で公衆栄養の実際を一週間学ぶ。学内で学んだことを現場で体験し、いっそう確実なものにしている。

加納武学長は食物栄養学科の新設について、『紫苑』一五号(二〇〇六年五月)に原稿を寄せて、次のように書いている。

> 帝塚山学院の「力の人の育成」という建学の精神に則って、大学で学んだことが卒業後の実社会でできる限り直接に役立つような学科づくりを目指したものです。実際、「食」と「健康」の問題がますます大きくクローズアップされてきている現代社会の要請(二一世紀における国民健康づくり)に後押しされるようにして、この新学科・食物栄養学科は、各方面から大きな反響と評判を受けております。

平成二十二年(二〇一〇)三月に卒業を迎えた食物栄養学科第一期生は、一人も留年することなく全員が栄養士資格を取得して社会に巣立っていった。就職率は八四％で、就職先は給食関係、食品企業、病院や学校(保育園を含む)だった。

卒業生のうち七〇名が管理栄養士国家試験を受験し、五八名が合格、合格率は八二・九％だった。合格率では一気に全国の上位校となった。全国

で管理栄養士養成課程を持っている大学(学科)の新卒の受験者七八六五名のうち合格者は六一八七名で、合格率は七八・七%だった。

食物栄養学科第二期生の管理栄養士国家試験も合格率は八三・八%と第一期生を上回る成果をあげた。

管理栄養士国家試験で、二年連続で全国でも高い水準の合格率を達成した陰には、食物栄養学科の教員と学生が一丸となって取り組んだ年一二回の模擬試験、週四回の国家試験対策ゼミがある。

平成二十四(二〇一二)年度の管理栄養士国家試験では「一〇〇%合格」をやりとげた。平成二十五(二〇一三)年度は試験が難しかったこともあり、管理栄養士国家試験の合格率は九〇・六%だったが、平成二十六(二〇一四)年度は九四・四%と他大学にくらべて高い合格率を維持し続けている。

平成二十七(二〇一五)年度は八三名が管理栄養士国家試験を受験し全員が合格。平成二十四(二〇一二)年度に続き二度目の「一〇〇%合格」を達成した。

第七節　大阪狭山市と生涯学習推進に関する協定を締結

平成十八年(二〇〇六)二月七日、帝塚山学院大学と大阪狭山市は生涯学習推進に関する協定を締結した。加納武学長が二月九日の理事会常務委員会で、協定の内容を説明した。

協定の目的として、「包括的な連携のもと、まちづくりの各分野で相互に協力し、人材の育成や活力ある地域社会の創造に寄与する」とうたっている。

具体的に取り組む連携協力の事項として、(1)市と大学の人的、知的資源の交流、(2)市と大学の連携協力による調査研究および事業の実施、(3)市並びに大学が主催する事業に対する相互協力及び支援、(4)その他双方が協議の上必要と認める事項――の四点で合意した。

協定の調印式に出席した大阪狭山市の吉田友好市長は「これまでいくつかの限られた範囲で協働してきたが、今後は学生を中心に子育て支援や教育など、より幅広い分野でまちづくりに参画していただきたい」と話した(『大学通信』一〇一号)。

第八節　文学部の男女共学と大学院の充実

平成十九年(二〇〇七)三月二十九日の理事会で、前年(平成十八年)三月の理事会で加納武学長が理事長に選出されて以来、大学学長との兼務となっていたが、ともに重要な職務であり、学長を辞任し、理事長の任務に専念することが承認可決された。

これにともない、第一一代学長に酒井信雄副学長が就任した。

平成十九年(二〇〇七)四月一日から、文学部を現代コミュニケーション学科二三〇名、国際文化学科一五〇名、二学科合計三八〇名の入学定員を、一学部一学科(現代コミュニケーション学科)二三〇名にした。文学部を男女共学にした。これで文学部、人間文化学部の両学部が男女共学になった。

平成十九年(二〇〇七)四月一日から、大学院人間科学研究科に臨床心理専攻(専門職学位課程)を開設した。

専門職大学院は、平成十五年(二〇〇三)四月からスタートした新しい大学院制度で、「高度で専門的な職業能力をもった実務家の養成」に特化した教育を行い、現場の第一線で活躍する各分野のスペシャリストなどを教員に招き、最新の知識を学ぶなど、レベルの高い専門教育と実務教育を行っているのが大きな特色だ。大学院開設の初めの目的であった専門性の高い臨床心理士の育成を達成するために、臨床心理修士(専門職)の学位の取得ができる専門職学位課程を設置した。

こうした平成十九(二〇〇七)年度の新しい大学改革について、酒井信雄学長は「文学部の男女共学化と、他の私立大学よりも先駆けて、大学院に臨床心理系の専門職大学院を設置したことは、大きな前進でありました。また専門教育とともに、教育課程の一つの柱となるキャリア教育は、キャリアセンターの強化とともに着実に力強く一歩を踏み出したといえます」と説明。さらに、「(平成)二十年度、二十一年度にかけて学院大学は更なる飛躍をいたします。狭山キャンパスに『教育開発・支援センター』を新しく設置し、徹底したエンロール・マネジメント、両学部共通科目のプラットホーム化(一本化)、地域貢献型プログラムへの積極的な取り組みなどを推進いたします。狭山と泉ヶ丘の両キャンパス間にシャトルバスを走らせて相互乗り入れを図り、大学全体の活性化と『面倒見の良い大学』を目指し、理事会と手を携えて本格的に始動いたします」と決意を語った(『紫苑』一七号、二〇〇八年三月)。

第九節　西日本初のリベラルアーツ学部と二学部四学科体制

石川啓理事長は平成二十年(二〇〇八)三月二十七日の理事会の「第二号議案　平成二十年度事業計画および予算(案)の件」の提案の中で、「平成二十年度の最重要課題は大学改革であり、学院の伝統を活かしながら、小規模大学の特色を活かし、学生の教育に専心する西日本最初の日本型リベラルアーツ大学を目指す」と新たな大学改革の具体案を打ち出し、平成二十一(二〇〇九)年度からは入学定員の絶対確保を目指すとの決意を示した。その具体的内容は、以下のようであった。

- 現文学部(入学定員二三〇名)を募集停止して、リベラルアーツ学部(入学定員二〇〇名)の届出による設置を行う。
- 現人間文化学部(入学定員三八〇名)の文化学科、人間学科を募集停止して、届出による情報メディア学科、心理学科の設置を行い、その後学部名称を人間科学部(入学定員三一〇名)に変更する。
- 質の高い大学、面倒見のよい大学にするために、教育開発・支援センターを設置し、リメディアル教育をはじめさまざまな教育方法などを開発するとともに、学生の支援を行うことで、学力強化を目指す。
- 入学志願者・入学者の安定的な確保を実現するために、広報体制の見直しを行い、法人本部に入試・広報企画課を新設し、全法人的な入試・広報企画委員会の主管部署とすることで学院全体のイメージの定着と、費用対効果を十分に検討したmedia mixの企画、立案、執行、評価並びに各学校別広報の間の調整を行う。
- 大学のアドミッションセンターは専任教員を責任者とする体制に改組して、住吉校および泉ヶ丘校にそれぞれ入試課を新設する。

この理事長提案を受けて、大学評議会は平成二十年(二〇〇八)四月十六日、以下の点を承認した。

1、リベラルアーツ学部入学定員二〇〇名を設置する。
2、現在の文学部現代コミュニケーション学科二三〇名は、平成二十一年度の入学生から現代コミュニケーション学科の学生募集を停止する。
3、文学部現代コミュニケーション学科の入学定員二三〇名のうち二〇〇名はリベラルアーツ学部へ移行する。三〇名は定員の削減をする。
4、人間文化学部に情報メディア学科九〇名、心理学科一五〇名を新設し、文化学科一五〇名、人間学科一五〇名を平成二十一年度の入学生から学生募集を停止する。それに伴い、人間文化学部の入学定員を六〇名削減する。

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科の設置と人間文化学部の名称変更および情報メディア学科、心理学科の改組改編について、大学は平成二十年(二〇〇八)七月一日、記者発表を行った。

第一〇節　教育開発・支援センターの開設

一　教育開発・支援センターのための文部科学省助成金の獲得

平成二十一年(二〇〇九)三月二十五日の理事会で、児玉隆夫学院長が教育開発・支援センター設置の目的を説明した。

大学教育開発・支援センターは平成二十一年四月から本格的に稼働することになる。教育の全般的な資料収集をはじめ、教育施策の企画・開発、学生支援に関することになる。共通教育に関すること、地域連携に関することなど、かつては二キャンパスそれぞれに行っていた業務を今年度からはできるだけ共通化し、大学全体の改革のためには、この組織の下で学生サービスの向上、地域連携の強化のために、非常に多くの項目について実質立ち上げていかなければならない。この運営のために文部科学省から日本私立学校振興・共済事業団を通じて補助金を毎年二〇〇〇万円、五年間で一億円を受けている。大学教育開発・支援センターが活動することによって大学のユニティーが高められ、共通にできるものや強化すべき点はこの組織で行うことになる。

リベラルアーツ学部と人間科学部という二つの新しい「旗」をかかげて再出発することになった帝塚山学院大学を支えたのが、この教育開発・支援センターで、それは平成二十年(二〇〇八)十二月一日に動き出した。

同センターは狭山キャンパスのＣ棟二階にある。センターの愛称は「セッズ(ＣＥＤＳ)」、学習と交流の場所は「セッズホール」。愛称は、教職員・学生による投票で決まった。この建物の一階には学生食堂があり、三階にはＩＣＴを活用した情報教育の実施、情報教育に関する施設・設備の管理運用、および大学院や各学部、学科での教育研究や事務の業務などのＩＣＴを利用した支援を目的とする、ＩＣＴセンター(旧国際コミュニケーションセンター)がある。そこでは、学生たちがコンピュータの活用やトラブル処理について、気軽に職員に尋ねることができる。

また、教育開発・支援センターのある二階には、国際交流センター、生涯学習センター、国際理解研究所がある。学生・教職員が利用しやすいように考えた配置になっている。泉ヶ丘キャンパスには、教育開発・支援センター分室(ＣＥＤＳルーム)が平成二十三年(二〇一一)四月にできた。入学前や在校生との学習面談、自主参加講座の会場として活用した。

センターは、大学全体が一つになって「面倒見の良い大学」に取り組むために、これまで十分に取り組めていない領域・分野を洗い出し、その克服と新たな展開をはかることをめざした。二学部四学科に共通する教養教育の企画・運営、外国語科目の共通化を通じての能力別クラス編成、学生の悩み、暮らしぶりを聞き取り、学習相談をはじめとする学生の支援体制の強化、充実にも力を注いだ。

また、泉北・狭山両ニュータウンにキャンパスをもつ大学として、地域との共存をめざした。自治体、地域ＮＰＯ、地元企業などと連携し、地域の人材・資源の掘り起こしと養成に貢献し、同時に、その活動を学生たちの教育・実践の場として活かすなど、地域の「知の拠点」としての地位を一歩一歩固めていった。文部科学省が二一世紀の大学の重要な役割の一つとして位置づけている「地域・自治体との連携」を先取りした。

教育開発・支援センターが取り組む事業は、プロジェクト型。学内から

広く案を募り、関心のあるプロジェクトに所属も部署も越えて、教員と学生が関わり、大学の発展に一人ひとりが貢献する場に育っていくことをめざした。

このセンターは運営のために、文部科学省から「定員割れ改善促進特別支援」として日本私立学校振興・共済事業団を通じて補助金を毎年二〇〇〇万円、五年間で一億円を受けていた。

平成二十年(二〇〇八)十二月に実質的に発足した教育開発・支援センターは、十二月十日に第一回運営委員会を開き、溝手真理副学長(リベラルアーツ学部教授)を初代教育開発・支援センター長に選出した。平成二十一年(二〇〇九)一月二十六日に第二回運営委員会を開き、平成二十一年度の本格的な始動に向けた事業計画を決めた。

二　センターの本格的な始動への準備

平成二十一年(二〇〇九)四月からの本格的な稼動に向けて事務局体制も整い、運営委員会では、センターの目的に沿って事業計画、運営体制づくりなどについて、集中的な話し合いが重ねられた。そして、以下のような事業計画の骨格が確認された。

- アドミッションセンターから入学前教育を引き継ぎ、スクーリングと作文講座を行う。
- リメディアル教育プログラムとして日本語、英語、数学(算数の補習授業)を行う。
- 一般教養、一般常識を学ぶ学習支援プログラムを準備する。
- 入学から卒業まであらゆる角度から一貫して学生を支援していく、つまり「エンロール・マネジメント」の取り組みとして、出席状況をつかみ、欠席・遅刻の多い学生をサポートする。
- 相談業務を始める。「学習なんでも相談コーナー」をつくり、担当者がいつもいる状態にする。
- 英語・日本語の基礎力や就職支援対応力の向上を目指す「基本学習支援プログラム」を開講するために、教員への協力依頼を行う。
- 自主参加型、交流型の「パワーアッププログラム」を新しく作りだす。
- 地域と連携し、菜の花プロジェクトなどを題材にサービスラーニングに取り組む。
- 共通教育の教育施策については、学部からの提案を待って具体化する。

その上で、センターは平成二十一年度入学生に対して次のような入学前教育を実施した。

(1)作文講座

- e-learningで「よくわかる作文講座」を開講し、わかりやすい、いい文章を書くワザ・コツ・ヒケツを学べるようにした。
- 早期入学決定者に二回の作文課題を出し、教員(非常勤講師を含む)七人がていねいに添削した。

(2)自校教育

- e-learningで「知ってナットク帝塚山学院大学」を開講した。帝塚山史、「帝塚山学院」学、偉大なる先輩たち、挑戦！「帝塚山学院」クイズを通して、帝塚山学院大学をより深く知り、入学予定の大学

に親しみを抱く取り組みをした。

(3)スクーリング

- 早期入学決定者九七人に対して、泉ヶ丘キャンパスで学科別ミーティング、e-learning 大クイズ大会を行い、作文講座の優秀者を表彰した。

(4)生物・化学のリメディアル教育

- 食物栄養学科入学予定者にたいして、入学直後に実施する生物および化学の基礎学力テストに対応するテキストを届けて入学前学習を促した。

このように教育開発・支援センターは、初めての仕事を総力をあげて乗り切った。

新学期に入ってからは、連休明けの五月中旬に、入学前教育を重点的に実施した協定校・公立推薦校の入学者九三名に、「授業の出席状況」「大学の施設と教育サービスの利用状況」「課外活動」「生活状況」「そのほかの不安や心配事」など一九項目のアンケートを行った。五一名(五四・八％)から回答があり、それを基礎資料にセンター長を中心に事務局員も手分けして面談、学生の生活状況を聞き取り指導した。

前期試験で日本語と英語の単位を落したり、教員が気がかりな学生として名前をあげてきた一二四人に郵便や電話で相談面接に来るよう連絡。七五名(六〇・五％)と学習相談をし、基礎学力や授業に取り組む状況を確かめ、センターが開講している復習教育プログラムなど、課外授業を受けるよう勧めた。単位を取れなかった背景には、「アルバイトなどの生活状況」「大学内に居場所がない」などの事情があることがわかった。

三　取り組み　広く深く多彩に

本格的な事業を平成二十一(二〇〇九)年度に始めた教育開発・支援センターは、二年目、三年目、四年目と年を重ねるごとに、学習支援、学生支援、保護者向け教育相談、地域との連携、入学前教育などの取り組みが広く、深く、多彩になり一歩一歩確実に充実していった。

〈「ことばの力」を磨く〉

すべての「学び」の基礎になる「ことばの力」――書く、読む、考える、話す、聞く――を重視した。

教育開発・支援センターは入学前教育の作文講座・作文添削にはじまり、学習支援自主参加プログラムでは「自分物語」「天声人語講座」「語彙・読解力検定対策グループ学習講座」など、書く力を身につけることに力を注いだ。「書く力」は深く読む力、考える力を培うからだ。日本語の力はすべての学びの基礎体力である。こうした取り組みを背景に、全学的に作文コンクールを二回行い、新聞のコラムにならい六〇三文字の作文「学生人語」を募集した。平成二十五(二〇一三)年度には三〇〇点を超える応募があり、大賞二点、優秀賞五点、佳作一〇点に賞状と副賞を贈った。選考委員六名が「こんなにみずみずしい文章を自分たちに書けるだろうか」「すごい体験を、抑制の効いた見事な筆致で描いている」と講評するほど、力作が寄せられた。

〈心の扉をひらく面談〉

もう一つ、精力的に取り組んだのが「学生支援」だ。

近年、多くなっている学力の面でも、意欲の面でも境界線に身を置く学

生に心のケアを含めて正面から全学的、組織的に取り組むために、センターが事務局機能を担い、要としての役割を果たした。

第一歩は、入学予定者に対して入学前教育の一環として、「入学前学習面談」を行った。「現在の生活習慣」「健康状態」「自分、家族、友だち」「大学生活について」などについて二〇項目以上のアンケートを行い、将来、大学生活で問題になるかもしれないことやその程度をあらかじめつかみ、一人A4判の用紙三ページほどの記録を作ってファイル、入学後の学生指導に生かした。平成二十六年(二〇一四)四月の入学予定者の場合、一四三名の面談に、教育開発・支援センターの担当者、学生相談室を通して依頼した臨床心理士、元高校の生活指導担当者で取り組んだ。

中途退学につながりやすい欠席・遅刻が多い学生、日本語や英語の単位を修得できない学生に対して個別面談を重ねた。生活状況(健康状態、睡眠、朝食、アルバイトなど)、大学内での様子(クラブ、友人、将来の志望など)、学習状況(受講状況、成績、やる気)などを、一人に四〇分~五〇分、長い時には一時間半かけて、丁寧に聞き取った。学生の都合を優先するので、アルバイトが終った夜に、足を運ぶこともある。約束の時間に姿を見せない学生もいるが、携帯、手紙で、電話でと繰り返し接触をはかった。「待ちの面談」ではなく「探しにいく面談」「攻めの面談」だ。生活の改善や学習支援自主参加プログラムの受講をすすめた。面談の結果は、一人ひとりのファイルに仕分けして、アドバイザー教員と共有するようにつとめた。

〈人間力養成塾〉

学生の「人間力」を育てる取り組みにも力を注いだ。

受験生や入学予定者または後輩の目標になり、卒業後に社会人として通用するために「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を身につけさせるのをめざす、「学生スタッフ養成塾」だ。平成二十五(二〇一三)年度からの教育開発・支援センター、アドミッションセンター、キャリアセンター、学務課の共同での取り組みで、専門業者に委託して、四日間、延べ一二時間の研修を実施した。平成二十五(二〇一三)年度は、リベラルアーツ学科、情報メディア学科、心理学科、食物栄養学科の四学科から、一回生一五人、二回生一三人、三回生九人の合計三七人が研修を受けた。研修会とスクーリングに参加した学生には、修了証を発行した。彼等は、オープンキャンパス、入学前教育スクーリング、保護者セミナー、就活セミナーなど学内の行事でスタッフとして役割を受け持っている。

これまで教職員が担っていた入学前教育スクーリングプログラムの運営を、先輩学生が前面に立って仕切るようになった。また、教育開発・支援センターのいろいろな企画に学生の立場から関わるCA(CEDS Assistant)を育成し、全学ドッジボール大会などは、CA独自で運営。社会人としての基礎力を育む機会と場になった。

〈地域社会との連携・協働〉

教育開発・支援センターのもう一つの柱である「地域社会との連携・協働」も着実に実績を積み重ねた。取り組んだ活動には地域の自治体、企業、市民などさまざまな人たちが関わっている。学生にとっては、ボランティア活動で地域に役に立つというだけでなく、色々な経験を重ねてきた人との出会い、みんなで力を合わせてひとつのことをやりとげることは、大学キャンパスにはない、貴重な「学びの場」になった。以下、代表的なものを挙げる。

・大学の狭山キャンパス前から狭山池に注ぐ一級河川・三津屋川を美しくする活動が、平成二十一年十月二十四日から始まった。大阪狭山市の市民団体・自治会・市・府とともに学生・教員が取り組んだ「三津屋川清掃活動」は、年三回、河原に生い茂った草を刈り、投げ捨てられた大小のゴミ類を拾う。同時に、河川の観察と簡易水質検査も行った。この清掃活動の様子を写真などを使ってパネルを作り、学内で広報した。地域のコミュニティー紙でも、帝塚山学院大学生たちが三津屋川の美化に取り組んだ模様が写真入で紹介された。この三津屋川清掃活動に参加することは、「人のくらし」と川、戦後の地域の変化…「川」を切り口に社会を考え、くらしを考える引き金になった。

・高齢化社会が進む中で、食事づくりが困難な高齢者、障害者の人たちに、市民事業として配食サービスが行われている。この市民活動を資金面で支援している市民団体「街づくり夢基金」からの依頼で、人間科学部二名、リベラルアーツ学部三名の学生が、配食事業所三ヶ所（堺市・富田林市）を訪問。事業内容や訪問のときの感想をまとめ、平成二十二年十一月に栂文化会館で行われた市民団体主催のシンポジウムで学生が発表した。市民基金がどう活動に生かされているのかなど、配食サービスの現状と課題について、たくさんの写真を使ってパワーポイントにまとめた発表は、好評を博した。

・平成二十二年度には、大阪狭山市が主催する環境関連イベント「エコフェスタ」のポスター原画を学内で募集、二五名が応募した。最優秀賞には学長賞と大阪狭山市長の感謝状が手渡された。採用されたポスターは大阪狭山市内の中学校や公共施設、南海電車三駅に張り出された。また、縮小版が各戸配布の広報の裏面全面にカラーで掲載された。

・狭山キャンパスは大阪狭山市第三中学校区にある。地域との連携、市民との協働を実行するために、平成二十四年度から、第三中学校区円卓会議環境チームの一員となり、「菜の花プロジェクト」の活動を始めた。この菜の花プロジェクトは、地域自立の資源環境循環サイクルをめざす運動。家庭の廃食用油を回収し、軽油代替燃料（ＢＤＦ＝バイオディーゼルフューエル）を作り、地域内を走るバスなどの燃料にする取り組みだ。地域との連携活動で、地域の市民との関係づくりをすすめ、積極的に協働する学生スタッフも育ち始めた。

・平成二十四年四月二十八日、二十九日に行われた、約八万名が集まる大阪狭山市最大のイベント「狭山池まつり」に、実行委員会からの要請を受け、学生にボランティア参加を呼びかけた。二日間で二七名の学生が手こぎボートの管理などで祭りの運営に貢献した。平成二十五年にも二日間で三〇名が参加し、貸しボートの管理、舞台司会の補助役などにあたった。

・こうした地域との連携・協働つまり、「地域を舞台にした学び」を、リベラルアーツ学部と人間科学部の共通科目「オフ・キャンパス・スタディー」として、単位を認めることが決まった。平成二十六年九月から、地域連携・協働に四〇時間参加すれば、一単位になる。四年間やれば、四単位とれることになる。

〈特別公開講座〉

地域の中の大学の役割の一つとして、市民と学生がともに学ぶ特別公開

講座を夏期休暇と春期休暇などを利用して企画した。

「日本と世界の昨日・今日・明日を読む」と題して、「ヒロシマ・ナガサキ・核」「戦争」をテーマに夏休みの公開講座を平成二十一年(二〇〇九)八月二十日・二十一日の二日間開催した。

春期休暇中の公開講座は、平成二十二年(二〇一〇)三月二十九日に「現代の貧困」をテーマに、ワーキングプア(働く貧困層)の現実を追い、背景を探る講義だ。

とくに、平成二十三年(二〇一一)三月十一日に発生した東日本大震災と津波、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の崩壊をテーマに「3・11東日本大震災」と題した特別公開講座を、震災から二ヶ月後の五月十四日から、七回連続で開講した。講師は本学の教員を軸に、震災発生直後に現地に駆けつけ、NHKでもその支援活動が大きく報道されていた神戸市のNPOから四名のゲストを招き、生々しい現地報告を聞いた。学生と近隣地域の市民ら延べ一五〇名が受講した。震災と関連して、メディアの可能性・役割、核問題、IT利用による支援、ボランティアによる支え合い、原発などもテーマに広く、深く考え、学んだ。

平成二十四年(二〇一二)九月二十二日、辰濃和男氏(元朝日新聞論説委員、元日本エッセイスト・クラブ理事長)を講師に招き、「文章のみがき方」の講義を受けた。辰濃氏は昭和五十年(一九七五)から昭和六十三年(一九八八)までの一三年間、朝日新聞の「天声人語」を執筆。狭山キャンパスE三〇四教室で行われ、市民九九名、学生一七名など一三五名が参加した。

平成二十六年(二〇一四)四月一日、杉本雅子副学長が教育開発・支援センター長に就任した。

第一一節　南大阪地域大学コンソーシアムと大学コンソーシアム大阪への参加と連携

他大学や企業との連携をはかり教育研究を深め、広げるのにも力を注いだ。

その一つが平成十四年(二〇〇二)に発足した「特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム」だ。一四大学・短期大学が会員で、学院大学は設立当初から参画しさまざまな事業に協力している。平成二十一(二〇〇九)年度は、単位互換システム事業、国際交流・留学事業、教職員研修事業、教育委員会との連携事業、キャリア教育支援事業等の部会を束ねる大学間連携教育プログラム委員会を担当した。

「南大阪地域大学コンソーシアム」会員の大阪府立大学、大阪大谷大学、羽衣国際大学、プール学院大学、そして帝塚山学院大学は「実践力のある地域人材の輩出～大学連携キャリア教育センターを核にして～」をテーマに、平成二十(二〇〇八)年度の文部科学省戦略的大学連携支援事業に選定された。

また、学院大学は平成十九年(二〇〇七)から「特定非営利活動法人大学コンソーシアム大阪」の会員となり、単位互換プログラム内のセンター科目として関西経済同友会寄附講座の「大阪産業論」(大阪経済界トップによるオムニバス講座)と「大阪の食文化論」(大阪の食業界トップと研究者によるオムニバス講座)を幹事校として担当している。講座の企画・運営を行い、他大学も含めた多くの大学生と一般社会人の受講を支えている。

第一二節　激動期迎える大学

一　大学を取り巻く環境

平成二十五(二〇一三)年度現在、大学を取り巻く環境は、一段と厳しさを増した。

石川啓理事長は平成二十五年(二〇一三)三月二十二日の理事会において、「第一号議案　平成二十五年度事業計画および予算(案)の件」の提案の中で、大学を取り巻く環境の実情を以下のように説明した。

文部科学省は大学や学部の新設に対して準則主義を取り入れた。準則主義とは審査により新設を認めるのではなく、大学設置基準に定められている基準を満たしていれば、実質上届出によって認定するという緩やかな方策である。そのために多くの大学ができた。供給が増えたにもかかわらず、少子化の進行という状況下であるので、私立大学の定員割れが顕著になってきた。平成二十三年には二二三校、私立大学の三九％が入学定員を割っていたが、平成二十四年になるとそれが四五・八％になった。平成二十五年度は確実に五〇％を超える見込みである。このような状況は大学をはじめ、高等学校から幼稚園まで及ぶ見込みであるので、わが国の教育界は構造的不況業種であると言える。今のような状況で推移すると近い将来、特に中小規模大学の大量破綻時代に突入することは必然であると思われる。

そのうえで、定員充足を図る一つの案として、食物栄養学科の拡充計画が打ち出された。

二　食物栄養学科健康実践栄養士課程

平成二十五年(二〇一三)五月二十三日の理事会で、酒井信雄学長が文部科学省と厚生労働省に五月末に提出する書類をもとに、食物栄養学科に「健康実践栄養士課程」を設置するための第二号議案の提案を行った。提案要旨は以下の通りである。

- 食物栄養学科は平成十八年四月に管理栄養士養成課程としてスタートした。平成二十四年度には、管理栄養士国家試験の合格率一〇〇％の実績があり、管理栄養士という食のスペシャリストとして活躍する人材を生み出してきた。
- 現在、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科は入学生確保が難しい状況にある。

リベラルアーツ学部の入学定員を二〇〇名から四〇名の定員を振り替えて一六〇名とする。食物栄養学科は堅実に入学者を集めており、食物栄養学科内に「健康実践栄養士課程」を新設する。

- 健康実践栄養士課程では、豊かな人間性と広い教養に加えて、「食習慣」と「運動習慣」で予防医学の考えをベースに実践的な専門知識と技能を備え、健康で豊かに暮らすために「食」と「健康」の分野で積極的に社会貢献を果たすことのできる有為な人材を育てることを教育の目的としている。予防医学的な分野、教育の分野に栄養士を送り、国民が健康で豊かな生活を維持できるように、栄養士が専門家として地域住民に積極的に働きかけ、社会貢献できる人材を

養成するのが目的である。

- 平成二十五年度から平成三十四年度までは「二一世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）第二次」が示され、第四次国民健康づくり対策が展開されており、国の政策に一致する課程づくりを目指している。国民の健康生活を維持、推進する人材の養成というのがこの課程の一番の目的だ。
- 食物栄養学科の競争率は事実上二倍を超え、一〇〇名以上の受験生がやむなく他校へ流れている状況だ。「健康実践栄養士課程」について、大阪府、和歌山県内の複数の高等学校に対して、今後の進路についての希望する学問分野および資格などについてアンケートを実施。二六〇〇名以上の回答を得ており、「入学定員四〇名の学生確保は確実」との見通しも示された。

理事会は審議の結果、大学人間科学部に食物栄養学科健康実践栄養士課程の新設を承認した。

食物栄養学科に健康実践栄養士課程を平成二十六年（二〇一四）四月一日から開講すると、泉ヶ丘キャンパスが学生数増でいっそう手狭になるため、情報メディア学科を狭山キャンパスに移転することが、平成二十五年（二〇一三）十月二十四日の理事会常務委員会で決まった。平成二十六（二〇一四）年度の夏期休暇中に移転にともなう改修工事を行い、早ければ平成二十六（二〇一四）年度後期から講義を始めることになった。

〈注目集める教室で生まれた「テヅカヤマの食」〉

参加しながら　考えながら　学ぶ――食物栄養学科の授業でも、実習でもこの精神が貫かれ、「食」と「健康」のスペシャリストが着実に育っている。

平成二十四年（二〇一二）三月二十七日、第三回「大阪産（もん）コンビニメニュー選手権」（主催：株式会社サークルKサンクス、共催：大阪府）で、食物栄養学科三回生の稲垣しほりと芋生莉沙が考案した「スイートポテトプリン」が知事賞を受賞した。

二人は平成二十三年（二〇一一）春から、地元大阪産のサツマイモを使い、「すべての方を対象に」「スイートで食物繊維が摂れる」「甘さ控えめ」をテーマに商品化に取り組んだ。製造者、販売担当者との話し合い、試作、試食を重ね、半年近くかけて完成させた。平成二十三年十一月三日から三十日まで関西二府四県のサークルKサンクスで、「スイートポテトプリン」（一九八円）が販売され、期間中に、一万四七六六個売れた。

この「大阪産（もん）コンビニメニュー選手権」には、お弁当部門、おにぎり部門、スープ部門、スイーツ部門の四部門あり、大阪府内の大学や専門学校の若者たちが開発した二〇四作品が競い合った。各部門での販売実績や購入した人たちの意見をもとに、最も人気の高いメニューとして、稲垣・芋生組の「スイートポテトプリン」が知事賞に選ばれた。

ホテル日航大阪と食物栄養学科は平成二十三年（二〇一一）四月から平成二十四年（二〇一二）六月までの間、コラボスイーツ企画に取り組み、第一弾として学生のアイディアを採り入れた洋菓子「エクレア」、第二弾商品として美味しくて可愛くてカラダにうれしい「野菜ケーキ」、第三弾は茶葉や梅を使った「有平糖飴」を商品化して販売した。

平成二十四年（二〇一二）十一月から、堺市の惣菜メーカー「なな菜」と

食物栄養学科三回生が四ヶ月近くかけて、おいしい惣菜づくりに取り組んだ。学生七二名の約三〇〇のアイディアの中から、「きのこのオムレツ」「サバの味噌ワイン煮」など七つにしぼった新商品をつくり、平成二十五年（二〇一三）四月に、高島屋堺店で開かれた「南大阪うまいもの大会」で販売された。

さらに、平成二十五年（二〇一三）四月から平成二十六年（二〇一四）三月にかけて、福田ひとみ教授ゼミと惣菜メーカー「なな菜」がカロリーを抑えたメタボ対策の弁当の開発に挑んだ。福田ゼミの稲本紀里子、金澤由貴、横田真衣が「メタボ対策ヘルシー弁当」を考えだし、後藤かずみ、辰巳美穂（平成二十六年三月卒業）が「塩麹からあげ弁当」を考案。平成二十六年（二〇一四）七月九日から十五日まで高島屋泉北店（堺市南区）で販売した。売り場では、カロリーを減らしながら必要な栄養素を十分にとれるひと工夫や、お弁当のメニューの作り方と栄養価計算をのせた冊子をプレゼントした。

さらに、平成二十六年（二〇一四）四月にスタートしたばかりの食物栄養学科健康実践栄養士課程の一回生四〇名は、五月初めから産学連携による新事業づくりの「堺市いちじく六次産業化プロジェクト会議」に参加し始めた。いちじく製品の試食会、いちじくを使ったレシピ二四作品の提案など、秋頃の販売を目指して意欲的に取り組んだ。

昔は有名だった「堺のあなご」に改めて光をあてるために、あなご弁当も考案中だ。

帝塚山学院大学人間科学部食物栄養学科に世間の目を引きつけた出来事があった。

平成二十五年（二〇一三）十二月十四日から全国公開された松竹映画「武士の献立」の公開キャンペーンとして京都・二条城で行われた饗応料理作りに、約一八〇年前に大阪で創業した料亭花外楼の協力のもと、食物栄養学科の学生二〇名が挑戦した。学生たちは花外楼の堀川洋一総料理長から料理の作り方を教わり、「鰤の鍬焼」などつくった三品を器に盛り全員で試食、日本料理の深い味わいを堪能した。その技だけでなく、日本人のおもてなしの心にも触れた。同時に、学生が考案した雑煮をつくり京都・二条城の地元の小学生たちにふるまった。

福田ひとみ教授は「日本には四季折々の食材があり、日本人はそれを生かして料理を作ってきました。今回『おもてなし』というテーマで、学生たちが本格的な日本料理に取り組めたのは特に幸せなことです」と語った。

帝塚山学院大学泉ヶ丘キャンパスに平成二十七年（二〇一五）四月、「帝塚山学院大学　健康プラザ」が開設された。地域住民の生活習慣病やロコモ（足の筋肉が衰えて階段が上がりにくくなるなどの運動器症候群）の予防を目的にした健康づくりプログラムを堺市民に継続して提供していく。帝塚山学院大学は、「食習慣」と「運動習慣」による予防医学の考えを基本に、「社会貢献機能」「地域の生涯学習機会の拠点」としての役割を担っていこうとしているからだ。

開設記念講演「メタボとロコモ～40代・50代・60歳以上のあなたに！～」（主催：帝塚山学院大学人間科学部食物栄養学科健康実践栄養士課程　後援：堺市　協賛：味の素株式会社）が平成二十七年（二〇一五）六月十三日に泉ヶ丘キャンパスで開かれた。津田謹輔学長（医学博士）が「健康長寿のために今できること」をテーマに基調講演。味の素株式会社の萱沼公恵広報・学術担当専任課長による特別講演「タンパク質を摂りましょう！～ロコモ予防

～」が行われた。

三　教職支援室とICTセンター動き出す

平成二十五年(二〇一三)四月から、「教職支援室」を狭山キャンパスに新設し、泉ヶ丘キャンパスに分室をおき、本格的に動き始めた。教職課程認定大学として教職課程の強化をはかり、教員採用試験全般にわたって修学支援にいっそう力を注ぐためだ。公立学校教員になるのには、都道府県の採用試験に合格する必要がある。三～四倍程度と高い倍率で、試験準備には相当の努力が必要だ。教職支援室では、対策講座(十月～)、集中講座(春休み)、直前対策講座(四月～)を開講し、問題演習、面接練習などをおこなうほか、教職に関する説明会や個別の教職相談も行っている。社会が大きく変動している現代、次代を担う人材の育成は非常に大きな課題になってきている。

同時に平成二十五年(二〇一三)四月から、国の補助を得てICTセンターを狭山キャンパスC棟に新設した。これまでのメディアセンターの機能を引き継ぎ、さらに大学全体のICT化を推進するためだ。狭山キャンパスと泉ヶ丘キャンパスにそれぞれICTセンターが置かれており、両キャンパスでの電子メールシステムの共通の支援、それぞれのキャンパスのPC室など施設や設備のサービスをこれまでより効率よく行いながら、新しいICTの時代に向けて取り組んでいる。

全学でICT教育に力を入れるだけでなく、「学生の主体的学び」をより活性化し、情報教育のさらなる充実をはかるものだ。

e-learning形式の修学支援システム(テヅカドリル)を、平成二十五年(二〇一三)二月から導入。これは一回生から四回生までの全学生を対象にした修学支援システムで、IC端末のあるところいつでも、どこでも活用できる「基礎学力向上」と「就職対策支援」に役立てるものだ。

酒井信雄学長は「こうした取り組みは、帝塚山学院大学の教育方針である、主体的に学ぶ『自立した学習者』を育てるためのものである。学生一人ひとりが、卒業時に、何を学び、何ができるようになったかを実感できる教育を実践することこそが、教育機関としての役割と考えている」と強調している(『紫苑』一三号、二〇一三年十月)。

四　人間科学部に「キャリア英語学科」

平成二十六年一月二十三日の理事会常務委員会で、酒井信雄学長が平成二十七年(二〇一五)四月に人間科学部に新設する「キャリア英語学科」について、説明した。

入学定員は五〇名で、リベラルアーツ学科から三〇名、情報メディア学科から二〇名の入学定員を移動させる。教員は一〇名で構成する。

三月二十日、文部科学省から「届出」により設置することができるとの連絡があり、三月二十七日に開かれた理事会で「キャリア英語学科」の申請手続きに入ることが認められた。四月末までに手続きを終え、六月二十八日に文部科学省が新設の最終決定を公表した。「仕事で使える英語力と、ビジネススキルを身につけ、社会の即戦力へ」が目標だ。

キャリア英語学科の新設にともない、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科は文化系七専攻(グローバル言語・文化、中国語・中国文化、韓国語・韓国文化、日本文学・文化、歴史・伝統文化、児童文学・こども文化、芸術文

化）に再編。人間科学部情報メディア学科は情報ツールを使いこなせる人材養成の学科へと改編される。

五　実務と教養教育の調和追い求める全人教育

帝塚山学院大学の半世紀近い歩みをたどっていくと、実務・実践と教養の調和を図りながら「人間」を重視した、幅広い全人教育を追い求めてきた姿が浮かび上がってくる。教養は単なる知識の寄せ集めではない。一般的な知識とともに物事を自分の頭で考え、自分の言葉で表現し、判断して行動する力――「生き抜く力」を、学院大学は育てている。

文部科学省が平成二十六年（二〇一四）八月七日に発表した学校基本調査（速報値）によると、平成二十六年春の大学進学率が過去最高の五一・五％だった。こどもの数は減ったが、大学の定員が増えていることが影響している、としている。大学入学者（浪人なども含む）は六〇万八二三二人。一八歳人口一一八万八三八人に対する割合は、二〇一三年比一・六ポイント増で、過去最高だった二〇一一年をも〇・五ポイント上回った。短大・高専・専門学校を含む高等教育機関への進学率は八〇・〇％（前年比二・一ポイント増）で、初めて八〇％台を記録した。

少子化のなかでの大学進学率の伸び、定員増という大学を取り巻く複雑な環境を視野に入れながら、帝塚山学院大学は新たな半世紀に向けて、「新しい地平」を切り拓く挑戦を続けている。

第一三節　大学の国際理解・国際交流

一　地球の平和・アジアの安定―世界を視野に

時代が二一世紀を迎えようとするころ、国際情勢は不穏な空気を募らせ、早くから激動の新世紀をうかがわせる兆候を各地で示していた。平成九年（一九九七）に始まるアジア通貨危機は世界経済の安定を揺さぶった。時を同じくして進んだイスラム過激派の台頭は平成十三年（二〇〇一）九月十一日の米同時多発テロを生み、そのままアフガニスタン戦争、そして平成十五年（二〇〇三）のイラク戦争開始へとつながっていく。

帝塚山学院大学が国際理解研究所を中心に「世界平和」「地球市民」を見据えた活動を強めていくのは、こうした情勢を背景にしてのことである。

すでに定例化していた国際理解研究所主催の国際理解講座で「二一世紀世界は今」と題したシリーズ講座の第一回が開かれたのは、たまたま米同時多発テロが発生して十一日後の平成十三年（二〇〇一）九月二十二日であった。毎日新聞大阪本社代表室長の観堂義憲氏を招いての講演は、民族・宗教戦争の多発という冷戦後の世界の特徴、イスラムが過激化する背景、単独行動をする米ブッシュ政権などを取り上げ、直近の世界情勢を反映する内容となった。

このシリーズ講座はその後も、地球環境、核問題、アジアなどをテーマに、世界の流れに寄り添った形で続けられていった。

世界を見つめようとする眼差しは、同時に歴史にも向けられる。同じ年の十月二十六日、第二次大戦中、オランダ領だったインドネシアで旧日本軍により捕虜収容所に送られた戦争被害者団体のオランダ人二四名が本学

を訪問、学生らと話し合う交流会が催された。国際理解研究所と外務省の共催で実現した。

この団体は「対日道義的責務基金（ＪＥＳ）」といい、会員は二万五〇〇〇人以上。日本政府に公式の謝罪と賠償を求めつつ、毎年一回、日本を訪れ、若者たちとの交流を進めていた。

この交流会には本学学生約八〇名に加えて地域の住民も参加し、オランダ側からは二名の女性が体験を語った。旧日本軍による様々な非人道的行為が紹介されたあと、訪問団のコーエン副団長が「日本の若い人たちには責任を押し付けるつもりはない。真実を伝え、悲劇的な出来事を分かち合いたいだけです」と訴えた。これを受け本学からの参加学生の一人は「私は毎日報道されているアフガニスタンでの状況をテレビや新聞を通じて見たり、聞いたりする中で何が大切なのかを真剣に考えさせられている」「（私たちは）どう行動していくのかが大切なのではないだろうか」と記している（『大学通信』九六号）。

日本が抱える歴史認識の課題に向き合おうとする機運が、ここからは読み取れる。

この流れの中で、国際理解研究所が平成九年（一九九七）から二年間にわたり「地球市民を考える」「地球市民を育む」の統一テーマで開催してきた国際理解公開講座の講演集が一冊の本にまとまり、平成十四年（二〇〇二）二月に出版された。『地球市民が変える』と題し、三六六ページ、定価は二七〇〇円。現代史の激動を鋭くとらえ、考察した同研究所の活動の集大成となった。

またこの時期は、学生による海外のボランティア活動も目覚しく展開された。

人間文化学部四回生の平山愛紗、平畝千鶴、湯川まゆみの三名はＮＧＯ団体「ＳＶＡ（シャンティボランティア協会）」に協力する形で平成十三年（二〇〇一）四月から、内戦の傷跡なお癒えぬ東南アジアのラオス、カンボジアの子どもたちに絵本を贈る運動に取り組んだ。

この三名は同年八月十九～二十六の七日間、当時まだ「秘境」とも呼ばれたラオスを訪ねた。ほとんど交通信号もなかったこの国で、バスによる移動図書館に同行して二つの村を訪問している。そのうちのリンサン村では一泊二日のホームステイも体験した。

その様子を平山は『大学通信』九六号に以下のように報告している。

> ここで異文化の直接体験をすることができました。リンサン村最終日にはバーシー儀式でおくってもらいました。この儀式は村の人々が私たちの無事と健康を祈りながら私たちの手に白い糸を結びつけるという式です。この儀式の後私たちの手首は包帯をぐるぐる巻きにしたみたいになりましたが、たくさんの人々の温かさを感じることができてたまらなく感動し、同時に別れが辛くもなりました。

この貴重な異文化体験について平山は「最初は言葉や生活習慣の違いに不安や心配を抱いたけれど、それらは感動と私自身の成長に変りました」（前記『大学通信』）と、感想をつづっている。

二　東アジアを見据え

世界を見る眼差しは、時の流れとともにその焦点が東アジアへと注がれるようになる。背景には経済的に急速に台頭する地域の現状、とりわけ一

熱心に耳を傾ける聴衆

シンポジウム「日中関係の発展に文化は何ができるか」
平成18年（2006）１月22日　大阪国際会議場（大阪市）

三億の人口を有する中国が瞬く間に世界の経済大国にまで成長を遂げてきた時代の趨勢がある。

その中国と日本との関係を考えようと、帝塚山学院大学は朝日新聞大阪本社との共催で平成十八年（二〇〇六）一月二十二日、「日中関係の発展に文化は何ができるか――政冷経熱の現状と『文温』の可能性」と題するシンポジウムを開いた。大阪市にある大阪国際会議場の会場は五〇〇名もの聴衆で熱気に包まれた。

日本と中国は近年、領土問題、公人による靖国神社参拝などを巡り、政治的な軋轢が絶えない。時にはそれが緊張状態にまで発展することも珍しくない。一方、経済面では、すべての点でアジアのトップランナーだった日本と、急成長の中国とは、利害を共有する緊密な間柄にある。二国関係が「政冷経熱」と言われるゆえんである。

このシンポジウムに掲げられた「文温」なる語は、このシンポジウムを準備する中で「ごく自然にわいて生まれた新造語」（『どう拓く日中関係――政冷経熱の現状と「文温」の可能性』かもがわ出版）だとされる。この催しに注いだ関係者の熱い思いが伝わる用語である。

シンポジウムのパネリストは四人。評論家の加藤周一氏、王敏法政大学教授、王暁平帝塚山学院大学教授、加藤千洋朝日新聞編集委員の顔ぶれは、いずれも中国問題に関する代表的な論客たちであった。コーディネーターをつとめたのは中川謙帝塚山学院大学教授。

日中の根底に横たわる「文化」という共通基盤の「温かい」力で、どう現状を切り開くべきか、という議論は三時間にも及んだ。その内容は、前述の『どう拓く日中関係』と題したブックレットの形で出版された。

日中関係はその後も曲折をたどりつつ、悪化の方向に進んでいく。しか

し帝塚山学院大学の東アジアを見据えた取り組みは継続される。

前記シンポジウムと相前後して国際理解研究所は平成十七年(二〇〇五)、「東アジア国際理解シンポジウム」「日中国際シンポジウム」を相次いで開催した。「日中国際シンポジウム」は外務省の助成を受け十一月二十六日、京都市の国際日本文化研究センターで行われた。「日中相互理に関する研究――知的文化交流の視点から――」と題し、中国側からは北京外国語大学の厳安生教授、国際日本文化研究センターの劉建輝助教授が参加した。

さらに平成十八年(二〇〇六)からは、国際理解研究所の手により東アジア関連の計三つの学術会議・シンポジウムが中国、韓国、日本をまたにかけて開かれる。中国・北京会議は同年九月十三、十四両日、北京・精華大学会場で、文学のテーマを中心に日中双方から六人が研究発表、講演をした。

続く韓国・ソウル会議は十月十三、十四両日、ソウルの高麗大学を会場に高麗大学日本学研究センターとの共催で行われた。テーマは「東アジアの文化交流と相互理解」。初日は日本映画『憂国』上映のあと、映画の主題である作家の故三島由紀夫の思想を巡り、討論が交わされた。作家の四方田犬彦明治学院大学教授の発表を軸として、「切腹」など日韓の間の「異文化」について双方の参加者同士、率直な意見交換があった。

二日目の十四日は李御寧元韓国文化相による「小さいモノから見る日中韓の関係」、また川本皓嗣大手前大学学長による「日本文学における伝統と文化」と題した基調講演が行われ、それを受けた発表、討論が展開された。

一連の学術会議の締めくくりとなる日本・大阪会議は同年十一月十一日、大阪市の大阪国際交流センターで開催。「東アジア国際理解シンポジウム―日中関係の過去・現在・未来―」と題し、一般市民を中心に五〇名が参加して議論に聞き入った。

これら三つの会議では本学国際理解研究所の上垣外憲一所長が司会進行、発表などで中心的な役割を果たした。

近現代史の脈絡の中で様々な問題に直面する東アジアを、文化交流の視点からとらえなおそうとする具体的な取り組み、と言っていい。

その流れの中で実現したのが、平成二十一年(二〇〇九)三月九日に高麗大学で開催された「高麗大学校日本研究センター二〇〇九年度国際学術シンポジウム」である。帝塚山学院大学と高麗大学は平成十六年(二〇〇四)十二月、「学術協定」を交わし、以後、さまざまな交流を行ってきた。シンポジウムはこの両大学と、東京の武蔵大学の三大学が共催した。

本学からは溝手真理副学長、人間文化学部の新妻義輔、文学部の古田真一、宮内淳子の三教授の計四名が参加。ちなみに帝塚山学院では同年四月に、それまでの文学部を改組してリベラルアーツ学部が発足。その後、韓国専攻コースも設けられ、このシンポジウムは本学の韓国に対する取り組みぶりを示す場ともなった。

この高麗大学とは学術協定の締結以来、留学生の交換が続いてきた。平成二十一年(二〇〇九)一月十七日、これら韓国からの留学生と、大阪に暮らす在日韓国・朝鮮の女性(オモニ)との交流が実現した。本学国際理解研究所が主催する「大阪に生きる在日オモニ達の歴史とこれから」と題した国際理解懇話会が大阪市鶴橋で行われ、八人の在日女性と三人の留学生との意見交換は三時間にも及んだ。

同じ民族とはいえまったく異なる境遇を生きてきた在日オモニとの交流

は、留学生たちにとり、本国では実感できない日韓関係の別の一面を知る貴重な機会になったはずである。

そうした機会を若者たちに提供し続けていくことこそが、帝塚山学院大学の担う価値ある責務のひとつなのであろう。

歴代学長・副学長在任一覧

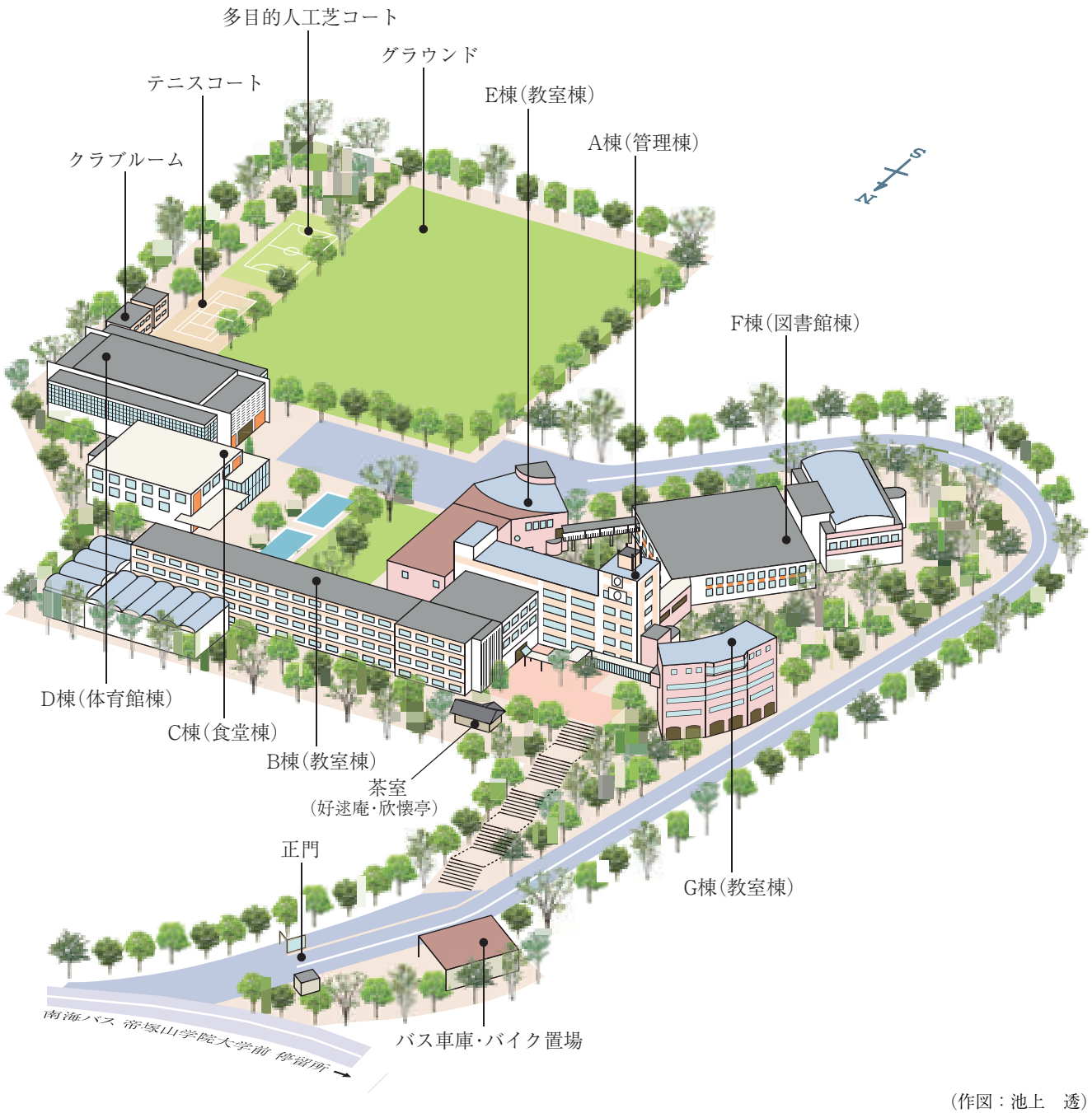
学　長

森　　礒吉	1966年(昭和41) 4月23日～1967年(昭和42) 3月31日
西本三十二	1967年(昭和42) 4月1日～1975年(昭和50) 3月31日
庄野英二	1975年(昭和50) 4月1日～1979年(昭和54) 3月31日
	1981年(昭和56) 4月1日～1985年(昭和60) 3月31日
原　龍之助	1979年(昭和54) 4月1日～1981年(昭和56) 3月31日
	1985年(昭和60) 4月1日～1989年(平成元) 3月31日
山田博光	1989年(平成元) 4月1日～1997年(平成9) 3月31日
大谷晃一	1997年(平成9) 4月1日～2001年(平成13) 3月31日
皆川　　基	2001年(平成13) 4月1日～2005年(平成17) 3月31日
加納　　武	2005年(平成17) 4月1日～2007年(平成19) 3月31日
酒井信雄	2007年(平成19) 4月1日～2014年(平成26) 3月31日
津田謹輔	2014年(平成26) 4月1日～

副学長

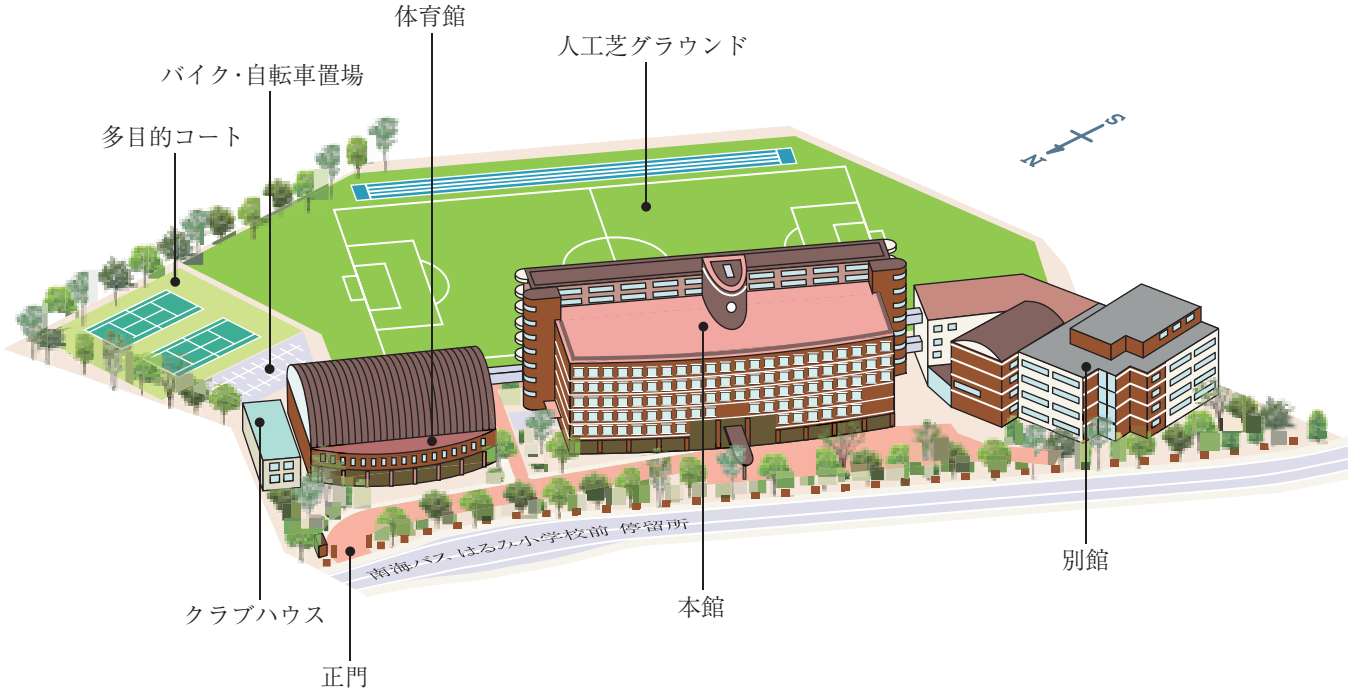
庄野英二	1966年(昭和41) 4月23日～1974年(昭和49) 3月31日
牧野博彦	1980年(昭和55)10月15日～1989年(平成元) 3月31日
大橋清秀	1991年(平成3) 4月1日～1992年(平成4) 3月31日
平田啓一	1993年(平成5) 4月1日～1996年(平成8) 3月31日
内田能嗣	1996年(平成8) 4月1日～1997年(平成9) 3月31日
三浦信一郎	1997年(平成9) 4月1日～2001年(平成13) 3月31日
山本節子	2001年(平成13) 4月1日～2004年(平成16) 3月31日
上垣外憲一	2004年(平成16) 4月1日～2005年(平成17) 3月31日
酒井信雄	2005年(平成17) 4月1日～2007年(平成19) 3月31日
溝手真理	2007年(平成19) 4月1日～2014年(平成26) 3月31日
西川隆蔵	2009年(平成21) 4月1日～2011年(平成23) 3月31日
	2014年(平成26) 4月1日～
杉本雅子	2014年(平成26) 4月1日～

狭山キャンパス立体図



（作図：池上　透）

泉ヶ丘キャンパス立体図



（作図：池上　透）

あとがき

『帝塚山学院大学五〇周年記念誌』が刊行されることになった。まずは、編纂作業のリーダーとして、全体構想を練り、記事、原稿を集め、編集をするという大変な労をお取りくださった中川謙、新妻義輔の両氏に厚く御礼申し上げたい。両氏ともに、御存知のとおり、ジャーナリストであり、かつまた数年前までは本学教授で、我々の同僚でもあった方である。そのお二人の叡智と熱き思い、そして健啖と健脚により、ここまでこられたのだと思う。

さて、ご覧の通り、本記念誌は二部構成となっている。第一部は「言葉」でたどる半世紀として、中川氏が編纂を担当されている。『大学通信』『帝塚山学院通信』という学内資料の中から学院大五〇年の歴史の礎ともいえる時代の教職員やOBの方々の文章を集められ、中川氏が丁寧に言葉をそえられ綴ったものである。

「こだはらの丘で」の章は、大阪狭山市にその礎を置き、文学、教養教育を中心とした時代の真っ只中を歩んだ教員、OBの方々の話が並んでいる。女子大学ならではということもあるのかもしれないが、教職員のいささかゴツゴツとした話が、テヅカ女子のしなやかな語りを引き立たせて興味深い。帝塚山の品格が香り立つところだ。章が変わって、「二学部体制へ」というテーマになっている。ここは学院大が、堺市の泉ヶ丘の地に人間文化学部を設置してから、今日までの道のりの中での教員の学生、学問、学科、大学へのさまざまな思いや考えが集められている。サブタイトル通り、学院大はそれまでの文学、教養志向から実学志向へと、時代の流れに沿いつつ、情報科学、心理学、心理臨床、食物栄養学など、人間科学への道を新たに拓いてきた。読者には、学院大の人材育成の裾野の広がりを感じていただけるのではないか。「体を鍛え、心を磨く」、「地域に寄り添い」の章では、ゴルフ、フィギュアスケート、アーチェリー、軟式野球といった運動部の活躍や茶道部、点訳部の地域での活動エピソードが綴られている。読んでいて、当時の学生の華やかで、はたまたエネルギッシュな活躍、活動は今更ながら誇らしいし、またそのウラには地道な努力があったのだろうと思う。これぞ「力の教育」の成果の現れではないか。

当時の面影をたどりつつ、読み進めてこられた読者に、さらに学院大五〇年の歴史の重みと煌めきの原点へと誘うのが、「われら一期生」である。新妻氏が編纂を担当されたが、原稿を集めるに、大変ご尽力されたと聞く。二五人もの一期生の方が原稿を寄せられているが、帝塚山学院が大阪狭山の地で、大学という一ページを開いた、その幕開けの新鮮で希望に満ちた高揚感が伝わってくる。その思い出、情景の語りには、教員と学生との「和気あいあい」の雰囲気がどことなく漂っていて、のんびりとして、ゆっくりとした時間の流れを感じるのは私だけであろうか。

フロンティア・レイディたちの「言葉」のその次は、「忘れ得ぬ出会い」「学長が語る―帝塚山学院大学の昨日・今日・明日」である。ここでは、これまでの学長経験者、現学長、現役教員の話となっている。第七代学長山田博光氏、第一一代学長 酒井信雄氏、第一二代の現学長 津田謹輔氏と三人の学長の言葉に、学院大変革の節目にあっての大学運営の努力や思いが刻み込まれている。奇しくも、大学がこれまで乗り越えてきた困難が見

え隠れしている。平坦な道ではなかったし、恐らくこれからもそうだろう。

そして第一部の締めを飾られているのは、昨年、理事長の重職につかれた野村正朗氏である。力強いリーダーシップの下、学院大の将来像「小粒でも光る大学」が示されている。小粒でも、そこに光るものは、何であろうか…。知の力であろうか、情の力なのか、いや意思の力なのか、それとも軀幹の力か、…それらの力の煌めきは学院大のさらなる発展へと導くものであることに違いはない。

次に第二部である。これは学院大五〇年の「通史」として、『帝塚山学院一〇〇年史』の「大学編」で構成されている。セピア色した写真の多くから、学院大の伝統がヒシヒシと伝わってくる。当時を偲び、思い出に浸っていただける方も多いだろう。本当に大切な写真ばかりである。この記念誌が「我ら学院の名におえる」一〇〇年の歴史に華を添えることになれば幸いであるし、記念誌編纂の面目躍如と言えるかもしれない。

こうして、第二部に目を通して見ると、五〇年という時を刻んだ学院大の姿が帝塚山学院一〇〇年の歴史、伝統を背景にして、より鮮明に浮かび上がってくる。いうまでもなく、帝塚山学院一〇〇年の背景なくば、学院大は存在しない。この記念誌はそうした中で、集い学び巣立った学生と教職員の「言葉」で綴られた学院大のライフヒストリーであり、物語である。タテ糸が時の流れなら、ヨコ糸は数々のエピソードやそこに秘められた思いであろうか。織りなす接点の一つ一つが煌めいているのだ。

津田学長の言葉を今ここで言ってみたくなった。

「建学の精神の旗をもう一度高く掲げよう」

そして「チーム帝塚山でがんばりましょう」と、…。

最後になるが、本誌を編むにあたっては、学内外の多くの方々に多大なご協力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げる。編集上の都合とはいえ、記述の不備等があれば、忌憚のないご叱責をたまわれば幸いである。なお文責は統べて編纂委員会にあることを申し添える。

平成二十八年九月

大学五〇周年記念誌編纂委員会
副委員長　西川隆蔵

大学五〇周年記念誌編纂委員会

委員長　津田謹輔
副委員長　西川隆蔵
奥田晃子
北村晴美
杉本雅子
杉田浩章
中川　謙
新妻義輔
橋本佳與子
彭　佳紅
（五〇音順）

帝塚山学院大学50周年記念誌

平成28年10月 8 日　発行

編　　集　大学50周年記念誌編纂委員会

発　　行　帝 塚 山 学 院 大 学
狭山キャンパス：
大阪狭山市今熊 2 丁目1823番地
泉ヶ丘キャンパス：
堺市南区晴美台 4 丁 2 番 2 号

印刷・製本　河 北 印 刷 株 式 会 社
京都市南区唐橋門脇町28